女學世界

第八巻

第六號

博文館發行







デパートメント・ストアー
越
三越呉服店
和洋
巻莨
シガー
一切
鞄
折鞄
靴
旅行用
化粧品入
一式
帽子
文房具
時計
指輪
寶石類
其他
ブローチ
諸大家ノ繪畫陶器漆器
銅器七寶其他新式ノ日
用食器類一式
呉服
洋服
太物
子ル
セル
新柄品
香水
香油
石鹼
白粉
齒磨
口紅
傘
履物

女學世界第八巻



第六號目次

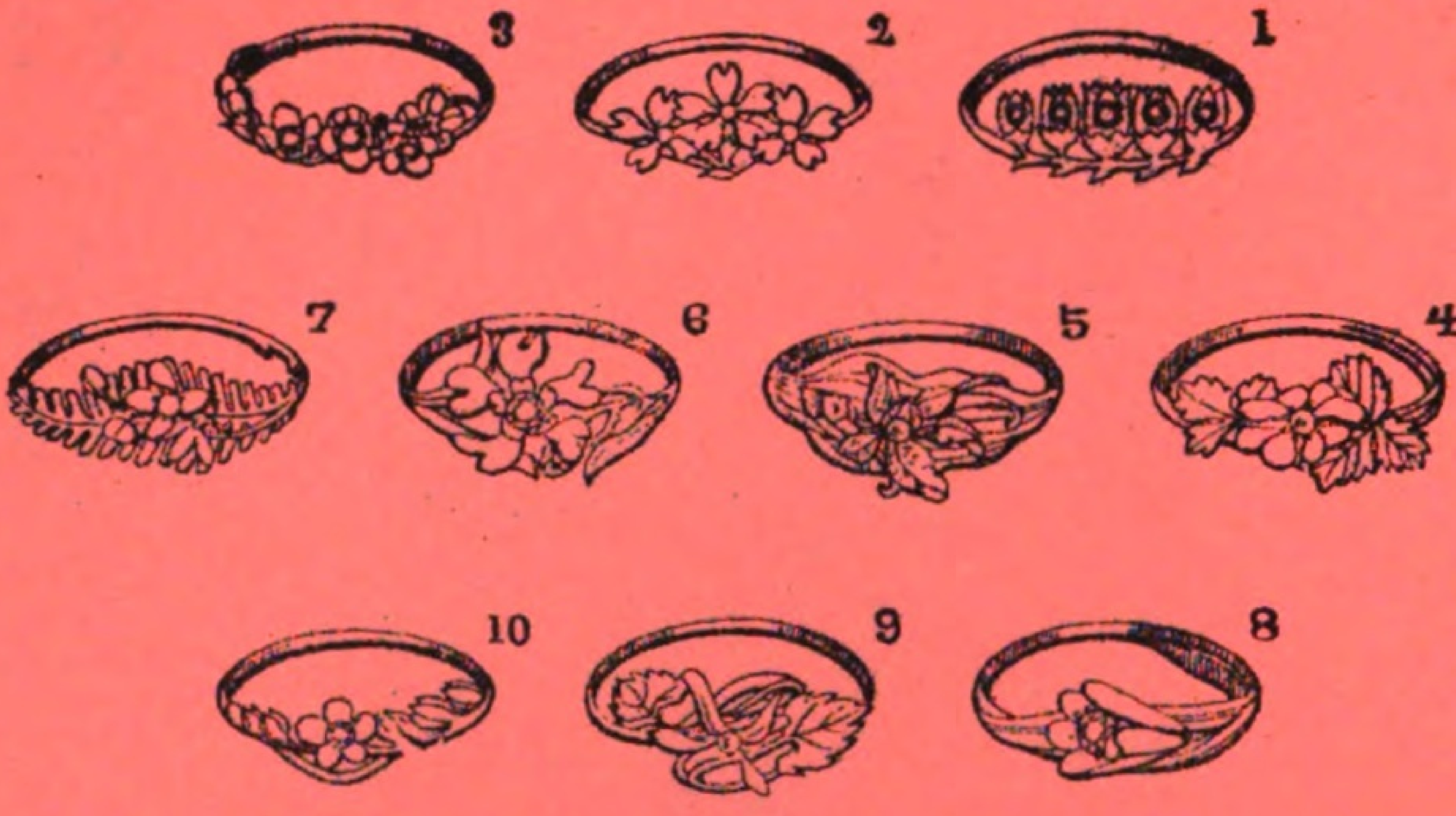


お芝居や
汽車中の
特等席で見る
美人のお化粧は
ミナ〳〵
たつた白粉
デスヨ
よくもこれ迄に
人氣が揃つた事ヨ
それは全く品が
善いからです



▲某貴族の令嬢常にたつた白粉を召して

▲白粉はたつた白粉が一番よくつてよ



高山植物式 寶石入指環

（大西白牡丹戊申流行案内其の五）

(1)	コケモモ	ルビー又は眞珠入 拾五圓	ダイヤモンド入 六拾圓
(2)	ヒナザクラ	眞珠三個入 拾貳圓	ダイヤモンド入 叄拾圓
(3)	ベニイチヤクソウ	ルビー三個入 貳拾圓	ダイヤモンド入 五拾圓
(4)	ウラジロキンバイ	眞珠入 拾八圓	ダイヤモンド入 叄拾圓
(5)	ヒメチドリ	眞珠入 貳拾叄圓	ダイヤモンド入 叄拾八圓
(6)	ピランヂ	眞珠入 貳拾圓	ダイヤモンド入 叄拾五圓
(7)	オサバクサ	眞珠入 貳拾五圓	ダイヤモンド入 四拾圓
(8)	チジマアマナ	眞珠入 貳拾圓	ダイヤモンド入 五拾圓
(9)	ヒメミヤマスミレ	眞珠入 貳拾圓	ダイヤモンド入 叄拾五圓
(10)	モウセンゴケ	ルビー又は眞珠入 拾八圓	ダイヤモンド入 叄拾圓

○振替口座九二九三番○長電本局三十番●三千番

京橋 南傳馬町

大西白牡丹

女（いの一）

(その二)

美人中最も高尚にして素顔の美しきを以て有名なる東京婦人は益々クラブ洗粉を愛用せられつゝあり



若し欧米人が斯く問はゞ

英國美人よりも日本婦人の總てが素顔の美しきは何故かと問ふ事ありとせば其は日本に於て有名なるクラブ洗粉が舶來石鹼より優れるが故なりと答ふ可き價値あらん




カメリヤ
洗粉
あらひこ
◉容貌の美醜は化粧法の功拙如何にあり
カメリヤ洗粉は最新の化粧法に基き學理的に配劑なせる高等美身術に適したる最良の化粧料なれば皮膚の營養を助け、きめを細かに光澤を増し肌膚を艶麗美白ならしむる特効を有し其香氣の優秀なる永く身邊に薫りて自ら快感を起さしむ
定價
大瓶壹個廿五錢
小瓶同十五錢
大袋同十五錢
小袋同三錢
罐入同十三錢
發賣元 東京 小林富次郎

女(いの四)

桐壷

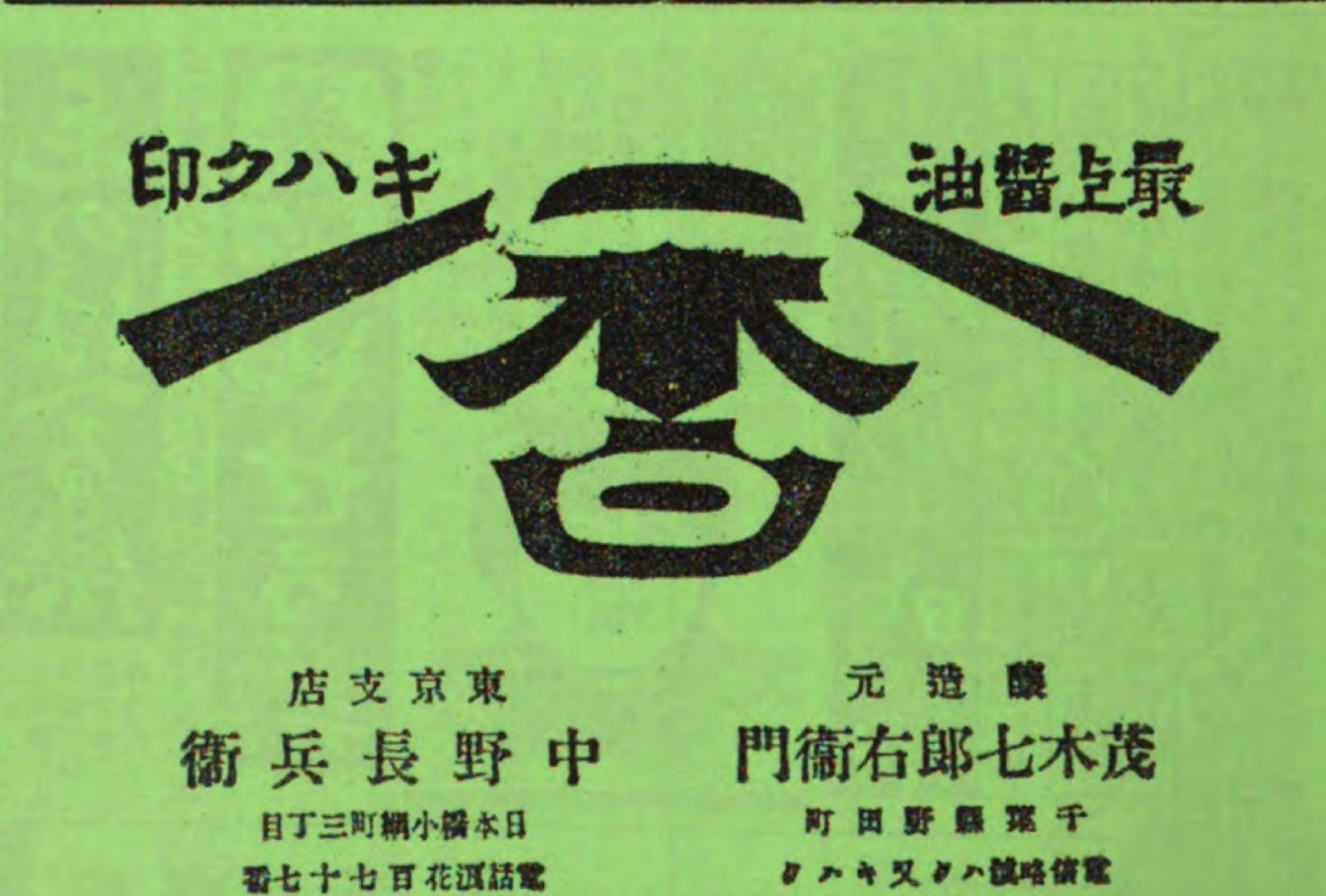


箒木



一條成美畫
三宅花圃書


畏くも
内親王殿下御用
高等美顔
無鉛薄化粧
フユスクリーム
おしろい
高橋初次郎製
東京日本橋區本町二丁目
チエリーオイル本舗
價三十五錢


最上醬油
キハタ印
釀造元
茂木七郎右衛門
千葉縣野田町
電信略號ハタ又キハタ
東京支店
中野長兵衛
日本橋小網町三丁目
電話浪花百七十七番

女(ろの二)

◉おしろいも香水も洗粉も何も要らぬ調法なる新發見劑◉

藥學得業士從七位鏑木靜夫先生製劑（最も近き將ろ理想的可驚特効藥）

右高等白色劑「ホワイテン」は在來化粧品と異り鏑木藥學得業士歐米の白色劑を我邦人の常用に適する如く消毒殺菌に注意し香水石鹼洗粉代用となり經濟上の利又少からず乞ふ特効藥の御試用を。

美顔白色新劑

ホワイテン

一名にきび退治



（化粧、消毒、經濟三大徳用）

（特効）皮膚を緻密にし白色艶美ならしめ（にきび）（そばかす）（あれ）を防ぎ光澤を増す

（注文）▲爲替、東京芝久保町局）▲代金引換一個二十四錢▲郵便切手代用一割増▲送料函代共一個十錢樺太、臺灣、朝鮮一個三十五錢▲普通賣藥に非れば直接當藥局へ御申込みありたし

（藥價）特製一圓二十錢　大瓶七十五錢　小瓶四十錢

調劑發賣本舗　東京芝區櫻田伏見町三番地　東洋堂藥局（電話新橋二九四二番）

毛のはへる藥

多年實驗の生毛劑にして特効驚くべき奇藥

一圓●一圓半●濃厚二圓半●三圓半送料十錢

美容散 やせる藥

●血ぶとり、あぶらふとり、酒ぶとり、顔赤く、のぼせ症等總て肥胖質の人用ひて害なく身體美容となる保證藥なり

●定價（一週）七十錢（三週）二圓五週三圓廿錢送發十錢



皮膚病専門藥

あまづ	いんきん	たむし
あか鼻	ざくろ鼻	あざ
ぜにがさ	ひぜん	わきが

本劑は獨逸國皮膚病研究所專用法劑にして特製一瓶にて全治保證又おいこむの憂なし

小瓶五十錢中瓶一圓大瓶一圓五十錢特製二圓送料十錢

專賣本舗　東京本郷區本郷三丁目　新宮藥館

女（ろの二）

ちゞれもくせも
けはへうけあい

妾の手がけた方で此病にて諸種の賣薬して癒らぬ人も悉く治りし故夫れで皆様の進めにより御披露し升御問合せは往復はがきにて御申込あれ

東京麹町區飯田町四ノ十六

女髪師 安部歌子

肺病

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇法發明の爲め全治する故世の同病者を救ひたき志願に付望の方は郵券二錢封入にて御照會あれ

東京府下大森入新井 川名助次郎

特許(乳兒用器)專賣

おしめイラズ



●統計上乳兒百人生五十七人死する割なるに本器で育ては僅九人の小數のみ

●效能 本器上に寝せば僅少の濕で常に腰足を温め夏は涼爽にて安眠し冷濕に原因スル傳染病腸加答兒を防ぎ皮膚病腦膜炎に罹る事無し

定價金壹圓四十五錢

詳細は四月一日女學世界に明記せり

●東京神田竪大工町

丸二商會(振替口座壹四叄壹九)

妾事小供の時より薄毛にて種々の薬を試みしも効なかりし所洋行中なりし醫學博士令夫人より奇薬を得是迄の薄毛も濃くなり又毛の生へざりし所迄毛生へし嬉しさの餘り困る方に告たし

三錢郵券を添へ御照會あれ

東京市京橋區越前堀 河村愛子



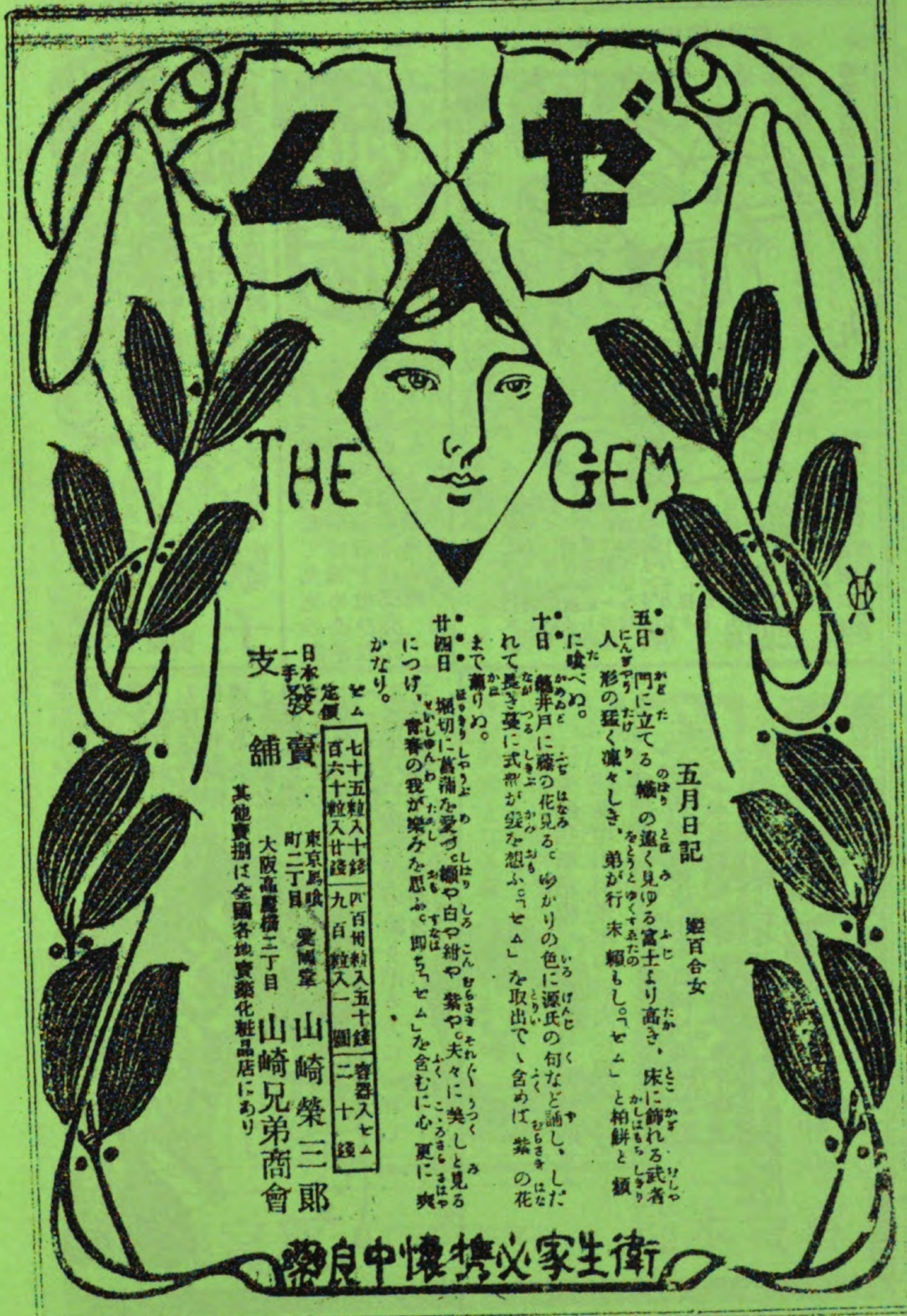
◉癩病新治療 (夜間) (入院随意)

院長増田勇多年の研究に由り發見せる特効新薬の注射にして最新の實驗根治療法也(治療上の質問は即時應答す)

本郷區駒込千駄木町(團子坂上)

東京皮膚科醫院

女(ろの三)


ゼム
THE GEM
五月日記　姫百合女
五日　門に立てる幟の遠く見ゆる富士より高き、床に飾れる武者人形の猛く凛々しき、弟が行末頼もし。「ゼム」と柏餅と頬に喰べぬ。
十日　龜井戸に藤の花見るゝゆかりの色に源氏の句など誦し、したれて長き蔓に式部が髮を想ふ。「ゼム」を取出でゝ含めば紫の花まで薫りぬ。
廿四日　堀切に菖蒲を愛づ。絞や白や紺や紫や。夫々に美しと見るにつけ、青春の我が樂みを思ふ。即ち「ゼム」を含むに心更に爽かなり。
ゼム定價
七十五粒入十錢　百六十粒入廿錢
四百卅粒入五十錢　九百粒入一圓
容器入ゼム二十錢
日本一手發賣　東京馬喰町二丁目　愛國堂　山崎榮三郎
支舖　大阪高麗橋二丁目　山崎兄弟商會
其他賣捌は全國各地賣藥化粧品店にあり
衛生家必携懷中良藥

女（ろの四）

五月晴



太田三郎筆

(はの一)

當今一番よくきく月ざらへは何か

●諸孃姉方に急告す●

月經閉止月やく滯りの如何に恐るべきかは今更言ふまでもなし然るに從來の月ざらへは其原理を極す各々大同小異にて殊効ある良藥なし本劑は其病理病症を各専門大家に習得し實地經驗と最新學理とにより普く**特効藥**を蒐集し直接**大醫**に係ると同一の効力を有す即ち効能は婦人月經不順月やく閉止月經滯りを子宮も痛めず快よく下す妙藥也二三ヶ月以上の閉止も一二週分三四月以上又は血塊にても特製分服用せば必ず流下す十七八歳に至り月經なき人は二週分每月月經困難は三日分服用せられよ

理想的最良藥

改良月ざらへ

女月丸



藥價 一週分六十錢 二週分一圓十錢 特製 四週分二圓廿錢 六週分三圓卅錢 送料各四錢宛

●本劑は其奏効極めて峻烈なれ共身體には少しもさわる事なし眞に有効無害の奇藥也

調劑本舖 東京々橋區東仲通中橋和泉町一番地 **小宮愛生堂**

婦人藥王 **流經散**（りうけいさん）

●月やく止まるを憂ふる方は每月一の日此藥を用ゆれば**止**るとなし四ヶ月以上の閉止も特別製の方を連服すれば**程**よく**下**ると**妙**なり**産**後の**古**血又は血**塊**及十七八歳になりても**月**やくなき人にても**忽**ち下る事請合**ち**の道にて折々目まひ立くらみのぼせ**頭痛**又物事を苦にして**氣**分あしき等に用ひて實によくきく藥にして世間ありふれの月ざらひ等と天地の違ひ是をのめば醫者を要せず

定價 特製[illegible]り分金[illegible]●同半月分六十錢●七日分卅錢●三日分十五錢送料各二錢宛

わが藥

（天下一方腋臭劑一）小包卅錢▲中包五十錢▲大包壹圓特製大包貳圓送料各貳錢宛

本症は頗る腋臭を放ち他人に接近するをきらわれ有爲の美男子も**交際**を欠き又妙齡の美婦女も**良縁**を失ふが如き**不幸**に陷れる人澤山あり之れを救はんが爲數年苦心して得たる新發見藥を世に紹介す多少に係はらず本症のある人は早く用へて幸福の人となられよ

經驗保證 **毛生劑**

定價 試み金卅錢●小瓶金五十錢●大瓶壹圓特製**貳圓**送料四錢

本劑は多年經驗したる化學的作用のけにいぐすりにして特許を受けたる保證劑なり。

●婦人必需の養生寶典は郵券三錢封送あれ●

專賣 東京神田區五軒町大通り 電話下谷壹參貳壹番 振替口座三六七壹番 **寶順堂**

女（はの二）

●婦人科
●小兒科
専門
午前宅診　午後往診
▲入院を許す▼
東京市麹町區飯田町四丁目九番地
女醫　鷲山彌生
電話番町七八四乙番

◀破天荒の怪著▶
佐久間信恭校閲　廣文館編纂
英文法圖解表
正價 六拾錢
郵稅 四錢
郵券代用謝絶
●總クロース金文字高尚優美帙入一表
▲圖解ヨリ得タル記憶ハ明確ニシテ秩序整然タリ
▲圖解ヨリ得タル智識ハ精細ニシテ排列瞭然タリ
▲記憶ト理解ニ困難ナル英文法ヲ解剖亦組織シテ圖解トナス研學の士一表ヲ座右ニセバ忽焉トシテ豁達悟入スベシ
發行所　東京本郷區湯島三組町八一番地　廣文館
振替貯金口座一四九四七番

印刷は
東京小石川　精美堂

誰も驚く珍料理
教ゆ天下一品返信料封入照會あれ
東京小石川久堅町五八　高柳孝子

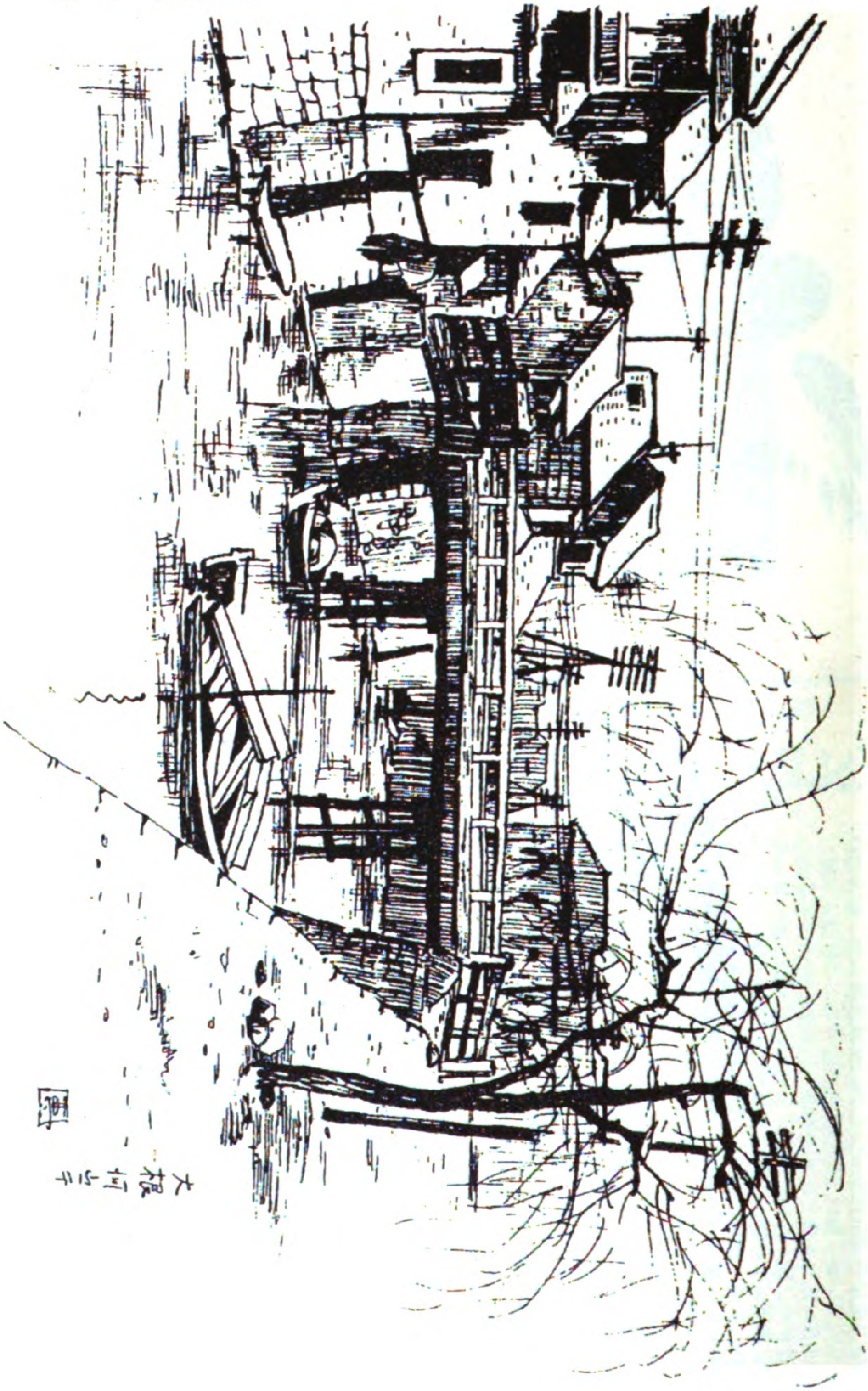

あかげちゞれげくせ毛を
毛縮毛癖直し
獨逸醫學博士發見化學應用赤毛縮毛くせ忽ち直り黑艶美髮となる説明書藥名詳説の雜誌ハガキで申込次第無代進呈
東京市京橋越前堀　樂天堂

サメハダ
ガンガサ
ニキビ
ソバカス
こせがさ皮膚病一切如何なる難病も根本的全治せしむる一大奇藥を予が歐米巡遊中發見の結果餘りの不思議さに同病患者救濟の爲其由來冊子を進呈す郵券貳錢送れ
東京品川海岸元芝
岡別邸

女(はの三)


御料
畏き邊りの
御料に召させ給ふ
高貴御化粧料
御園白粉
東京芝
胡蝶園
製造本舗
東京日本橋區橘町四丁目
丸見屋商店
發賣元
ねり製
御園白粉
水製
御園白粉
こな製
御園白粉
洋風化粧クレーム
御園の蕾
高等化粧水
御園とき水
御園なでしこ
濃厚化粧水
御園四季の花
高等頭油
御園香油
高等香水
御園香水
高等はみがき
御園歯磨

女(はの四)



竹久夢二筆





女(にの一)

自宅作文獨習良師友

懸賞募集課題○お伽噺○新派和歌○短篇小説○脚本○日記文○新體詩○實用文○俳句○新論文○舊派和歌○美文○短文○繪畫○新歌謠○滑稽談○餘興○學校生活(賞外)○女學問題○誌友の事柄

選評　巖谷小波、小栗風葉、佐野天聲、横瀬夜雨、與謝野晶子、谷江風、中村文學士、佐々木信綱、内藤鳴雪、山中古洞

▲詳細の事は見本(價拾錢送壹錢)に就て御覧下さい

本誌は三十八年一月創刊

投書は誰でも隨意

日本唯一女學雜誌

女子文壇(ぢよしぶんだん)

發行　毎月一日増刊六回

口繪　名畫光澤紙原色刷寫眞肖像風景數葉

定價　壹册(百卅頁)金拾錢送料壹錢○半年分(九册)送共前金壹圓五錢○壹年分(十八册)同金貳圓○郵券代用壹割増

低廉・好評・無比

五月一日發兌
●四年第七號　定價拾錢送料壹錢
例により卒業生の寫眞澤山挿入す

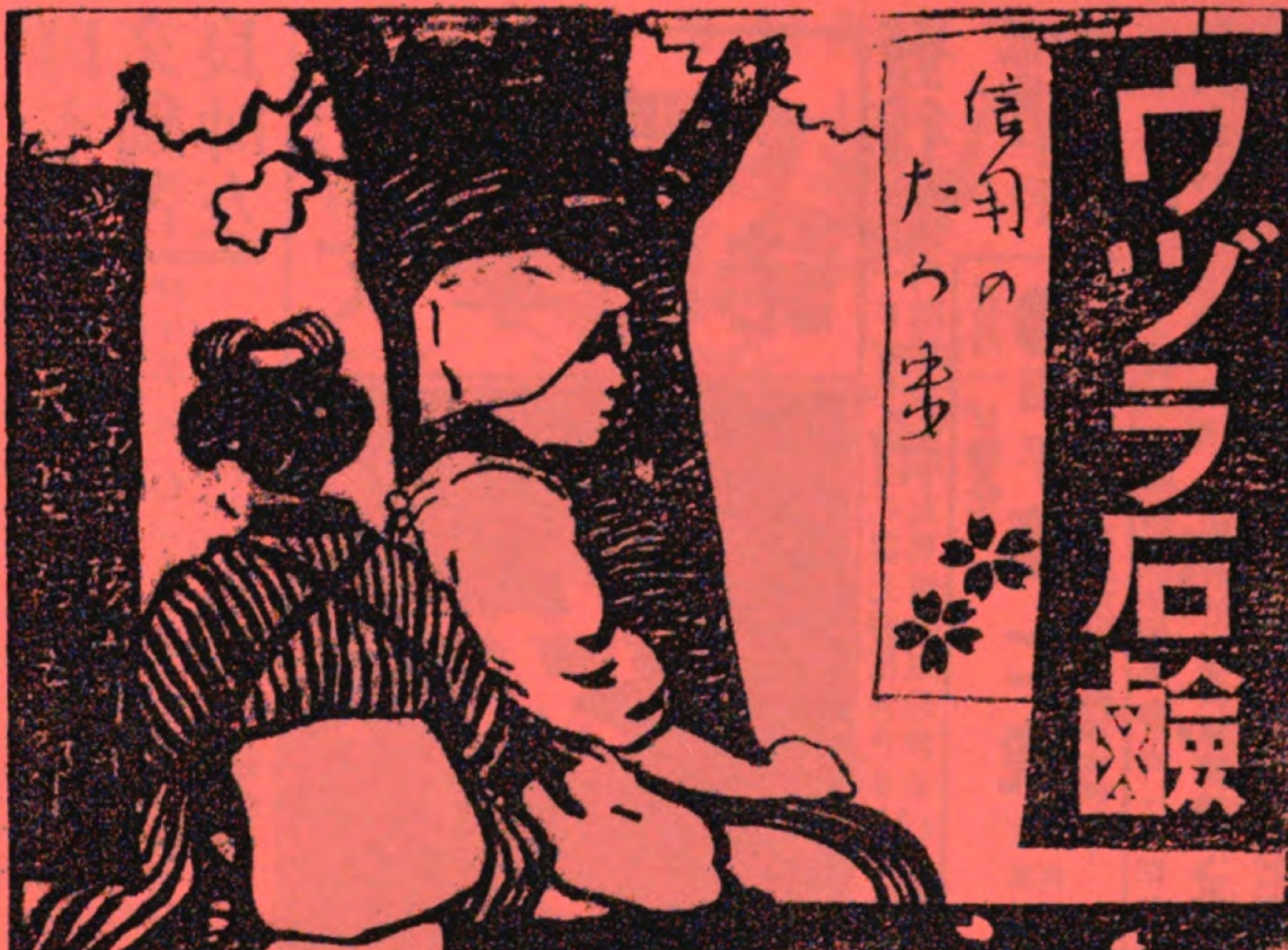
定期増刊　五月十五日増刊
●四年八號夏すがた　定價拾錢送料壹錢
之にも卒業生寫眞澤山挿入す

▲注意＝一號より取揃あり最寄書店に品切の時は振替貯金拂込法により直接發行所へ御申込を乞ふ▼

東京　京橋區大鋸町十、十一番地　【振替貯金口座第壹七貳九番】　女子文壇社發行　電話本局六百七番

特約發賣所　●神田東京堂、上田屋●日本橋北隆館、至誠堂●京橋東海堂、良明堂　其他取次店は全國各雜誌書店

女(にの三)


ウヅラ石鹸
信用のたつ事

さみだれ



加藤南山筆

夏螢

うのくれ
さゝやど
関魚

[illegible]

大口鯛二筆



發賣御案內●造花用電燈

盛籠用。花輪用。花簪用。技花用等各種

(營業概目)　造花半製品。造花用染料。

造花用器具。摘ミ細工材料。金銀モール

模寶石。電氣用眞線

東京市日本橋區横山町壹丁目十六番地

美術造花材料商　**天野卯兵衛商店**

(特長電話浪花一六四三)
(振替貯金口座四九七〇)

營業案內御入用ナレバ此切取御添ヘ御申越シ被下度候

縣　郡　町村

切取線

女學世界

女(ほの一)

女(?)の二

如何にせば美人となるか？

此の希望は婦人方が日夜の思ひでありませう所が此の美を補ける唯一の化粧料たる白粉の撰擇が惡ければ花顔衣にも堪へぬ美人も往々醜婦となるのであります若し身の幸福と衛生に重きを置かるゝ御婦人ならば夫の鉛毒を含む鉛白粉などは避ける様に致さねばなりません併し無鉛と云ッても是まで世間に有觸た不完全な無鉛白粉は伸び惡しく肌に乘らず只だ無鉛といふ名のみで美容料としては不適當なるものですから常に御注意が肝要であります所が今や最も進歩した最も優秀な白粉が發明されましたソレハ大學の有名な方方が特に日本婦人のために製煉された

無鉛 **大學白粉** であります

大學白粉は最も進歩した最も新しい學理を應用して製煉したる理想的の白粉で少しも鉛毒の憂なく在來の白粉より良く伸びで肌に乘りよく決して斑になつたり剝げる事のない優秀な特長を有して居ります殊に芳香は高尚優雅な十有餘種の香料が巧に配伍せられてありますから峻烈爽快な香氣は馥郁として宛かも八千草の一時に咲き亂れた花園に遊ぶの思がします然れば多數の貴婦人淑女を始め女學生諸孃は擧て本品を愛用せられて居ります

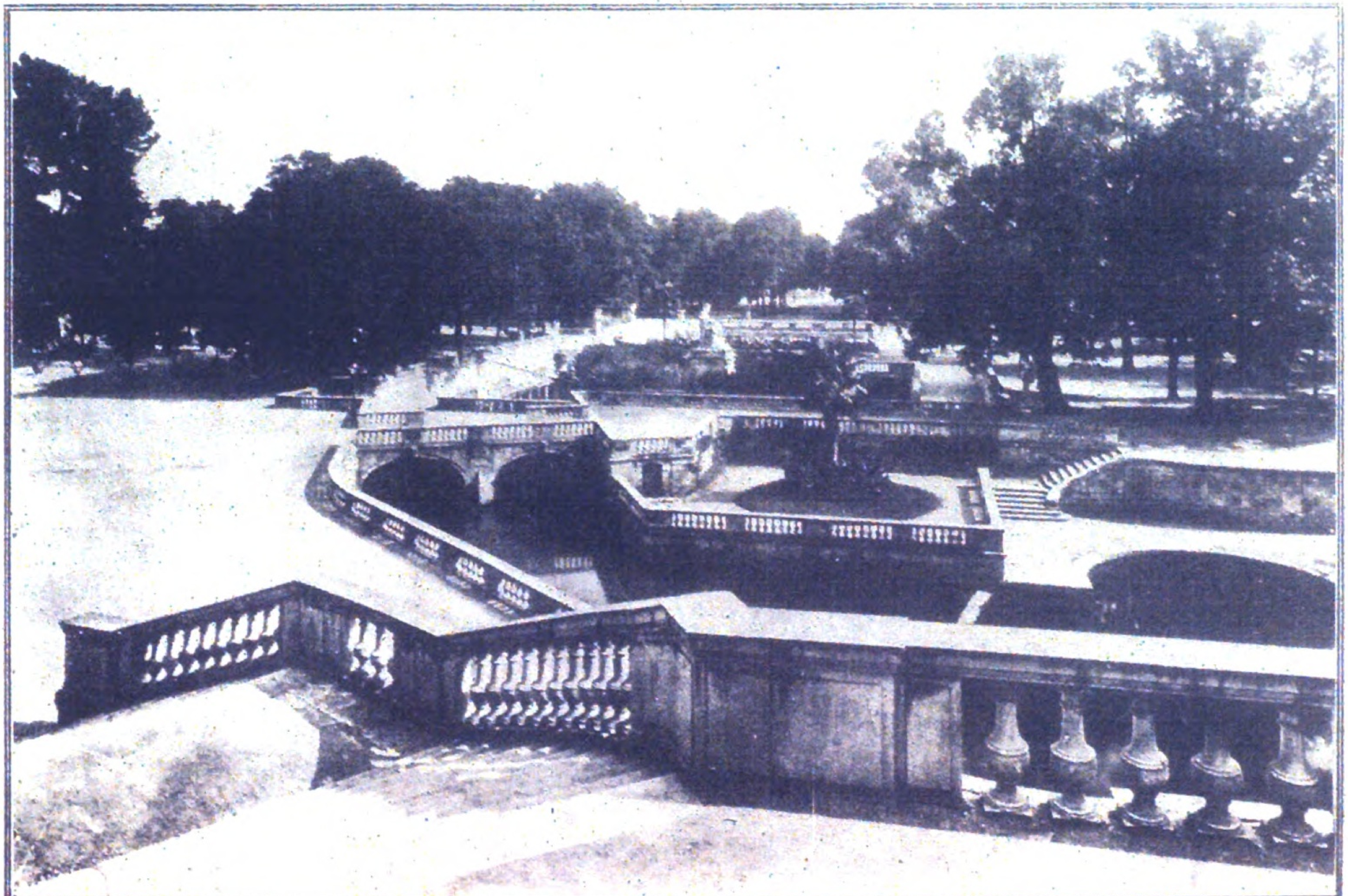
大學白粉定價煉製大瓶三十五錢小瓶二十錢水白粉二十五錢 （本品は全國化粧品小間物店に販賣す）

東京市 **大學白粉製煉所**

徳川公爵の家庭



泉の園



十八世紀に造られし公園にして佛國ニイムに在り

女學世界愛讀者に限り一割引

毛髪を黒く長くふさくくする
椿油にて精製したる
ランラン香油



色を白く肌を艶麗ならしむる
レモン牛乳にて製せる
ランラン化粧水

兩種共一瓶定價各卅錢送料八錢づゝ

毛髪の營養には椿油ほど好い者はありませぬこれは衛生大家及び毛髪を大切にせらるゝご婦人方の實驗證明せらるゝ處でありますが此普通の椿油は厭らしき臭氣がありますから之を除去せねばなりませんランランオイルは最も純良なる椿油に毛髪の營養に必要なる藥劑を加ひロースバイオレットの高貴なる香料を以て彼の惡臭を防ぎ毛髪の助育を專一としたる香油也

大阪西區新町通三丁目

發賣元 福田源次郎商店

電話西千六百壹番 振替口座六〇八六番

皮膚の營養には牛乳に勝るものなきことは皆様のご承知のことでありますが近頃亦レモン液の肌を純白ならしめ殺菌の効あること發見せられ醫學大家の盛に賛評せらるゝ所となりましたランラン化粧水は此配合に困難なる牛乳とレモン液とを最も完全に調配したる最新最良の美顔劑にして色を白くし小皺を伸し吹き出ものを除き夏季の日焼け冬季のあれを防ぐ特効ある化粧水なり

女(への一)

（への二）

新築落成御披露

學校靴特別勉強

學校靴ハ弊店ノ特色





●業務の大擴張

●品質の大改良

●商品の優美堅牢

●無双の大勉強

東京市神田區小川町一番地

木戸靴店

電話本局 一二五三

○刺繍用器具 並に材料

○袋物器具 並に材料

○摘ミ細工 壜細工材料

○造果用材料 並に木型

東京市本郷區弓町二丁目

倉持商店

切取線

此切取線を添へ御申越しの方へは美術技藝の栞並に定價表無代進呈す（女學世界）

女（への三）

女（への四）

女子大學卒業生



理想の子供服



女子共立會寄贈

TAKA-DIASTASE



タカヂアスターゼ

世界最大の製藥工場

パークデビス社は完全なる設備を有する世界最大の製藥會社にして、上圖は其デトロイトに於ける本社工場の全景なり。此他同社は加奈陀及英國に同一規模の分工場を有し、世界の醫家が要求せらるゝ總ての醫藥品を製造す。

タカヂアスターゼはパークデビス社の製品なり。完備せる装置の下に熟練なる技術者に依り、製出せらるゝ

高峯氏發見消化新劑

本劑は品質純良、毎瓶强度均一にして、又其効力永久不變なり。

醫師及藥舖諸彦！模造品製造者の誇大なる虛僞的廣告に誤らるゝ勿れ、世上本劑以上の實品なきは歐米及吾多數醫學大家の實驗報告に徵し確認せらるべし、需用者は必らず高峯氏タカヂアスターゼと指定せられよ、本劑は粉末錠劑水劑の三種として發賣せり各地藥舖にて販賣す

代理店 東京南茅場町 三共藥品合資會社

女（その二）

登錄商標



サンデン博士曰く神經强壯にして身體精神共に健全なるときは幸福長命なることを得べし

事實說明書及說明書申入者に無代進呈す

サンデン電氣帶

主治効能

神經衰弱、消化不良、胃擴張、不眠症、便秘、脚氣、神經痛、寢小便、リウマチス、腰痛、腦病、記憶力不良、男女生殖虛弱、遺精、夢精、ヒステリー、中風、半身不隨其他



登錄

商標

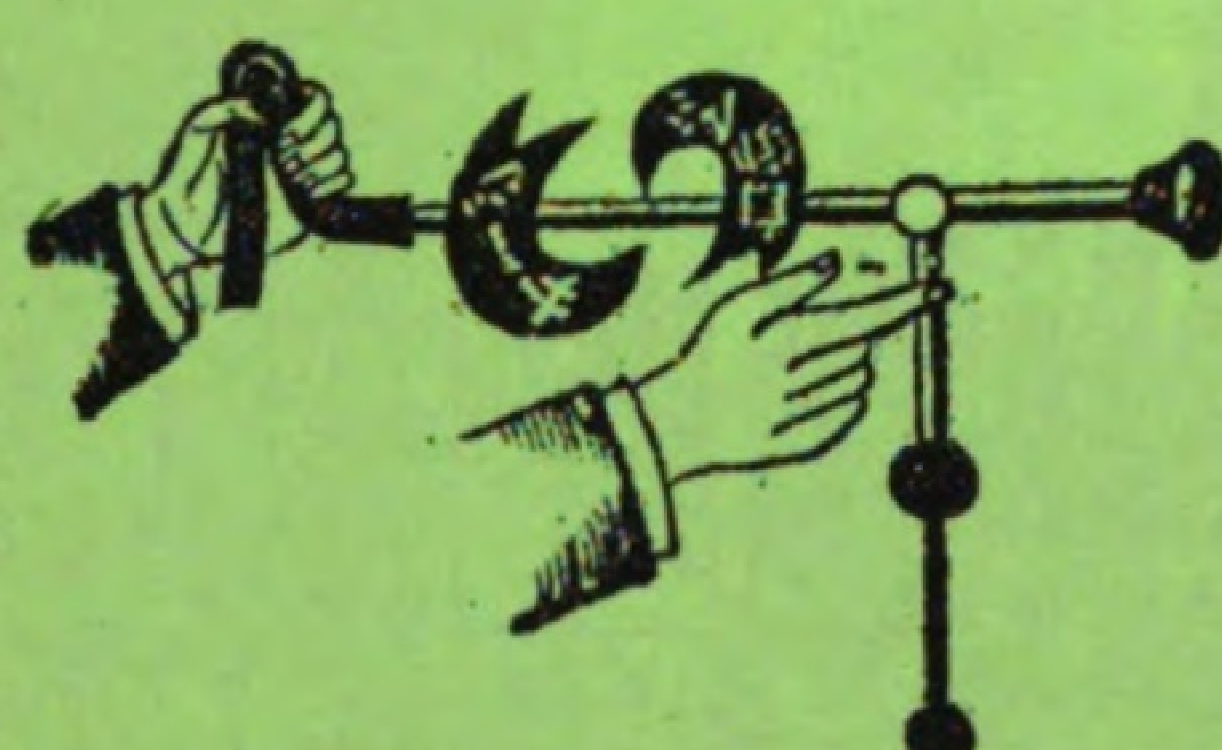
アクチナ



アクチナ　耳、眼、鼻、咽喉、頭部、喘息氣管支其他

アクチナ　は家族應用の便あり

說明書申込者に無代進呈



「自働マッサージ」

一名ひとりあんま器

かたのこり其他痛む所を即座に治す

說明書無代進呈

「電氣ブラシ」美顏術用

說明書無代進呈

サンデン電氣商會

總支配人　タブリユー、エチ、ワットソン

本店　横濱市山下町八十一番館

支店　東京市京橋區尾張町二丁目

支店　大阪市南區心齋橋筋一丁目

女（その二）

The Girl Student

女子英語

編輯主任　東京外國語學校教授　村井知至
　　　　　日本女子大學校教授　松浦政泰

編輯補助　ジヤパン、タイムス主筆　高橋一知
　　　　　前高等師範學校教授　岸本能武太

●通信教授の性質をも帶び獨習に妙で又學校受業の參考にも適す
●程度は主として高等女學校即ち重に第一、第二、第三讀本
●或る小部分を除いては初等英語研究志望の方ならば男子にも適せずとせず
●趣味と實益とを兼ね面白くて爲めになる、不完全な敎師に就くよりよい
●親切は本誌の生命殆ど悉く對譯にして多くは詳密なる註釋を加へ誰にでもわかる
●讀譯譯讀英文、和文英譯、會話、習字何でもないものはない
●文章もあれば理科もあり家政もあれば遊戲もあり決して單調でない
●肅然として襟を正うせしむるものあり滑稽百出頤を解かしむるものあり趣味亦多樣
●西洋雜誌が讀めだし西洋の料理書家庭書などが讀めだす
●英語を學ぶと同時に日新の知識に觸れ且つ大に修養に資する所あり
●暗誦朗讀又演藝に適する女學校文學會其他種々の會の餘興に適する材料もある

特別寄書家（いろは順）

高等商業學校教授　花輪虎太郎君
第一高等學校長　新渡戸稲造君
第一高等學校教授　岡田實麿君
東京帝國大學教授　和田垣謙三君
學習院教授　神田乃武君
前同志社校長　横井時雄君
民友社長　徳富猪一郎君
高等商業學校教授　高島捨太君
早稲田大學教授　高杉瀧藏君
女子高等師範學校教授　武田錦子女史
東京女子英語塾長　津田梅子女史
日本女子大學校長　成瀬仁藏君
早稲田大學教授　浮田和民君
慶應義塾講師　野口米二郎君
「英學生」主筆　山縣五十雄君
外國語學校教授　淺田榮次君
外國語學校教師　メドレー君
女子高等師範學校英語教員養成所主任　鹽谷榮君
實踐女學校長　下田歌子女史
立教中學校長　元田作之進君
早稲田大學講師　杉山義亂君

初號目次

●口繪櫻とこま鳥(三色版)●發刊の辭●祝詞神田男爵津田梅子女史
(修養欄)新渡戸稲造君
(研究欄)●譯讀●新舊譯語の對照●ナショナル第一講義(岸本能武太)●女子會話●作文初歩●書翰文練習●米國少女の歐洲旅行通信文●新式英習字●英文和譯(課題)●和文英譯(課題)
(家政欄)●季節料理(對譯)●西洋小兒服裁縫(對譯)岩村秀太郎君●臺所化學(對譯)●化粧臺(同上)●育兒談(同上)
(文藝欄)●ダイヤロゲ(文藝會の材料)●太平記劍の卷(英譯)鹽谷榮君●英詩和譯(鹽井雨江君)●和歌英譯(和田垣謙三君)
(娛樂欄)●英語笑話●英語失策談●英語遊戲(兒童花の會)●英語の謎
(雜報欄)●閨秀實驗談(余は如何にして英語を學びしか)(下田歌子)●女學校英語評判記●雜誌の雜誌●讀書の栞●應問錄●讀者の聲

定價一册十錢郵稅五厘
半年分六册六十錢(郵稅共)
一年分十二册壹圓拾錢(郵稅共)
毎月一日發行初號に限り四月十五日發行

新渡戸博士は**英文倫理談**を毎號の**修養欄**に寄せらるべく
元田作之進君は**英作文**の構成法に關する**新案**を寄せらるべし

發行所　東京市神田區表神保町十番地　東西社(振替貯金口座一三一四八一)

女(その三)



フランス製
ケーバ香水
全世界を通じて流行品
本品は現今貴婦人方の愛用品
フランス上流社會はケーバ香水の高尚なる匂を愛せらる
輸入元
日本橋區橘町二丁目
竹間商店
電話浪花一六一四番

竹柏會



日本橋倶樂部に於て


千代田白粉 香油
千代田白粉と香油とは廿世紀式の新原料を配合して調製したるものなれば夙に淑女令孃に愛用せられ高評嘖々たり
白粉 大瓶卅五錢 小瓶二十錢 水製 廿五錢
香油 大瓶卅五錢 小瓶廿五錢
東京馬喰町
山岸三之助
電話浪花三七九三


純粹椿油
三宅油（みやけゆ）
小廿五錢 中四十五錢 大八十五錢
みやけ油
僞物所々に現はる
本舖の純粹椿みやけ油の大効力は紳士貴婦人諸君は村井先生の御說明にて御承知の筈なれば略すさて近來所々に弊堂發賣の純粹椿みやけ油の僞物非常に現はれ下らない油へ匂ひを入れて胡魔化し純粹椿など〻申し甚だしきは本舖純粹椿油の登錄名稱たる三宅油又みやけ油など〻言ひ觸らす不埒極まる者あり若し御買求めの際は右圖の如く三婦人の登錄商標にお目を留め下されたし此の商標無くば決して純粹椿三宅油又はみやけ油に有らず
御注意 一外は一切仕らず候而してみやけ油と三宅油とは少しも區別無し唯讀み易き爲め一の假字に有之候
一みやけ油の升賣りは本舖間宮三宅堂の
▲地方よりの御注文は小瓶八錢中大瓶十二錢の小包料を要す
發賣 間宮三宅堂本舖
電話浪花六二〇 東京日本橋區人形町通蠣殼町二ノ十五 振替口座八七五一

女（ちの一）

教育縫取り繪

一箱金五錢　郵税二錢

一本の針と數種の糸にて美しい花や可愛らしい鳥や勇壯の軍人や其外種々何でも自在に美麗に出來る新意匠の高等玩具也

造花材料函

一箱廿五錢　送料二錢

造花用の器具と未成の花卉十餘點を入れ合せ造花術を自得せしむる樣せしものなり

糸掛器

專賣特許　實用輕便

甲廿五錢乙廿錢郵税二錢

人の手を借らず一人にて糸を掛け糸細の大小にて自在に伸縮も出來る便利器なり

千代帛紗

甲七十錢乙半圓丙卅五錢丁廿錢郵税二錢づゝ●開けば高尚の帛紗となり疊めば折カバンとなる男女兩用の妙品也

婦人月經帶

甲壹圓卅錢乙八十錢送料八錢

女學生看護婦事務員其他立働きせらるゝ婦人方月經の期に例の過ちなく且腰を温め衛生に宜し

改良新式 萬年筆

六十五錢　一圓廿錢　貳圓

二圓五十錢　送料各八錢宛



男女兩用

軸中にインキを蓄藏し筆頭內小針の作用により記書するものにて一回の貯液能く數千字を書き得るが故に學校銀行會社商店及旅行用に極めて便利也

上等　管及針本金製　中等　管銀製針本金製

並品　管水牛針銀製　何れも便利無比也

高尚美麗 理想鏡



直徑一寸三分ニテ半身ヲ寫ス

ニツケル兩蓋時計側裏面に藥入あり

甲五十錢　乙四十錢　送料二錢

賣捌特約　佳人粹士　好評嘖々

新案特許旅行用 齒磨具



上等ニツケル製中に齒磨粉入刷毛舌掻等裝置す

正價甲三十五錢　同乙三十錢　郵税各二錢づゝ

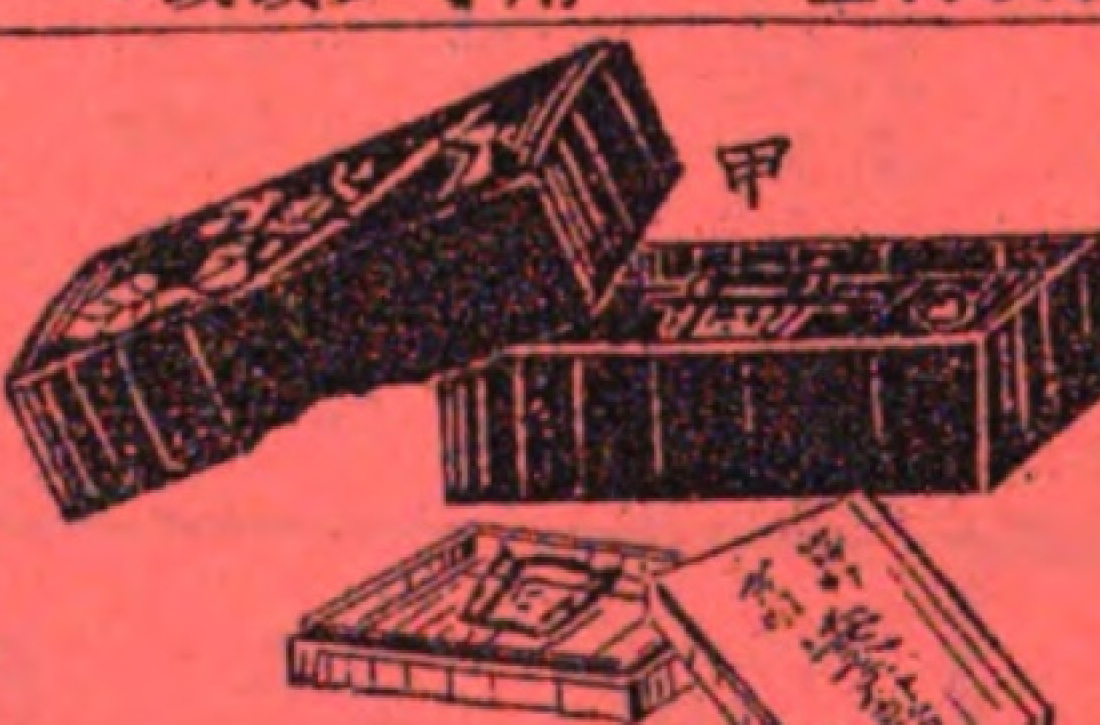
新案 裁縫箱

甲卅八錢乙廿八錢送料八錢



高尚優美桐の木製室內外出兩用に適す甲にはハサミヘラ掛針指巻糸巻等五品附屬乙には鋏ヘラ糸巻の三品附屬

新案特許 磁石應用 安全針箱



甲蒔繪入金廿五錢　乙桐箱入金拾錢　送料二錢

針の錆る事なく又失せる憂なく家庭に外出に兩用に適し女學生間に大好評有

發賣元　大阪東區釣鐘町一丁目　振替口座第五二四七番

中外用達合資會社

●本社營業案內（百餘頁）は往復葉書で申込めば送呈可仕候

女（らの三）

最新刊音樂書

文學士 北村季晴先生編纂
吉丸一昌先生歌章擔任

中等 音樂教科書

（菊判洋裝製本頗堅牢）

卷壹既刊 定價金四拾錢郵稅金六錢
卷貳既刊 定價金四拾錢郵稅金六錢
卷參（五月上旬發行） 定價金四拾五錢郵稅金六錢
卷四（六月發行） 定價金四拾五錢郵稅金六錢

音樂界の要求によりて破天荒の教科書は出でたり、此一書によれば音樂上の智識と技術とを併有することを得べし、これ編者北村先生が六箇年間苦心經營の賜物にして、樂界多年の渇望は實に此書を俟て始めて充たす事を得たるものとす

東京音樂學校教授 島崎赤太郎先生閲
福井直秋先生著

初等 和聲學

洋裝頗美本
定價金六拾錢
郵稅金六錢

和聲學に關する邦文の著書は多年我が樂界に於て要求し渇望せし所にして然も之れあらざりしは斯道の一大缺陷たりしと云ふべきなり今や福井直秋先生の手に成りて斯學の大家島崎赤太郎先生の周密なる校閲を經たる本書出づ蓋し大旱の雲霓も啻ならざるべきを信す其内容體裁等の如何に至りては敢て弊社の言を要せざるべく弊社は唯樂界未曾有の好著を紹介することの榮を得たるを欣ぶあるのみ

女（その四）

發行所

東京市京橋區竹川町十三番地 合資會社 共益商社樂器店 振替貯金口座一五八〇番 電話新橋五二九・四八八〇

櫻井女塾々生



醬油釀造界の一大革新

最良醬酒



●資本金壹千萬圓

釀造元
日本醬油釀造株式會社
東京深川區小名木川通　電話浪花「長」三七七三番
一五九五番

特色
製造清潔
品質佳良
黴を生ぜす
價格低廉
特色

弊社は前人未發の新發明にかゝる嶄新にして完全なる鈴木式釀造方法及機械的裝置により精良無比の醬油を釀造販賣す

特約販賣所
東京日本橋區北新堀町　電話浪花「長」一四六番
合資會社 日本醬油東京販賣所

其他 東京酒類問屋組合酒類仲買店及各地小賣店にて販賣致候間御用命願上候

女(りの一)

女（りの二）

●會長貴族院議員柳原伯爵閣下
●名譽贊助員樞密院副議長東久世伯爵閣下　（其他貴紳數人）

高等女學講義

第一卷　四月廿五日　發行

▲紙數約二百五十頁菊判　二箇年全二十四册完結▼

講師　●理學博士齋田功太郎君●文學博士原秀四郎君●前學習院教授森孫一郎君●東洋音樂學校長鈴木米次郎君●高等師範學校教諭後閑菊野女史●立教女學校教諭門馬常次君（其他專門諸大家十數名）

本講義錄は高等女學校の教授細目に準じ各學科を極めて平易に講述せるものにして職業に從事し或は各種の技藝學校に在る女子をして家庭に於て修學するの便を得せしめ且高等女學校生徒に最良の參考書を供せんことを目的とするものなり

●雜誌　●菊判約五十頁●口繪二枚●挿畫數個●體裁優美　目次●傳記佳話●應用學術●小說●雜纂●會員寄稿和歌作文　會員には毎月無代贈呈

●會費　●一ヶ月分四十錢●三ヶ月分壹圓拾四錢●六ヶ月分貳圓拾六錢●總て前納の事
但最初入會の節は必二ヶ月分前納　入會金參拾錢　但四月中入會者に限り全免（詳細規則郵券貳錢送附直に進呈）

●振替貯金…………壹萬四千六百八十六番

東京市本鄕區西片町二十一番地　帝國高等女學會

女(りの三)

美術技藝研究會長梶山彬著　高雅美本定價五十錢郵稅八錢

編物新書

編物は實用的にして而かも裝飾を兼ね且つ其技藝は高尚にして家庭に置ける第一の生產的なり著者は從來實地研究と授業上より是を分解し懇切に平易に記述せるもの內容は材料と器具其他諸種に渡り完全無缺たらしむ。されば此書を繙く時は斯道研究として唯一の資料たり世の傳習者及技藝科の敎員たるものは一書を購ひて參考とされよ○分解及挿合圖百五十個

造花術新書

定價金五十錢郵稅八錢

本書は著者が敎授上の傍ら實地研究の結果之を世に公にせられたるもの、其內容は學理と實際とを調和し染色錢當組合せ等懇切叮嚀に記述せられ加ふるに一花一葉每に正確なる百九十餘個の切圖を附したれば一度此書を繙く時は容易く座から千紫萬紅の花葉を自然の儘に造り得らるべし。且つ近年刺繡と共に高等女學校の必須なる一科目となり居れり

美術技藝研究會長梶山彬著　高雅美本定價五十錢郵稅八錢

袋物製作新書

袋物は趣味と實益とに富む者なれど大抵其秘訣は專門家の掌中にあり世人の遺憾となしありし所著者は研究會を起すに當り其秘訣までも公にせらる專門家の裁ち方縫方は本書一度繙く時は容易く知り得べし。且參考の爲實地に應用出來得る圖案大判全面の切圖六十二面も入てある。

刺繡術新書

和裝高雅美本定價五十錢郵稅八錢

諸般手藝科敎員は座右すべき珍書也　圖案百五十個入

本書は著者が多年實地研究と授業上より得たる結果を世に公にせられたるもの也斯術に熱中する人は勿論世の

女(りの四)

摘み製作新書

和裝高雅美本定價五十錢郵稅八錢

摘みは大抵專門家の堂奧に秘せられ有しを著者は大に遺憾となし自ら各大家を訪ひ其秘訣を世に公にせらる此書一度繙くときは細小の花卉も百餘個切圖に因て造り得べし

妻女の本分

深谷志汀著定價金三十錢郵稅六錢

家を治むるは國を治むるより難し本書は婦女子としての資格を解せり。一家の組織。一家團欒婚禮式。敎育衛生裁縫料理活花茶湯其他家庭百般を網羅す

女子文のはやし

小杉博士校訂　青木博士增訂　和裝(好評第八十版)定價三十五錢郵稅六錢

女子の作文書多けれども未だ完全なる者なし本書は當時高等女學校に使用せられある消息文記事文を採りたるもの也

女子記事文林

大和田建樹著　定價金六十錢郵稅八錢

國文體の記事文美文韻文美句詩歌を作らむとする者には恐らく本書の右に出づるものなからん

東京市京橋南橫町十八　廣文堂書店發行　振替貯金四六八四番

彈琴



皮膚の營養上容貌の美のため特に推薦する良劑

衛生美顔『シモン、クリスリン、クリーム』

Crême Simon

『シモン、クリーム』は近頃の製造品では有ません久しき以前より御使用と御評判を受けて居ので有り升

『シモン、クリーム』は一種の强壯劑と皮膚を柔くする藥劑とを配合して製造したる無比の良品で有ます



『シモン、クリーム』は皮膚を白くし且つ滑かにして表面がすべ〳〵となり又天鵞絨の如く艶麗ならしめ又快よき香氣を發します毎日お化粧の時に御使用になれば何時もつや〳〵しき容貌を保れます

『シモン、クリーム』はヒビアレ、日にヤケ、汗もの、ニキビ唇のわれ、霜やけ、赤ら顏、又は毒虫に刺された時に御塗りになれば僅に少時間で其効能が分ります又髯剃の後やお小供衆に塗抹しますとすべ〳〵として大變氣持がよく又美くしくもなります

本品は販路が益々擴張されるに從ひまして僞物が多く市場に出て居りますから御求めの際は『シモン、クリーム』『粉おしろい』石鹼共特に登錄商標を御確めの上御購求を願ひ升

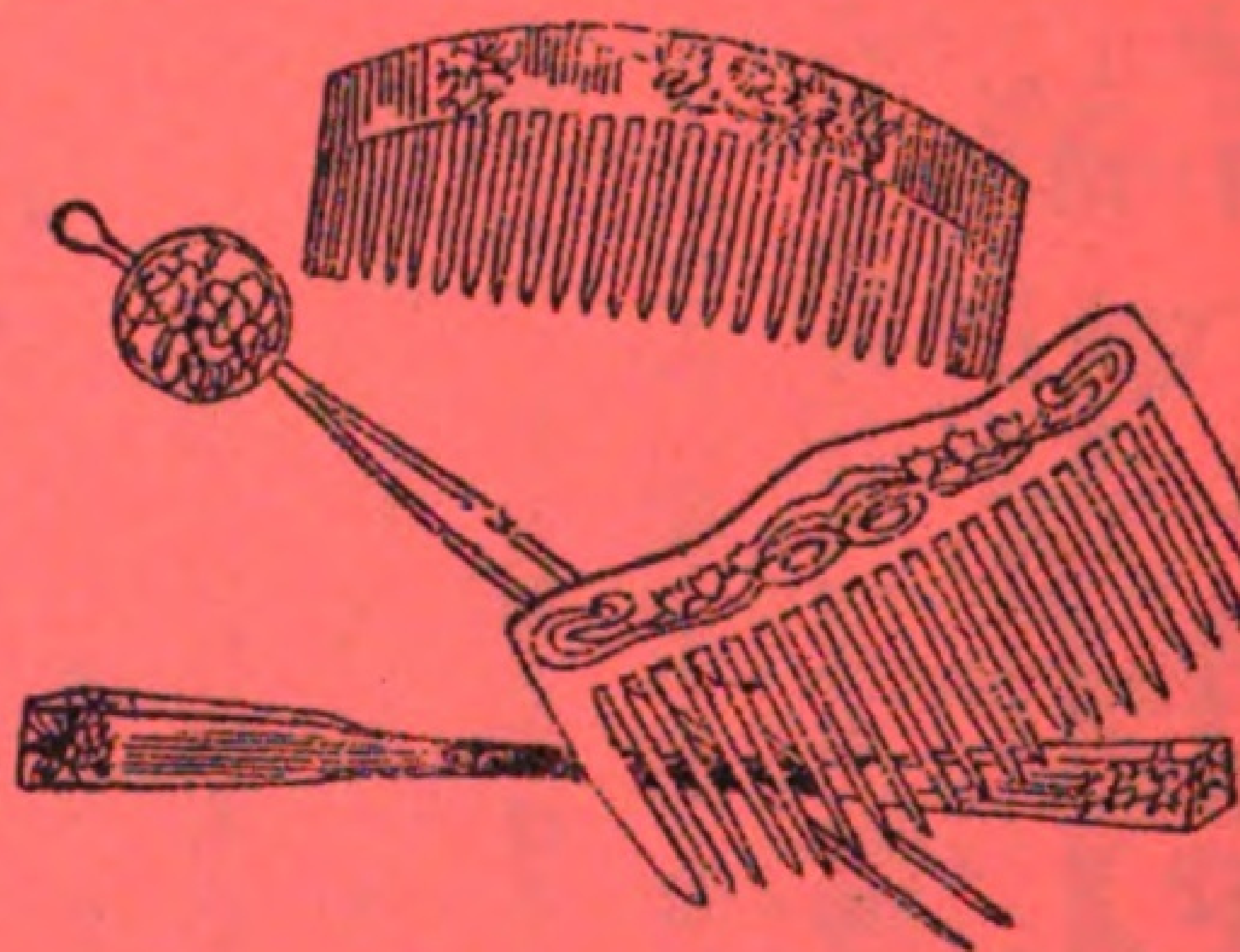
東京及大阪三越吳服店を始め各地洋品店化粧品店にて販賣致して居ります

登錄商標



日本代理店 横濱七十番 エー、ハイム商會

▲意匠斬新破格廉價正札付▼



儀式用鼈甲 櫛 笄

象嵌蒔繪 櫛 中差

金銀寶石入 簪 指輪

帶止ピン

珊瑚珠翡翠 玉替 根掛

化粧品

今回佛國ヨリ季節向最新東髪用四吋五吋六吋リボン 極メテ齒通リ好キ、ハイカラ向

タボ櫛 横櫛 三枚櫛 新着

●地方ハ商品目錄御申越次第送呈ス

神田須田町（電話本局 二〇七六番 振替口座 二八一一番）

鼈甲 小間物商 三井屋德次郎

京橋區新橋際 博品館內支店

神田裏神保町 東明館內支店

女（ぬの一）

女(ぬの二)

女（ぬの三）

女(めの四)

理想の子供服



中野屋洋服店寄贈

女(るの一)

▲藤井女史が女學世界記者に答へたる淑女の可讀近來の良書とは此小說也

坪松
內本
博雲
士舟
序譯

小說

何處ニ往ク

◉本書は高山樗牛が世界的傑作と讃歎せるポーランドの文豪シエキエヰツチ名作の「クオヴヂス」の譯にして前篇は花の如く美はしき戀物語後篇はローマ滅亡の修羅場の繪卷物也結構雄大思想深邃肉躍り血湧くの感あり。坪內博士の序に曰く雲舟君の譯筆平明にして暢達作意を傳ふるに於て遺憾なしと。

好評再版 前篇六拾五錢 後篇五拾五錢

●送料一冊八錢二冊十二錢

東京本郷弓町 振替七六七四

昭文堂

醫學博士 吾妻勝剛先生序

醫學士 佐藤得齋君 伊藤尙賢君 共編

男女學生健康法

全一冊

洋裝三六判
總クロース頗美本
紙數三百八十頁
正價金四十五錢
郵稅八錢

博文館發行

振替口座第二百四十番

三輪田眞佐子先生撰

新撰教訓百首詳解

本書は三輪田先生が既往二ヶ年に亘りて名家の感吟百首を撰集し句每に綿密なる註釋を施し歌の大意を說明し且つ讀人の二傳を附せられたれば一讀歌意に通し**教育勅語**の綱領に遵據してその教訓歌をも撰まれたる曉するは勿論徹頭徹尾教育的見地を以て起稿し者なれば本書を座右に置きて朝夕誦吟すれば知らず識らず國體國風を知り國民道德を進め優美の情を養ひ歌學の一端を窺ひ兼ねて語格の習熟を得べし本書は實に家庭の讀物として最適の良書なり希くば江湖の諸彥一本を購求せられんことを

洋裝美本全一冊 定價五十五錢郵稅六錢

東京市日本橋區鐵砲町 榊原文盛堂

女(ろの三)

(其の四)

大日本淑女學會

會員募集

講義錄は何時にても一號より送る

▲御自分のお宅に居って高等女學校の課程を講習しやうとする方は、本會におはいりなさい

▲本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義錄を發行します。講義の親切丁寧なことは云ふまでもありませぬ。新式の教授法によつて獨習に最も便利な方法をとります

▲卒業は二ヶ年で會費も低廉であります

▲會員には講義錄の外『姫百合』と云ふ美くしい體裁の利益になる女學雜誌を每號無料で進呈いたします

本會の講義錄

▲大判三百頁優麗なる冊子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は專門女子教育家也
▲科外講師は博士學士廿家
▲每號科外講話を附錄とす
▲純潔高雅の家庭小說あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期每に修業證書を與ふ
▲講義錄は貳ヶ年完結とす

◉詳しい**規則書**は申越次第差上げます

◉東京神田駿河臺（電話本局三千四番）

大日本淑女學會



五月

行事——五日端午の節句。男の子の祝ひ日なり。此日男兒ある家家にては、庭上に五月幟、鯉の吹流を立て、床の間に甲冑、旗、差物、菖蒲刀、弓箭、武者人形等を飾りつけ、柏餅、ちまきを製して我子の武運を祝す。又市中の湯屋にては菖蒲湯を立つ。二十八日地久節。

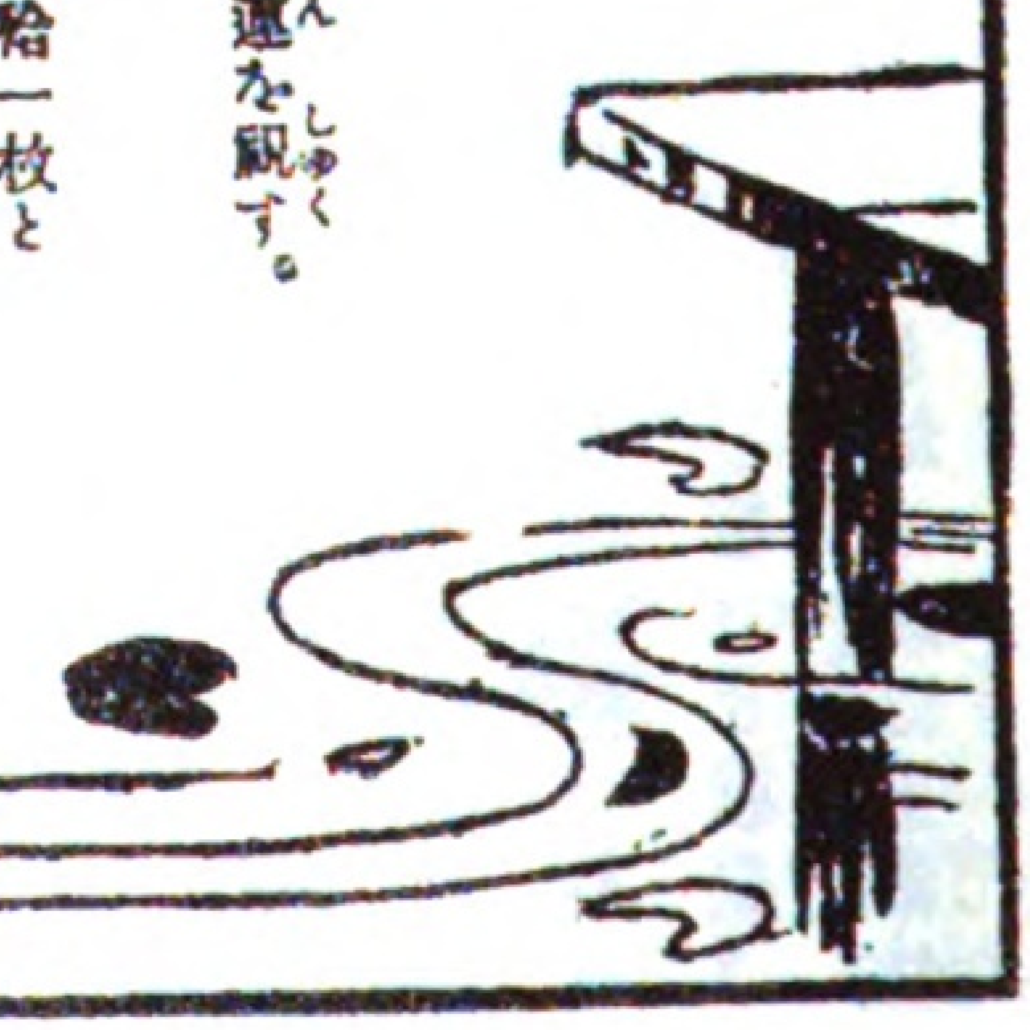
季節——「立夏」。「小滿」。花は梢にかへりて若葉に戰ぐ風すゞしく、人は袷一枚となりて始めて汗を知る。

家事——春より夏に移り替る季節なれば、衣服諸道具の出し入れ、解き物、洗ひ張り、いろ／＼の用事多し。されば好天氣の日を卜して洗濯の用意すべく、火鉢を廢して煙草盆を出し、坐布團を仕舞て夏の敷物にかゆる等、それ／＼仕事の手配あるべし。

食品——魚介類には甘鯛の鹽燒、卯の花と鯛の丸煮、蜆の味噌汁、香魚の山吹燒、土鰌なべ、野菜類にては百合の丸煮、そら豆のスープ、獨活筍、いろ付慈姑、摘み菜の香の物、菓子類にては芋羊羹、椿餅、柏餅。

遊樂——牡丹、芍藥、つゝじ、ふぢの花各々妍を爭ふ好時節なれば、近郊に一日を觀賞に耽るも面白かるべく、或は糸を清湍に垂るゝもよし。

日曜——三日、十日、十七日、二十四日、三十一日。



思潮

兩人の行爲に對する諸家の論評

最近の事實として顯はれたる男女の行爲は事頗る異にして單に青年者流の墮落、狂熱、戀愛、性慾のみの結果として看過せんにはあまりに複雜なり、蓋し一面時代思潮を指摘するの好資料として、こゝに大方の論評を請ふことゝなしたり。

内田魯庵氏　三宅雪嶺氏
長谷川二葉亭氏　三輪田元道氏

悲劇？喜劇？

内田魯庵

▲手拭ひ吹き流しの亞流にはあらず

押しくるめて言へば無論困つた出來事に違ひはない。然し森田といふ男は「女喰ひ」であるとか。平塚明子といふ女は「男欺らし」だとか。もしくは明子を「實に凄い女だ！とう／＼何だか譯の分らぬ事で瞞過して了つた！」などゝいふのは可哀相な酷評である。其麽物ではない。あれは斷じて純潔なものである。どうも明子を女學生が崇拜してゐるとか。或は又あれを三段に分けて、三幕物の劇に脚色と佳い悲劇が出來ると、

女學生などが言つてゐるとか、兎も角も若い女學生に男子は勘なからぬ影響を與へてゐる、困つた者だとか言つてゐる人もあるが、成程それは家並如彼いふ婦人が出ても困る。困るけれども　家並に支那人の妾になるやうな女が出るよりはい〻それとは譯が違ふ。ともかくも精神的の純潔な問題である。情死に出かけたとか道行をしたとかいふと、直きに手拭ひを吹き流しに咬へて花道から驅け出して來て、適る處で女が躓いてバツタリと倒れると言つたやうなものと世人は頭から決めて了ふが、其れと是れとは全く選を異にしてをるものと思ふ。

▲教育家の妄評

新聞などでもいろ〳〵の事を言つてをるが、就中笑ふべきは某教育家の言ひ條である。何でもさん〴〵に森田の惡口を言つて、「森田といふ男も實に怪しからぬ奴だ—學士ともあらう者が若い女を欺したりなどし、て實にくだらない奴だ」とか言つて、罵詈讒謗を極めた序でに、自然主義の攻撃などをしてゐるが、さういふのを一面から見れば、教育といふものは自然主義よりも無勢力な——自然主義以下のものだと自白してゐるやうなもので、却つて教育の價値が問題になつて來はせぬかと思ふ。

すべて社會の事象といふものは、單獨に孤立的に起るものではない。社會全般の種々なる事情が絡み合つて、その關係の中から或る事實が起つて來るものである。この情死事件もその通りで、その起つたのには教育といふものも矢張關係を持つてゐるのである。然るに某氏などは、教育は此の事件に何の關係もなく、全く別立してゐるので、突然に此の事件は、何處からか天然痘でも流行つて來たやうに起つたと恁う思つて唯その當人だちを罵るばかりであるが、さういふ無責任な皮相な、同情のない批評をしてゐるからいけないもつと深い處まで入つて物を觀ないから教育が出來ないので、從つて這麼事件も起るのである。玆に思ひ到つたらば、教育家たる者は先づ自己の無力を愧ぢて、

宜しく旻天に號泣すべきであるのに、それを彼のやうな事を言つてゐる。かゝる人が何とやらいふ地位を占めてゐる女學校は、恰ど清潔法の施されてゐない處から續々惡疫が生ずるやうにならねば幸である。

▲酷に評すれば八笑人

教育家の批評などはさておき、單に森田學士と平塚明子、この二人の男女を一口に評すれば、彼等は一つの謬見に陷つてゐたものである。その謬見とは何であるか。外でもない。彼等は藝術を直ちに人生に實現しようと試みたのである！處が其麼事で死ねるものではない。死といふものを藝術的に考へてゐるやうな事で死なれるものではない。然も彼等はさう考へてゐた。だから一般の世人には彼の事件は解釋が出來ない。世人の眼には果して死ぬ積りであつたかどうかが何うしても分らぬ。又所謂驅落や情死と樣子の違ふ處がどうしても分らぬ。分らない筈である。彼死ぬは不思議な考であるのだから。聞くが如くば森田學士は情死に出かける日の朝、その日の新聞をちやんと讀んでゐたさうである。這麼事で迚も死なれる譯のものでない。けれども本人は死を藝術的哲學的に考へて、即ち彼のダンヌンチオの「死の勝利」などを實現しようと思ひ、又その實現に意味ある解釋を付けて――即ち死を哲學化して――それで死なれるものと思つてゐた。婦人の方もその點は同じ事である。これが抑大間違ひで、さればこそ果して死なれずに、如彼いふ滑稽じみた事に終つて了つた。

此の點から見れば――即ち此の嚴肅な複雜な人生といふものを、輕忽にも藝術的に弄ばうとして、忽ち失敗に歸した態を見れば寧ろ甚だ滑稽である。或女學生は三段物の悲劇にするとかいつたさうだが、成程悲劇には違ひない。全く悲劇であるが、然し一方から見れば、却つて好個の滑稽劇ではあるまいか。これは酷評かも知れないが、かの「八笑人」の左二郎、茶目吉が、飛鳥山で茶番をやつたといふ、その茶番とまあ似たやうなものではなからうか。左二郎、茶目吉があの

喫茶番をやつた氣が知れない。今度の一件も氣が知れないこと。まあ同じやうなものではないか。兎も角結果から見れば茶番に終つて了つた。然し夫だけに又一息に喉を突いて了つたよりも更に一層の悲劇である。

▲祝すべし然して救ふべし

世間では多く森田などゝいふ青年は腐敗してゐるとか、墮落してゐるとか、やれ明子が莫連者だとか、さも彼等がその代表者――模型的デカダンスでゞもあるやうにいふけれども、所謂チピカル、デカダンスにも善意味と惡意味と二つあるが、もし惡い意味で言ふのならば、ナニさうではないと思ふ。そりや支那人の妾になるやうな女と一つらに見做しちやならない。もつと精神的のものである。

ともかくも新事實である。さういふ暗流が明治の學生間に從來流れて來たにしても、それが今愈々現事實として眼前に現はれて出たのである。全く新事實！明治以前には此のやうな事は決して有り得ぬ事。兎も角もお染久松の戀を解する眼では解することの出來ぬものがある。人情に通じてゐるといふ小說家でも、江戸式の、戯作者氣質の頭腦では迚も解し得ぬ事實である。或は自然派小說家の何某でも、人間を肉慾の塊とばかり思つてゐる先生には、恐らくは分るまい。さすれば斯ういふ事實――變現象ではあるが其れは精神的の變現象――の起つて來た事に對しては、教育家たるものは却つて之を祝してよい譯である。まづ大いに祝盃を擧げてよいのである。然して後之を救ふ方法を講ずればよい。頭から罵倒するのは實に迂濶な話である。

無論この事實は正義視することは出來ない。それは何と言つても正義視する事は出來ない。固より危險な現象に違ひない。明かに危險である。社會的危險に違ひない。が、それは電燈が出て來て電燈から起る火事といふ危險を増したといふやうなものである。電燈の出來た事、學生の思想界、精神界の進んだ事、それは矢張祝すべきことであらう。

▲二人の戀と將來

けれども單に社會問題として見ずに、二人の身の上殊に婦人の身、明子の後始末をどうするかといふと、實にこれは困り者で、どうにも始末にゆかない。明子の父定二郎氏の立場を察して見れば、實に腸を絶つ思ひであらうと思ふ。

明子の方に戀があつたか無かつたかといふ、これは一見分らない事であるが、然し矢張戀があつただらうと思はれる。あの類に森田の惡口を言ふ所などが、却つて森田に尠なからずインフルーエンスされてゐる事を證してをる。或は明子自身も意識して居らぬかも知れない。然し暗々の裡に戀はあつたものと斷定すべきであらう。

さらば後始末は付くではないか。どうせ出來合つたものならば仕方はない。一つにして了へ。と譯もないやうであるが然うは行かない。二人とも不承知だ！茲に於てどうにも始末に行かないのである。互に意識的になつてゐるので簡單に「一つにして了ふ」といふ譯にいかない。さらば二人の將來はどうなるか、明子の運命はどうなるか。殊に婦人の方がどうにも親は始末に困るであらう。

一種の色情狂か

文學博士　三宅雪嶺

▲色情狂

詳しい事情は知らないが、今までに分つて居る處で考へれば、明子といふ婦人は一種の色情狂ではあるまいか。實際如彼いふ色情狂があるものださうな。即ち異性の者を傷づけるか殺すかして、それを愉快！と感ずるので、それが又或る場合には異性の者に自分が傷つけられるか、殺されるかするのを愉快！として求める。つまり彼の婦人はそれなのであらう。外の事はない。無意識的に根底に横たはる此の要求から、單に

森田學士を殺し又自分を殺すのが愉快で、これが爲に塩原の山深くまでも雪を蹈み分けて入つたのであらう。

處が明子の方は色情狂でも、森田の方は狂ではない。從來の種々の經緯から、森田も亦稍狂的に感染して、十分死ぬ積りで出かけたのではあらうけれ共、さあ愈々「殺して下さい」といふ刹那に臨んで逡巡いで了つた。もとく男の方は狂でないからである。それでとうく思ひ切り惡く、彼麽滑稽な事になつて了つた。

▲手紙と遺書と刄

あの明子が森田にやつた手紙など、普通の眼で見れば何うしても分らないものである。「誰でもいゝ私の骨まで髓まで刺し通す者はないか」とか「先生は私を殺して後世生きて見てゐるといふけれども、私も先生を殺して身肉を食み、夜陰に血潮をすゝりて唇を染めんことを願ふものとしたら何うするか」とか、頻にさういふ事を言つてゐる。「私を先生が虐殺なさる處を見せて下さい」、「何でもいゝから私の額に鉈を加へて見せて下さい」。かういふ事を澤山言つてゐるのを、普通に解すれば如何にも常識を失つてゐて、全然譯が分らぬことになるが、色情狂の婦人として見れば總てがよく分る。

明子が眞劍に死ぬ積りであつた事は、あの遺書を見ても分る。簡潔で、一寸善く出來てゐる。眞劍でなければ矢張あれだけには出來ない。出來てゐるものを讀めば何でもないやうだが、どうして本氣でなければなかくあれだけには出來ないものである。

されば明子が眞劍であつた事は疑もないが、然し愈々となつて果して死ぬのが厭にならないかどうか。それは行つて見ねば分らぬ。白刄を胸先へ突き付けて「さあどうだ」といふ處まで森田がやつて見ればよかつたが、森田は其處までやり得なかつた。誰やらが「ナニ明子はあれ以上の女だ」とか言つてゐた。要するに男の方がまづ逡巡いで了つたと見える。

▲男は如何

さらば森田は如何。これは狂ではないが、やはり變つてはゐる。薄情――と言つては違ふが、ずん〳〵感情の移り變つて行く質と見える。その刹那には非常に其物に熱中して了ふ――こゝは普通の薄情と大變違ふが――一たび感情が他へ移ると、以前の物は奇麗に思ひ棄てゝ了ふ。花に遊ぶ胡蝶！と譬へると大變美しく感ぜられるが、前に遊んだ花を譯もなく忘れ果てゝ了ふ殆ど冷酷なる胡蝶である――言ひ換へれば――薄漣女といふ事をよくいふが――これは男の薄漣とも言はうか。

それだから甚だ薄つぺらである。前の關係も後の關係も、共に棄て難くてその間に煩悶苦惱するならば、そこに深みも厚みもあるが、前の方は打斷つたやうに棄てゝ了ふのでは、煩悶も苦惱も何にもない。興覺めた話である。小説にした處が甚だ面白くない小説と言はねばならぬ。一昔も前の事であつたが。山田美妙齋が淺草邊りの或る女を欺して、何うしたとか恁うしたとか艶聞を流した事があつた。それは小説の材料にする爲だと辯解して、正にそれを小説に書きは書いたが餘まり面白くもなかつた。今までの辯解程度では、森田亦然りと言はねばならぬ。聞くが如くば彼れは全く懷疑的な男だといふ。果して從來の道徳も宗教も念頭にかけぬならば、何の氣兼ねも要りさうもない、ずん〳〵と自信を表白したらよさゝうなものである。教育させた人間でもあるから、よほど意味ある辯解が出來さうなものではないか。森田は文學的の新生涯に入るとか言つてるさうだが、さすれば何れ懺悔錄のやうな物を書くであらう。それに正直に白狀するか、假構事をやるか。そこは見物である。やる位ならば總て大膽に思ひ切つてやつて見たら宜しからう。さもない間は矢張薄つぺらなものとしか何うも思はれない。

▲教育と色情狂と結婚

さらば明子の性癖は教育によつて左右する事は出來なかつたか。或は幾何かは左右し得たものであらうか。もしくは却つて文學の影響を受けて、一層性癖を助長した傾きはないか。或は又一般人も多少さういふ傾向を持つてゐるもので、惡くするとそれが募つて來るやうな事はないか。皆なか／＼問題である。

同じく色情狂でも、始終教育で陶冶されゝば治つてゆく程度のものもあらう。要するにそれは種々であるが、所謂禪學令孃といふ名前は、これは名前で、新聞屋が勝手に付けたものではないか。禪學令孃――何だか呼び好くて具合がいゝ。と言ふやうな譯で彼方でも此方でも禪學令孃！實は禪でも學でも無かつたのかも知れない。然しまあ彼の手紙なり遺書なりに、あれだけ難解かしい事を書けたのは文字教育の効能で、それだけの點では明子は教育に左右されてゐたのであらう。

寧ろ誰とでも早く結婚してゐたならば、何うなつたか分らない。それに色情狂といふものゝ發作するのが恰ど又結婚期にあるのだから、明子も無事平穩に、早くスウイート、ホームの味に觸れてゐたならば、その感情が又餘程變つたであらうと思はれる。結婚次第では又却つて結婚した爲に其の狂が募つて來るかも分らぬが……。兎も角も婦人の結婚期に變つた現象が起つて來るので、これも即ち其の一例である。然しあらゆる妙齡の婦人は結婚期に於て陰に陽に多少の變動を受けぬ者はない。明子孃對森田學士の事件の如きは、好個の考物であらうと思ふ。

暗中摸索の片影

長谷川二葉亭

▲不可解なる事實

禪學令孃と頻に評判のやうであるが、果して禪學だか何うだか。禪學で悟つた者ならば、アハヽヽヽと大

笑ひして、それで仕舞になる筈ではないかと思ふ。死ぬの生きるのと騒にも及ぶまい。本氣になつて辯解でもあるまい。禪學といふに何にも意味は無さゝうだ。何にしても不可解の事實である。材料不足である。　森田は妻子を離別までして出かけたといふ處を見れば、眞劍に死ぬ積りであつたらしくも思はれるが然うかと思へば又彼麼たわいの無い事で終つて了つたそれなら洒落か狂言か。或はあれは小說の材料にするつもり、あの女をモデルにする積りで彼麼眞似をやつて見たのだ、といふ者もあるし、なあに彼れは一つ如彼いふ事を仕出來して、世間の奴等が何と言つて騒ぐか見てやらう位の事だ。といふ者もあるが、眞逆にさうでは無いやうだ。

◆唯一つの神秘

森田の友人の語る所を聽くに、森田は最う全く懷疑家で、眼中に道德も無ければ宗敎も無い男であつたが唯一つ天地間に小兒の愛だけは神秘的なものだ。と言つてゐたさうである。而して又妻子の無い友人などの眼には、實に可笑しくて堪らぬ程小兒を可愛がつてゐたさうだ。さうして見ると愈々分らなくなる。

勿論明子との關係も何れ程の深さであつたか能く分らないが、兎も角も其の女に對して大いに好奇心を持つてゐたは事實で、よく友人に向つて、實に變つた婦人だ、面白い女だ、と言つてゐたさうである。それに「死の勝利」の——女がどうしても屈せぬ、それを斷崖の上へ伴れて行つて突き落す、女が覺えず「助けてくれ！」と叫ぶのを聽いて、「我れ勝てり！」と莞爾と打笑むと共に、續いて男も身を躍らして千仞の谿に飛び込んで了ふ。これを痛く愉快がつてゐたも事實であるさうな。

けれども其麼事位で、あらゆる事總てが懷疑的である中に唯一つ是れのみは神秘だと言つてゐた、その小兒の愛までも犧牲にして出かけた。どうも分らない話で、又其れ程に決心して行つたものとす

れば、その結末が滑稽である。

▲意識以下の心理事情

それは二人に聽いて見れば、いろ〳〵の事を言ふであらう。けれども其れを聽いたつて分るものではない。否、これは本人同士にも分らないであらう。即ち當人たちも意識してゐない、意識以下の種々な心理的事情が紛糾つて、それに動かされてゐるのである。

この意識以下の複雜な心理事情――それが分らない内はこの事件の眞相は分らない。だから最つと材料を豐かに得て、其處を洞察し、看破して、それを明瞭にして見せたならば、成程――と初めて當人同士にも分る、と言つたやうな物であらうと思ふ。

よく事情を知つてゐる森田の友人があるから、一つ小說にでもして、本人にも分らない眞相を摘破して、大いに世人や本人たちをも警醒してやつたら宜からうと冗談を言つた事であつたが、能し事情を詳しく知つて、總て分り拔いてゐるやうな顏をしてゐる友人連に逢つて、段々訊いて見ると矢張分らない。「さあ其處は何うだらうか」。と言ふやうな事で首を傾げて了つて、私の疑問は矢張疑問として殘つて了ふ。

▲時代の片影を見る

然し何れにせよこの事件に就いて、感ずる所に時代精神の斷影を見ると思ふ。何ぞや、即ち個人主義、個人思想である。元來この個人主義といふものは、社會が大いなる壓力を以て個人を支配し、驅使し、桎梏して、殆ど個人を道具扱ひにし、個人を塵芥のやうに取扱ふ。といふ傾向に反撥して起るもので、つまり個人といふものゝ存在を大いに主張するのであつて、そこにも大いに道理があるが、さうかと言つて、それを飽くまでも貫けば人類の共同生活は出來なくなる。個人主義を極端に發揮すれば、どうしても社會は解體して了ふ。その社會がまだ解體せぬ以上、個人主義を飽くま

でも貫かうとすれば、却つて自分が亡びて了ふより外は仕方がない。即ち個人の存在を主張して却つて存在を破壞して了ふのだ。明子森田の一件も、やつぱり其の破壞をしかゝつたものである。

▲千古の問題

個人主義に對して一方に社會主義（即ち共同主義）、この二つの要素が何うしても實際社會――この生きた現實の社會――には必要で、然もその調和が旨く取れない。個人主義と社會主義との衝突矛盾。これが西洋も東洋も今も昔も問題で、始終これに弱らされてゐるのである。

近來私が讀んだものゝ中で、今も猶忘られないものは露西亞の雜誌に出てゐた論で……。即ち個人は自由を得ようと悶躁く。けれども社會の壓制――露西亞政府の壓制――は大いなる力でそれを押へ付けて來る。其に何を望んでも何を考へても到底遂げられる見込は立たぬ。もう絶望である。そこで強い者は――男でも女でも――憤然として革命家となる。弱い者は自分が死ぬ、酒で滅茶々々になる、肉慾で滅茶々々になるさうして不平を忘れようとする。かくして言語に絶えたる露西亞の墮落腐敗の一面は現はれて來るのである。これは露西亞の話であるが、個人主義と社會主義との衝突からは、何處にも係る傾向係る暗流が流れゆきつゝある。

▲暗中摸索の兒

かやうに二つの主義の衝突に挾まれて、其の調和の取れぬので昔から何處でも弱り抜いてゐた。それが苦しさに露西亞のメレジコウスキーなどは、一種の調和說を立てゝ來た。それは一種の三位一體說で、個人主義と社會主義と而して最う一つの調和點とがあつて、それで三者一體の調和を得ようといふのである。人の身體に此の一個のユニットがあつて、それで全體の複雜なる機關がよく調和されてゆくやうに、この實際社會から何等かのユニットを一つ發見して、それで此の二個

の衝動を調和しようと考へた。これはメレジコウスキーのみならず誰しもから考へて來るわけであるが、然しその手ャツトが果して何であるか、なか〳〵捉まへる事が出來ない。そこで所謂暗中摸索!。今は正にそれを捉まへようとして掴み得ずに、悶躁き悶躁いてゐる時代である。

さればこそ滔々として青年男女が懐疑的になる。虛無的になる。個人主義になる。明子森田なども此の暗中摸索の暗黒裡から生れ出た兒に外ならぬので、あれが眞正に我が存在破壞をやつて了ひ死んで了ふ、と、それは時代思潮――個人的潮流――の代表者を現はした事になるのだが、彼麽中途半端な事ぢやあんまり言ふにも足らぬ。然しながら兎も角も時代精神の片影ではある。

二人の葬らるゝのみにはあらず

三輪田元道

▲大いなる問題

これは却々大問題であると思ふ。單に明子と森田某とが一身を過つたといふのみでなく、影響が頗る大きいと思ふ。

先づ私の平生の持論から申すと、昔から東西共に倫理と文藝とを、互に各別に獨立するもの、若しくは撞着して相容れないものと思ひ、今の人も猶さう思つて居るが、これが抑々誤である。昔から大偉人の説いた倫理をよく見れば、實に趣味津々として大いに味ふべきものがある。例へば釋迦が一莖の清らかな蓮の花を採つて、これを其の一人の弟子に與へた處が、弟子も亦莞爾として之を受けた。すると釋迦が大いにその振舞を嘉したといふ。これ其の一莖の花にも天地の美

も人情の美も籠つてゐるので、よく其處を味ひ得たのを嘉したのである。基督の敎も亦然り。「野に咲ける百合の花はソロモンの榮華の極みよりも美はしい」。これも亦自然美も人情美も十分に咀嚼した敎ではないか。東洋の、孔子の敎とても――つい先夜も晩餐の食卓で話し合つた事ですが――「人若うして少艾を好む」といふ文句がある。然も「論語」の中にある。然して少艾とは外でもない、若い婦人の事である。

　聖人などといふと直ぐに乾燥無味なものに思ふが、聖人は何うして〳〵人情通で、大倫理の中には斯の如く大人情が含まれて居る。然して大文學も亦その通りシエークスピアとかゲーテとかダンテとか、一世を聳動した世界的の文學者の作には、必ず一種の倫理觀が含まれてゐるので、つまり大いなる人物ならば、倫理文藝、何方から出立しても、歸着點は一になるのである。それが人物が小さいと動もすれば極端な、細かい事に拘泥して了つて、兩者を自分の頭腦の中に併せ容れ得ぬやうになる。そこで一知半解の輩となり、道學者となつては文藝を敵のやうに呪ひ、文藝を嗜んでは道德を五月蠅物、迂濶な物として棄てゝ顧みぬ。即ち文藝あつて道德あるを知らぬ、否、眞の文藝には倫理の籠つてある事を知らぬ、これが日本現代の大いなる弱點だと思ふ。然して明子森田の二人も、亦この誤に陷つたものである。矢張現代の弱點に陷入つて了つたものである。

▲危險なる風潮！

然してこの二人の事實によつて、現時の風潮の甚だ危險に赴いてゐる事が今更に感ぜられる。この二人は實に危險なる風潮の力が、割合に大なるを證した代表者！　である。

　私共も大學出身であるが、兎も角も大學は最高敎育の府、其處に入るまでには既に幾分淘汰せられ、又卒業するまでには多少の忍耐も要れば多少の學才も要る其處を遣り通したは確かにまづ精選せられた人間と言つていゝ。森田氏は即ちその一人。又婦人の方も女子

大學を出た即ち最高教育を受けた婦人である。殊にあの平塚氏は私共が高等學校時代の獨逸語の教師で、後には會計検査院の高等官。その家庭は嚴格——のみならず又正しいもの。されば家庭から言つても又當人同士の教育ある點から言つても、共に中流以上の位地信用あるべき人たちである。さういふ男女の間に恁様な情死沙汰が起つた！　これ甚だ風潮が危險だといふ所以である。

けれども新聞や世間で傳へるやうに、文學士ともあらう者が道ならぬ戀をしかけた、而して屢々挑んだ、其れが叶はぬ結果遂に世の中が厭になつたと、這麼にいふのは大いなる誤である。成程それは挑んだであらう。が、よし挑んだのが事實にしても、單にそれだけで解するは淺薄なこと。誘惑といふものは戀着しくは戀を說くものばかりではない。二六時中耳に聽くもの目に視るもの身に觸るゝもの、皆誘惑たらぬはない。取分けて戀が最も人を誘惑するには違ひないが人知れぬ誘惑といふものは其他に數限りもないのである。それを單に戀に誘惑されて、それぱかりで如彼した行をしたと見るのは間違ひ。寧ろ一般に抵抗力の無い、意志の薄弱なのが病根である。然もこれが水平線以下——の無教育な輩のした事ならばさまでの注意は惹かない。さういふ者の情死や驅落は毎夜毎晩ある。それが最高の教育を受けた男女の間に起つた。即ち教育上から代表的地位にある青年男女が、恁ういふ無抵抗力の事實を示したのだから、坐ろにその危險の風潮に寒心せざるを得ない。

▲女子教育の病弊

平塚明子一人の例を以て、全體の結論を立てるは危險のやうでもあるが、然し明子てふ一婦人を以て、現今の女子教育が甚だ智的に失してゐる事の證據になりはせぬかと思ふ。言ひ換へれば婦人の道德的情操が缺けてをるのである。

嘗て讀んだ傳說に、非常な美觀を持つた一女子が、

その美貌を慕ひ寄る男が多いので、遂には操を守り得ぬかも知れぬと、燒鏝を以て自から花の顏を凄まじくして了つたといふのがあつた。之を讀んで私は實は不滿足に思つた。これが何を意味するのであるか、と言へば、その美人が自から守り得ぬ、即ち意志薄弱なる事を示してをるのである。が、又一方から見れば、其の時代には倦くまでにして、潔き操を保つことを尙んだのである。然るにかゝる情操は近來は甚だ流行せぬ何でも出來るだけハイカラに、出來るだけ智慧のあるやうに、出來るだけ金のあるやうに、出來るだけ偉く見られるやうにと虛飾の競爭である。恰ど商店の品物を飾り立てることが巧みになつたやうに、三越や白木が眩いばかりの店の裝飾で人目を驚かすやうに、人間の價値や品位を飾り立てゝ、一文でも高く賣り付けやうといふ風になつて來た。これは最う確かにさういふ風潮になつてをる。時代思潮が內部の物を出來るだけ外に發表して、三のものは八に、八のものは十以上に見せようといふ傾きになつた。內面的修養よりも、外部の裝飾、方便的智識のみが進むのである。

聞けば明子の机の上には碧巖錄などが乘つてをり、口にも禪學を說いて居つたとやら。私は好んで人を毀るのではないが、これも亦智的中毒の氣の毒な一例である。なぜならば明治の今日に於ける禪學は一種の智的娛樂に過ぎない。此頃は如何はしい政治家や如何はしい實業家の間に頻に禪學が流行つて、實際は非禪學的な言行ばかりやつてゐながら、然も禪學をやると誇つてをる。婦人の禪學などもまづこの際のもので、要するに智的道樂――虛榮――衒學――のものである。なぜならば眞正の禪は誘惑に墮落するものではない。本能滿足をやるものではない、いかなる誘惑にも累はされずに、よく精神を不偏不動の狀態に保つものである。それの出來ぬ禪學ならば滑稽なものすべて婦人の禪學などは先づ達磨が泣く方であらうと思ふ。

▲文藝の毒か社會の毒か

男の方とても無論シエクスピアもゲーテもダンテも否、あらゆる大文學者の作品は概ね讀んで居るであらう。明子も亦文學好きだといふから、或程度までは讀んで居るであらう。けれども果して何れだけに讀んだか。書中に自から潛める眞正の人生、眞正の戀、眞正の人間の義務を讀み味はつたならば、如彼いふ事は出來ぬ筈だと思ふ。殊に男子の方は妻子まである身で、生徒たる一婦人に道ならぬ戀をしかけて誘惑するなどといふ。文學の眞味を解せりや否や疑はざるを得ぬのである。

近時の風潮を見るに、曩にはニイチエの本能滿足主義が歡迎せられ、此頃は自然主義が歡迎せられてをる。のみならず幾らか事實に現はれて來る傾向になつた。否、さういふ傾向が社會にあるから然ういふ小說が出て來るのである。現代の人に取つては戀がいかに影響するか作用するか、其の實際が小說家の頭腦へ入つて、而して小說に顯れて來る。確かに自然主義的潮流が社會に流れてゐて、これが爲に本能滿足說や自然派小說も稍々芽を吹いて稍々活動の力を持つて來るのである。而して明子森田の如き悲しむべき犧牲が生じて來るのである。

さらばこれ文藝が毒したか、社會が毒したかといふに、原因は寧ろ猶一歩前にあると思ふ。即ち東洋の從前の教は——殊に男女間の教に就いては非自然非人情の處があるを免れなかつた。「七歲にして席を同じうせず」「貞女兩夫に見えず」。かく極端であるが果して何人が實行したか。言ふは易いが眞實に之を守るは非常の困難である。確かにこれ生理的にも心理的にも無理な話である。非自然である。從つて斯る教は一般に虛飾的に流れて了ふ。從つて青年男女間の倫理に弱點を生じた。以て乘ずべき缺陷、死文的の弱みが出來た。茲に於て自然の人情に訴へて、人間も生物ならば生物的欲求は免れぬ。或は又政治や經濟さへも人情の土臺の上に築かるゝもの、文學は勿論のこと、倫理も

亦人情を離れては無いといふ思潮に入つて、本能滿足となり自然主義となる。嚴格な博大な倫理の前には、發生すべき餘地も理由もない此等の思潮が起るのも、從來の偏固な道學に對する反動で毒の本源は一つは彼等にあると言つてもよい。

▲當事者には制裁を加ふべし

さりながら社會には自から善惡の標準があるから、善は賞し惡はどうしても制裁しなければならぬ。殊に今日の場合——取りわけ明子と森田の事件などはさうである。

なぜかと申せば昔は善も惡も己れの良心で判斷したけれども、此頃のやうに自然主義流行で、厚顏ましい鐵面皮な、破廉恥な、政治家は收賄をする、その妻君は俳優買をする、女も男も操といふものを關はぬやうな、かやうに社會も紊亂した今日は、人々の良心といふものは最う標準にはならぬ。然して我自身を辯護すべき事實は世間に澤山ある。「君ばかりぢやない。あの方だつて」と我と我が心にいふ。「あの方の方が私よりよつぽど熱い事をして居るわ！」と自から辯護する。男は又「ナニ家庭の事や私行上の事はいゝ。自分は社會の公人であるから、區々たる事は顧みるに足らぬ。いざとなれば……」と自から寛うして恣まな振舞をする。今の時代は殆ど良心の制裁といふものは地を掃つて無いと言つてもいゝ。

殊に自然主義の實行者に向つて反省を求めても無効である。天下に愚と言はれても自分が滿足してゐればそれまでの事ではあるまいか。寧ろ實行者、先覺者として、自から滿足してゐようも知れぬ。否、さういふ自信があるらしくも傳へられて居る。

これに對しては社會的立場から臨むより外はない。高等教育ある此の二人の行が、果して社會の發達を助けるか妨げるかといふ見地から批評するより外はない。此の意味に於て私は社會的制裁の一部を、氣の毒ながら此の當事者に加へねばならぬと思ふ。

▲華嚴と鹽原

這麼批評も、遡つて二人が葬らるゝのみに止まるならば、敢てしたくは無いのである。唯恐らくは動もすると傳播し感染する。さればこそ制裁も改悛も繰返し望ましい次第であります。罪を惡んで人を惡ます。彼等の幾重にも改めんことを望む。代表的教育ある青年と代表的教育ある令孃とが恁ういふ事態を暴露したのは、正に青年男女の墮落を代表したもので、續々とさういふ事實が起つて來ないとも言はれぬ。藤村操が華嚴の瀑に投じた時に、世人は夢にもあのやうに模倣者の續々と起る事を豫期せなんだ。然しあの以後華嚴の瀑の流行り方は偉いものである。鹽原の山深く手を携へて辿り入る男女が、今後續々と起らぬとは保證される限りでない。否、動もすると模倣者を生ずる惧れがある。この意味からは彼等の失敗したのが未だしも仕合せであつた。否、更に彼等二人の幸福のため、又同じ傾向を有し同じ暗流に浮沈せんとしつゝある妙齡の男女のために、更に彼等の新生に入らん事を希望するのである。





妻となる者の困難なる事情

英語專門女塾長　櫻井ちか子

▲妻の操たれし所以

良人に對する同情と云ふ事に就て一寸面白い實例が在ります。私の舊知己であつた某婦人は、一通の教育もあり確乎とした人でしたが、或日良人が役所から歸られるや否や、『貴夫明日の御辨當の御菜は何に致しませうか』と何心なく尋ねました處、良人は物も言はずに夫人を撲ちました。餘りの不法に夫人も立腹いたし一悶着して其場は濟みましたけれども、是が夫人の不平の原因となつて如何も家庭が圓滿に參らず、終に破鏡に立至つたのです。夫で此婦人は立派に獨身生活を爲て見やうと決心して醫學に志し、機を得て米國に渡り、彼地の醫學校を卒業して、大阪に開業致した處、幸に良く流行て得意の境遇となりました。或日重患者往診の歸路、如何したら彼を救ひ得られやうか、如何な處法に投藥したら宜からうと車の上で氣を揉み乍ら家に歸りますと、留守居の老婢が唐突に『先生今日は肴屋さんが參りませんが、晩の御菜は野菜ばかりで宜しう御座いますか』と尋ねた時は、堪らなく腹が立て横面を張倒したくなつたが、婦人の身を顧みて我慢して了つた時に、始めて十五年前の往事を回顧いたし外の務に勞苦して歸つた際、同情の無い調子外れの話を仕掛られると婦人の自分でさへ斯樣に疳癪が起るのであるから、彼時の良人が暴な事をされたのは尤至極の次第である、畢竟自分が家にばかり閉籠つて居たので外に働く人の苦痛が分らず、同情が缺けて居たために良人の怒を招いたのであると、熟々自分の非を悟り涙に咽んだのだ相です。此婦人は夭死いたしましたか

ら憚り世人に知られませんでした。

▲離縁となるべき原因

婦人は同情の深いものですけれども、家の中にばかり閉籠つて智識の範圍が餘り狹いと、ついうつかりと常識に缺けた事を良人に仕向るやうになりますから家政を良く務めると共に外界の事物にも注意するのが肝要でせう。外の働を兼て居る婦人は、良人を凌いで我儘かと云ふに、却つて良人に同情を持て居るのは、外界に接する勞苦を自分が味ふて居るからでせう。良人の猖獗は、男子の我儘から起るのもありませうが多くは外で苦悶した反動ですから、婦人は充分同情を傾けて之を慰め、新しい勇氣を鼓舞するやうに務めなければなりません。破鏡の原因は素より種々でありますが、此處等の呼吸が分らぬ婦人が、多く此禍に遇ふのであらうと考へます。

▲私の感心せる米國の一夫人

私が米國で懇意に致した某妻君は、良人が月收六十圓位の會社員で幼兒が一人ありましたが、元より下婢は置きませんから晩食の後仕舞など手一つで一寸忙しふ御座いました。同じ會社員の内でも晩食後は妻君と一緒に臺所を手傳い子供の世話も爲る老實な人もありますが、此家の良人は殿樣風で手助は致しませんでした。此妻君は何時も晩食に用ゐた皿鉢を臺所へ押しやつて置き、直に良人と快く談話して居りました。「良人が疲れて歸つて來るのに、ソハ〳〵と食事の跡片付をいたし、皿鉢の音をガチャ〳〵させて忙し相に働くのは嘸良人が厭であらうと存じますから、其儘隅へつくねて置き、食後は直に小供を抱きながら良人の話相手になつて居ります。而して跡片付は明日良人が出勤した後に朝食の器と一緒に洗ひますので、唯皿の洗ひ數か少し多くなると云ふだけですから、其氣で手早く致せば何でもありません」と私に話しましたが、斯樣に注意するだけあつて、誠に美しい家庭で御座いました。

▲婦人の忍耐には變りなし

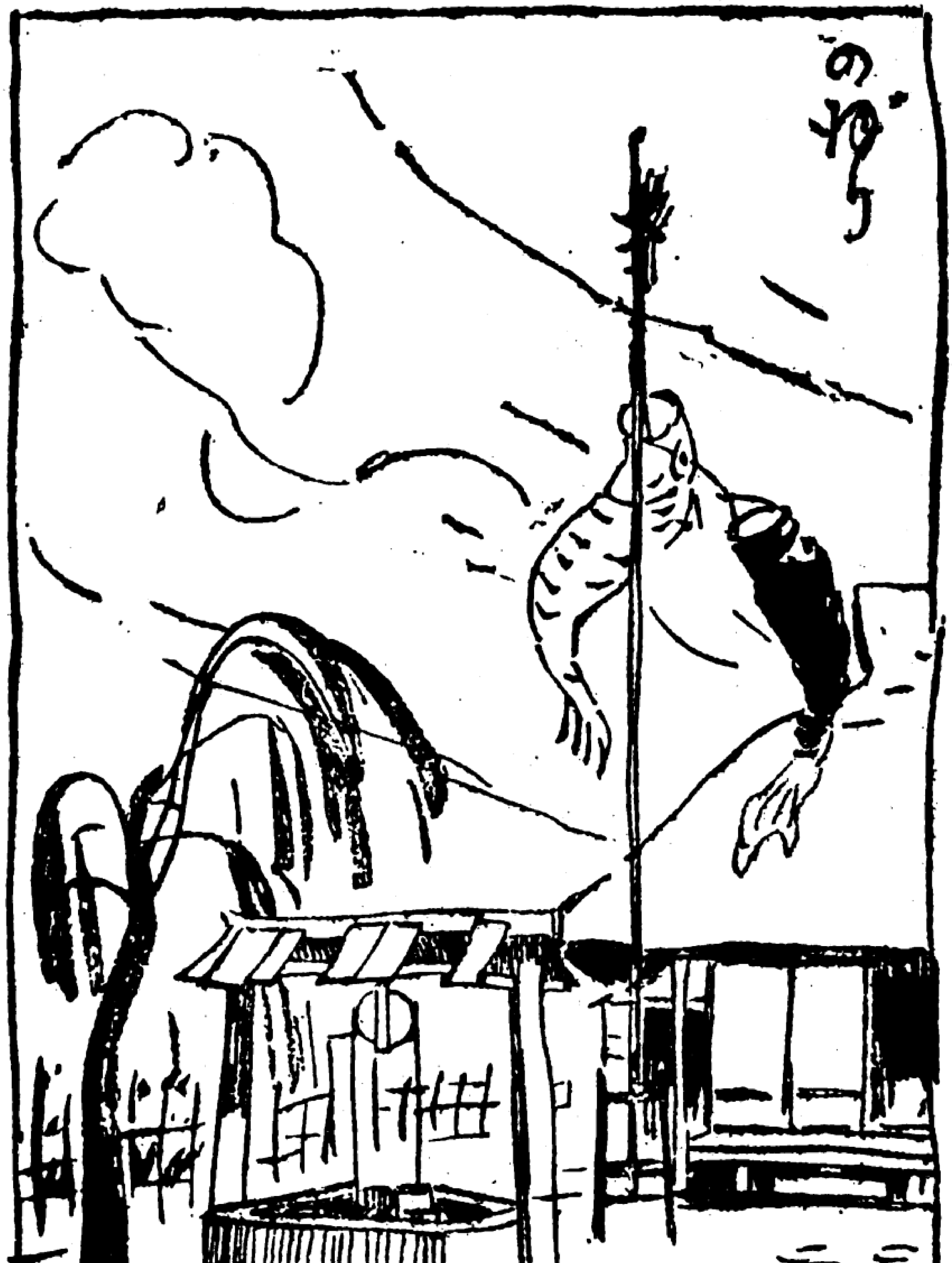
外面から見ますと、米國婦人は男子と對等の權力があつて幸福に暮して居る樣ですが、裏面に入れば我國の婦人と大した差はありません。私は三回も彼地へ參り、主に中流の妻君と交際いたし、外國人と云ふ感情を捨てゝ姉妹同樣に親密にいたした方があり、往々苦痛な内情を泣て話された妻君もありました。完全な自由結婚の下に成立つた夫婦でも永い年月理想通りにばかりも參らず、疳癪まぎれて妻君を打擲する良人も隨分あるやうですが、米國の婦人は思ひの外良人に從順で我慢強ふ御座います。割合に日本の妻君の方が内々權利があつて自由な事を良人に云ふやうに思はれます（勿論一般ではありませんが）堪忍のなる堪忍は誰もする、ならぬ堪忍するが堪忍と云ふ陳腐の教訓は何國の婦人も服膺しなければならないと私は何時も生徒に話して居ります。

私の知己であつた某婦人は、良人の跋扈する家庭を屢々實見して熟々結婚が馬鹿らしくて厭になり、獨身で通さうと決心して宣教師となりました。而して各地を布教して廻る内に、永らく宿泊した或家庭の如何にも淸く樂しさうであるのを見て、自分も斯樣風に暮して見たくなり其後高潔の紳士コールデン氏と結婚して美しい家庭を作りました。彼地の婦人宣教師なども獨身者は有夫の者に比べると忍耐にかけて差があるやうに思はれます。

▲泣き方に相違がある

亞細亞の光と云ふ米國の本に、『日本の子供は泣ぬ』と書てありましたが、矢張皮相の觀察で實際は米國の子供より泣ので御座います。日本で外國人と交際する位の家は先づ中流か中流以上ですから、子供にも守が附て居り、應接の際には他へ連れ往くとか、家に置ても注意して遊ばせて居ますので泣聲は致しません。又外國人の前へは大人しい兒を出しますから泣ぬと思はれる筈です。唯外面だけの觀察で全體の風習を認定する事は何國にも有勝なので御座いませう。

米國人は個人主義だと申しましても、其人の性質に依て親の爲に身を捧げて居る者も御座います。私の懇意にした下宿屋の二階に盲目の母親と二人で暮して居た某會社員は、母親を大切にいたし、外出る時は手を引て外を歩ませたりして男子の出來ぬ世話を爲て居ました私は始終此人に同情して親御の手を引て上げた事も御座いますが、此の壯丁なぞの行は孝子の手本だと感心したのです。



◎嫁と姑との關係

米國の家庭では嫁姑の間に厭な我慢を致し合ふ事は少いのです。御承知の通り親は子を當にせず、其代り財産を

讓る時に悉く子に投げ出さないで、自分の用意を爲て置きますから、別々に身代を構へて子や嫁と同棲致さず、從がつて風波も起らぬのですが、假令同棲して居る家庭でも極圓滿で御座います。是は嫁姑の趣味が一致して双方同棲を望む者だけが寄り合ふと云ふ風ですから其間柄が實に親密で御座います。中には若い御嫁さんで未だ家政に馴れない間、姑と同棲して家政を執つて貰ふのもありますが、姑が壓制を行ふ事もなく、嫁も自分の望みで斯樣いたすのですから愉快に暮して居ります。各自の趣味を枉げて寄り合ふと云ふ無理な所がありませんのは彼國人の幸福な點でありませう。

▲搔集日（家庭の規律）

彼地では月曜が洗濯日と定つて居まして、此日は料理に手數のかゝらぬやうに爲て居ります。何處の家でも日曜には夫相應な御馳走を拵へますから翌日は幾らか殘り物が御座います。夫を種々に利用いたして間に合せますので、月曜を搔集日と稱へて居りますが、此搔集の料理が却々旨いので御座います。彼地では家毎に馬鈴薯を貯へ在りまして、朝はゆでた馬鈴薯を細く切り、麵麭の端屑と一緒に牛酪で燒き手輕料理で濟す家もありますが、拵方が器用ですから一寸風味よく食べられます。日本より家庭の規律が整つて居まして働きよい所爲もありますが、概して彼地の妻君は骨身を惜まずよく働きます。日本なら二人位は下婢が要るだらうと思ふ家庭でも一人も使つて居りません。尤も日本では一ケ月三圓位で雇へるのに一週五弗も給料を拂はなければなりませんから自然左樣なるのでせう。又妻君が公共のために働くと云ふのは中流以上でなければ致しません。中流の妻君は矢張一家を守つて忙しく暮して居ります。唯子供に手が掛らぬ習慣と訪問の規律がよく立つて居るので、格別時間を費さずに交際は出來ますが、想像するやうに外で活動しては居りません。

簡易西洋料理

櫻井ちか子

PLAIN OMELET.

4 eggs　½ teaspoon salt　Few grains pepper　4 tablespoons hot water　1 tablespoon butter

Separate yolks from whites. Beat yolks untill thick and lemon-colored; add salt, pepper, butter, and hot water. Beat whites until stiff and dry, cutting and folding them into first mixture until they have taken up mixture. Heat omelet pan, and butter sides and bottom. Turn in mixture, spread evenly, place on range where it will cook slowly, occasionally turning the pan that omelet may brown evenly. When well "puffed" and delicately browned underneath, place pan on centre grate of oven to finish cooking the top. The omelet is cooked if it is firm to the touch when pressed by the finger. If it clings to the finger like the beaten white of egg, it needs longer cooking. Fold, and turn on hot platter.

玉子の厚焼

（材料）玉子 四つ　鹽 小匙半分
胡椒 少量　湯 大匙四杯
バタ 大匙一杯

【製法】先づ玉子の黄味と白味とを分ち黄味の方を濃くして レモン色になる迄攪き交ぜ鹽、胡椒、バタ及湯を加へ置き次に白味を固く水氣の去るまで泡立て 前記の黄味の中に入れよく 混和したる後 玉子焼鍋（オムレット、パン）にバタをよく引き前記材料を注ぎ込み平等に火の廻る樣、火鉢又は「七りん」にのせ表面に箸を觸れてベタベタ せぬ位に焼き下面が狐色になりたる時 裏返して焼き二つ折にして温めある皿に取り熱き内に 出すのです、ストーブ或は天火が有れば其中に入れて表面を焼けば 裏返さなくともよいのです。

（注意）其中に肉を細かに刻み バタでいり鹽胡椒にて味をつけ 其間に包みてもよく又其材料の中に交ぜ込みてもよいのです、又三葉、葱、等の青みを少し入るれば 尚よいのです。

此は玉子一個で 一人前出来るのですから其割合で大きく焼き切りて出しても よいのです出す時はソースを添へて出すのです。

日本の普通の玉子焼鍋でも焼けます。

前記の材料の中に焼粉少しを加ふれば 尚ほよくふくれます。

SWEET MILK GRIDDLE-CAKES.

3 cups flour　1½ tablespoons baking pouder　1 teaspoon salt　¼ cup sugar　2 cups milk　1 egg　2 tablespoons melted butter

Mix and sift dry ingredients; beat egg, add milk, and pour slowly on fist mixture. Beat thoroughly, and add butter. Drop by spoonfuls on a greased hot griddle; cook on one side. When puffed, full of bubbles, and cooked on edges, turn, and cook other side. Serve with butter and maple syrup.

牛乳にて焼く熱き菓子

（材料）メリケン粉 三合　焼粉 大匙一杯半
砂糖 一合の四分の一　牛乳 二合
玉子 一個　バタ 大匙二杯

【製法】メリケン粉、焼粉、鹽、砂糖、を篩に入れ一度に篩ひて 玉子を黄味白味共に泡立て其中に雜ぜ込み牛乳を加へ よく攪き交ぜてバタを入れるのです、（若しバタ固り居る時は溶して用ゆるのです）フライパン或は鐵の焼板（キンツバ又は大福などを焼くに用ゆる鐵の板）の上にバタを溶し置き前記の材料を大匙にて掬ふか又は片口より流し出し 適宜の大さに落して焼けば泡立ちて 緣が固りますから其時裏返して又焼きて後バタ、蜜或は砂糖を添へて出すのです。

〔注意〕此は極熱いのを賞味するのですから皿を温め置いて入れるのです 若し澤山焼く時は皿を湯氣の上或は ストーブの上に置きて冷さぬ樣注意せればいけませぬ。

夫妻同化の秘機

海老名彈正



甚だ六つかしい時代

結婚といふことは、昔は範圍が定つてをりまして、即ち士のお娘さんは士の子息と、商人の娘は商人の息子と、又農工は農工同士といふ風に限られて居つて、實に窮屈な事でありました。のみならず封建制度の結果として、他藩の者と縁組みすることなどは、夢にもありませんから、何でも其の藩の内に限られて居たのです。私の藩などは十二萬石で、そして藩士の家が三千でしたから、士の子女は何が何でも其の三千家の内で何うにか婚嫁かなければならなかつたのです。ですから婿取り嫁取りは宛然競爭の姿で、もう娘や子息が十歳位になると、早くも許嫁をして了ふといふ勢でありました。然るに今はそのやうな制限は一切打ち壊れて了ひ、士農工商何でも關はず、北海道沖縄何處でも關はず、のみならず英國人とでも佛蘭西人とでも、好き自由に婚姻は結べるので、その範圍の廣くなつた事は實に非常なものであります。

ですから、今は結婚がまことに容易しいやうでゐて、

その實はなか／＼六つかしいのである。まづ一つの困難は親と子との關係で、と申すは畢竟教育に屬する事で、即ち親の時代と子の時代とは教育が違ふので、從つて趣味が異なつてをるから、親の良いと思ふ婿や嫁は、兎角子女の嬉しくない人といふやうな譯になつて來る。それ故理想的の結婚が何うといふことは一概には言へないので、親は親の理想があり、子女には子女の理想があり、他人は他人、我は我といふ風に、各々理想を異にするので、その理想の衝突から種々な不幸が湧いて來るのであります。どうも此の、親の良いと思ふ所が子の良いと思ふ所でないといふ、この衝突からいろ／＼の困難な事實が起つて來るのであります。が、さらば所謂自由結婚にして、すべて青年男女自身に打ち任せておいたら善いかといふに、さうなると又所謂ラヴ、イズ、ブラインド―戀は盲目なりで、一旦の青春の血の湧くまゝに、取り返しの付かない過ちをして、後で後悔の淵に沈むものが頻々として起るに違ひありません。

とにかく何うも六つかしい問題で、これは若い者も考へねばならぬと同時に、年長の者も考へねばならぬことゝ思ひます。何が何でも親の命令通りといふ、昔の教育の行はれてゐた間はそれで濟んでゐましたが、今日のやうに既う本人同士の理想が出來、婚を求むる上に可能力の多い時代になればなる程、事が六つかしくなつて來る、自由になると共に複雑になるのは免れないわけであります。

似寄つた者の配偶

さらば何ういふ風に結婚をするがよいか、どういふ方針で良人を定め妻を選んだものかと言へば、それは既う分つてゐる。昔の人は旨い事を言つてをる。曰く「似た者を夫婦にせよ」、曰く「牛は牛連れ」、私もこれに限ると思ふ。このやうに結論は付いてをるのですが、それを實際に當つて今少し説明して見ませう。

第一に教育ある女子と教育なき男子との結婚は、無論理想的のものでありません。婦人でも特別に金好の

人は別でありますが、さうでない——即ち敎育を受けて高尙な趣味の出來た婦人ならば、到底敎育なき男子で滿足出來るものではありません。又身分は平民でも高等の敎育を受けた婦人が、華族——華族さんは皆馬鹿、といふ譯ではありませんが、まあ〳〵然ういふのも多くあります。ヒヨツとして一時その爵位を嬉しく思つて、何でも構はず華族さんだといふので嫁して行つたらば、結婚としては失敗で、後々の不幸疑ふべからざる事であります。結婚といふことは其麽事ではない、爵位や金などのやうな、物によつて成立つものではない。男子の方から考へても、華族のお孃さんを貰ふといふ事は、よつぽど用心しなくてはなりません。御持參金のどつさりあるお嫁さん、これも決していゝものではありません。いづれは踏み付けられるか、尻に敷かれるか何かの種になります。要するに婚姻といふものは、身體と精神との似寄りの者が結び合ふべきものであります。

育ちより氏

然し、身體と精神と、この二つだとは申し條、私は氏といふものは、割合に重んずるのであります。昔から「氏より育ち」と申しますが、私はそれを反對に取つて「育ちよりは氏」と申したい。けれども私の氏といふのは、格式や地位や門閥を問ふのではなく、唯その家はどんな人格が續いた血統かと見るだけでよい。言はゞ其の家の人格の上の系圖を見たいので、さういふ意味の氏を私は割合に重んずるのです。即ちその本人ばかりを考へずに、その家の氏——十代も二十代もの血統を通つて來た其の家の人格を考へるのです。即ちその家は何ういふ人格を出した血統かと、斯ういふ譯の氏を私は重んじたいと思ふ。

容貌を選め

さて身體は男女共に大いに選ばねばなりません。身體の不權衡なのは總べてよくないもの、と言つても身

長の高さ低さ――いや、その身長の高さ低ささへも、多少は考へねばなりますまい。奥さんは見上げるやうな旦那様は五尺にも足らぬ小男。それでは實に具合がわるいと同時に、男の方は常陸山のやうで、女の方は袖の中へ這入つて了ひさうで、並んで行けば宛然子供が袖へ吊下つてゆくやうに見えるなども、あんまり見よいものではありません。かういふ類のを見る毎に「どういふものかな」と首が傾がるのであります。

かやうに體格の強弱や大小を考へるばかりでなく、容貌も矢張見ねばならぬ。これも十分勘定へ入れて考へなければならぬと思ひます。中には「容貌などはどうでもいゝ」といふお方がありますが、これが果して本心から出た詞であらうか何うか、疑はしいものだと思ひます。殊に男子などはよく然ういひます。然し美的觀念は誰でも持つて居る。又有つてよいものです。容貌の美といふことも相應に考へねばなりません。又可笑しい事に男女共、一種の義侠心を持つてゐまして、誰もあの人の處へは嫁かぬさうだから、私が嫁つてあげるとか、他人が皆棄てた婦人なら、宜しい自分が拾つてやらうとか、それは義侠心も結構ですが、大抵さういふのは長くは滿足してゐられないに決つてをる。菅公の詞の中に、「妻は姦しからざればよし。家は雨漏らざればよし。衣は寒からざればよし。食は饑えざればよし」といふてありますが。これでは餘り殺風景ぢやありますまいか、やはり美といふ事は多少考へてよい事だらうと思ひます。さりながら私の申す美は勿論野卑な厭味なのではなくて、高尚なる美を意味するのでありますが、ともかく容貌も相應に匹敵してあるのがよいので、諺に「駿馬癡漢を乗せて走る」といふやうな、餘り不權衡なのは不幸の基であると思ひます。

されぱと申して、それなら醜婦と醜男子と必ず配合させるか。又體格の上を言ふても、強壯の者同士はよいが、虚弱な者は必ず虚弱な者を求めねばならぬか。と言はれゝばそれも困ることで、さう窮屈に考へずに、つまり唯、成るべく權衡をといふに外ならぬことであります。

心づくしも水の泡

さて問題は何れ精神上に落ちて來るのであります。その點については先づ第一に道徳上の趣味が似なければなりません。枝葉に渉つた趣味は一々然うも行きかねませう。然う行けば固より此の上もない事です。獨逸の小說に、一人の教授があつて、その夫人は田舍育ちの「ごく貞操な、世帶持ちの、良い夫人でした。で、良人の疲れを慰めるために、毎日いろ〳〵の御馳走――鶏とか七面鳥とかの料理、種々な旨味いものを拵へて待つて居る、やがて主人が學校から歸つて晩餐となる、夫人はそのいろ〳〵の御馳走をする、處が主人は生憎教授である。(歷史家であつた)で、食卓に就いても猶歷史の事を考へて居る。食物などに少しも注意を拂はぬ、全く唯機械的に口へ運ぶばかり、何の料理かも知らずに食べ、美味いお汁なども水を飲むやうに飲んで居る、心づくしの切角の御馳走も實にこれ水の泡、夫人は毎時本意ない顏をしてゐるといふ、かういふ食物料理に趣味を持つた婦人が、その趣味の無い人に嫁くのは即ち理想的でない。が、然しこれは枝葉の事であります。私の趣味といふは最つと高い方面のこと、即ちモーラル、センス。道義上の趣味であります。これこそ大いに人間に關するもので、例へば男の方が嚴格で、高尚く、公明であるのに、女の方が極めて卑しく低いとしましたら、これが何うして調和しませう。牛と馬どころぢやない、とても駄目です、一時は他の事で補ひが付いてゐても、不滿が始終ある、もしくは婦人の方が婉しく清らかに美しい品性を持つてゐるのに、男子が陋劣輕薄な人としたら、その婦人の不愉快さはどれ程でありませう。「堪へ難き苦痛」といふは實に是れ等をいふのでせう。されば似た者夫婦といふ、その最も似ねばならぬのは、第一にこの點にありませう。

教育ある婦人の爲に歎く

次に教育については、昔は男は教育あるもの、女は

低いもので通つてをりましたが、今はさうは參りません。これも男女相似た程度を欲しますが、近ごろ世上の實例を見て疑ひがあるのです。といふは先づ日本で最高の教育を受けた婦人は、女子高等師範出の人々だらうと思ひます――この方が女子大學よりも上でありませう――されば學問といひ人品といひ、この婦人達が一番上である以上は、やはり最高の教育ある男子と婚を結ぶべきであるのに、實際は然うでない、多くは高等師範出身の男子位に嫁するのです。これ一つは義務年限がある爲め、又一つには同じ方面に向いてゐるからで、然しこれでは男子の方が少し劣つてをりはせぬでせうか、女の方は日本で絶頂の教育を受けてゐるのに、男はさういかない、果してこれが理想的でありませうか、私は竊かにそれらの婦人、否、すべて教育ある婦人の爲めに歎くのであります。實に人事は思ふやうにいかぬ。殘念な事である。出來得べくは女子より男子が一歩上に出てをるのが望ましい、他國は知らず、日本では男子が女子より劣るやうな配偶は宜しくない、一二の點で女子の方が優つてゐるのはよいが、全體としては男子即ち夫の方が優つてゐなければなりませぬ、これが教育の點での權衡であります。

夫婦同化の秘機

も一ついふべきは宗教の事であります。日本では今まで此の點は放任の狀態、然しそれで旨くゆくかどうかは疑はしいと思ふ。元來人類の上に於て、何處に同化がよく行はるゝか、ともかくも宗教は餘程人類を同化させる。假にまづアングロサクソン人と日本人とが一番同化し得る點は何處にありませうか、學者同士でせうか、政治家同士でせうか、また實業家か勞働者か、その何れよりも宗教家同士が早く同化し得るだらうと思ひます。クリスチアンは割合に早くよく親睦します。佛教は亦支那、暹羅、安南、印度などを同化させるに力あることは相違ありません。固より宗教萬能ではない、然し一つの同化力として有力なものに違ひない。斯くの如く異人種の上にさへ力があるならば、一家庭

の夫婦の上に於てそれが同化の効力あることは疑ひもないこと、もし此の調和が缺けてゐるなら、その夫婦の間には大いなる缺陷がある。宗敎的感情の一致しないといふこと、その苦痛は非常なものであります。それ火事だ！　といへば、火の中へ飛び込んでも位牌を出して來る。さういふ痛切な宗敎上の情感の不一致は、非常の缺陷と申さねばなりません。この點で同情同感になれる處に、夫婦同化の秘機が存すると思ひます。けれど宗敎が一致したからとて、それだけで、外國人と結婚することは、唯今の處では何うありませうか。當人同士は愛し合ひ滿足し合ひ、それで結構かも知れませんが、唯子供が少し困ります。まだ今では直きに「雜種兒」といはれるので、子供が迷惑を免れません。ですから當分まづ日本人は日本人同士がよいと私も考へます。

結婚の第一準備

さて身體や容貌の上の事も前申す通りですが、殊に精神上で、道義の上の趣味が似てあり、敎育も亦似てをり――但し男子が稍優り――又宗敎の上でも同情同感が出來る。これ等がよく權衡の取れた、似寄りの對手と結婚することが出來ましたら、まづ幾分か理想的結婚に近づいたものでせう。これらの點で「似た者を夫婦にせよ」と、私は之を一番のいゝ策と考へるのであります。かういふ意味で君子は淑女と、金好きは金好きと、恰どこれがいゝのであります。

然るに趣味、精神の一致した良い結婚をするには、男女共に未婚時代の貞潔が申すまでもなく何より大切未婚時代に共に誤まる所があれば理想の婚姻は出來ませぬ、實に其處には非常な貞潔を要するのであります。良人に打開けることの出來ない事があれば、もう夫婦の間は缺けてをる。女子の身の上に暗い秘密が隱れてゐるならば、夫婦の間の眞の愛は成立たない。年齡を匿す、あれだけでも何うだらうかと疑はれる。唯あれだけの事でも快からぬものであります。良人と妻とは一枚にならねばならぬ。心淸く行淸くてこそ一枚

になることも期せられる。まづ自分の身を清く持つて、初めて理想的の男子を求むる資格も付いて來る。理想的結婚を望まば先づこの準備をするが必要、空しく希望するは徒らな希望であります。ですから年若い婦人や(男子)は非常に意志を堅固にする事を要するので、もし少しなりとも、身の上に瑕が付きましたら、それは理想的結婚の上に非常に障害を齎らすに定まつてをります。全く皆意志の薄弱なるに基するのですから、極めて意志を堅固に、極めて公明正大に、凜として犯すべからざるやうに身を持たねばなりません。よつて之をも併せて、青年男女方の猛省を促しおきます。

(本郷會堂に於ける講話の大要)

政治婦人と宗教婦人

吉川曾水

婦人の政治に參與するは、世界をしなべて禁ずる所なり。近頃英國に於て、婦人の參政權を求むる運動起り、米國の或州にては現に婦人の議員選擧權を認むるも、概して云へば乳房の大にして肌の美しき女性の政治を談じ、選擧に狂奔する時期は未だ來らざるなり。故に政治婦人と茲に題するも、女子の大臣、白粉を塗りたる議員を指すにあらずして、其天性一種の政治的趣味を有し、其材略行動、政治家としても恥づかしからぬ婦人をいふなり。而して此くの如き婦人は古代にもあり現代にもあり、西洋にもあり東洋にもあり、かの英國のエリサベス女王の如き、墺太利のマリヤテレサ女帝の如き、支那の則天武后の如き、我國の神功皇后の如き、何れも纎弱の身を以て國家の大權を掌握し、其堂々たる威容其鷹揚なる態度、幾多の有髯漢を辟易せしめたることは史上に記さるゝ所なるが、此等の女君の最も高き地位を占め、絶大の權力を振ふに至るまでには、それ相當の道筋あり種々の事情あり、殊に社會の組織一變したる今日、凡ての婦人に、エリサベスたれ、則天武后たれと勸告することは恰も凡ての男子に向つて、シーザーたれ、ナポレオンたれと望むが如く、

到底出來ざる注文なり。故に例外に屬する女傑の詮議は暫らく措き。たゞ如何なる性向、如何なる趣味を持つ女が、政治婦人たるべきかといふに、第一負けぬ氣なり、容易く男子の前に屈伏せざる覇氣なり、此覇氣なき女は斷じて政治婦人たるべからず、然らば覇氣とは何ぞ。

◎

饒舌と雄辯と異なる如く、我意と覇氣とは異なれり。猥りに夫にスネ、、、兩親に向つて小理屈をいふを覇氣とすれば、裏長屋の山の神、女學校のお轉婆娘は、、、あつら、、へむきの政治婦人なり。然れども山の神は井戸端會議の議員に適し、お轉婆娘は女壯士の列に入るべきも、高尚清健なる政治婦人といふべからず、負けぬ氣覇氣とは、ソクラチースの女房の如く、旦那の頭に冷水をブツ冠せる勇氣にあらずして、女子の天職と本領とを重んじ、自己の名譽と節操を犯さんとする男子は、遠慮會釋なく之を叱責排斥する勇氣なり。人類はアダムのみにて生せず、神は男女を造り給へりとは西洋婦人の理想なるが、此理想こそ彼等の多數をして、獨立の生活を營ましむる所以なれ。マダム、ローラン は佛國革命時代に於て、勇敢且つ純粹の性情を發揮したる婦人にして、其家は政黨員の倶樂部の如くなりしが、後囚はれて死刑の宣告を受くるや、自由の名を呼んで徐ろに斷頭臺の露と消えたる其意思の旺盛なる、政治婦人の覇氣を十分に備へたりと謂ふべし。源義經の愛妾靜御前も亦此種の覇氣ありしもの丶如し。彼女は鎌倉時代の白拍子即ち今日の藝娼妓の類のみ、門閥の貴きにあらず、修養のあるにあらず然れども梶原景茂の醉ふて彼女を挑むや、彼女怒つて曰く、吾曾て豫州（義經）に侍す、豫州は頼朝公の親弟にあらずや、汝は公の家臣なり、何ぞ吾に對して禮を失ふの甚しきと。而して尼將軍と歌はれたる頼朝の妻政子に至りては、更に其心身に覇氣の横溢するを觀る。頼朝死して外戚北條氏の直に其遺孤を除かざりしもの、一に此政子の存命せし爲にあらずや。

◎

刺氣に從つて當然起るは活動なり、活動は政治婦人の特色なり、故奥村五百子の愛國婦人會創設のため、草鞋を穿ち、腰辨當を下げて、東西奔走したるが如き、最も大なる活動にあらずや。晩近米國に、八十歲の高齡を以て活動する、ジユリア、ワード、ホウと呼ぶ老婦人あり、平生交はる友は、其子か孫に當る年配の人人にして、常に新聞を愛讀し、獨佛戰爭に對して注意したる如く日露戰爭に注意し、リンコルンの大統領選擧に向つて趣味を持ちたる如く、一九〇四年ルーズベルト氏の選擧に就ても大なる趣味を有し、帝國主義者として、領土擴張論者として、現大統領の政策を熱心に贊成し、女ながらもタフツ大學より法學大博士の學位を得、老を忘れて活動する有樣は、血氣盛なる男子を凌ぐものありといふ。又淸國の西太后の如きも、老齡七十以上の身を以て、簾中國政を掌り、大小の事務盡く總攬し給ふ其氣根の强大にして、雄邁なる實に驚くべきにあらずや。

○

政治婦人たるに尙一つの要素は、其夫若くは戀人(若しあらば)の政治的事業を助くる精神なり。余の友人にして代議士たらんと欲するものあり一夜其志望を細君に相談したるに、細君忽ち斥けて曰く、「議員などおよしなさいよ、貴君が政治運動に托けて外出ばかりしては、私が淋しくて耐りませぬ」と。此の如き細君は到底政治婦人たる資格を有せざるものなり。英國の大宰相デスレリーの夫人を見よ。夫人は其夫と馬車を同ふして、常に議院に赴き、夫の議場に演說するや、己は傍聽席より耳を傾けて之を聽くを例とし、或日議院よりの歸途車中にて指を傷つけ、苦痛甚しかりしも、連りに考慮しつゝある夫の精神を亂さんことを恐れ、家に着するまで何事も語らざりしといふにあらずや。又名將山内一豐の家貧ふして良馬を買ふ能はざるや、其妻が鏡臺の箱より、豫て貯へ置きし黃金を捧げて、良馬を買はしめたるが如き、夫の立身功名を思ふ政治婦人の模範といふべきなり。要するに負けぬ氣を有し、武士は食はねど高楊枝といふ理想を好み、兼ねて手も

八丁口も八丁、活動することを嗜む女學生や令孃は、婦人參政權の未だ認められざる今日、せめて其嗜好を滿たす爲に、代議士辯護士新聞記者に嫁して政治婦人となるべし。されど夫の每夜歸宅遲きを怨みてヒステリーを起す如き弱虫は、政治婦人の試驗に落第と心得ざるべからず。

◎

或る程度まで政治婦人と反對の趣味嗜好を有するは宗教婦人なり。前者は壯麗なり社交的なり、後者は質朴なり仙人的なり、前者を以て榮華を耀かし艶美を示す百合花とすれば後者は一輪二輪清淡の趣味を發揮する水仙花なり。而して天性同情に富み、他人の事といへば己れの寢食を忘れて心配し、路傍の乞食漢を見れば、乏しき財囊も之を倒まにせざれば已まざる婦人は當然宗教婦人の資格を備へたるものなり。

◎

愛は婦人の生命なるが、宗教婦人の愛は、情郎を戀慕し、手飼の犬猫を寵するが如き愛にあらずして、純潔無垢一點の私心なき愛ならざるべからず。換言すれば宗教婦人の事業は社會を救ひ人心を感化する慈善事業なり。慈善といへば古より、病者を看護し、餓えたる者に食を與へ、渴きたる者に水を與へ、裸體の者に衣服を惠み、家なき者を宿らしめ、孤兒を慰め、死したる者を埋葬するにありと定められ、現に歐洲の或博物館には、此七つの戒を現はしたる面白き繪畫を有するが、近代の某慈善家は、之れに尙三つの戒を加へ、無學の者に敎へ、惡人を改善せしめ、社會の惡しき習慣を匡正すべしといへり。歐洲大陸のあらゆる病院監獄を訪問して、病人囚徒を慰さめられたるジョンホワードの如き、窈窕たる一女子の身を以て、黑海の戰場に、數多の負傷者病者を看護したるナイチンゲール孃の如きは實に愛の化身といふべし。往昔シリアといふ國にナーマンといふ勇將あり、或年シリア軍の總司令官となりて、イスラエルを征し、數多の捕虜を率いて歸りたるが、此中に二八の少女あり、風姿極めて淸楚、顏花の如し。ナーマンは此少女を以て其夫人の侍婢と

なしぬ。然るにナーマンは威風凛々たる將軍たりしに拘らず、世人の最も嫌ふ癩病に罹れり、夫人も將軍も此不治の病氣の爲に屢々嘆聲を洩らしぬ。而してイスラエルの少女は將軍の病氣に苦しむを見て、同情の念に堪えず、一日夫人に告げて曰く『サマリヤに豫言者エリシアあり必ず我主の病を治療すべし』と。ナーマンは直ちにエリシャの許に行きたるに、果して癩病は全治したり。其れシリヤ人は此少女に取りて憎むべき敵にあらずや。而かも其敵の病氣を憫みて名醫の所在を告げたる愛情は實に雪よりも潔白なりと云はざるべからず。又英國の或海岸に於て貧しき生活を營む父と娘あり、父は漁師のことて毎日海上に船を泛べけるが、暴風雨の夜船を海岸附近の暗礁に突き上げ、船體は破壞し已れも亦海底の藻屑と消えぬ。唯一人後に殘されたる少女は深く泣き悲みたるが、やがて心を取り直し、亡き父の葬式を濟ましたる後、毎夜蠟燭を我家の窓に點じて暗礁を照らし、其近傍を通航する漁舟をして、危險を避けしめたること殆んど十五年に亘り、此久しき闇夜は一晩だにせずして絕えず火光の消えざる樣蠟燭を繼ぎ更へ、夜明けて臥床に就くを常としたりといふ。其人類を愛する至情、實に嘆稱すべきなり。

◎

慈善の名の下に、音樂會の催され、演劇の開かることは我等の耳にする所なり。然れども此種の會合にして、若し貴婦人令孃の、虛名を好み自己の快樂を得るために、催ふさるゝものならば其價値は極めて少なし蓋し公爵夫人伯爵令孃は、馬車に乘りて何々婦人會の寄附金を勸誘するも、單身徒步貧民窟を訪ふことを爲さゞるに引き換へ、宗教婦人は綺羅を飾りて各種の婦人會にこそ出席せざれ、憫れむべきものには絕えず施し、一月に三度結ぶ髮を二度結びて、其節約したる金錢を貧民に惠むなり。慈善には顯はれたる場合と隱れたる場合あるが、宗教婦人の慈善は、隱れたる場合の最も大なるものと知るべし。

◎

敎育に從事するも亦宗教婦人の業務なり。國内に於

て教鞭を執ると、海外に於て子女を薫陶するとを問はず、教育は一個の神聖事業なれば、之に從事する婦人は、高き理想を有し天職の爲に身を献げる精神なかるべからず。教育と慈善とは相去る一歩のみ。ジョン、マンナース夫人曰く、「某氏の家庭に於ては食卓の中央に一個の籠を常に備へ置き家族の食事を爲す毎に、肉にても麵麭にても菓子にても少しづゝ籠の中に投じ、以て貧民に施すことゝしたり」と。是れ一種の簡易なる慈善法にあらずや。

◎

然れども慈善は理性によりて行ふべし。不注意の救濟は、却つて社會の害惡を増すものなれば、充分注意して、大酒家に向ひ更に酒を與ふるが如き行爲あるべからず。婦人は愛の天使なり、此天使たらんと願ふ乙女子、は宗教婦人となりて、或は教育事業に、或は慈善事業に其一身を投じ、社會の改良人道の發展のために盡すべきなり。



德のある婦人と腕のある婦人

妾の私淑せる兩夫人の面影

矯風會の一員

泰西の詩人が理想とは天使の影を追ふやうなもので切角其肩に手を懸けたかと思ふと美はしい影はモー手も及ばぬ所にあると申されましたが、實に理想と現實とはなか〳〵一致の出來ないもので、理想と云ふ高さ深さに於て涯しもない處に到達すると云ふ事は、到底不可能の事で御座います、然らば私共は兎ても理想を滿足させる事が出來ないかと申して此の貴い人生を宜しく送るべきで御座いませうか、私共は理想の海に棹していつか望の港に上陸する迄、勇んで進むべきではして御座いませんか、私共は平素よく理想の人だとか、家

庭だとか申しますが、さて實際に參りますとなか〳〵其人、其家庭を見出し得る事は出來ないのみならず自分自身も其人格、其家庭を造る事は出來ません、然し理想に近い人には稀に遭遇ふ事も御座います、今私は一家の主婦として平常多大の尊敬を拂つて居りますABの兩婦人について述べたいと思ひます。一方は精神上に於て、今お一方は實際上に於て、殆ど理想に近いお方であると思ひまして、茲にAB夫人と申して其一端を申上げて私共お互に益したいと思ひます、でこの兩家の主人はどんな御身分の方かといふ事は茲に申兼ねますが、或る一部の社會に知られた方で職業も收入も略同じ事であると云ふ事だけは申して置きます。



A夫人と其の家庭

御家族は夫婦とお子供方が五人、寛裕な重々しい、云ひ知れぬなつかしいお聲の父君、眞面目でお心懸の正しい、まつ直ぐな慈愛にあふれ給ふ母君、この美はしい家庭に育てられて居らるゝお子樣は如何にもお幸福な事だと毎度羨しく思つて居るので御座います、お子樣の學校の成績もよく孃樣などは至つて淑やかで無邪氣で、奢侈の風は露はがりもなく、さる女學校の模範生として、教師間にも生徒間にも評判のよろしいのは、皆家庭の賜物であると思ひます、夫人は今の高師の前身なる師範學校の出身で、文才もあり、趣味も豊かなお方で御座いますから、いつも盡きぬ物語に自分を忘れて聞き入るほどで御座います、夫人の最も尊い長所は御性質の眞に清い、氣高い所で御座います、御主人は一都の社會から尊敬されるお方で、夫人もまた慈善事業などに關係されて居られますからまづ中流の上くらゐな身分で御座いますが、夫人は珍らしい程質素なお方で、やれ指環やれブローチなどゝ、身の飾に浮身をやつされる貴婦人方の社會に出られても、常に瀟洒とした地味な服裝で、決して詐りの贅澤を貪られると云ふ事は少しも御座いません、唯々いつでも口癖のやうに心ばかりは錦を飾りたい、魂を寶玉の樣に輝かしたいと申して居られます、隨分世に知られて居る婦人の中にも表裏のある方が御座いますやうですが、此夫人には僞善などは露雫ほどもない、本當に正直な方で御座います。而して憐みの深い性質で御自分では隨分と不自由をしながら不幸な者には慈悲の涙をおかけになるやうにと思はれます、ですから如何な人でもこの夫人の人格に對して彼是れ評する人は御座いません、それだけでも其品性の優れて居られる事が偲ばれます、この精神的な優しい夫人が主宰してをられる家庭の模樣は如何で御座いませうか。

◎玄關と應接間

お宅は都の片邊田端の里に接して居る寂しい處で御座いますがまた自然の趣に富んだ大層靜かな處で上野

の森に續いて日暮の里あたりは春になると紅の霞に鎖されて天王寺の塔がぼんやりと墨繪のやうに立つて田畠には黄金の花が敷きつめられて芳ばしい香がたへず匂つて來る里で御座います、門から玄關までの道すがら乙女椿や西洋の草花が色とり〳〵に咲き亂れて居るのを樂しみながらベルを鳴らして案内を願ひます玄關の内には大小のお靴が入り亂れて居るうちに孃樣のリボン靴ばかりきちんと可愛らしく脱ぎ捨てられてあります、やがて坊樣か孃樣時々は夫人自身が御笑みながら出迎ひ被下ます、洋



風の應接間は十疊の板敷に絨氈が敷きつめてあつて東南は硝子の開き戸で、廣い芝生の上には黒茶色の小犬が四五匹心地よげに太陽の光に浴びて眠つて居る樣も見えます、此處には平和の空氣は滿ち〳〵て居ります、室内には支那より到來の軸物の外には些の飾もなく、中央に圓形の卓子が据えられて大小五六脚の椅子が人待顔に此處彼處に置かれて、隅の方の粗末なデスクの上には雜誌や新聞紙のやうなものが堆く積まれて舶來のストーブのみは此室を賑はし居ります、夫人はどんなに忙がしくても又

心地の勝れ給はぬ時でも、いつも心から待遇して何にかと物語をして被下ます、時々は此室も取り散らしてあつて、來客によつては一時不愉快に感せられる事もありませうが、軟かな暖かい春の風のやうな夫人のお心に接しまして何にもかも忘れて慈母の懐に抱かれて居る思がいたします、夫人は下婢を雇はれませんで、其代りに貧しき女學生を一人づゝ保護して、それに勝手の事やお掃除等に手助をさせて居られますが、多くは御自身でお湯の水汲みまでも遊ばすと云ふ始末ですから、それは〳〵いつ參ッてもおいそがしい様子それも御都合で近頃は苦學生も居りません上に、夫人自身は社會の事業に携はつておいそがはしいので隨分お氣の毒に思ふ事も御座います、惜い事には夫人は家政の整理には至つて不得手で居らつしやるから、私共の目にすら不經濟と思はれるふしも度々見えます、小さい事では御座いますが、私などが丁度お食時にでも參りますと、すぐお魚屋へとばしてお刺身やお口取などを御馳走して被下と云ふわけで、まことに忝けない事では御座いますが、何だかお氣の毒で苦しいものも嬉しく戴かれなくなつて却つて有合せでもと思ふ折も御座います、凡てがかやうな具合ですからそれはなかなか御費用のかゝる事で御座いませう、之ればかりは尊敬もして居る私共の目にも、ちつとどうにかならぬものかと思はれるので御座います、精神上には一點の批難すべき所のない立派な御婦人で御座いますが、家政の事には失禮ながら落第點と申してもよろしう御座いませう。

B夫人と其の家庭

この夫人はA夫人と反對の性格を日常の事に顯はして居られます、夫人は御夫婦に四人のお子供の家庭沈默な情深い御主人と、快活で交際上手の夫人まづよい取合せでムいますお子さんは皆活潑で、恰俐で、學校ではいつも首席を占めて居られると云ふ有様、實に平和な樂しい御家庭で御座います、夫人も矢張り女學校出身で、なか〳〵の敏腕家でありまして、社會事業

にも携はつてＡ夫人と等しくこの社會に却々名を知られて居られる方で御座います、夫人の特長は氣立のまことによい、小さい事に胸を痛めたり、物事に齷齪なさらないで何でも面白く、愉快に解決をつけられる方で、就中家庭の事には注意深くて、實に主婦としては申分のないお方です、而して服裝でもお髮でも亂れて居ると云ふ事はなく、見たところだけでもまことに立派な夫人で御座います、それかと申して決して贅澤をなさると云ふ理では御座いません、たゞ時々磊落に失する傾きがおありになるのと、名譽心にかられ給ふ事がありますのはまあ欠點と申せば申すやうなもので御座いませう。

◎玄關と應接間

芝、愛宕町で四方はなか〳〵騷々しい處で從つてＡ夫人のそれの樣に自然の風致に富んだゆつたりした處のない御住宅ですが、門を入るとすぐ洋風の玄關があつて、ベルを押すといつも奇麗にお化粧した年老の下婢が鄭寧と出迎へて、之れも洋式の應接間に導いて被下ます、硝子の窓は一點の曇りもなく、カーテンも奇麗で、書棚なども秩序よく配置されて、壁にはラフエールの名畫や風景畫がかけられて、卓子も椅子も輝くばかりにふき切つてあつて、主婦なる方の俤が偲ばれます、お居間は和樣で違ひ棚、床の間は申すも更なり、凡て裝飾の配合もよく且つ掃除が行き渡つて、敷物茶器なども高價の物では御座いませんが、淸潔で進められた者はお手製の和洋の菓子、居心がよくつて氣も晴ればれいたす樣で御座います、これが上流社會で三人も四人も雇人を使つて居られる方々の家庭ならば別段珍らしくもなく又お褒めを致す事も御座いませんが、僅か二千圓内外の收入で斯樣に凡てに行き渡るやうにいたすには主婦たる人の苦辛はなみ一通りではならぬと誰も頷く所で御座います、ことに臺所などは殆ど理想的に出來て居りまして、お料理には特に注意して居られますから、野菜などでも決して粗末にはなされずつまらないものでも美味しく調理して私共に進められます、而して下婢も夫人の御心懸を習つて夫人が來客

の御相手を遊ばして居られる時は、お菓子などは勿論、お食事の献立までもとゝのへて客人を喜ばせます、お給仕をいたす時も手を奇麗に洗つて、身なりも小奇麗にしていたしますからまことに愉快に樂しく頂かれるので御座います、この點に於きましては實にA夫人と雲泥の差が御座います、而うして夫人が外の働をされて居ても家庭の中は混雜も不整頓もなく、油の注れた機械の樣に、凡てが整然と運轉いたして居ります、私は伺ふ毎に夫人の勝れる樣な爽かな辯說よりも、此の秩序正しい家庭の樣に唯もう云はれぬ快味を覺えるので御座います。

私はいつもこの兩夫人と、其家庭とを比較して悟る處が御座います、人數も僅か一人の差違で收入も同じであつてB夫人の生活の程度がA夫人よりはよほど高いのを見ますと、家政上に注意するのと、其のなり行に任せて置くのとは非常な懸隔であると存じます、尤もA夫人は慈善の爲めに隨分と人の知らぬ金品を費されますが、兎も角もあの氣高い美しいA夫人の精神にB夫人の實際的のまめやかなる秩序正しい御注意を備へたならば、嘸ぞ立派な理想的な婦人が出來る事であらうと思つて居ります、兎角品性の高い人々は實際に疎く、又實際的で敏腕家と言はれる方は品性に於て物足りない處があるやうに思はれます、今もしA夫人を梅に譬ふればB夫人は櫻に似通ふとでも申しませうが、一は香を以てまさり、他は姿を以て誇る事が出來ます。





育兒の經驗なき母親へ

東洋幼稚園長　岸邊福雄

△甘い物がお好ですか

支那の或る書物に、人其子を育つる事を學んで而る後に嫁する者は未だ之あらざる也、と書いてあつたと思ひますが、我國もまだ矢張り其んな程度に在るので若いお母さん方の所謂育兒法なるものは頗る不完全で御座います。併し嬉しい事には、近來は母の責任を考へて育兒に注意なさる方が大分多くなりました。以前は世のお母さん方に向つて、貴方のお子樣は甘い物がお好きですかと問へば、大抵の方は、甘い物は子供の爲に惡いと思つてゐらつしやると見えて、いゝえ好みませんとか、又はたんとは喰べませんがなど丶、曖昧な挨拶をなさいましたが、此頃は此方の發する問に對して明瞭した答をなされるばかりでなく、時としては之れは如何でせうかと進んで質問なさる方が多くなりました。これは母たる人の一進歩として深く喜ぶ次第であります。

△好くのは寧ろ自然です

一體皆樣は甘い物は子供の爲に宜くないと考へて居られるから、之を公言するのは體裁が惡いと思はれませうが、實際は左樣でありません。醫師の說によれば、大人でも小兒でも、甘い物を喰べると疲勞を癒す、殊に子供は體質上から之を要求するので、好くのは寧ろ自然である、好かないのは常の子供ではない、腸胃に異常があつて、消化機能が不十分であるか、或は神經過敏な弱い子供だと言ひます。恁う云ふ事を辨へずに、今日でも尙ほ子供が甘い物を好むと言ふ事を愧ちる方があるのは、誠に迂濶な話で御座います。

△御飯を零す子供

私は御飯の喰べ方に依つて毎時も其子の生立を見分けて居ります。喰べてゐて御飯を零すのは、多く中等以上の生活をしてゐる人の子で、貧しい家の子には其樣云ふのを餘り見受けません。それは中流以上の人は皆女中を使つて居て、子供は始終それに注意され、手傳はれて食事して居たのが、遽に獨りボッチになるものだから、勢ひ御飯を零し、又零しても拾はない事になるのでせうが、之を見ると、餘り子供の世話を爲過ぎるのも考へものかと思ひます。此樣云ふ事は總て自身で始末をさせる方が、其の子の將來に取つて何れ程爲になるか知れません。

△兄弟喧嘩の仲裁法

二人以上の子供のある家では、兄弟喧嘩ほど世話の燒けたものはありません。兄を抑へると弟が增長し、弟を抑へると兄が增長し、平等に抑へて置くと兩方から不平が起ると云ふ有樣で、人のお母さんとなつて毎日朝から晩まで一人で檢事となり、判事となり、或は辯護士となつて遣つて行くのは容易の事でありません。此の喧嘩の捌き方は如何にせばよいかと言ふに、理非明白の時は固より惡い方を抑へますが、雙方共に一理ある場合には、寧ろ弟を抑へるがよいと思ひます長幼の序を保ち、規律を立てる爲に、是非斯うせねばなりません。

けれ共兄の方を其儘にして置く時は、つまり弱い者いぢめをするやうで、甚だ面白くない結果になるから必ず後で呼び寄せて、先刻は弟を叱つたが、決して彼ればかりが惡いのでは無い、お前も矢張り惡いのだから、以後十分氣を附なさいと說諭するのです。さすれば、兄は增長しないのみか、自分が兄だからお父さんやお母さんが重んじて呉れたものと思ふから、自から弟を憐む情を起して、喧嘩は滅多にしなくなります。

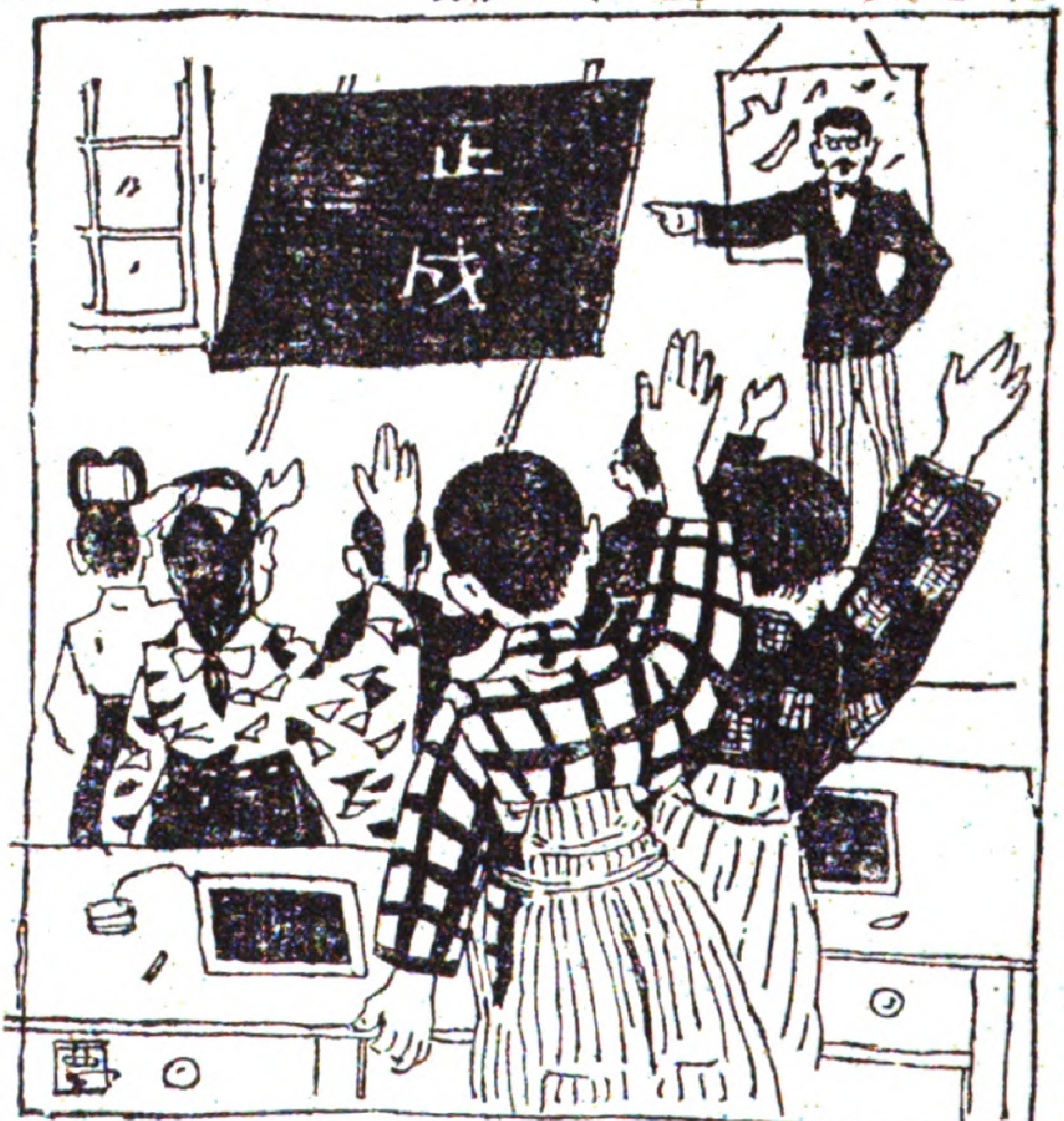
△私が執り居る平和策

私の幼稚園では、弱い者を可愛がる子は强い子と云ふ事を、毎日口ずさみにさせて居ます。自分より弱い者、年の幼い者、或は病人などをいぢめるのは何より

も悪い事で、それを可愛がる者こそ一番強い子であると言ひ聞かすのです。すると不思議にも弱い者いぢめをしないから、私は此の方法で園内の平和を保つて居ります。先頃腦膜炎で耳の聞えない子供が入りましたが、皆の可愛がり方は一通りでありません。萬事にいたはつて、彼れは宛ら一園の寵愛を一身に集めて居ります。

△お子達の呼び方

我が子の呼方は人々の階級、職業等によつて一定して居りませんお屋敷では、坊や、孃やが多く、町家では、芳ちやん、美ちやんと云ふやうにちやんを附けて居ります。



―先生！知つてゐます―

で色々考へて見ますのに坊や、孃やでは子供を餘り貴族的にする虞れがあります。其の音調からして人を迂濶にする樣で、私の實驗上、怎んな風の家の子は所謂坊ちやん育ちとなつて、長じて役に立ちません。と言つて呼び捨てにするのも亦情愛が淡いやうで、よくありませんのみならず其れがやがて其の子の氣質に影響を及ぼします。私の知人に、子供を、鐵五郎鐵五郎、と呼ぶ人があつて、其の聲が如何にも角だつて優しくないので、何時も不快に懷つて居ま

したが、其子は果して優しくない人となりました。總じて人は敬と愛との二つを離れてはいけません。我が子だからとて敬語を添えぬのは人情に反します。且つ子に對して、お前其處にお坐りなさい、好い子よ、いらつしやい、などと言ふ以上は、同時に呼名に敬語を遣ふのは當然であります。而して、之れは、他人に對して敬語を遣へ、親切なれとの教訓にもなります。即ち坊や、孃やもよくないが、呼び捨てにするのも極端ですから、私は町家風に、ちやんを附けて呼ぶのが最もよいかと思ひます。

結婚は義務にあらず

◎獻身と氣樂＝＝子供一人を二十歳まで育てるには、複利法に依つて計算すると、少くも千圓の金を要する、五人を育てるとすれば五千圓の金が要る。然らば子供が無かつたとすれば其金が子供の代りに貯蓄されてソツクリ殘るかといふに、却々然うは行かない、唯だ夫婦の者が氣樂に過したといふ丈で、得る所は何も無い。尤も或る哲學者の如きは其の著述が金錢には換へられぬ程の價値があつて子供にも優る寶を遺して居るのですから、社會の進歩といふ上から斯う云ふ獻身的の人も亦た大いに必要であるが、一般に言ふ時は獨身を奬勵する譯には行かぬ。

◎早婚と晩婚＝＝結婚は義務ではなからう。然し生理上自然の傾向であるから、強ひられずとも結婚する、だか其時期は大に考ふべき事で朝鮮が彼の樣に貧弱なのは確かに早婚も原因であると思ふ。又早婚がよくないと同樣に晩婚もよくない。我邦も將來は益々晩婚の風になつて來るだらうが、男子が四十歳で結婚するとすれば、六十歳に成つて其子は漸つと二十歳で、獨立も出來ない、加之も其下に小さいのがあるとすると父の死んだ後は此等の子供を途方に迷はせることゝなる。又た女の方も三十五にも成つて始めて結婚すると、漸々二人の子供を生むのが精切りである。ソレニ女は二十七八は然うでもないが、其を越すと悲觀的に成つて精神狀態に異狀を來たす失があるから相當の年齡に於いて結婚すべきである。

◎結婚廣告＝＝妻の選擇に就いては、是迄のやうに華族とか金持とか、媒介人の身分とかに重きを置かないで、今後は人格を主として選ばればならぬ。かくて結婚式を擧げたなら、此事を社會に公表した方が可いと思ふ、細君を迎へたことを秘密にする人があるが、是は甚だ不都合である。私は結婚したら其を新聞紙上に公表するやうにしたい。又た妻を求むる場合にしても、媒妁結婚である邦は、廣く他人の周旋を待つ方がよい。私は寧ろ新聞等に廣告してま始の相手を求むるのも今日にては必要の事だと思ひます。

（三輪田元道氏談片）

女(その一)

少年世界　第十四卷第七號　定期增刊

少年四季

全一冊洋裝菊判紙數百廿八頁
正價金拾錢　郵稅（本號限り）四錢
五月十五日發行

春花秋葉、綠樹白雪、四季の變遷を獨領して、悠々樂しき境に逍遙する者は我少年諸君ならずや、少年世界は今や本年度第二次の增刊をこゝに採りて、四季と少年に關する總ての事物を網羅し、一年三百六十五日いつ開き見るも更に趣味津々たるべく、記者多大の苦心を傾注したり、乞ふ先づ左の目次に就て內容の一斑を知り給ふべし。

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　振替口座二百四十番　博文館

女（その二）

婦人世界は簞笥長持と並に嫁入道具の一つ

婦人の友

婦人世界

婦人の師

五月一日發行 毎月一回 三巻 第五號 一冊拾五錢 郵税一錢 前金六冊分郵税共九十錢 十二冊一圓七十五錢

◎男女結婚論……村井弦齋

◎男子は如何なる妻を選ぶか……
◎何故に從順の婦人を選ぶか……
◎何故に箱入娘を選擇するか……
◎理想の妻とは如何なる者か……
◎何故に容貌の美しき婦人を選擇するか……
◎何故に藝者を妻とせんことを欲するか……
◎何故に金滿家の娘を選擇するか……
◎金滿家の娘は如何なる性質を持てるか……

▲不幸なる結婚をしたる婦人の自白 無名子

▲子供を可愛がらぬ親 乙訓鯛助

▲私の實行せる簡易生活 古巣枝生

▲少女欄 人形物語 桂林評釋

▲小説 摘草

▲郭公の歌

◎外國婦人の見たる日本女學生の缺點 報知記者 磯村春子

◎私は如何なる理由にて再婚したるか 三輪田女學校教頭 三輪田元道

◎若き婦人は家庭にありて何を爲すべきか…… 山脇高等女學校長 山脇房子

◎斯くの如き良人は必ず失敗す…… 清風生

◎女は如何にすれば美しく見えるか…… 柳川春葉

▲流產は如何に豫防すべきか 醫學博士 榊順次郎

▲小兒腦膜炎の手當 醫學博士 加藤照麿

▲鯛料理 弦齋夫人

▲女工の日常生活 紡績

◎懸賞募集

◎短文◎和歌◎俳句◎習字◎珍らしき寫眞◎面白き繪探し◎諸國の手毬唄◎新案文字合せ◎家庭笑話◎婦人頓智談◎

東京京橋南紺屋町十二 實業之日本社 （郵便振替貯金口座參貳六番）（電話新橋八七四番） 賣捌全國書店

女（その三）

實業に志す明治少年の大好評繪入雜誌

●毎月一回一日發行● 四六二倍大判紙數七十二頁上等紙



正價一冊金十錢
郵税一冊金壹錢

第一卷第五號　五月一日發行

各商店會社銀行及び諸製造工場内の少年諸君!!!

奮闘世界

▲尋常卒業の少年日本一の機械通となる　波多野承五郎
▲工業發達法　大隈伯爵
▲貯金成功法　米國人フランシス
▲四字の格言　大谷嘉兵衛
▲職工幻燈

修養世界

▲小僧立身美談小説　新泉
▲五萬圓をためるに五たび死す　潜水實驗
▲學校に出ようか小僧奉公しようか

娯樂世界

▲内外反對の角力▲考物▲投書交詢▼

口繪（最珍）

▲日本第一の機械通小林作太郎氏と氏の發明したる發電機
▲最新工藝貝細工成品と原料
▲ろんどん第一繁華の町

獨習世界

▲外國の取引所利用　富澤學士
▲一等强い柱は何か　秋保校長
▲最もよき種まき法　菊池教授
▲手習の手本
▲英語の會話

智識世界

▲實業界の最新事實
▲よく〳〵祟った商品奇談
▲伊太利貝細工の本邦試驗（吉岡技師）
▲開港場の外人せり賣場實況

懸賞世界

▲誰にもできる▲電報文▲考物▲俳川柳

立身出世を望ば實益多趣味本誌の如友

郵便振替貯金口座貳四〇番　東京　博文館　本町　賣捌全國各地書店にあり

（その四）


享和元年創業
日本ニ於ケル時計商之元祖
宮内省御用達
D.K.
東京市京橋區八官町九番地
小林時計店
電話新橋一〇〇三
電信略語コ(ヌヒ)コハ
振替口座七八〇七
營業品概目
時計附屬品、指環、簪、
帶留、ブローチ、手釦、
紀念品一式
最新の流行品目錄郵券
六銭封入御申越次第進呈す
紀念品
賞牌メタル
迅速廉價

文章世界 第三卷第六號 定期增刊 五月壹日發行

近代三十六文豪

全一冊 洋裝菊判 紙數二百四十頁——定價二十錢 郵稅(本號限)六錢

文豪の傳記は興味多くして、且つ、時代の思想を知るに於いて缺く可らざるものなり。十九世紀以後、思想の變遷せる。それ幾何ぞ。其横溢し奔漲せる光景はまことに偉觀を絕せりと謂つべし。されば今日に於ては、沙翁の傳記よりも、寧ろトルストイ、ツルゲネフの傳記を知ることを要するは言ふを待たず。而して世、此種の文豪傳あることなし。これ、吾人が『近代三十六文豪』の發刊に意を致せし所以なり。此一卷を懷ろにせば、近代に漲り渡れる清新にして奔放なる思想の中に、これ等文豪がいかに奮闘し、思索し、而して其不朽の名を刻みたるか併せて其思想と其著作と其平生とを明かにするを得ん乎。『近代三十六文豪』は新興文藝の思潮史たらんことを期す。

東京本町 博文館

(露西亞)
ゴリキー
トルストイ
ツルゲネフ
チエホフ
ドストエフスキイ
ゴンチヤロフ

(佛蘭西)
フロオベル
ゾラ
ドウデエ
ゴンクール兄弟
モオパッサン
ユイマン
マラルメ
ボードレエル
ヘルレーヌ

(獨逸)
ニイチエ
ハウプトマン
ズーデルマン

(英吉利)
キップリング
スチヴンソン
メレディス
ハーデエ
スキンバーン

(那威)
イプセン
ビヨルンソン

(瑞典)
ストリンドベルヒ

(伊太利)
ダヌンチオ

(西班牙)
エチエガレイ

(丁抹)
ブランデス

(白耳義)
メーテルリング

(米國)
ポー

(日本)
北村透谷
樋口一葉
尾崎紅葉
正岡子規
高山樗牛

女(その七)

日本女子大學教授 白井規矩郎編

最新刊

新選五十進行曲集

本書は従來の類書と其選を異にし、緩徐、中庸、急速等に區分して、如何なる運動遊戯等にも適用し得る様に組織せられたるものなり、殊に嶄新壯快なる曲數五十何れも歐米最近の作にして未だ他書に抄錄せられざるものゝみなるは、弊房の私かに誇て好樂の諸君に一奏を薦むる所以なり

四六倍判 美本全一册
正價金六拾錢
郵税金六錢

發兌元 一松堂書房
東京市神田區上白壁町九
振替貯金口座三四〇九番

ドクトル寺島喜三郎先生校閲
水島華月先生著

結婚の前後

價廿五錢 郵税四錢

⊙結婚は人生の最も大事也⊙人生の大禮なり⊙
⊙本書は未婚者の大教訓⊙已婚者の大福音⊙
⊙讀め未婚の青年男女⊙看よ已婚の紳士淑女⊙

らい病

此のらい病藥は數種の有名なる癩病治療藥を化學的の方法にて分拆し其主成分に更に最近の發見に係る治癩新藥を加へ且つ當館主が醫科大學卒業中研究したる成績に考へ配劑したる新藥なれば一度使用して其效驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむる事は難事なれども其病勢の甚しからざる中に參圓分を四ヶ月服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても二藥を六ヶ月併用すれば病原菌を脫力死滅せしめ漸次輕快に赴き一生醜貌を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無效なる藥品に非常なる高價を貪り大言を吐て其效能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陷れんとする瞞着主義の賣藥に非ず

●醫師は癩病者を診察せば屆出る規則なれど藥劑師には其規則無れば決して他へ知れるとなし安心服用あれ

チノサール 一ヶ月分 貳圓
複方チノサール 一ヶ月分 參圓

三河國碧海郡刈谷町益世館藥局主
本舖 醫科大學卒業藥劑士 從七位勳六等 中島龜之丞鑑製



女（その八）



家事を執りつゝ小説を書く私の經驗

大塚楠緒子

▲火鉢の前でも臺所でも

私は舊から小説家にならうの何のと云ふ考へでも何でも無かつたのですが、唯好な爲に書き始めたので御座います。併し學問も淺い上に、家事に心を奪はれますから御耻しいものばかり出來まして、如何したら少しは良い物が書けるだらうと始終苦心して居ります。ハイ子供は四人生みましたが、三番目の子供を失ひ、唯今は十三を頭に八つと三つ皆女兒で御座います。私は以前から乳が少しも出ませんから、牛乳や乳母で育てましたが、自分の乳を與へませんでも監督は充分致さなければなりませず、特に末の娘は昨年の九月に腦膜炎にかゝり、漸く生命だけは取止ましたけれども唯今以て平生の健康に復せず、一人手懸した擧句で非常に心配いたし其介抱のために一時は座敷の掃除さへロクに行屆かぬと云ふ始末で、原稿も落着て書く餘裕がありません。斯樣病人騒ぎの無い時でも可なり家事に追はれて居ますので、却々書齋に閉籠つて書くと云ふ次第に參らぬのです。時としては長火鉢の前で牛乳の加減を見ながら書いたり、臺所で煮物を爲ながら書いたり致しますから、帳面を彼處へ持て往たり此方へ持て往たり可笑やうで御座います。皆樣がマサカ其樣事は在るまいつて仰いますが、實際其樣なので御座います。私は一體原稿紙へぶつ付に書くと云ふ事が出來ません上に、唯今申す通りまごつき乍ら書のですから下書の帳面へ一應腹案を認め、之を訂正して淨書するので御座います。

▲頭腦を勝地に養ひたし

男の御方が何ヶ月の間何處の海濱に閑居して書れたとか、彼處の山の中で筆を執れたとか云ふ事を伺ひますと實に羨ましいと存じます、混雜した所では巧い物が書ないと云ふ譯もないでせうが、私のやうな未熟者は猶更幽邃の境に心身を休め、ゆつくりと考へなければ迚も滿足な小説は書けないと存じて居ります。家にばかり居ますと材料が何時も同じ様な傾に流れますが、旅行すれば思ひ寄らぬ邊から新しい材料を得られませう。併し一家を持て居る婦人が自分の好な事の爲に氣儘勝手に出歩きは出來ませんから致方は御座いません。私は據なく依頼を受けた時も日限を切て御受合いたす事は出來ないので、特に新聞の小説は半途で綴かなくなると心配ですから脱稿した上でなければ御掲載願はぬ事に定て居ります。

▲成るべくモデルを避ける

私は何時も文藝倶樂部を良い參考書と致して居ります。文藝倶樂部は皆樣の小説を拜見するばかりでなく、雜錄で世間の事情がよく分り、經驗の乏しい私には極よい都合なので御座います。モデルで御座いますか、此頃は大層モデル流行で小説中の人物を本當に活躍させるのにはモデルを捉へる事が必要に違ひありませんが、私は成るべくモデルを避けるやうに注意して居ります。御交際する方々の内に若し小説中の人物と似寄の方が在てはならぬと心配致す位で御座います。私は前申し上げる通りホンの自分の嗜好で書くので小説家の何のと人に言はれるのは極りが惡う御座います。小説家なぞと言はれると何だか質の惡い婦人と思はれて主人の體面に係りはせぬかと心配致します。

▲叙景に就ての苦心

萬朝報の「露」で御座いますか、彼も商家の樣子が全然不案内で困りましたから、日本橋の方に昔から住んで居られる或方にお願ひして座敷や倉庫の模樣を話

して頂きに一日參つたので御座います。ハイ伊香保へは丁度二年ばかりつゞけて避暑に參つた事があります日數で御座いますか、彼是二十日位かゝりましたらう。イヱ最早無經驗で書くのですから御恥しいので御座います。私は偶々明媚な風景に臨みますと、唯最早恍惚として魂を奪はれて了いますので、其場で筆を執つても書く術が分らぬ位ですが、家に歸つて落着てから追々と細かしい景趣を腦裡に再現して描き出すので御座います。



▲種々雜多なものを讀む

幼い時から何に限らず讀むのが好でした。私の母は極の小說好で貸本屋の常得意で御座いましたが、唯今のやうに子供に小說を讀せては害になるなぞと云ふ議論もない時代でしたから、私も勝手に小說類を讀んで樂しんだのです。八犬傳、弓張月、水滸傳なぞを始めとして種々雜多なものを

讀みました。而して子供心に何卒斯様ものを自分で作つて見たいと考へた事もありました。小學時代にも算術は嫌ひで、作文は一番よい點を取りました。卒業してから跡見玉枝さんを手ほどきにして、後雅邦さんの處へも參り一時は畵師にならうかと望んだのですが、畵は道具立が大層で且一室に籠つて長時間筆を執らなければならず。寫生にも時々出掛る必要があり、一家を持た傍らには一寸不可能な仕事であると存じて半途で止めました。文章ならば一本の筆と紙さへあれば何處に坐つて居ても立て居てもチヨイ〳〵と書留る事が出來ますから、家政を執りながらの仕事には極適當だと存じ此方へ心を向け始めたので御座います。

▲同窓會と文學趣味

つまらぬ小説でも書いて見やうとなると如何しても其方へ心を奪はれ、自然家政が疎かになるとも思ひますけれども、扨何も爲すに暮したとて其割合に完全に家務が執れると云ふ次第にも參らぬやうですから、出來るだけ勉強して見たい積りで御座います。學校を出てから家事にばかりかまけて頭腦を養ひませんと、趣味の範圍が狭くなつて、同窓會の際なぞも談話は何時も友達同志の起居や衣服の噂位で、講演を願つた先生方の御話も成るべく簡單な事を望み、唯チヤア〳〵と取とめない事を話し合て別れると云ふ風になるやうです。其内專門にやつて居るのは割烹と裁縫位で文學の修養をされる方は實に少う御座いますから、其方面の御話は何時も定つた方ばかりで御座います、夫ですから同窓會から歸つて今日は何の利益が在たかと考へて見ても、唯彼人の衣服は何色で彼方の帶は何で在た位が頭腦に殘つて居るだけです。それで私は生意氣か知れませんが何卒讀書會を設けて月に一度位づゝ寄り合ひ頭腦を養ふ事を計りたいと存じ同窓の方々に相談して見ましたが、贊成者が御座いませんでした。割烹や裁縫の講習は無論必要ですが、月に一回位は書物の輪講でも致して精神を養ふのが必要であらうと存じます。

▲貴族家庭の研究

私は出來る事なら貴族の小間使か仲働に二年ばかりも住み込んで家庭の眞相を知りたいと思ふなどゝ戯談を申す事が御座いますが、全くさうして知つたのでなければ家庭の研究も出來ず又巧く小說に寫す事は出來ません。看護婦なぞは永く雇はれて居れば略家庭の工合が分つて居るだらうと存じて咋年子供の大病の節頼んだ看護婦に少し尋ねて見ましたが、職業上秘密を守つて居りますから、本の一通りの觀察だけを話して一向要領を得ませんでした。



▲新橋の女髮結に行く

私は以前ムヲサキの編輯を爲て居た或る婦人の紹介で、新橋で有名の女髮結阿愛の所へ二三回髮を結に參つたので、藝妓の様子を略々知る事が出

來ました。私が髪結に參つたのは唯藝妓を知たい爲ばかりではなく、一度有名な阿愛に結て貰ひたい好奇心が起つて下女を連れて車で參つたのですが、加賀町の阿愛の家は本當に狹い家で如何に醉興とは云へ斯樣處へ何故來たのだらうと後悔した位でした。處が結はして見ると實に手際なもので、私のやうな惡い髮でも鬢や髱がふつくりと出まして鏡へ向ふと不思議なやうに顏に似合つて出來たのです。而して一度阿愛に結て貰ふと後で他の髮結に結せても暫くの間は癖が直つて格好よく周圍が出來るのは不思議な位で御座います。いつも癖直しの湯はドン／＼釜で沸かして居り梳手が二三人扣へて實に叮嚀に癖直しを致します。上手だけに勢力も大したもので、客は番札を貰つて待つて居ると云ふ工合ですから、客に對して別に愛想も申しません。私なぞ參りましてもロクに挨拶もいたしませんから據なく此方から禮をするやうな次第で、最初は妙な感じが致しました。併し阿愛は洒然とした氣立の面白い女で、話をしてもキビ／＼と心持がよう御座います。それに髮結ひに來るものは藝者か又はおしやれの商家の娘などで髮は水髮で、汚して來るものはありませんから、狹い家に日々何十人押寄せても油臭い事もなく、汚い髮屑が散つて居るやうな事がありません。素人向へは時々上流へ出るだけだ相です。確か榛山さんなぞへも上るとか聞きました。結賃は藝妓が貳拾錢、素人は三十錢だ相です、藝妓は大抵隔日の髮上で、朝から犇々と詰かけ爭つて番札を取り、待つて居る間はごろりと横になつて勝手な事を喋舌て居るのもあります。若いのは少し氣取つて居ますが、三十前後のは外見も何もかまはず、却々洒蛙／＼したものです。私は藝妓と話をする次第にもゆかず、さうかと言つて木から落た猿のやうにつくねんとして居るのも氣が利かず、一生懸命に口から出まかせの話を致しましたら、阿愛は私が小說を書くのを知て居まして、『奥樣はお孃さん育ちのやうぢやありませんね、小說をお書きになるせいでせう、』なぞと申して可笑う御座いました。

▲おつくりの稽古に來つしやい

お蔭は私には奥樣風の髷、藝者には藝者風の髷を結ひました、或る若い藝妓が翌日御客と遠出するとかで丸髷に結ひました處、「この奥樣のやうな大きい髷に出來たやうだから結ひ直して御呉れ」と申して私のやうな野暮風では困ると云ふ心配で頻りに髪をいぢつて居ましたのは可笑う御座いました。周圍にズラリとそれ、い、しやが並んで居られますと鬢を掻くにも氣後れが致しますのを阿愛が『奥樣左樣云ふ風に掻いては折角の髪が臺なしになつて了いますよ』と云つて掻いて呉れました。『貴女方も二三日此處へ來しつて藝者衆の髪のなでつけ方や、着物の着こなしを御覧なさると大變な違ひですよ』と阿愛は氣焔を吐いて居ります。其後もチヨク〳〵結ひに參りたいと思ひますが、御大層のやうでもあり暇もないので參りませんが、材料を得るには至極好都合な處で御座います。

▲私は順境に過しました

私はズーッと生家に居ましたから、主婦となつても御孃さんのやうな心持で居り、他からも左樣取扱ひまして總領を生でからも、出入の者なぞは御孃樣と呼ぶ癖が抜けませんでした。元より舅姑の味も知らず、家庭も圓滿で是ぞと云ふ苦痛もなく、先づ思ひ通りに是まで過して參りました所爲か、宗教とか人とかに依る考へは起らず、自分で思ひ立つた事はどこまでも行て見やう、又行り通せると云ふ信念が強いので御座います。而して陰氣な事より陽氣な事が好きな方です。順境の御蔭で斯樣事を申して居りますが、如何しても辛い艱を甞た方々のやうに貴い經驗もなければ價値もないので御座います。書く暇が思ふやうにないと云ふのは勿體ない次第ですから、裁縫なぞも出來るだけ自身でいたし、筆を執るために家事が疎 にならぬやうに心懸て居ります。



老婦人の見たる今の時勢

水原未瑳子

△昔の婚嫁は出征に同じ

昔の婦女は、貴賤上下押なべて、穩順貞淑をのみ尊しと爲し、只家内に在りて、裁縫を事とし、家事を專務とし、子女を育て、舅姑夫に仕へては、假令いかなる無理難題をいはるゝも、曲從して忤らはず、只管におとなしければ、藝は鈍くとも、何を知らずとも、一家の妻たるの資格は、十分に有するものたりしなり、されば父母たる者も女兒には幼少の時より貞女兩夫に見えずの諺を敎へ込み、殊に緣付の際には、呉々もいひ聽かせ、女兒も又、此度び彼家に嫁する以上は、奈何なる憂目に遭ふとも、決して生て再び父母の家には歸らじと、覺悟を定めて、恰も兵士の出征と一般、涙を隱し、聲を吞みて、表面はめでたし／＼と紛らして別れたるものなり。さればこそ、姑のむつかしきも夫の難題をも克く耐忍しよく曲從して、辛抱しおほせたるなれ、是れ他なし、婦女として夫より離別を受けては、其事の理非はともあれ、去らるゝといふ事が、生涯拭ふべからざる大恥辱とし、惹て其父母までも、育ち柄の甘き故なりと、世間に譏らるゝに至ればなり。

△不品行は境遇の激變

明治の文明はよみすべきも、婦女子の爲めには全く反對の結果を現はし來れり、女子も又學校に登り、男子と等しく、從來は夢想だにせざりし、科學的の智識を敎授さるゝ事となりたれば、其反動の甚だしき、凡そ何にても其壓迫するの甚しき程、反撥力の強きことはりにもれず、數百年間、家内にのみ蟄居させられ、十二分に押壓おきたる女子を、一時に開放して、學問

させ、世間に出して、交際場裡の花とまで稱するに至りては、女子たる者が奚か狂ひ跳ざらむ、忽にして無數の於轉婆墮落生發生して、蛾の如く飛廻り、蠅の如くに群がり、婦人たるの本分を忘れて、猥りに外國の擬似をするに至る、例へば氣候の、激變に就ては、身體の壯健ならざる者の、當られて病むが如く、人も又餘りに其境遇の變動甚しかりし爲に、精神の堅固ならざる輩は、皆浮されて文明の本道を進む能はず、漫にちかみちを狂奔して、あらぬ路に迷ひ込ては、又返る事能はざるがごとし、今日女子の思想の不健全を來し惹いて品行の上に遺憾の點多きは必竟婦人社會の境遇の激變より來りしものなり。

△娘に甘きは母の不見識

又然まで墮落はせず、世に唄はるゝ不品行もなき女子にても、父母の甘きが爲に、家に在りても母を覊繫無學とやりこめ、反口して其言に從がはず、母はかへつて自己の無教育なるがゆゑ、我兒の爲る事、いふ言に感心して、穎敏無双の尤物なるが如く思ひて、他人に吹聴し、女兒を自慢し、自ら乳母の役廻りに甘んじて、辨當を詰、靴を磨きて、姫君に奉仕する冊の如く、母たるの威權、更になければ、娘はいよ／＼附上りして、我まゝ氣隨を增長し、嫁しては夫を尻に敷いて、一家治らず、姑をあなどり、厄介視して、別居論を唱ふるに到る、是れ又其の母たる人の不見識の致す處にして親たるものが時代の潮流に暗かりしの罪なり。

斯る次第なればたちまちに衝突して、離縁沙汰となるも格別不面目とも思はず人間至る處靑山あり、爰ばかりに日は照らぬなどゝ、負惜みを言ひて恥といふ事を知らず、父母も又、我女兒のいふ處ろをのみ信じて、他人をあしきものと心得、世間は廣し、良緣は數多あらむなどいふ、嗟此親にして此兒あり、たとへ幾度夫を替ふるも、僥倖にして女房天下と、ならるればよけれども世中は、注文通りにゆくものにあらず、とかくする中に、歲月は流れて、暫も止まらず、年齡過ぎては、良緣も次第に得難くなり斯くして遂に老嬢の嘆を

招くに至る。

△初縁は天命なり

男女の縁は、奇妙なるものにて、當人同士も相思ひ、父母も又、どうかと願ふほどの中も、縁なければ、種種の故障おこりて、まとまらざる一方に、思ひ掛なき方より、申込み來りて、案外にも迅速に事はこびて、日ならず結婚の式を擧ぐるに至るもあり、又幾度も幾度も、延引しながら、終に始の志しを果すもあり、故に昔しは是れを出雲の神業とし、天縁奇縁などゝいひ、今も猶は不思議の縁と稱して、とにもかくにも、人意をもつて忖度すべからざるは、男女の縁となすものゝごとし、之を神慮に歸するも、又宜ならずや、易經にも初縁は告とあるが如く、初縁は即ち天の命ずるところ、其身の運の定まるところなれば、假令いかなることありとても決して天命に抗すべからず、然るを耐忍力なく覺悟なくして離縁となりて他に再縁したりとも決して其身に附きたる運は轉ずるものにあらざれば再縁の初縁にまさるといふ事はなきものなり、稀に出世したる如くみゆるも、其家富貴なれば裏面に種々の憂愁ありて、生甲斐もなき心地する等、苦は色かふる松風の音なるべし、然れば初縁を以て我天命なりと思ひ定め、兵士の戰場に臨むが如く、生還を期せずと、覺悟を極めて、父母に訣別したる、昔の婦女の、勇健なる志操は眞に天晴れの行といふべし。

△演劇の及ぼす悪影響

われ近日東京座の春狂言を見たり、彼の富士川夫人妙子の行動こそ誠に心得難き限りなれ、彼れ意中の人なる瀧澤某には添ふ由もなくなりて、思はずも富士川の妻と成たれど、猶瀧澤に心を通はせて、夫への勤めも浮の空となる趣きなり、諸孃よよく考ても見給へ然程までに瀧澤を慕ふとならば、あく迄も其意志を立通して若免るゝ道なくば、髪を切て尼寺へなりとも駈込み、猶も迫らば自殺をも爲べき勢を示しなば、父の侯爵も爲方なからむ、舊劇の朝顔の如き、突飛にも

家を出奔して、情郎の許へ行かむとする、氣隨不孝は元より論なけれど、情郎を慕ふの一念は、憐むべきところ無にしもあらず、妙子はそこまでの勇氣もなく、家の爲めとて父に迫られて、據ろなく富士川へ嫁したるは、些か思慮あるに似たりといへ、既に因果を定めたる以上は、瀧澤の事は斷然思ひあきらめて、一筋に夫に仕へて、獻身的ならざるべからず、然るに身勝手の情に驅られて、



身は富士川にありながら、心は常に瀧澤のもとに馳せ夫をして有名無實の夫婦なりと云ふに至らしむ、たとへ富士川ならずとも、外に情人あるがために、かく夫を袖にすると知りて、誰かは腹の立ざらむ、意地わるくなるも其筈なり公衆の前にて、恥辱を與へたるも、妙子が夫に對する行狀のあしきが故なり、然もなくば、何の關係もなき、赤の他人に、恥をかゝせて、快とする理由はあるべ

からず、然れば此一件は間接には、妙子が富士川を激せしめて、瀧澤に耻辱を與へたるにて、夫へは勿論その情人にも又節ならず、惹ては父兄にも不孝なるべし、まごとに、浮薄輕跳にして、事に臨で覺悟を極る勇氣なき、意志薄弱なる當世の婦女子を、寫し出してあます處なし、之を見て、妙子に同情する人は、即ち意志薄弱にして、情にのみ驅らるゝ、氣隨氣儘者なるべし、之を見て以て我身をかへりみ、誡となす者、ありやなしや、われは世の藝術に就ての根本の理論は知らずとも單に世道人心の點より見るに、今日此妙子の如きものを演じては、さらでも情に驅られ易き女子をして、燃る火に油を注ぐ如くなるべし、毒には成るともみぢんも、藥にはならず、正劇と銘を打からには、今少し正しき道に、人を誘導すべき劇を、撰ばれたきものならずや。

△勞苦艱難は人生の務め

日本婦人の文明はまだ〱過渡時代也ヤタラに西洋婦人の外皮の花々しきを羨み擬似して跳反るを手柄と心得ためれど、其精神の確乎にて物事を爲とげる事はまねひ得ず、何事にも飽易く、諸藝を學ぶにも少し複雜に渉れは面倒なり、六かしと止て、他の藝に替へ、始め珍らしきうちこそ凝もすれ、やがて又嫌になりて止るが多し、何藝にても專門となれば學校の課業の如き切拔に非ざれば、それ〲に皆難關ところあり、其處を勉强して越ざれば得らるゝ物に非ず、藝事に於て猶且然り、况や人間一生涯の身の納りは何人たりとも幾許の浮沈艱難を凌ぎてこそ、始て安心の域には至るなれ、貴賤貧富の區別なく世にある限りは何人も苦なくして一生涯を送らるべきものにあらず、苦しめば後に樂み來り、樂しみ過れば苦しみに戻るは世の定則なり、いづれ免かれ能はぬ定なれば、同じくは若きうちに十分苦しみて、課業をはたし、老後に樂みを受くるこそ得策なれ、廿歳前後より卅歳以上、四十に至るまでは血氣壯んにして奈何なる辛苦にも、心の持やう一つにて、堪え得らるゝものなり、堪がたしとは意志の

薄弱なるのみ俗に心勞すれば病が出るといへど勞働にても心配にても、壯年血氣の間は、何の是式に負てなるものかと、勇氣を奮つて苦と戰かへば、病魔も恐れて近づくものにあらず見事に打克て凱歌を奏すべしといへども、人も四十となれば徐々身體が衰へそめ、五十六十に及びては我慢にも勞働は出來ずなる替りに種々の經驗をへて、思慮分別は增り、輕々しく物に感動せぬ樣になる故に老て智の增るは若き時顏色の增が如しと古人もいへり、されども老人は餘りに心を痛め、氣を勞する事あれば、必らず病を惹き出すなれば、子孫たる者はよ



くこれを慰めて其心勞を輕からしむべきなり、壯年に樂しく暮して、老て孤零落し、今日稼がされば喰能はぬ程衰なるものはなし、されどそれも壯年のうちウカ／＼と空しく過して、老後の覺悟なかりしゆゑなり、されば苦勞艱難は人間當然の勤務なれば、一日も早く役を濟さむと我より進て引受け決して恐るゝ事なかれ、大に苦しむほど成功も亦大なるものと知るべし。

◎流行の虛榮に迷ふ勿れ

西洋流の心醉とゝもに、貴婦人紳士の交際塲裡に花やかなるを見て、世上一般女子の虛榮心を

煽動せられたること甚だしく、少しく澁皮の剝けたるは、自惚心を逞くして、女は氏なうして玉の輿に乘るといへば、我とてかほどの顏色あり、いかで凡人凡夫の妻とはならじ、避暑避寒の別莊を有する程の、豪家紳商にあらずとも、佐官以上の軍人に嫁せむ、或は外交官の夫人となりて、共に洋行し、夫を扶けて大技倆を顯はさむと、口癖にいふがごとき、其大膽なる志ざしや誠によしといへども、言と行は相違して、幾許もなく、私生兒を產むものあり、たとへ又不品行の評判はなき者も、妙齡に相應の緣談の申込も多かりしを、悉く謝絕して、ひたすら豪家を企望し居れど、此女兒の素性宜しからず、人の口には戶も立られねば、隱すより顯はれて、今は大方人も知りつ、それではと、誰も申込む者なくなり、空しく盛りの春を過して、今は卅歲に近づきぬ、身の程を忘れたる虛榮の迷夢は、皆かゝる類ひのみ、氏なうして瑞輿に乘る人は、よく／＼高運の者か、又は世に稀なる天品者か乃至は絕世の美人か、何せよ千萬人中の一人のみ、普通の女子の、企て及ぶところにあらず、況てそれらは、皆先方より迎へらるるなり、我より望みて得らるゝ物にあらざるぞや、さらば諸孃は、さる虛榮の夢に惑はずして、各自分相應の良緣を、父母親戚の擇に任せて、嫁せられたる以上は、これ我が天命なりと決定して、克己の勇氣を發し苦と戰ひて、離緣などいふ、忌はしき事は、夢想だにせず、良妻賢母の名を擧げて、めで度く樂隱居の位置にのぼり、樂しく餘命を送りたまへ、美服よりも、金よりも、將金剛石よりも、耐忍力こそ、生涯の寶なり之を失ひたる人はロクな人間にはなれざるなり。





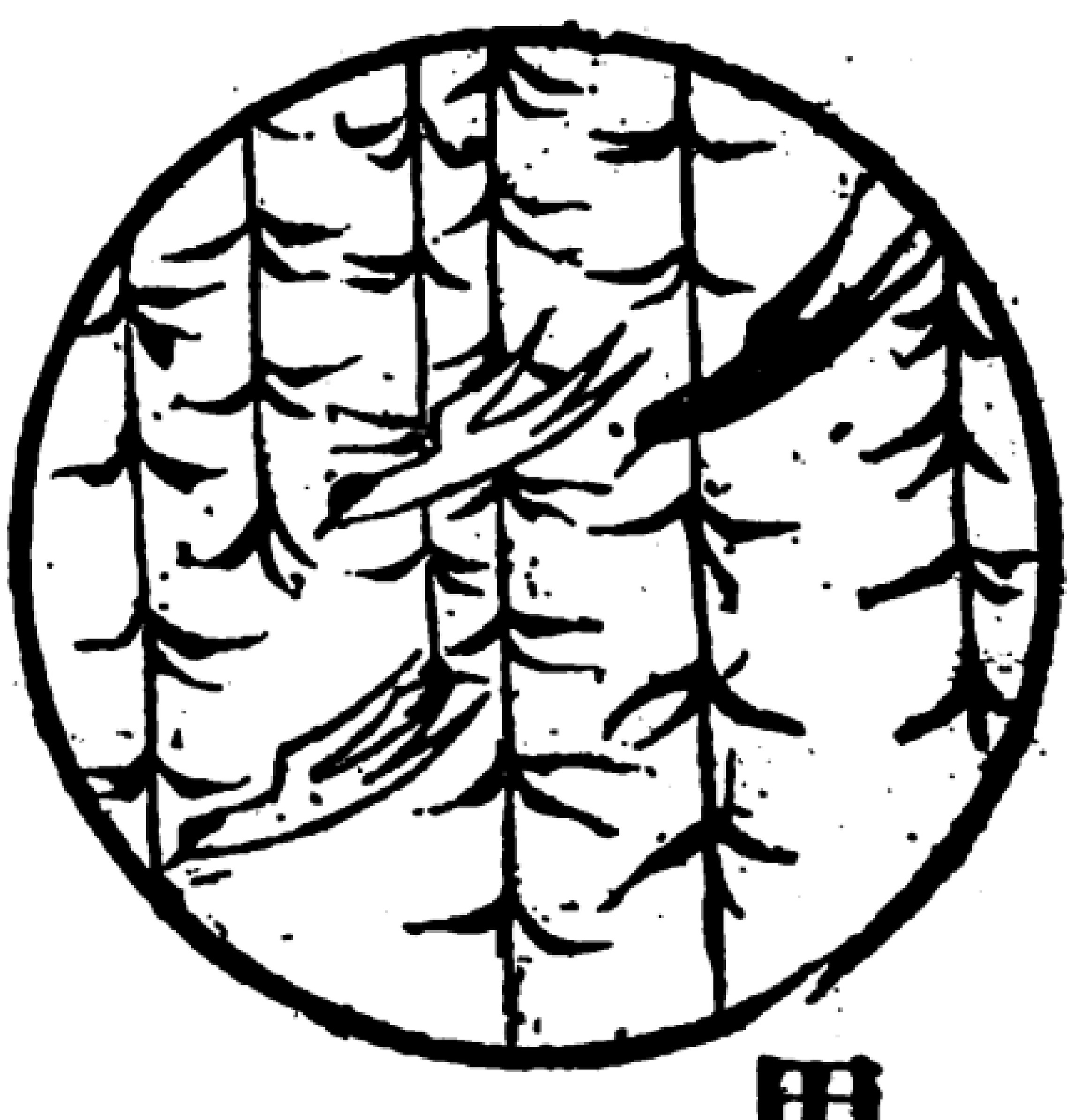
我子の爲に望む花嫁

私の長男は、已に二十を過ぎましたから、早晩お嫁を貰はねばなりません。それに就て私は酷く干渉したくはありませんが、一體お嫁を貰ふと云ふ事は、軈て一家の主婦として、子息を助け、孫を育てさせて吾が家の百年の計を爲すのであるから、成らうことなら、何處から見ても、立派な資格ある者を欲しいと思ふて居ります。けれども私は、何も子供夫婦を當にして老後を養つて貰いたいとか、やれ何をして貰はねばならぬとか言ふのではありません。自分の事だけは、何處々々までも自分でやる積なので、自分は、只子供に一通りの學問をさせて一本立となし、そして好いお嫁を迎へて、老後の安心を謀れば可いのです。

然らば、どういふお嫁が欲しいかと申すと、それは望んだ所で、さう〳〵好いのはありませんから私しは、大事な條件にさへ叶つて居れば、他は深く構はない積りで居ります。第一の條件は、お嫁が健康體であることです。純正なる血統に生れた、强壯な娘を貰いたいのです。私は、日頃、肺結核癩病などの血統の人は、社會の爲に、結婚を禁ずるが宜しいと思うて居る程で、之に最も重きを置きます。次には家庭に必要な教育ある事、即ち一通りの修養ある者を欲しいと思ひます。殊に誠實なる婦人を望みます。誠實は人道の始にして、又終であります。斯くあつてこそ、婦人の本務を果すことが出來るのです。誠實ならざる婦人は、いくら身體が健康で、學識才幹衆に拔んでて居ても、何の役にも立ちません。故に私は健康と、誠實とを、お嫁に要する二大條件と思つて居ます。

外形の美よりは、精神の美を望みます。金持の娘などで、絹物ずくめで、肌を包んだものよりは、木綿着物で、優美な心を包んだ方が何れ程ゆかしいか知れません。去れば個人として、價値のある婦人であれば、その門閥貴賤などは、毫も問ふ所ではありません。それならば容貌は、どうでも好いかといふに、之れは全くかまはぬ譯には行きません。成るべくは容貌は美しい方が宜しい。そして、愛嬌たつぷりといふのが欲しい。美人は、動もすれば、標緻に甘んじてつんと澄ませるものですが、之れは一方から見れば謙德を害するもので、こんなのは大禁物です。(山根正次氏談話)


NOTE BOOK.



里歸りの記

杉浦翠子

つひ一月前までは花山綠と云て、人からも孃樣々々と呼ばれて居たのに、只一夜白無垢を着て三三九度の盃取り交したばかりに、もうその翌朝からは新田と姓が代つて奧樣とよばれるやうになる、考へて見れば如何にも不思議で、私は恰度除夜のやうであると思ふ、一夜の中に歳が新たまると同じにミスがマダムになる關門である、然し四十一年に年が變て曆が新しくなつたとて馬鹿が怜悧になる程、心は進歩しないと同じにいくら奧樣々々とよばれたつて私の心は依然として昔のまゝで別に美しくなつた譯でも無からうに、身の周り人の待遇凡ての事が皆變て自分ながら可笑しいと思ふ位である。兎も角も此の際は人生の變遷時で最も多く歷史の殘る時であるから、後の思ひ出にもと何事をも書きとめて置かうと思て居たのに、怠して筆とる餘裕のあらばこそ。

三月七日に式を擧げて、四五日の間は夫の知人親類に引き合されて、初對面の挨拶に胸をどき／＼させ乍ら、披露會も有耶無耶の中に過して、直に新婚旅行に箱根へ行つた、今までは一人か二人誰か傍に居たものをこゝへ來てから、ほんの夫と差向ひなれば漸く打寬ひで馴々しい言葉も交される。

晝のさゝめ言を山の鶯に聞かれたか、夜は灯の中にゐます春の神の見給ひしか、十日の間にたゞ甘き夢見て醉て居たやうなものであつたが旅より歸る頃には漸く妻らしい心持にもなつて來たのである。

が此間たゞの一度だつて日記をつけやうと思た事なく、今から記して置かうかと過去を追懷しても何だか神經が鈍て分明とした印象がない、たゞ世の中が春だ

つた事や、猫も鼠を捕るのを忘れさうな日和續きだつた事や、私もいつも睡いやうな氣持だつた事や、お目出度〳〵と祝ふてくれる人の言や、毎日お化粧しては着更ばかりして居た事などが、幽に記憶に殘て居るが是と云てもとりとめがない、まづ一言にいへば詩人が所謂歡樂の世とでも云はうか、體に翅が生へて春の野をふわ〳〵と飛び廻つて花の香に醉はされて居るやうな心持であつた。

が四月の六日、今日こそは記して置かねばならぬ事がある。

其は何かといへば生れて始めて丸髷に結たのである十九年の今日までも結た事のない髷だから、一寸と頭に手が觸ても變た手ざわりのをかしく、何だか後に引張れるやうに重く、人に見られると悚とする程氣まりが惡い。何と云てもまだ肩上げ卸したばかり、妻と呼ばれる身ながらも紫被布着て廂髪にリボン飾れば、未だ娘の色香したゝか殘て、客よお辻俥でも「孃樣參りませう、」と云はれる程の初々しさ、自分からも人の妻たる資格などはないと思て居るから、よし孃樣と呼ばれたつて、馬鹿にして居るなとて腹は立たない、却て嬉しいやうな氣がするのである、娘といへば足りない點があつても、人は許して與れるもの故、私はいつまでも二尺五寸の振袖で居たいものだと思て居たのに、こう丸髷に結て終ては紛れもないお嫁さん、妻といふ印判を體に捺されたやうなものである。いつそ妻とよばれるなら四五年も經て世帶馴れた風に見られゝばまた嬉しいけれども、こんな大丸髷に赤の手柄ではいかにも新婚であるといふ事を表彰して、他人に見られても、すぐあれはお嫁さんよと指示されはしないかと思はれて氣まりの惡い事夥だしい。

何故私はそれほど氣まりの惡い髪に結たかといへば、それは明日お里歸だからである。

結婚の時は島田、旅行のときは手輕の束髪に直して昨日まで矢張り束髪で居たのだが、お里歸には奈何しても丸髷でなければ不可と仲人さんが云ふのである。お里歸りは近い人も遠い人も有らうが、私のは東京

から十里ばかりの田舎川越の町である、私はそこに生れて十四の春まで土地の小學校に通たがその後上京して東京の女學校に通て居たのである、鄕にはお父樣はもう亡くなられたが、ひとりのお母樣と、惣領の兄樣が相續して義姉さんも被居しやれば姪も甥も居る。

式が濟で三日目にお定まりの揃ひの寫眞を丸木で撮たから、直ぐ一枚を鄕の母樣に送ッたらば大變のお喜びで每日〳〵飽かず眺めて御出になりながら、奈何も寫眞では飽き足りないから、一日も早く二人揃ふて御新客に來てお呉れとの御狀であつた、親といふものはそれ程娘が結婚し



たのが嬉しいものかしら、今迄學校に居た頃は一度だつて、歸て來いの待てるのなど〻の優しい御手紙は頂いた事がない、尤も修業中甘くしては爲にならないと思してかもしれないが、今度の如にあの筆不性の母樣がこんなに再三お手紙下さるとは餘程の御喜びなのに違ひない、あゝ明日こそはその母樣に逢へるのかと思へば私も嬉しくて堪らない、いそいそと御土産物など取り揃えては、あしたのお天氣は如何かしらと空を眺めて見ると、もう四時である、かれこれ良人もお歸宅の頃だからと思て、もう一度髪の癖を直して見ようと思

つて、また鏡臺の前に坐る。

昨夜良人が宴會からお歸になつて、「今夜は西洋料理で何にも御土產はないが、卓上にこんな奇麗な花が飾つてあつたから持て來たが明日是を髮に挿して御覽」と仰て下さつたのは美しい花束で、見ると、紅のゼラニームや紫のパンヂや黃色なヒヤシンスなど色々の花が、恰度色糸でかゞつた手鞠のやうに丸く一束にされたのである、この儘にして置いては萎れると思て、白粉の空瓶に挿して鏡臺の前に置いたが、水を吸ひ上げた爲か今日は大變に勢がよく、見るとその花束が鏡に映つて、私の顏は恰度花の上に映る。

「ホヽ、是を髮に挿して御覽」こんな赤いものがさせますかつて、本當に賢樣は氣樂な事を被仰る、だけどよくそんな事にお氣がおつきなさるわ」とこんな事を思て「ホヽヽ」と擽られるやうな笑ひ方をすると、鏡にちやんとその笑顏が映るので我と我が身が恥かしくなつて、思はず顏を赤くして俯向く。

櫛を出さうと思て、鏡臺の抽出を開けやうとすると何か閊かへて居るらしいので、ガタ／＼搖ぶると瓶に挿した花束が搖れて、海棠に似た薄紅色の花葵がハラハラと散る、紅をさした白粉の雫が點々と鏡臺のあたりに落ちたやう、それが何ともいへぬ艶めかしさなので私はつく／＼と目戍つたが稍とその花片を搔き集めて見る、この花片を續けて文字にして見やうと思て花片の片側に唾をつけて鏡の表にベタリと貼りつけて見る、よく貼れるのでまた次のを貼つて見る、そして片假名のナの字を拵らへて見た、それからまた次にはツの字を拵らへてとう／＼ナツカシイの五字を鏡の表に。

花片もて書き綴ッた、恰度紅筆でかいたやうであるもうひとつ賢樣(夫の名)と書いて見やうかと思たが花片が足りないので寧その事、このゼラニユームを挘つて眞紅の花片で書て見やうかしら、嘸詩的だらうなどと、こんな惡戲に餘念ない折「旦那樣の御歸りで御座いますよ」と兼が云ふ。

まあちつとも知らなかつた、玄關の開く音も耳に這

入らなかつたのだわ、と思て慌てゝ鏡の面の文字を消そうと思ひ指先で擦ると、花片がよれ〳〵になつて鏡の縁から下へ零れる、障子を外に廊下へ出ると這入て來られる夫と出合頭。

『御歸り遊ばせ』と御挨拶すると「オヤ」と夫は私の髪を御覽になる、今日お留守の間に結たので始めて御覽になるのである。

『アラそんなに御覽遊ばしては、厭！』と私は顏を袖で掩ふと、『ハヽヽそんなに顏を隱したつて頭はよく見えますよ、素敵だね』と被仰る。

『旦那樣よくお似合ひ遊ばすでせう』と兼やが附加へる。『本當に立派な奥樣になつたね』と夫はまじ〳〵と見ながら、サア今夜は餘程大事に寢ないと大變だよ、どうだい枕に縛りつけて袋でも被ぶせて置いては………』と夫は冗談を眞面目に被仰るので私と兼がホヽヽヽと笑ふ。

『それで貴郎、どうなすつて？　會社の方は御暇が取れますか？』と私が聞くと。

『あゝ、明日は構はないがね、月曜日には會社へ出なければならないよ、何しろ先日中から結婚だの旅行だの大分休だものだから、用が澤山差支へてるんでね、いゝぢやないか、日も永いし、明日一番汽車で行て終列車で歸れば充分だらう……汽車だつて三時間位しかかゝらないのだもの』

と仰るので『え、充分ですとも』と私が云ふ『あんまり永くお母樣の傍に居て、東京へ歸るのが厭になつたりすると困るからねハヽヽ大丈夫かい？』と夫が仰るので『眞逆ね……』

と私は兼に眼配をする。

『左樣で御座いますとも、こんな立派な旦那樣を御持ち遊ばして。そんな事は御座いませんわね』

と、兼が巧い事を云たのが愛嬌になつて、三人が一度に哄と笑ふ、賑やかである。

夫は洋服を脱いで着物に着代へながら。

『サア〳〵、今夜は御飯を早くして、一緒に明日のお土産を買ひに行かうぢやないか、お母さんには何にし

やうね」と仰る。

御母さんには違ひないけれども、自分の母を夫に特にお母さんと呼ばれたのが、何となく嬉しい、母様がお聞きになつたらどんなにお喜びかと思ふ。

晩は夫と共に銀座へ行つた、買物をすまして歸て來た頃には廿日餘の月が出て居間の丸窓の障子に庭の石燈籠の影をうつして居る、春の月は美女の嬌羞にも似て朧に空に浮いてる、四分の羞、六分の笑を含んだ私の丸髷姿が、自讃かもしれないがこのお月樣に似て居るよなどゝ思ても見る、嬉しい明日はお天氣も大丈夫だ！、常々懐かしい故郷へ行くのだと思て、十一時頃寢に就く、明朝早く目が覺める樣にと枕に賴でねる。

四月七日　日曜日

夫の家に居ても矢張り故郷は戀しいものか、體が行かない先にもう魂は故郷のあたりを逍遙て、昨夜は花咲き滿ちた故國の春の野に憧がれ遊だ夢を見た、が今朝化粧す可く、鏡臺の前に坐ると、夜べ夢に辿た花野の香が染みて居るかとばかり鏡に映る我が細眉に、殘んの香、匂やかに、煉白粉のローズの香、今朝までも頸に額にしたゝか殘つて居るのである、まづ鬢直しをして鬢擦でふはりと鬢の毛を掻くと、小波寄つたやう、綠の黑髮に櫛の跡がつく、毛筋棒の先きでそつと膨らますといゝ格好の鬢になる、白粉をつけて、紅を點じて頰にも臙脂を施し今日は特別の極彩色に粧ふ、我ながら、いみじと思ふ。

お化粧も濟んだので、納戸へ着更にゆく、道中着は別にしやうかと思たが、別に持てゆくのも荷物になるし、道中にはコートを着てゆけば差し支へないだらうと思て、それではあの頂いた黑の模樣を着て行かう、と心に定めて簞笥を明ける。

お誂ひ、新田樣、三越呉服店と書いた折紙に包まれて紙縒紐で結であるのを解くと、まだ仕付のまゝの仕立たばかり、この着物は特に里歸りの爲に夫の方から下すつたので、嫁ぐときは藤色の振袖だつたのを、丸髷に結ふのだからとて、黑の留袖に仕立て下すつて、嬉しくも五つの紋は夫の家の即ち新田家の揚羽蝶の定

紋がついて居る、白羽二重と二枚重ねて、緋の友染の長襦袢の上に着ると、肩が滑べり落ちさうな、どつしりとした地のいい縮緬で、獨では容易に着こなせないで、まごまごして居るところへ兼が來て『オヤお召替で御座いますか、御手傳致しませう』と云て後へ廻て衣紋を繕て呉れる。『旦那樣はもうお起きなさつて?』と聞くと。『否、未だで御座いますよ、』と云ふ、男の方の仕度は雑作ないがもうお起し申さなければ遲くなる、と思つて居ると言ひ合したやうに、お庭の方でホーホケキヨと鶯が鳴く、毎朝私がお起し申すのを、今朝は鶯が代て呉れる、曉を覺えざる春の眠もこの聲聞いては夢も醒めずに居られまいと思ふと案の定、お居間の方で咳拂がする、旦那樣はお起きになつたらしい。



私が漸く帶を結ぶ頃には、もう夫は何事も濟まして洋服に着更へながら姿鏡の前でネクタイを結で被居る

私は帶も結ばれ、櫛、簪、時計、指環まで殘らず身に粧ふものゝ仕度が濟んだので、夫の方へ行て後に立つてフロックコートの襟を直して上げると。

『やあ、立派になつたね』と後に立てる私の方は見ないで、前の姿鏡に映る姿を夫は御覽になつて仰る、

『ホヽヽ奈何も有り難う御座いました御蔭樣で………』と私が着物の御禮を云ふと。

『どうだ、氣に入たかね』と仰る。

鏡の表で顏と顏とが、見合つて話をして居る。

二人とも仕度が濟むだ頃は六時三十分前で折よく俥も來たので、私は上へコートを羽織り留守を爺と畜生に賴で早速俥に乘て出る、信濃町の停車場から甲武線に乘てゆくのである、外へ出ると空はよく晴れてまたなき上天氣である、かう太陽は高く登て遠ちに靉靆いた霞が次第々々に薄くなつてゆく。

この次ぎ位の汽車からは小金井行の花見客でさぞかし雜沓だらうと思たが、幸ひ朝早いだけに乘り込んだ列車の二等室は夫と二人ぎりであつた、二人並で色々な話をしたが重に私が鄕の事を餘計に喋舌やうになる、汽車が荻窪へ着いた時ステーションの櫻が滿開で風にハラ〳〵と散る花片が汽車の窓に舞ひ込む。

一時談話が途切れたので、私は窓から外を見ると涯もない武藏野の平野は滿眸の春色融々として遠方の山邊には霞たなびき、菜の花畑、麥畑に微かなる春風戰よげば、黃金の小波綠の大波打寄せて波より嬉しい花の香がパット薰る、蝶飄々と汽車の窓を掠めて通る長閑さ、同じ春でも新婚旅行の時は三月の中旬なれば花は紅梅か、彼岸櫻のちらほら見ゆる頃で、別れ霜のまだうそ寒かつたが、今日こそは春酣なる頃ほひの心は一際浮立つを、私は斯うして錦着て故鄕に行くのではないか、是よりの滿足が如何してあらうか。

學校に居る頃は、卒業證書を持て歸省るのが無上の名譽と思て居たが、今日こそは妻たる資格と、天晴れ賢母となる可き餘裕を備へて今や故鄕にゆくのである噫、雲雀は空高く凱歌唱ふて居る、蝶は私の爲に虛空に舞踏を踊て吳れる。

この花、この鳥、この色、この香、我が世の春は盡く私の爲の歡迎の莚ではなからうかと、今迄幾度か往來したこの汽車に乘て今日ほど滿足の喜悦を覺えた事はないのである、私の傍には髯美しい良人が坐つて御出になる。

二時間のあひだ、黄嶋蒼田相迎へ相送た、汽車は早くも川越の停車場についた、私は敷島袋を下げて改札口を出ると、逸早く飛んで來た車夫、見れば次郎吉である、花山家の定紋の着いた新らしい法被を着て。

「これはようこそお出でなさいました、御宅からお迎ひに參たので御座います」

と饅頭笠片手に丁寧にお叩頭をする、下げた頭を見ると次郎吉もいつの間にか歳とつたと見え、白髪が生えて生た。

私が「御苦勞樣ね」といふ中、次郎吉は今改札口を出て來られる夫の方へ行て、是は恐入りますと、いひ乍ら夫が持た手鞄を慌てゝ奪ひとつて。

「是は初めて、お目に懸ります、私は花山樣に長年御贔負に預かつて居ります、次郎吉と申す者で御座います、何分宜敷と……」正直に長々と初對面の挨拶する。

「車を……そうか」と、夫が云ふうち、次郎吉はもう一人の若い車夫を手招くと、その車夫がカラ〳〵と俥を挽いて來る、夫は其方へ乘り私は次郎吉の方へと乘つた、いざ挽き出さうとすると夫が「先きへ御出で」と仰る。「否　何卒……」と私が遠慮すると「構はないからお出で」と重ねての御志に、「それでは御免遊ばせ」と云て私のから挽き出して貰ふ。

當節は奥樣の方が先へ乘て往くのがハイカラなんださうだが私はさも嬶天下のやうでみつともないと思て一度もそんな事はした事がないのに今日は如何したものか、いはゞ今日は夫より私の方が榮ある日であるから、この榮光を少しでも傷つけまいと云ふ心持から態と私の方を先にたゝせたのではなからうかと、賢樣の御心中を推して見る。

狹い田舍道に二輛の俥は珍らしいので、皆往き來ふ人が振返つて見る、何だか氣恥かしいが、心の中では

窃かに鼻を高うして居る、斯う云ふ時には譬ひ耳擦りされたつて、冷嘲られたのなどゝいふ僻みも起らないのであるが、たゞ氣に懸るのは志儀町の角の武藏屋と云ふ玩具屋の前を通る事である、武藏屋ではよく私が駄々を捏ねた事があるので、私が母樣とその店の前を通る時には必ず何か買て頂くものと定めて、もし明日にしようなどゝ母樣に云はれると私はぢだんだを踏で動かなかつたものだが、それにこの店のお婆さんが商賣上手で、私の欲しがる心をつけこんでは色々な嶄新な玩具を出して見せたりなどしたが、今でもあのお婆さんは丈夫かしら、私がこうして奥樣になつて、丸髷になんど結た姿を見ると屹度昔の事を思ひ出して呆れて終ふに違ひない、まあ緑さんの、あのやんちやんが丸髷になんぞ云て澄まして居るとは呆れるよ位に思て冷笑するであらう、誰でも小さい時分はそんなものであらうが、私は殊に我儘者で暴ばれて仕方がなかつたのをお婆さんは皆知て居るのである、今では懐かしいと云ふより寧ろ氣羞かしい、あの店、髙窓お婆さんが居て呉れなければいゝがな、などゝ思てる中韋駄天走りの俥はいつしか武藏屋の前に來た、窃と暖簾の内を覗くと恰度客も居ないで、お婆さん獨徒然と店に坐つてこちらを見て居る、是はとばかり慌てゝ洋傘に顔を隱すとそのはづみに洋傘の骨の先が前髪の毛に引つ掛かつて痛い思ひ………『一寸と〳〵』と後の俥で呼ぶのに氣がついて振返と『後挿が落ちさうだよ』と夫が注意して下さる。

右手を延ばして簪を直すと、誰か私にお叩頭した人がある、能く見れば山本のお竹さんである、まあ成人くなつたこと、よく青洟を垂らして居た子だつたのに丸髷になんぞ結て、何處へお嫁に行たのかしら、と變り果てた舊友の姿を思はず車の上から振り返つて見ると向ふでも私の方を珍らしさうに振り返つて居た。

いくつかの町を通り越すうち見えて來たのは、我家の土塀、もう其處と思ふその瞬間の想はたゞ嬉しいと云ふより外はなかつた。

玄關に俥が着くや、否や、内から格子があいて、障

字が開いて、母様、兄様、姉様、敏ちやん、新ちやん、八重ちやん、花ちやん、松中までがするりと並んで「まあよくお出なすつた」と口々に言ひ囃やす、私の二の瞳は是等多くの人を一時に映すのだから忙がはしい、皆懐かしい人ばかりの誰の顔に視線を與へてよいか判らない、

「ホ、、、今日は……」と頭を下げると、『そゝいい格好！」と直ぐ義姉さんが丸髷に気がついて仰る。

私は遠慮なく玄關を通つてずん／＼座敷の方へゆく夫は後から。

いつもは子供が多いので随分散らかつて居るのに、今日は整然と片付いて



居て、十畳の座敷には、火鉢座布團が今にもと客を待ち構へて居る、其中夫が此處へ來られると、『さあ、何卒、こちらへ』と兄は丁寧に上座を占めた座布團の上を勧める、夫がそれへ御坐りになると、兄は私にも、『そこへ御坐んなさい』と丁寧な口をお聞きになる、お嫁にゆくとこんなに丁寧にされるものかと鳥渡おかしく思ふ、兄様はよく私のお尻を打つた事があるくせにと思ふ、私はいゝ加減だつたが夫はこの多勢に一々挨拶なさる、一家族皆こゝに集まつてさも珍客でも到來のやうに饗應す、色々な話が始まる、殊

に母樣はにこ〳〵とその態度ぶりが嬉しさうである、

母樣は、

「まあ、豪氣なお召が出來たねー、みんな頂戴したのかい、まあひとつ立つてよくその模樣を拜見させてお呉れ」とホク〳〵笑顏して仰るから、私が立つと、母樣は眼鏡を懸けて、褄先を手にとつてつく〳〵と櫻の模樣を見ながら、

「まあ、お琴、御覽な、なんて面白い模樣ぢやないか、この金糸で刺繍た霞の具合のいゝことね」と義姉さんにまで褒めて呉れといはないばかりである、「本當にお立派で御座いますことね、鳥渡まあ、後をむいて帶を見せて御覽なさい」と仰る。

私はまた後を向くと「をゝいゝこと」と云ふ。

私が恰度操り人形のやうに後をむいたり前を向いたりするのを、一同がポカンと見て居ると、義姉樣が「さあ松やはお茶でも入れないかね」と下女が叱られる、「ホヽヽ、あんまり美しいもんだから見惚れて終て居るよ」と云はれる、と松やは氣がついたやうに開いた口を閉げて、赤い顏して逃げてゆく。

「そう〳〵揚羽蝶の御紋だつたね、」と母樣は思ひ出したやうに私の紋所を見ながら、

「あなた、本當に不思議なもので御座いますよ、私はもう里の紋なんか、二十年も用ひませんが、矢張り私の實家がこの揚羽蝶の紋でしてね、先月お二人お揃のお寫眞を拜見しますとき、あなたの御羽織の御紋を見て思ひ出したので御座いますよ、ねー、あなた、御緣と申すものは不思議なもので、何處かに因緣が御座いますものですね」

と例によつて老人の因緣話、母樣は夫にむかつてまことしやかに語る。

「ホヽヽ、母樣にもお里があるわけだわね……」

と私がいふ　義姉樣のお里は今でもあるが、母樣のなんか聞いた事がない、私たちは母樣の花嫁時代の事は知らないのだから、母樣は昔からこゝの家の人のやうに思はれる。

「そりや、ありましたともね、私なんか十五の時にお

嫁に來て十六にこの育郎を生んだのだが」と傍に居らしやる兄樣の方を御覽になつて被仰るものだから、一同が哄と笑ふ、兄さんはもうぢきに四十である。

「お前のやうに昔の女は意久地なしでなかつた、もうお嫁にゆくと、直ぐに眉毛を落し鐵漿をつけたものさ」と綿帽子被ぶつた頭を御話しになる、五十路を越えた御髮は白髮まじり、今度綿帽子被るやうになれば母樣は西の淨土といふ處へお嫁にゆくのであらう。

「まあ、十六位で赤坊がよく產めたわね、私なんか厭だわ、面倒臭い」

「そりや、困たお嫁さんだねー、そんなでは嘸旦那樣がお骨折の事だらう…………　ねーあなた隨分我儘者ですから、御癇に障る事も御座いませうね」と母樣は夫にしみ〴〵と仰る、眞逆自分の妻を人前で褒める譯にもゆかず、然りとて母親の前惡口もいへず、こう問はれて夫も餘程窮したらしい。

「否どう致しましてハヽヽ……」とお笑ひ遊ばす。

「本當だよ」と兄樣までが相槌をうつ。

「まあ、こんなに立派なお仕度までして戴いては、餘程能くお使へ申さなければなりませんよ」と母樣は眞顏になつて仰る、誰も傍に居なければ、私もその積です位云ふのだけれども、一同の前でどうしてそんな事が云へやう、「ホヽヽ……」と曖昧に笑つた。

先刻から誰か私の後の襖の外で囁いて居ると思つたら、それは姪や甥である。

「東京の姉さんはお嫁さんに行つたのだね」と十歲なる新太郎の聲、「あゝ…らお嫁さんだつて可笑しいね」と弟の敏ちやんの聲。

「みんな溫順しくするのよ、騷ぐと母樣に叱られてよ」と姉の八重子が弟どもを制すると、誰か一人、後の襖を細目にあけたが、「姉ちやんお婿さんが見えるよ」と云ふ。

「をゝいやだ、お婿さんだつて叔父さまだわ、さうして是から姉さんて云つては不可いのだわ、叔母樣ていふのだつて母樣が被仰てよ」と八重子が敎へてると末の弟の敏ちやんが、「ドーレあたいにもお婿さん見せて

お菓子よ」と二人の間を割いて襖の透目に顔を寄せる、それを私がハタと見ると驚いて「やあ、姉さんがこつちむいた〳〵」と云てカラ〳〵笑て逃げてゆく。

いつもなら、東京の姉さん〳〵て喜で私に纏ひ着くのに、今日は流石に見馴れぬ夫が附いて居るものだから、子供心のはにかみて傍によつては來ないが、何だか私に調戯て見たい樣子である。

「さあ、皆さん、お土産を上げるから來らしやいな」と私が云ふと、今まで夫と話をして居た姉樣が。

「そう〳〵、東京の叔父樣にいゝお土産を頂戴したよ、一同こゝへ來て御禮を被仰いよ」と云ふと姉さん株の、八重子がハーイと、可愛い聲で出て來たが、見馴れぬ夫や、こわいお父樣が居らしやるので、恐しく眞面目になつて、學校で褒状でも貰ふ時のやうに、畏まつて敷居越しに手をついてお叩頭をする、頬に額に振り掛かる下髪の後毛をはらひながら頭を上げると義姉樣が「これだよ」と出した簪の箱を恭々しく戴いて受取る、母樣が「どうも八重子はお行儀がいゝね、さあ、あとの兒は如何したい」と仰ると、

アハヽヽ、ヽヽと新ちやんに敏ちやんの二人はまだ顔を見せないで、障子の陰で擽りつこをしながら、お前先きへお出よ、厭だよ、などゝの押問答何が可笑しいのか、とりとめなく笑てる。

兄ちやん先へお出でよ、と敏さんがつゝくと、その機みに、新ちやんが現はれた、もう仕方がないと思たかいきなり坐つて、どうも有り難うと、お叩頭をしたが、さも用が濟んだといはないばかりに、パタ〳〵と逃げて行て終ふ、何が羞しいのかその周章方一同が思はず笑ふ。

「何だい、お土産を頂戴しないのかい」と仰ると、アーイ、と新ちやんは返事して來て自動車の玩具を貰ふ、それを見た、弟は羨ましくなつて、「母樣、あたいには……」と敏さんは自分から催促する、姉樣はサーベルを遣つて「さゝみんな仲好くしてお庭で遊ぶんですよ、喧嘩をすると東京の叔母さまはもう來らつしやらないよ」といふと、「さゝ行かう、遊ばうね、萬歳

萬歳と三人の子供は嬉々として縺れ合つて行く。

＊　＊　＊

「なんぼ、名物だつてお客樣にお芋は出せないでせう」と姉さまが仰ると「ホヽヽこの奥樣はさうでもなからうよ」と母樣が冷やかしなさるので、お齋には態々大好きな甘藷を煮て下さつた。

何はともかくも御先祖樣へお二人でお參詣に行てお出、と母樣が被仰るので、午後一時頃、躾やをお供につれ三人で御墓參りに眞行寺へ行く。



軒の低い家並、路幅の狭い田舍道は、春なればとて東京の如くに錦を織るやうな雜沓はないが、流石に春風は吹いて居る、紺暖簾や、茶店の赤毛布がひら〳〵として、近村から買物に出てくる村の娘の赤いけだしも艶めかしく、肥た顔にこつてりと塗た白粉もこの暖かさに溶けさう、挿した簪の櫻の花なのも氣がきいてる、こんな姉さんたちがさも珍らしさうに私等の一行

を見送つて居る、遠くの方でピーヒョローと飴屋の笛が聞こえる、田舎の春は何處迄も呑氣である。

　街を端づれると田圃道である、この田圃は武藏野へ續づく町の一端で、野の果には秩父の山脈が紫色に城壁のやうである、麥はもう穗が出て、菜の花は眞盛り、處々の田にはげんげが一面に咲いて、恰度緋鹿子の毛氈でも敷いたやう、蝶となつてその上へ寢たいやうである、畑を打つてるお百姓の顱卷がづるけさう、使てる鍬がピカリ／＼と光る、左に路を折れて畔を通ると婆やが、

「奥樣、裾をおはしより遊ばせ、白無垢が草の色に染まりませう……」と注意するので、一寸片褄とつて芝かと思はれる柔かな草の上を歩行くと、小米をつけたやうな薺、黄金色の蒲公英、紫の菫、外にも名しらぬ徼かな花が畔に咲き滿ちて、錦の帶を解いたやうな細路、ほんに踏むのは勿體ないやうである。

　裳引く長襦袢の、友禪染の蝶が、この花の香に活きて悅け出てはしないかと思はれる、千代田草履の裏にも花の香が泌みたであらう、絹足袋は花粉に染まるやうである、こんな時には洋傘捨てゝ繪日傘翳し、だんだら染の振袖着て、素足のまゝあるき度いやうである

「ね、綠さん菜の花があんまり明るいので、黑の衣服は引き立たないね」と夫が仰る。

　成程、右も左も菜の花畑で恰度一枚の白紙に三人の姿を殘して、餘白を眞黄な繪の具で塗り潰したやう。

「本當にそうですが、この洋傘の紫はよく、菜の花にうつりませう」

「そうだね―、菫の花輪の影に蝶が宿てるやうだ、綠さんを蝶に譬へたのだよ」

と夫は却々形容がうまい。

「それよりは恁うして、美しい御夫婦がお揃ひで、私がお供して參りますところなんか、芝居の花道の樣では御座いませんか」と婆やが付加へる。

　今さしかゝつたは、菜種の花道か、舞臺に垂れたは金絲の霞、胡蝶の刺繡ある綠の錦、青柳の糸で織つたのである、畔を脫けると左は入間川の支流である、川

幅は廣くはないが、この邊の田を潤す流、水清くして底の小石も數ふ可く、流に漂ふ靑藻は恰度水底の姫神が綠の御髮を洗ひますかとばかり、故郷の物といへば土の香、樹の香も懷かしい、この田圃で菫も土筆も摘むだ、そして歸途にはいつもこの川で足を洗たのである、またよく螺も拾ひに來たことがある。

「ねー、この川には今でも螺が居るかい？」

と私が後を顧て聞くと、婆やは汗ばんだ額を拭きながら「エー居りますとも」

もし、旦那樣、この川ではよく御孃樣はお惡戲をなすつたのですよ、（まだお孃樣と云てる）あの御隱居樣がお止め申すのに聞かないで毎日お隣の勘ちやんといふ男の子と一緒にこの川にお這入りになるのですよ、そしてあなた裸體でお腰卷ひとつで……

と私の十歲位の時の事をいひ出す。

「あら、嘘ばつかり、あのそらお前が迎ひに來たらうあの時ばかりよ裸體になつたのは」と一昔前の事を今更のやうに辯解して爭ふ。

「嘘か、眞實かこの川に聞いて御覽、どうも本當らしいね」と夫までがおひやかしなさる。

覗けば底まで澄むだ水は鏡のやうに輝いて、夫に寄り添ふた初々しい丸髷姿が明晰と映て居る。

本統に、こんな立派な奧樣におなり遊ばしては嘘のやうで御座いますね、と婆やが云ふ。

十九年間の我が歷史を記した、この川も屹度そう云て私の成人を祝してくれるだらう、せゝらぎの水の音何事かを囁いて居るやうだ。

兎角して居る中、眞行寺の前に來た、門の傍の花屋で花を買てお線香に火を點じて貰ふ、私は買ふた桃の花をもち、夫はお線香、婆やは後から手桶を下げてくる、門を這入ると直ぐそこに大きな柳がある、是は妖怪柳と云て噂に高いのである、この幽靈柳も春が來て若やいだと見え、美しう眉描いて、垂るゝは六尺綠の髮か、春風にふわり〳〵弄らる、靑柳の糸の艶めかしさ、これに幽靈が出るならば、そは羅浮の美人にも劣らぬ、柳姿細腰の妖艶なるべしなどゝ思ふ。

何日見ても大きな木蓮は、一朶の白雲虚空に掛かれるとばかり眞白の花が今眞盛りである、この寺の庭は萩が名高いので、若緑の色柔かさうな萩の芽がこゝかしこに出て居る、その影で小猫一疋、飛んだり跳ねたり、何をして居るのかと思たら飛んでる蝶々に戯れて居るのである、私が來い〳〵と呼ぶと、ニャーと返事して此方をむいた、三毛猫の鈴を張つたやうな眼、

「ヤー婆や私がよく窘めたみいちやんはどうしたの」とこの猫を見て、もとこの寺に居た猫を思ひ出す。

「あの猫は疾くに死んで何でも、この猫はあのみいちやんの孫位なんでせう」といふ、矢張血統を引いてると見え毛色がよく似て居る、また來い〳〵と呼ぶと此方をむいたが、私のお祖母さんを窘めたでせう憎らしい人、と云ふやうな顔をしてづん〳〵と逃げて行て終ふ。

三人はお墓の門を開ける、石塔の後にある櫻の大樹が今滿開で、花の天幕を御先祖の石塔の上に張つたやうである、お墓はいつでも地が濕めぽくて苔が青々として居る、お石塔の臺石に可愛い菫が咲いてる、土もない石の上によく咲くものだと思ふ、夫に半分お線香を分けて頂いて、私はお父樣のからお祖父樣お祖母樣のへ手向て、南無々々と口誦する、「本當にこのお目出度いお姿を旦那樣にお目にかけたい」と婆やがしんみりと云ふ、夫も何事かを誦しながらお父樣の御墓前にお線香を手向ける、幽明、處を異にしてこゝに契る父子の縁の糸か線香の烟は、夫の意を諾て淨界遙かに傳へてゆく、夫の御心中はどんなであらう、と妙な事を想像して居ると、何處でか鶯がなく、頭の上の櫻がハラハラと散る、西行が願くは花のもとにて我死なんの歌を思ひ出して「あゝいゝ、私が死んだらこの花の下に埋めて下さいね」と云ふと「ホヽヽとんでもない事を仰います、あなたはもう新田樣のお方ではございませんか、此處へは眞平、旦那樣の御國に埋めてお頂き遊ばせ」と婆やが云ふから、「でもお父樣もお母樣もこゝではありませんか」と云ふと「お母樣のお傍より旦那樣のお傍の方が、宜しう御座いませう……」と背中

を叩かれる『ねー旦那樣偕老同穴とか申ますでは御座いませんか』と婆やは却々學者である、そうだねー御迷惑でも仕方がないねーと夫が仰る、三人カラ〱笑ふ、また鶯が鳴いてる、今迄はお墓参する毎に、私はいつ死んでもここに埋められるものとばかり思て居たのに、成程私はお嫁に來たのである、母樣や父樣の永眠地であるこのお墓とはもう縁が切れたのかと思へば何となく心細い知らぬ夫のお國になんか埋められたなら誰もお參りなどに來て呉れる人はないだらう、など〻思たが、祖父樣祖母樣の御夫婦の戒名が二つ並で一つ石塔に彫りつけてあるのを見ると私もあゝされるのだと思て直ぐ嬉しくなつた。



歸路には親類の二三に挨拶しにゆく、歸つて見ると

親類から東京の御客へと草餅の搗き立て、蓬の香の芬芬するのが澤山來て居る、態々私等の爲に搗たのであらう田舎の人は何處まで質朴だらうと感心する。

　夕方には親類の方々に披露するとて、御酒宴を開く私と夫がお雛樣のやうに上座の方に並べられる、三の膳の立派な獻立で、夫は盃を受けるに忙がはしい、何だかまた結婚式でもするやうな氣持である、其の中高橋のおぢさんが高砂を謠ひ初める、十人ばかりのお客樣だが却々賑やかであつた、流石に永い日も漸く暮れかゝつて私の足の痺れが切れる時分に、そろ〳〵お客樣はお歸りになる、私等も、もう東京へ歸る仕度をせねばならぬ、何だか一日では名殘惜しいやうな氣がしたが、夫のお勤めもあるし、自分一人殘るのは厭だと思つて諦める、僅か一日でも母樣にも逢ひたし、親類の人にも紹介されたし、もう里歸の式も濟だのだからと滿足する、「歸るのは厭だらう……僕は如何しても用があるから仕方がないが、何なら殘つて居てもいゝよ」と夫が仰ると、傍に居た母樣が、「否、何卒、お連れ下さいまし、奧樣をお預り申すのは心配で御座いますからホヽヽ」と笑つて、

「歸るんですよ」と私には屹と窘め給ふ。

　澤山頂戴したお土產物などを手鞄に納めて居ると、八重子さんが、もう歸るの、と情けなさうである。

「えゝまたぢきに來てよ、八重さんも被來いな」と云ふと、「夏休みに行くわ、あといくつ寢たら長いお休みが來るのでせう」と氣樂な事を云てる。

　先刻から私の肩を捉まへてドン〳〵足拍子しながら「嬉しいな〳〵あたいも今に東京へ行んだ」と敏ちやんが云つてる。夫が、「東京へ來たらおぢさんのお家へお泊りね」と仰ると「あたいおばさんの家へ行くのだねー、叔母さん……」と私の顏を覗く。

「ホヽヽ叔父さんも叔母さんも一つお家よ」と八重子が說明すると「そう一つお家なの」と敏ちやん珍らしさうに聞く一同が哄と笑ふ。

「おばさん、こつちを御覽よ」とお庭の方でいふから見ると、敏ちやんが夫の靴を穿いてゴロ〳〵しながら

鼻まで被ぶりさうな夫の帽子を被ぶつて洋杖ついてエヘン／＼と態との咳拂ひして口髯捻ねる眞似をして居る、義姉さんが『まあなんて惡戯するのだらうね』とお叱りになる、一同が笑ふ。

日はもう暮れて灯が點く頃になつた、先刻から母様が夫に何を被仰るのかしら、と私は傍へ行て聞くと、『彼も片親ないので育たのですから、隨分不行屆も御座いませうが、何も御縁と思しておいたはり下さい、私はもうあれさへ片付けば重荷を卸したやうだと思て居りましたところなので、こんなに嬉しい事は御座いません、私はもういつ死でも安心で御座います……』と母様は涙を拭いて被居る『本當に父でも居りましたなら……』と云てまた泣いて被居る。

『何卒、御安心下さい、私の方にも隨分御不足も御座いませうが……』と夫は眞面目に賴もしい事を言て下さる何だか嬉しい。

八時の汽車に乘るのである、その中俥が來たので私は母様にお暇乞をいはうとすると突然手を握られて、『旦那様によくお使へ申すのだよ、決して粗末にしてはいけませんよ』と被仰つてまたほろりとなさる。

私も幾度か頷いて其から兄様、義姉様、子供、女中迄に左様なら、と云つて玄關口に出て俥に乘る、俥は三臺で兄様がステーションまで送て下さるのである、子供等もと云ッたが夜だからと云つて止めた。家族一同門まで送ッて出る、私等が車に乘る、いざ挽き出さうとすると、左様なら、御機嫌克う……萬歳々々と子供がいふ、俥がガラ／＼と走る。見返ると、母様、義姉様がまだ門の傍に立つて居らつしやる、また顧るともうお姿は朧夜の闇の中にかくれて終た、何となく私の胸は寂しい想ひである。兄様に別れて八時の汽車に乘り込んだ、ベタリと腰を卸すと時候の暖さで勞かれた體は溶けさうである、汽車は出る、私は漸々と故郷に遠ざかる。

あゝと太息をすると母様の顏が彷彿と現はれる、ああ母様は泣いて被居しつた、涙を拭いて居らしつた、春雨は草木の花を養ひ、母様の涙は私等の緣の結目を

固めて下さる、母様は悲しいので泣いたのではない、嬉しい滿足の餘りに流れ出た涙なのである、あゝ慰められて泣く涙、母様の涙は春の涙ともいはうか、……

母様の嬉しい魂は、恰度蒲英公の花が毛冠になつて長へに盡きない日永を、優しい風にふわ〳〵と飛んでゆくやうな思ひ、今日こそは歡樂の世、あの極樂世界といふものを目のあたり見たお心持であらう、あゝ今時分はお居間で夕のお念佛をして被居る頃である。



東京に歸つたのは十一時、寢室に這入つて筆をとつて今日の事を記しておく、毎日書く日記は三頁を滿たないのに今日一日だけに十數頁を費したので私は特にこの日だけ『里歸りの記』といふ字を朱書して置いた。



青春觀察

糸屋の姉さん

漢宮三千の佳麗、粧ひをこらせし都の春の花の色香も一夜の嵐にちり／＼て、世は淺みどり、深ふ、柳の糸の裊／＼と裾うちはえし紫きの繪日傘や――とか何とか、大層うまさうな、あの元祿さん見たいな事でもいふ樣ですが、私は決してそんな野心も何もあるやうな女ぢやございません、只平々凡々の事を平々凡々の筆でのべる丈でございます。

同じ町に、同じ人間が通るのですから、何も事新らしく云ふがものはございませんが、ソレデモ一寸面白いのが本郷通りと銀座通りでせうよ。

朝、晝、晩と三つに分けても、本郷通りは學生が多い、學生、殊に高等學校の生徒が威張つて通るのが一番目に觸れる、そこは銀座となると此頃はインバテスが多いと云ふやうな寸法になります。朝などは本郷通りを、年老つた、氣の毒らし官員さんや、新らしく學士になりたての、それこそホヤ／＼の煙でも出さうな御方は、得意らしく、氣取つて、まだ生へ揃はない口髭に、之も新らしい外套でキユッと身をしめて光る靴でキユッ／＼と反身になつて、電車迄御通ひ遊ばすのも、此處二三年の壽命でせう、やがて新調の外套が中古になる時分にはそれは月給も上りませうが、妻君や子供の費用に追はれて、在りし日の勢ひもなく、段々と生活難に貴重なあたまを惱まされるやうになつて了つて、これでも舊は角帽で候のと威張つて通つた人かと思はれるやうに貌るでせう。

白條の高等學校の生徒は見るから心地が佳い、背なら延び次第發育の美事な體には、マントを長く着て居るのも有るし、紺飛白利の着物に同じ羽織で、サッサッと歩いて居るのもある、ミルクホールや珈琲店には白條と角帽の客で持ち切り。夜などは、薩摩琵琶歌

を唄ひ乍ら歩くのや、寮歌を唄ふやら、青年時代の活氣が溢れて、人生の春此時が一番愉快な時分だと思はれる。端艇でも野球でも、皆此人達でなければ出來ぬ事である。

然るに角帽となると其處は異つたもので、まアおつにすまして、氣取らうと云ふもの、そして角帽となると白條にくらべて女學生さんの目を引付ける力が違ふから恐ろしい。焦げ茶色や鼠色のオーバコートで身を固めて、ノートにインキを提げて行く處、一寸奇麗な男ならば、女學生さんの方で振り返る。決して路傍の人として打棄つておかない又古本屋や、雜誌店の前に立つて居ても、本を買ふやうな風をして矢張り互ひに心眼を注射しつゝ無形の偵察を放ち合つてゐるのが多い、ソレも文科の生徒に女子〇〇あたりが多いといふ事です、何れも未來のダンテやセクスピーヤを以て自ら任じて居らるゝ方達でせうが今一歩を誤ると恐いですよ君些と遊びにやつて來給へ、僕はね今度西片町の上田さんの近所だから、とLの字の襟についた角帽が同じ印の角帽に云ふ。これは只出會がしらにいふ友達同士の挨拶ですが、當の目的は君と僕とにあらずして矢張り傍に立つてゐる女に對して矢を放つたものですね、まあそんな人達が天下を我物顔に大學前を横行濶歩するのですもの、小間物屋の姉さんたる私なんぞはもう小さくなつて歩かなければならないと云ふものです本郷通りを歩いで角帽や白條に逢はない事はありませんが銀座通りを歩いては又些少もそんな方には逢ひませんね、其代り商家の番頭らしいのや小僧サンがチョコ〳〵駈け出して居やうと云ふもの。電車道をズツと、有繁に建物は大きい、唐物屋にしろ、何に新聞社、保險會社、銀行、本屋、と大きいのがズラッと並んだ處、斯う云ふ道には定めし紳士貴婦人許りお通り遊ばすかと思へば、どうやら然うでもないらしい。西洋人が馬車を驅つて來るかと思へば又、馬鹿に野暮くさい女學生さんも通る。が氣の利いた女學生さんは少なく、島田桃割れの方が多い。中に束髮なのも居るが、這麼のになると、油を澤山付けて、髮の毛を一筋

も落さないやうに、奇麗になめたやうに出來て居て、本郷の方を行く女學生さんのやうに洗髮と云ふのは先づ少ない。肩掛も餘り掛けないで、心持ち拔き襟で、着物も一寸した絹物に、前掛で袢てんと云ふ小粹氣な女が電車を待つて居る。歩くにも刻みに内端に、少し仰向いて氣取つて歩く。一體が會社員商人、でなけれや、山師的な男、田舎大盡と云ひたいやうな人ばかり、何でも懷中の暖たかさうな人が多い。而して其



人達がどれも〳〵皆んな多忙しさうに歩いて居るから此方のやうな時代後れの姉さんがギヨロ〳〵し乍ら歩かうものなら、一遍に衝き當るかも知れませんよ。又本郷通りをお歸りになる女學生さんの多いつたら、一目で、あれがお茶の水さん、日本女學校さん、女子美術さん、裁縫さんと分るやうに、各自に學校の風が違つて、ソレ〳〵氣取つてお歩きになるから面白うございます。私達の目には氣取つて居らつしやるやうに

見えますが、御自分様達は些少もおすましの氣はなく平常から見識が高くつて被居るから自然とかういふ様子も現はれるのかも知れません。一寸往來を行く人も無學な奴が位に、おぼしめして對手にはなさらないから、從つて昂然として居らつしやるやうに見えるのでせうが、此方の目にはみなさん方なか〳〵御氣取り遊ばして、と見えますから因果ですよ。此頃少し桃割れや、唐人髷が流行つて來たと云ふお話しなので、氣を付けて窺ふと、成程少し……まあ何十人の内に二人か三人位は日本髪に結ふてゐらつしやる。着物は紡績か普通が銘仙位、柄は比較的質素なのが多いと思ひます靴も多いが下駄の方が奈何しても多いやうですね。束髪は大抵洗ひ髪のバサ〳〵したので、丸髷のやうにして居らつしやるのや、前髪をぐつと潰して了つて、両側を立てゝ、キリ〳〵と堅く巻いて割に根を高く結び、髱をふくらまして、簪でもリボンでも皆んな後ろにさし。前を潰すので、櫛を一枚前髪の中程にさした眞向、一寸横から見た時の格好は頗る佳いですねえ。又根をぐつと下げて、質素な結ひ方にして居るのも佳い。一口に女學生とか何とか悪口は申すものゝ今ぢやア女學生さんが小説ならば自然主義と同じく社會の大勢力になつて、時代の精神を一所に集めた流行の中心となつて居らつしやるのですから、大學生にしろ、誰にしろ、まあちよいと粋氣な女が歩いてゐたところで別段何も左程にも感じませんが、ね、そこがそれ女學生さんとなると一寸した女にでも擦れ違はふものならば、目遣ひの工合が誠にもつて險呑至極で、電光石火の恐ろしさ、サッと横に走つて了はふと云ふもの實にもつて恐ろしい事ですよ、ほんとに清少納言ぢやございませんが遠くて近きはそれ何とやら嗚呼幾多の二十五弦さん幾多の平塚明子さんどうぞ、ちつと愼なんで下さいよと申すのはつまり戀といふものは女と男の間に成り立つものぢやなくて思想と思想との一致ですからね學問が相當に有るせいかも知れません、女學生さんは野暮は野暮でせうが品は佳い、又汚ならしい髪も形も關はずに、背の低い、肥つた、瞻是れ學問專一の師範學校

の生徒さんも通りますが、まア其樣なのは少なく、一寸身の廻りにでも氣のつく女は、私は粋氣がつた女よりも、女學生さんの方が遙か現代の人の注意を惹くでせうとおもひます。其女が朝八時頃から夕方三時、四時頃は澤山、紫、紺、オリーブ、海老茶とソレ〳〵お好みの袴を穿いて、赤門、正門の前を楚々〳〵の、包をかゝへて、だから其頃の本郷通りは、人生の花。色彩に富んだ若い女が大勢來るので、時ならぬ春が來たやうに思はれる。本郷通りと銀座通りを書かうとしたのに話は曲つて、つい女學生諸嬢の爲めに、何だか餘計な文句をならべた樣でございます。



雨

はる子

○

菜の花道を急ぐ家路、折柄の春雨に、少し濡れたる袂には、嫁菜、土筆、零さじと手にて押へて中へ入れば、雛壇に並びたる人形や。何日の間に母が情と嬉しく、緋桃白桃と咲き亂れたる庭を背に、小さき體の畏まる。姉様被りの母上は、襷掛けの甲斐々々しく、お食りなと前に置き給ふは、我が雛にと造られし草の餅。狹き部屋に片寄せられし置炬燵。お寺詣りの祖母上の、之も雨にや濡れ給はんと、孫が同情の情はうれし。

○

灯火の影サッと露地に流れて、外に佇む人やある、バラ〱と傘に當る春雨の音、送りて歸る空車の、御神燈の影風なきに搖ぎ、摺硝子の戸の內には、しめやかに私語の聲。三味の音さへも無きぞ佗びしき。

○

思はずも琴の音に、蛇の目傘傾けて佇めば、梅の木に鶯のホ、ホーケキョと鳴く、之は畫なり。湯歸りに立止る。山吹の花の垣根や小鼓の音の洩るゝ座敷、打つは美しき娘なるべし。暖たかき春の夕べ、片袖に花の雫のハラ〱と蒐る。

○

さら〱と盤の上に掻き寄する石、師の坊や勝ち給ひし、悠やかに其笑ひ聲の襖を洩るる。障子啓けて緣に立てば、見飽きたる石榴の花の池に散る、藤の實の少し延びたる可愛ゆく、裏には苗賣の聲も哀れに聞ゆ、あゝまだ止まぬかと獨言して、書院の戸靜かに閉め給ふ僧の姿、何日迄もいつまでも降る五月雨や。

○

庭の木立も、杉の並木も一齊に片靡して、稻妻を見る間に降り來るは夕立ち。鍬持つて、煙立つ野路を行く人もありぬべし、あれ、と聲立てゝ馳けよるは妹、母の膝に打ち伏して鳴神を恐るゝ、一間に集りて蚊帳釣らんと云ひ出すは、總領の兄なるも可笑し、軒打つ雨の音恐ろしき迄に、斯かる中に獨り悠然と構へて、庭に這ひ出づるは蟇にこそ。

○

語り出す平家、琵琶を抱えて僧は端然、聞きすます人はいろ〳〵。皆一齊に僧に目をやる。折々に、降りて止み、降りて止む、甍打つ、折柄の秋雨淋し。

○

おもひ寐の夢醒めて、幾度びか寐返りを打つ島田髷のはつれや、床には蟀 の聲時を置いては忙しく鳴き出す、バラ〳〵と雨の音、あゝと思はずも太息を吐く、枕の冷たきも理なり。

○

耳疎き姑に、共に炬燵に倚り添ひ乍ら燈火に近く、讀み聞かするは嫁の役、讀むは近松の世話なるべし。外は時雨のしめやかに降りそゝぐ、オゝ寒む、と姑が云へば、讀みかけの本を閉ぢて、御風邪では、と後ろに廻りて衣を掛ける、襖にうつる二つの影、一つは大きなる丸髷なり、物賣りの聲遙かなる町に消えて、矢來の山里雨に淋し。





稚な馴染の外交官
橫濱出發の記

侶松女史

これは興津の可亡人藤井瑞枝女史の隨筆であります、女史の近況は前號に記して置きました。

昨日、和蘭の春ちやんから、次の樣な端書が屆きました。

『御手紙難有拜見、當方よりは、いつも、御無沙汰ばかりにて、誠に相すみ不申、……まづ〳〵、御變りもなく御暮しの由、大慶の至り、私も常に丈夫ですが、會議が濟んでから後は、非常に寂寞相成りました、……早く日本に歸りたいものですネ、……此繪は、例のランプランの下繪です、又、歸つたら一法螺吹きましようか、……』

私は此繪はがきを手にして、ふと、去年、春ちやんが出帆なさつた時の事をおもひ起して、其時の日記を書いて見樣かといふ氣になつたのです。

あゝ春ちやん！、春ちやんは、私の極めて幼な友達の一人ですが、春ちやんは、大學を出ると間もなく、佛國在勤を命せられ、長く巴里へ往つて居られたのですが、昨年、賜暇歸朝の際に、私は、彼の地の繪畫史のお話を伺つたのです（「日本美術」六十九號に掲載）それで、今又、ランプランの事などをいふてよこされたのでしよう。

たしか、去年の二月の初めでしたが、春ちやんのお母さんから『近々中に悴が亦外國へ行く事に内定しましたので、昨夜は、あれやこれや思ひつゞけて、安眠が出來かねましたが、委細は御目に懸りて』といふ樣な意味の手紙が參りましたが、暫くすると、公然、春ちやんが和蘭の日本公使館在勤を命せられ、いよ〳〵平和會議に先だつて、出發赴任さるゝと極つたのは、四

月の初めです、それで、私も上京中を幸ひ、御見送りを致したのです。

いよ〳〵春ちやんの出立の日、――左樣、たしか四月の五日であつたかとおもひますが、――私は前夜から、泊りがけに春ちやんの御宅へ參つて居つたのですが、さて當日は、御別れの御酒宴があるといふので、朝から御座敷も、勝手元も大混雜、併し、御客樣といふても、極々親しい御友達と、ほんの、御近所の知己の方ばかりで、あまり大勢では無かつたのですが、私は、何んだか其日は非常に氣がいゝゝハシヤイで、無茶苦茶に春ちやんと口喧嘩をして居りましたら、あまり御互の鉾先のはげしいのを、春ちやんの御母さんが見かねて、來客中の山根ドクトルの奥さんに向ひ『幼な馴染は、どうも他人樣の前とも憚らず、遠慮がなくて困ります』などゝ頻りに言ひ譯をして居られる、……私はハツトおもはぬでもなかつたのですが、此所で口をすぼめては、私の負けになりますから、引きつゞき、

『……それにしても、春ちやんは、何故、私の持つて來た蒲鉾の御禮を被仰らないの?!。折角、特別あつらへにして、燒かせて持つて來ましたのに』

『何んだ、この松の皮みたいなものゝくつゝいてゐるのは、たまさんのお土産か、道理でまづいとおもつた!』

『それでも、日本一の靜岡かまぼこの、極々上等ですよ、……春ちやんは久しく外國に御滯在の爲に、蒲鉾のおいしさを忘れて御しまいになつたのよ、……チー伯母樣!』

すると春ちやんのお母樣、――私は常に伯母樣といふです、――は、

『ほんに、これはよいお味ですよ、あなた(春ちやんに向ひ)もよく御禮を被仰いよ、無駄口ばかりをきかずに、……』

母上に口を添へられては、仕方ないといふ見えで、春ちやんは、

『一筆啓上、本日は蒲鉾二切れ御贈與にあづかり、深

く感謝の至りに不堪候、敬具、」

「二切ればかりじやない、たんと持つて來たのですよ、」

「それでも、僕の御膳には、二切れしかついて居なかつたから、人の分まで禮を云ふには及ばぬさ、」

「それにさ、苟くも、身、外交官ともあらう者が、古臭い一筆啓上なんて、あんまり似合はしくないではありませんか、」

「これはしたり、外務省では、日常使用する公文は、大抵一筆啓上でとりやりをして居るのですよ、」

「エ！、各國公使館ともですか？」

「勿論!!!」

「まあ驚いた、」

「だから先例も習慣も知らずに、無茶な口を開くと大耻をかきますよ、以來氣を御つけなさい、」

「ハイ〳〵、之は一本參りました、……併し春ちやんは大事に御出の頃、ヨーク、十年後の日本の外交のやり口を見てくれなんて云ふて御出でしたが、もう十年に間もないから、今度はしつかり願いますよ、」

「妙に、言質をとつて、覺えて居たものですネ、けれど、婦人は、公事に口出しなんかするものではありませんよ、」

「序に、私事にも立ち入る可からず、といふて下されば、私は、もう春ちやんの御嫁さんを、さがす心配も要らなくて、らく〳〵致しますのにネ、」

春ちやんは之には答へず、お母さんの方へ向ひ、

「お母さん、もし、僕が御嫁さんをもらつても、たまさんなんかに逢はせずに、押入へかくしておいて頂戴よ、どうせこんな飛び上りの御婆さんは、ろくなとを敎へないに極つて居ますからネ、」

「オホヽヽヽ、それでは旦那樣と一緒に夜會へ行くより、お母樣の御供をして、御寺參りをするか、さもなければ、押入れで晝寝をした方がよいと被仰る樣な、内氣な、おとなしい、御嫁さんを探しておきましようよ、」

何んのかのと、容易に諍の勝負がつきさうもない所へ、

小間使が緣側をパタ〳〵〳〵、新來の御客樣ありとの御注進〳〵、……やがて春ちやんの御伯父子爵が、御夫婦御揃ひて御出になつたので兩人の話は、こゝに中止の已を得ぬ姿！……。其内、出立の午後四時もだん〳〵差し迫つて參りましたので、そろ〳〵御膳をさげて、最後に春ちやんが、お父樣の御位牌に向つて、御暇乞の禮拜をして居らるゝ後姿を見ますと、私はもう、先刻の元氣は何　は、



所へやら、そゞろに、悲しくて〳〵たまらなくなりましたから、暫時、別室へ籠つて泣き顏をふいて居る間に、皆さんはもうはや、ずん〳〵新橋へ向はれたものも見えて、私の出る時にはさながら御玄關はひつそりして、唯、春ちやんの愛犬のハロー疋が、ポンヤリ石段の傍に蹲踞んで居るばかりですから、私

「御前も、もう私の御供が出來なくて淋しからうネ」と捨臺詞を殘して、一人おくれて俥をいそがせつゝ、新橋へ着いて見ますと、もう其所邊に見送りの方が多勢見えて居ります。

其中には、外務省をはじめ、大學側の方も澤山居らつした樣でしたが、勿論、私の見知つた顏の方は至つて尠ないのです、それで私は駒場の御百姓の掠鳥さんや(農學者)五月花士官殿(之はメイ、フラワーとてやはり春ちやんの幼な友達です)などゝ言葉をかはして居りますと、其內に、半白の都筑大使の御姿も見え、横にころげる樣なドクトルの山根さんも御出になりまして、私の顏を御覽になると、

「先刻は、大分、議論がはげしかつた相ですナ、」

「春ちやんに、さん〳〵いゝいぢめられましたワ、」

「いぢめられたのは、サア、何方だらうかな、……」

やがて、御親族の御婦人方も、だん〳〵御出になりましたから、私も其御仲間へ這入つて、がや〳〵して居りますと、春ちやんの從兄の五位樣が、そのまた若さんを連れて御出になつた、すると、私の傍に御出の誰樣かゞ『大變可愛いゝ、ハイカラな、御仕度をして居らつしやる、坊ちやんですネ、』なんていふて居られますと、乳母やが、春ちやんの御母さんの所へ來て、

『お內の若殿樣が、御見送りながら、御別莊の方へ若樣を御連れになるといふので、私も御供に參りますが、……今日は、貴方樣の若樣も、御機嫌よく御出立になりまして、御目出度うぞんじ上げます……』

などゝ、極めて慇懃な挨拶をして居ります、春ちやんのお母さんは『それは御苦勞樣、』と云ひながら、頻りに小さい坊ちやんを愛して居らつしやる、定めし、御心の內では、私にも、こんな可愛いゝ孫があつたら嬉しからうと、思つて居らつしやるであらうなどゝ、私は、フト、伯母樣の御心を推しはかりつゝぼんやり立つて居りますと、突然横合から、春ちやん所の、まだ慣れぬ書生が參りまして、

『あそこに居られます、御隱居樣は、誰樣に居らせられますか、』

「御隠居様！、何所に？、ア、、あれは、春ちやんのおかゝのみねと云ふ女中ですよ、下町の可然所へ縁づいて、今では樂隱居になつて居るさうですが、今日は、やはり昔を忘れず、御見送りの列に加はつて居るのですよ。」

「ハヽア、左樣で御座いますか、私はやはり然るべき方かと存じましたので、……あの方の分も入場切符を求めました、……」

「みねになら、尚更、求めてやつてもよいのですよ。」

やがて汽笛が鳴つて、皆さんは、プラットホームで握手脫帽………………私は又、明日出帆の時、再び橫濱でお別れを告ぐべき約束をして、改札口の所まで引きかへして參りますと、ペンキ屋の知太さん（オホ、畫家の事ですよ）が〇〇伯爵と共に私に挨拶をする爲めに、其所に待つて居られました、伯爵は、春ちやんとは、巴里滯在中の、最も親しい御友達であつたさうで、私は御目にかゝるのは始めてですが、かねてお互に、春ちやんから、色々聞いて居た事が在るので御座いますから、何となく、双方で御挨拶の語以外の微笑を感じたのです。

翌日は、雨がシヨボ〳〵と降つて居りました、されど私は大急ぎで橫濱へ出かけて參りますと、船の都合で、出帆がもう一日延びたといふ事です、それで、私はまあ兎も角も、春ちやんの泊つて居られる、橫濱は西戸部の、生死河の御爺さん（稅官長）の御宅へ參りますと御主人の圭さんは私の顏を見るや否や、

「ヤア、厄介者がやつて來たな」と被仰る、まあよかつた、御爺さんが、最初に如斯挨拶をなさる樣なら、私も御遠慮なく、今晩はこゝへ泊つてと、心の中でちやんと極めて居りますと、圭さんの、奥さんも、お母さんも、御子さん達も、さすがはお久しぶりだといふので、非常に歡迎して下さる、春ちやんは、一寸外出して不在でしたが、春ちやんの御母さんも御出になつたので、暫らく御話をして居りましたが、私の雨の中を出て來た爲めか、しきりに頭痛がして、氣分が惡くてたまりませんから、少しねさせて下さいと、圭さ

んの奥さんのちいさんにおねだりして、それから、多量にアンチピリンを服用して、やすんで居りますと、ちいさんは、御薬の口直しといふて、ビスッケトを澤山枕元に置いて行つて下さつた、そこで、私はねながら、御子さん達は、私の枕元にがや／＼云ひながら、いつの間にか大きなお皿のビスケットをみんな喰べて終つた頃には、もう私の頭痛もすつかり癒りましたから、起きあがつて居りますと、そこへちいさんが、這入つて來らして、

「まあ、あれ丈のビスケットをみんな召し上つたのですか、」

「えゝ、えゝ、御子様方と御一緒にネ、」

といふて、私はすまして居りますと、御子さん達は、また、

「みんなをばさんが喰べたのだよ、」

「本當よ、お母さん、」

などゝ、耳に、辨護の言葉を差しはさんで居られる、然し、

「多分私の頭痛は空腹のためでしたらう、其證據には、ビスケットを澤山戴いたら、すつかり癒りましたもの―」

「まあ、それは氣がつきませんでしたネ、一寸、何かを差上げればよう御座いましたのに、」

「そう、眞面目に被仰られては困りますよ、兎も角も、もう癒りましたから、御安心下さい、」

といふて、それから主さんの御宅の、應接の間の方へ行つて見ますと、さすがは、主に外國人を相手の、税關官舍の事ですから、裝飾もなか／＼行き屆き、且は、それに、西戸部丘上、最も景勝の地を占めて居る高臺の事ですから、東の方ははるかに海を見渡し、西南には、近くこんもりと木の生へた小山もありまして、一寸繁華な横濱とはおもへぬ様な、閑靜なよい眺望の所で御座います…………。

日暮には、春ちやんも御かへりになり、それから御家族も一同、みんな揃つて食堂でにぎやかに御飯を戴きましたが、食事中は、また、話に色々の花が咲き、

「春ちやんが、今度往く時は、お母さんをポッケットへ入れて連れてゆくと云ひながら、おいて往らつしやるのは、よつぽと親不孝子。」

なんて、誰かゞ云ひ出しますと、

「僕は無論連れて往くといふのですが、お母さんがいやだと被仰るから、其意に従つたまでゞ、つまり、僕が親の意にそむかぬといふ、孝心から一人でゆくのですよ、アハ、、……………」

すると、お母さんが、

「私は一緒に往きたくはな



いのですが、よい御嫁さんをもらつて、二人でゆくのだと、どんなに私も嬉しく安心だか知れないけれど、一向、働らきのない伜で困りますよ。」

などゝ、とんだ所で、真顔に述懐をおのべになる、そうなると、春ちやんもだまつては居ず、

「僕が働らきのないより、探して下さらぬ親の方がよつぽと氣がきかないさ。」

などゝ、酒が云はせる大元氣……、そこで、兎も角も、一年經つて、今度御歸朝の時までには、みんな總がゝ

りで、よい令夫人を探がして貰からといふので、此話は一段落がつきましたが。さて今度は、みんなで春ちやんに色々の御土産を注文する事になり、御子さん方は、ボールとか、ピストルとか、リボンとか、御人形さまとか、さま〲のものをおねだりになる。

『そこでたまさんは何が御望みなの?』

と、春ちやんが御聞きになりますから、

『私ですか、私は時計のくさり、、、』

『やあ、大したものを御注文ですな、』

『なあに、金やプラチナでなくてもよいのですよ、鐵でも鉛でもあちらの最新流行の型で一寸氣が利いてさへ居れば、何んでもよいのですよ。』

『そうか、それなら、屹度買つて來ませう、』

などゝ、、、たわいもない話をして、食事を終り、食後には、また、喫煙の間に集りまして、皆さんが茶菓を召し上つて御出になる大テーブルの廻りを、私が先導になつて、四五人の御子さん方も手を牽き合ふて、『汽笛一聲新橋を』などゝ、聲も勇ましく、唱歌をうたひつつ、どん〱がた〱、、、と室内をめぐつて居りますと、春ちやんのお母さんが、

『たまさんにも困るネ、小供と同じ樣にあばれてる、……少し落ちついてお話をなさいな、』

『ハイ〱どうも、あんまり御馳走を戴いてお腹が一ぱいですから、ついうかれましたので、』

するとちいさんが、

『たまさんは本當に妙ネ、平生御弱い樣でも、召し上りもの丈は隨分よく上るんですもの!、』

『今日は、特別御馳走の御加減がよい所へ、つひ、御晝飯を戴かなかつたものですからねオホ……』

それから、お互に廿年の昔に立ち歸つて、圭さんの書生時代や、春ちやんの小供時代、私達の娘時代に、色々と、春ちやんのお母さんに、世話をやかせた話などが出まして、誠に、面白をかしい一夜で御座いました、

明くる七日には、船が午前八時に出帆するといふので、朝は大急ぎで、みんなで仕度をして、東京から忘れものを持つて來る人々を待ち合せて居る間に、私が、マ

大使さんの手振を見ますと、妙に前の方が、ガタ〳〵のメチャ〳〵になつて居りますから、

「アラ、姉さん、今朝はあわてゝ髪を梳す事をお忘れになつたの、」

「ナアニ、今ちやんと手入をして来たのだから餘計な世話をやかずともよいよ、」

「それでも、メチャメチャですよ、」

と、つい、私が云ひはりますと、メチャ〳〵と思つたのは全く私のおもひ違で、横濱邊では、外國人との交際が多いためにか、曾ては、無作法で有名な姪さんも、此頃のお姉さんになられて以来は



髪に鏝をあてゝわざ〳〵、毛をちゞらして、お出でのだと聞いて、私は口あんぐりの大驚き……而かも、妙な所で、保護開化の天則を、しみ〴〵實見致しました。

其内、早稲田の姪さんが女中のおこの婆やを連れて、息きせき、忘れものを持つて、東京から来られましたから、圭さんの御家族も一同俥で波止場迄参りましたが、今日はもう、一昨日とちがひ、見送りの方といふても、ほんの少数の親しい方ばかり、中にも、横濱の方では、岡慶の大平さん、(検事)東京の方では、木挽の和田さん、(林學者)腰辨の眞も

やん、(法學士)それに、一昨日おなじみの、ペンキ屋の知太さんに、五月花士官などか主な方で在つたのです、然るに、私が、實ちやんの外套が、妙に長くて、殆んど、ヅボンの丈と同じ位なのを、不審に思つて、御父樣の御さがりかもしくば、御兄上からの、御借りものではないかと、つい、うつかり、其事を伺ひますと、長い外套は、目下の最新流行形であるものを、大に失敬な事を云はるゝ……改めて官吏侮辱の罪に問ひますぞ。」などゝ、したゝか、返り打ちに逢ひまして、大にまごつきましたが、イヤハヤ、田舍者が、稀に都へ出て參りますと、色々、新事實の新見聞をしては、驚くばかりで、お耻かしいとも、何とも、實にお話になりません。

其內、皆さんと、春ちやんとの御挨拶が一應濟みますと、一同で船へ上つて、寢室から、喫烟室、談話室、運動場、中には、機關室までも、御覽になつた方が在つた樣でしたが、運動場には十四五歳の外國風の女の子の手を提つて、頻りに別れを惜んで居る日本婦人が妙に一同の注意を牽きましたが、これが、實は母子訣別の愁歎の場で在つたので、子供は、父親の郷里なる和蘭をさして、一人でゆくのであつた、と云ふ事は、遙に後の春ちやんの通信に依つて解りました。最後に、大廣間の食堂へ參りまして、シャンパンを拔いて一同プロヂットをして、いよ／＼春ちやんの出立を祝し、互にお別れの言葉を交はしつゝ、棧橋を降りて參りますと、直にもう船は岸を離れる、……船は佛國汽船ポリチエシエン號……はや此時は、私も更に無駄口をきく勇氣もなく、たゞ／＼手巾を振りつゝ、茫然と往く手をながめて居りますと、船は次第／＼に遠ざかりつゝ、少さく少さくなりゆく時の心持!!實に何とも云ひ樣のない、自分も共に／＼浪に引き入れらるゝ樣な、心細い／＼感じがせられました。

再び西戸部の圭さんの御宅へ引かへして參りますと、春ちやんの御母さんは、頻りに涙ぐんで居られる、私もなぐさめの言葉に困りて、やはり共に悄れて居りましたが、其時のお母さんの詠み出でられました、歌は



は歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの實驗好評を博したる秘密藥を當館主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老錬なる技術とを以て專門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し之に最近の發見に係る生毛に關する新説を參考し最新藥を配合したる世界無比の學理的最新なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き賣藥が山師的に無責任の廣告を爲して販賣する輸着品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する沃度丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の賣藥にて効なきとて辭職せず是非本劑を試みよ頭髮濃はへぎは、まゆげ、ひげ陰毛等の薄くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脫毛するを防止し拔毛の再生を早め十ケド、アキモノ、ハツポー、キリキズ跡の禿に生毛せしむる事請合藥價送料共一瓶八十錢二瓶一圓三十錢郵券代用二割增の事

取次所ナキ地方ハ直接本舖へ注文アレ

三河國碧海郡刈谷町益世館藥局主

醫科大學卒業藥劑士 從七位 勳六等 中島龜之丞鑑製

本舖

●大取次左ノ通リ●

東京市

本郷六丁目赤門前	廣生藥局
麹町區紀尾井町三	富藤藥局
日本橋檜物町十八	龜田藥局
京橋區八官町八	野田藥局
神田淡路町二の四	桑田藥局
芝田町四の二	加藤藥局
芝愛宕下町一ノ二	岩本藥支店
赤坂田町四の一	竹内藥局
同青山北町五	四井藥局
本所吉岡町廿五	小島藥局
四ッ谷大傳馬町二	永野藥局
高松市片原町	新明藥局
京都市上京區寺町通り石藥師角	
京都市下京區五條通り富小路行當り	
大阪市平野町二	丹平商會
丸龜市本町	櫻井藥局
名古屋京町三丁目	飯田藤七
同 鍛砲町三丁目	谷田藥局
神戸元町一丁目	西村關更堂
廣島市橋本町	萬代藥局
神奈川青木七軒町	水崎藥店
仙臺市新傳馬町	櫻井藥局
岡山市橋本町	加藤藥店
弘前市下土手町角	菊地藥店
大津市菱屋町	磯崎藥局
福知	藥局
安江洋	反物店

美術

造花材料

卸小賣

半製品、鍛、打拔類一式

室内高等裝飾品

光線モール



御一報次第 定價表進呈

三國屋

東京淺草駒形町十四番地

振替貯金口座一一六四二

家庭整理の指導

當代第一流の女子教育家編著



家庭百科全書

全部五十冊　毎月一回發行

和裝頗美本　◉紙數各三百頁　◉石版彩色口繪一葉　挿畫十數個

▲定價一冊金四拾五錢＝郵稅八錢

近時婦人教育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尙ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、動もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には概れ理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尙に過るか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に教師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生徒の爲にも如何に稗益の多かるべきかは、敢て多言を須ゐざることながら、人ごとに家庭に教師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は最良なる家庭教師たる目的を以て編述發行し、敢て婦人教育の缺點を補はんと欲するなり。

第一編　**新家庭訓**　三輪田高等女學校長　三輪田眞佐子女史著

第二編　**四季料理**　宮中臣民兩流料理師範　大日本割烹學會々長　石井泰次郎君著

第三編　**裁縫指南**　女子高等師範學校教授　喜多見佐喜子女史著

第四編　**和洋菓子製法**　東京割烹會講師　龜井まき子女史著

第五編　**茶道と香道**　水原翠香女史著

◎茶道の部●茶道總論●茶之湯幷沿革●茶道之禮●茶道之心得●茶道之調●松下堂看板の文●茶堂の名稱●茶庭の說●待合の事●水屋飾(本式)●水を選ぶ事●溫灰之事●爐炭寸法●茶釜●茶巾●帛寸法幷披ひ方●出帛●三事を記憶すべき事●茶釜洗●釜の掛け法及前後嗜●普通點法●跡仕舞手順●中仕舞の事●口切の事●大目點の事●左勝手の事●椅子手前●炭手前順序●風爐の炭手前●大目の炭手前●茶會の事●茶會の順序●勝部順序●後入●濃茶之順序●後段附之事●勝手方の心得●會記の書式●棚飾●道具之事●拔ひ物の事●茶道具之大概(茶碗之部、釜師、食器の部、風呂師、塗師)●茶入紐の結方幷道具箱の紐掛方●外十三項◎香道之部●香道總論●香の廢れたる事●香道家之の傳來●香木之事●供香之式●空薫物之事●聞香之事●小包折形色々●香會飾法●香會之順序●跡片付手順●符調之事●名乘紙物の事●略式●外九十三項

▶販賣用電話 本局二六二〇◀　▶發兌元　東京日本橋區

(わの二)

婦女必讀の大全書發行

第六編

諸流生花指南

◎前編●生花の濫觴●諸流派●花道通用の文字●いけ花の心得●草木陰陽の心得●生花の大意●木密に就ての心得●花留の種々●花器の種々附寸法●花衣桁の種々●花器の取扱●床一式の心得●釘の打方並に寸法●生花の据ゑ所並に花器の向き●掛物に對する生方●花器に對する生方●四季の心得花器の用捨●傳花の原因●故實の種々●祝儀の花●佳節の花●神事佛事の花●卓下の花●茶席に嫌ふ花●會席における心得●花を所望する時の心得●生花拜見の心得●主客の心得●庭前の花を客へ進ずるの心得●花手桶花桶花盥のこと●草木四季の養ひ方●生花禁嫌の心得●生花の十德●花道の三神◎後編●生花の手順●枝を撓るの心得●花を生ける際に用ゐる言葉●生花となさぬ草木●南天樹を曲げる法●櫻をいける法●梅のいけ方●外三十項

琴松園文雅君
松幸齋理常君 共著

第七編

育兒の務

◎第一章 總論◎第二章 第一月●產れた時の體重●外廿三項◎第三章 第二月●微笑の愉快●外十二項◎第四章 第三月●一般の發育●外十項◎第五章 第四月●一般の發育●外八項◎第六章 第五月●一般の發育●外八項◎第七章 第六月●一般の發育●外六項◎第八章 第七月●運動術●外六項◎第九章 第八月●生齒と氷●外六項◎第十章 第九月●一般の發育●外十項◎第十一章 第十月●ベビー、テンダルの使用●外五項◎第十二章 第十一月●小兒の獨り立ち●外六項◎第十三章 第十二月●一般の發育●外七項◎第十四章 ●第二年の前半期●精神上及び身體上の發育●外五項◎第十五章●第二年の後期●小兒の步行●外七項◎第十六章 第三年の前半期●言語の增加●外十七項◎第十七章●第三年の後半期●小兒の被服●外十三項◎第十八章 ●第四年より第七年まで●發育の程度●外十一項◎第十九章 柔弱なる兒童●發育に關する知識の必要●外四項◎第廿章 ●小兒用食物の專賣品◎第廿一章 看病上の要領●體溫●外十七項◎第廿二章●看病上の細目●罨布の拵へ方●外十四項◎第廿三章 患者の食物を拵へる心得●外廿項◎第廿四章 ●諸病看護の注意●外十七項

醫學士 田村貞策君
朝夷孤舟君 共著

第八編

簡易治療法

◎總論◎第一章 一般療法●檢溫法●驗脈法●外十五項◎第二章 應急療法●人事不省●虛脫●外十五項◎第三章 臨床療法●甲、消化器に關する病▲胃加答兒▲胃痛と胃痙攣▲外十二項●乙、呼吸器に關する病▲鼻加答兒▲咽頭加答兒▲外九項●丙、皮膚に發する病▲濕疹▲腋臭▲外廿九項●丁、腦神經に關する病▲腦膜炎▲腦振盪▲外十八項●戊、眼に關する病▲結膜炎▲膿漏眼▲外八項●己、耳に關する病▲外聽道炎▲中耳炎▲外三項●庚、口內に關する病▲口腔加答兒▲齒痛▲外三項●辛、鼻に關する病▲鼻腔狹窄▲衄血▲腦漏●壬、婦人に關する病▲月經閉止▲月經困難▲外七項●癸、以上の外の病▲貧血▲腺病▲外十八項◎第四章 傳染病者處置法●甲、消毒法▲燒却消毒▲蒸氣消毒▲外四項●乙、傳染病の通路▲呼吸器▲消化器▲外二項●丙、傳染病▲腸窒扶斯▲發疹窒扶斯▲外十九項◎第五章 精神病者處置法●甲、精神病の範圍(四項)●乙、精神病の種類(十二項)●丙、精神病者處置法(六項)◎附錄●甲、學校病(五項)●乙、職業的疾病(七項)

新潟縣高田高等女學校教諭
藤井靜子女史著

●續刊

禮式と作法

女子高等師範學校教授 佐方鎭子著

惣菜料理

宮內省大膳寮庖丁 赤堀吉松君
日本女子大學教授 赤堀峯吉君
東京女子學館教授 赤堀菊子女史 共著

（わの三）

每卷醫學專門大家講述

家庭衞生講話

每卷洋裝菊判美本——紙數各約百六十頁

口繪寫眞版數多挿入

（第一編）**一般救急法**　醫學博士　三輪德寬君述　正價三十五錢　郵稅金六錢

（第二編）**衞生學大意**　醫學博士　森林太郞君述　正價三十五錢　郵稅六錢

（第三編）**藥物の大要**　醫學博士　林春雄君述　正價三十五錢　郵稅六錢

（第四編）**姙產婦之心得**　醫學博士　緒方正淸君述　正價三十五錢　郵稅六錢

○緒論●婦人の生殖器●月經●姙孕●受胎したる卵の變化●胎兒の子宮內に於ける狀態●姙婦の身體に現はるゝ變化●姙娠の徵候并に姙娠各月の徵候●分娩期日を算定する法●數胎姙娠●胎兒の死亡●分娩の種類●正規分娩の經過●胎兒の位置并に分娩の狀態●正規の產褥●姙娠中の生殖器以外の異常●姙娠中の膣分泌物の異常●姙娠子宮の位置の異常●胎兒并に其附屬物の異常●流產及早產●子宮外姙娠●姙娠と共に起る病氣●陣痛并に腹壓の異常●產道の異常●病胎兒の異常●胎兒の附屬物の異常●產道の損傷●胎兒分娩後の無力性出血●分娩時に起る氣●●產褥中の異常

（第五編）**花柳病講話**　醫學士　筒井八百珠君述　正價三十五錢　郵稅六錢

◉緒論◉第一編黴毒●黴毒‖●黴毒の傳染●黴毒の區別●黴毒の經過の概要●黴毒性原發症●淋巴管及淋巴腺の黴毒●黴毒の第二の潜伏期并に發疹期●皮膚の黴毒●毛髮及爪甲の黴毒●骨の黴毒●關節の黴毒●消化器の黴毒●呼吸器の黴毒●泌尿器及生殖器の黴毒●血行器の黴毒●眼の黴毒●耳の黴毒●神經系の黴毒●奔馬黴毒●先天性黴毒●黴毒の豫防法●黴毒の養生法●黴毒の豫後●黴毒の療法◉第二編軟性下疳‖●軟性下疳●壞疽性并に蛇行性下疳●横痃◉第三編痳疾‖●痳菌●男子尿道痳疾の症狀●男子尿道痳疾の豫防法●男子尿道痳疾の攝生法●男子尿道痳疾の療法●男子尿道痳疾の合併症●女子の痳疾并に其合併症●男女共に發する痳疾の合併症

（第六編）**耳の衞生**　醫學士　賀古鶴所君述　正價三十五錢　郵稅六錢　既刊

◎緒論◎耳の構造と其作用と◎初生兒の耳の衞生◎兒童の耳の衞生◎成人の耳の衞生◎耳の一般衞生法◎耳病の統計竝に原因◎耳病の症候◎聽覺の檢査法◎耳の洗滌法◎鼓室に空氣を通する法◎注意すべき二三の耳病◎詐れる重聽及聾啞の鑑定法

★發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館★

(わの五)

正價……金壹圓五拾錢

藤村
島崎春樹君序
理學博士 齋田功太郎君閱
農學博士 稻垣乙丙君閱
田中貢一君著



小包料十二錢

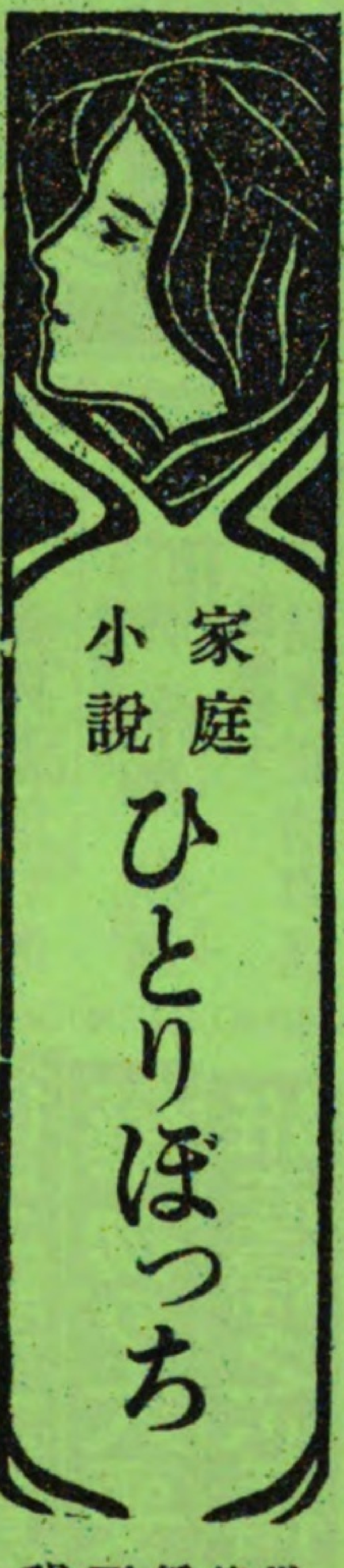
洋裝菊判總クロース美本紙數約五百頁
着色石版繪十數葉挿圖九十四個

著者は、植物學者にして、當時農科大學に其が專攻の學を修めつゝありと雖も、兼ねて文學に對する趣味深く、其造詣の深き、往々世人の意表に出づるものあり。著者は、世の所謂科學者の思想の餘りに乾燥にして、一に組織的事實の歷史家に過ぎざるを慨せられ、其道にあらざる諸學生、一般家庭はいふに及ばず、花界百般の事項を、或は文學者、神學者、哲學者等と雖も、無量の趣味と、絕大の興味とを以て、覺えず卷を解かしめ、自然の美妙、壯嚴を味ひ得しむる樣、特に小說として發表せられたり、本書は、五月に於ける金鳳躑躅の諸話に始まり、翌四月の春蘭伯の物語を以て終る、書中、愛らしき花子、勝の兄弟と、美はしき此等由花との間に緩々として演出さるゝ光景の、如何に優しく、將た興味深きかをみよ！ 而して之が副たる幾千の由花の如何に書中に活躍たるかを見よ！ 書中の花は、悉くこれ活ける少女活ける紳士なり。花の聲は、悉くこれ活ける天の聲なり、其內容の豐富、該博にして記事の痛快、切實なる、此種の書類中未だ曾て見ざるところにして、優に、現時の自然科學界に於ける・・・・・破天荒の作物として推重するに憚らず世の所謂文學と科學との調和を云々するの士は、先づ一度本書を繙かざるべからず。

（わの六）

津田梅子女史
新渡戸夫人まり子女史 序文

河井道子女史
辻村靖子女史 合譯



洋裝四六判
總クロース上製美本
紙數三百六十頁
正價金六十五錢
郵稅八錢

本書は千八百七十七年發行エミ、ラフィーバル女史の著にかゝる「水銀のやうに清く獨樂のやうに敏捷な」英國の一少女を主人公として其天眞を枉げず敬虔の念篤き性質を田園生活に於ける短時日の出來事に描寫して紙上に躍如たらしめしもの由來日本の家庭小說中稀に有る所と云ふを躊躇せざるなり頃日女子英學塾教授河井辻村二氏譯述して世に公にす其內容の如きはこゝに喋々するを須ひず江湖の人士乞ふ閱覽して批評の榮を賜へ

發兌元 東京日本橋本町三丁目 博文館 販賣用電話本局二六二〇 振替貯金口第二百四十番

新荷到着

洋傘 鞭杖

流行新形各種

仙女香

坂本商店

東京市京橋區南傳馬町三丁目

電話本局 一四四六

●るいれき（腺病）の特効新藥

金線草十錢

四百五十瓦入參圓也（送費廿錢）
二百廿五瓦入壹圓五十錢（送費十五錢）

▲本藥はルイレキ（腺病）外科的施術を要せずして全治し再發の患なからしむ詳細は同藥の說明書（金線草私言）に記述しあり望の方には無料にて送呈す

製藥本舗 東京日本橋區本銀町四丁目五番地 東光堂 振替貯金七六六七番

△本藥は各地有名藥舗に於て取次販賣す

女學雜誌



本誌は記事穩健確實にして實益に富めるを婦人雜誌中一頭地を拔くものなりと夙に世の定評あり
每月十五日發行壹部郵稅共拾五錢
本會は明治卅六年以來今年迄 宮中歌御會始に預選の光榮を蒙りし會員六名に及びたり今般其祝意を表せん爲本誌讀者に對し着實なる方法にて

大福引を擧行しなでしこ壹千圓

餘の女子必讀の書籍を贈呈すべき福引の籤を挿入す其贈呈書籍目錄左の如し
○婦人寶典（特價貳圓六拾錢）十部○婦人の修養（定價壹圓貳拾錢）五十部○大和撫子（同五拾錢）三百部○料理百珍（同參拾錢）壹千部○新撰家政百個條（同拾貳錢）四千部以上合計五千三百六十個價格千○拾六圓●二月十五日發行のなでしこに右福引の籤を挿入せり●講讀希望者は本會へ直接に申込みあれ郵便切手代用は壹割增しを要す

催主 みやび會 申込所 東京青山原宿 大日本女學會 電話新橋一八三〇 振替一一八三六

　　おもひ子は今船出せり異國の
　　　あらき波風立つなさはぐな

アヽ、實にこんなのはたゞの歌といふのではなく、ほんに眞情を吐露せられた、心の聲でありましよう。けれど、お母さんがそのひとり子の船路を案せらるゝと同時に、たゞ一人の御老母をおいて、遠く旅立つてゆかれる春ちやんの胸中も、また、どんなであつたでしよう、……私がいつぞや見ました何かの本の中に、『啼泣豈に悲哀の符號ならんや、諧謔談笑の中にも自づから斷腸の憶に在り』といふ言葉が在つた樣におもひますが、定めし、春ちやんの今朝の御心持ちも、こんなでありましたらうなどゝ私も心中何ともいへぬ悲哀の感に打たれました。

　　子をおもふ心も共に寫し繪の
　　　かげを離れぬ姿とぞ見よ

これも、お母さんが、其當時御自分の寫眞にそへて、春ちやんに御贈りになつた歌と記憶致します。

あゝ春ちやん、春ちやんは、今頃は和蘭の都で、どんな夢を見てお出でやら、春ちやんの夢に入るものは、故國か、母君か、私は更に、春ちやんの夢を夢みて、深き〱瞑想に陷いりつゝ、此日記を書き終りました……然るに今日、丁度、春ちやんが、博士になられたとの報を得ましたから、此日記を書いた筆で、直に、お母さんへ、御よろこびをいふてあげました、今迄は、博士といへば、何だか年とつた方の樣に思つて居ましたが、今、春ちやんがなられたと聞いて、却つて、妙な感じがします、それも其筈、春ちやんは、今年やつと三十ですもの子、……最後に再び、あゝ、春ちやんは今頃どうして御出やら?!………』

戊申春三月　　　　淸見潟の假住居にて認む




衣更へ



趣味ある家族の晩餐會

みどり子

おつに氣取つて、容體ぶつて、婚禮の夜の花嫁然とすましながら、御馳走の種々頂戴するよりは、水いらずでお茶漬たべて、お薩芋でお茶でもいたゞいた方が餘程趣味があつて面白いとは、宴會の席に列なる毎にいつも私の感ずることでございました。

這麼わけから、私は人中へ出るのが嫌ひで、今日の宴會は虚禮虚儀の競進會、衣服や食物の品評會、虚榮心の競べつこであると心密に卑めて居たのでございました。

三月の始め、小石川なるコーツ夫人より晩餐會に來れとの、ペンの跡麗しき案内状が來ました、行かうか行くまいかと幾度も繰り返して考へましたが、私は兎何しても行きたくないから、據なき用事これあり候と覺束ない英語の返事を書いて見ましたが、何だか其では物足りないやうな心が致して、物はためし出席て見やうかとの心も起りました、私は地獄の一丁目を這入るやうな思ひを致して、出席することに決心いたしました。

夕の七時よりとの案内でしたが、丁度午後に來客があつたので、コーツ氏の敷居を跨いだのは七時半頃でしたらう、瀟洒たる客間には、男女廿餘名の來客が樂し氣に集ふて居りました。

夫人は美しい笑顔を以て迎へられる、そして一枚のカードを渡されました、表には英語の走り書で、却々うまい事が書いてありました。

快樂は平時に眠りつゝある精力を覺醒して、之を働かしむるの力を有す、故に智識才能に富みたる大人といへども、身體の運動と快樂に心を注ぐ時に於ては、常に働きつゝある腦力に靜養を與へ、更に之を

一新せしめて、一層の智力と思考力とを増加せしむるに至るべし。

と、實に晩餐の主意としては最上の言葉では厶いませんか、さうして裏面には其夜の執行順序が認めてある、却々凝つたものでございました。

私の參つた時には丁度今第一番の歌がすんで輪投が始まつて居ました、十二三歳と見ゆる長子のウエルス君は、紙と鉛筆とを持つて順次に姓名を呼んで居る、呼ばれた人は中央に設けられた、定めの場所へ出る、美はしきメレー孃は輪をとりて其人に與へる、他のものは皆一樣に椅子に凭りて勝負如何にと眺めて居ます、何となくスパルタの昔が偲ばれました。

一、二、三、四、五と投ぐる輪は容易く的中しません。

海軍の軍人は乾度巧いよ、理學士の夫人は上手だらう、工學博士は特別でせう。

と取り／＼に言ふ、か丶る時には元氣がよいですが輪は學術では動かぬものと見えます。

良人の恥を雪がなくては、あなた加勢をして下さいよ。

など丶却々皆さんが勇んで居られる、私の心もいつか窮屈な禮服を脱いで心地よき春着に着換へたやうでした。

俺が居るぞと後援さる丶旦那樣もあれば、あなた念じて居ますよと加勢する夫人もございまして。誠に家族會の遊戲として興味深い催しです。

平素は冷淡で餘所／＼しくて、殊更人前には四角張る日本の夫婦が、今夜に限つて奈何したのでせうと可笑しくなりました、これは確に眠りつ丶ある精力が覺醒したのでせう。

最後に私が投げた時、如何なる機か輪は悉く的中しました。

まア上手だこと丶賞めて下さる方もございます。

すると隅の方で女軍が勝つたと笑ひ給ふ人もある。

獨身もの丶癖にと誰やら私の肩を敲きました。

依頼心がありませんからねと私は威張りたいやうな

感じがしました。最優者にとコーツ夫人の手より赤白黒の輪を描いた大きなお菓子を受けた時には、月桂冠を得たやうに嬉しうございました、人様が御覧でしたら私は小兒の様に見へたでせう。次のシン



ドリラの靴つけも非常に面白うございました、一人づつ眼隱をして、シンドリラ姫が繪姿へ靴をつけに行くのでありますす丁度日本の福笑ひのやうなものです。

吾こそは功名して、美はしき姫の歡心をと一騎當千の武夫氣取りで武裝（眼

隠）いかめしく出で立ち給へど、悲しや口惜しや眼なし鳥の、靴はあやにく膝に脛に、肩に、背に、甚敷きは頭に顔に。

私がまア這麼ところへと眼を開いては夢のさめたやうに笑ひ出す。

恐ろしく背の高い某理學博士は、前以て距離を計り位置を定め、方向を確めて、いざとばかり立ち向はれたが、靴は遂に愛らしき姫の胸のあたりに附けられました。生命をさへ惜しからずと戀に憧憬れ給ひし古の皇子さへ、容易く逢ふことを得ざりしシンドリラの足に、どうしてたゞかりそめの一夜の馴染みで、しかも一分間の盲目探で、直に其靴を附け其手をとり、我愛する君よと呼ぶことが出來ませうか、如何に戀は盲目であるとはいへ。

室の一方には、金髪麗しきライラ嬢が、美しきシンドリラの繪本を開いて、少しなまりのある日本語で頻りに其說明をつゞけて居ます。

これが意地の悪い姉よ、姉はシンドリラを酷過て臺所の隅に朝から晩まで働かせて、襤褸の着物ばかり着せておいたの、其所へ妖怪が來てこんな奇麗なお姫様にして、王の宮殿へ伴れて行つたの、ほらね、

まあ奇麗なお姫様ね！

それから皇子に逢つて、歸へる時急いだので靴が脱けたのよ、それで皇子は其靴をもつて國中探して歩いたの、

おやさう、其からと談してる中に、コーツ氏得意の笑歌が始まりましたから、人も花も窓も壁も、ストブの上にある楠正成の銅像までが、腹を抱へて笑ひ出すやうに見えました。

次は來客の姓名と順序番に記してある、指名點呼でもせらるゝのかと思ひながら考へて居ますと、皆さん列を作つて下さいとのことでした。

愈々兵隊さんだなと思ひながら、列に加はる、各自に紙と鉛筆とを渡された、是は意外鐵砲ではありません。

次の間にお客様がたの、お名前を、繪や謎や、一口

噺や、品物であらはしてあります、其に番號が附けてありますから、何番は誰と云ふ事をお認めなさつて下さい、時間は十分間鈴が鳴つたら直ぐ列をして、此方へお歸り下さい、何方がよくお當りでしたか、お答へを戴きせう。

　コーツ夫人は當夜の人々の姓を呼むで更に之を認めた紙を渡されました、何があるだらうと、好奇心に驅られながら、勇ましき進行曲につれて、進むで行きました。頬髯嚴しきフロックコートの紳士も、丸髷に裾模様のしとやかな奥様も、無邪氣な子供らしき笑をたゝえて、樂しさうに進行される。恰も幼稚園の生徒のやうに。



　室の周圍には色々なものが置かれてある。美しき繪畫、ポンチ繪、寫眞、竹や石や、書籍の類まで

何でせうねと首を傾けて居る人の後で解つた！と手を拍つ人もある。

お解りなすつて？

いゝえ、自分のさへ。

あらまア、あなたのは直ぐ知れますわ

さうですかと又熱心に探し始める。

眉を顰めたり、首を捻つたり、溜息をしたりしながら考へて居る人々の内には、獨り得意の微笑をもらしながら、頻りに點づいて居る人もある。

チリーンの鈴の音が響くと共にピヤノの音につれて列はまた先の室に歸りました。中には遠征軍が凱旋したやうに、勇氣勃々たる人もあり。物足らぬさうに考へて居る方もあります。

木立の側に顏の下部の方が描いてあるのは何ですか

、、、きくちでせう。

恐しい顏のお假面は?

朝夷ですよ——朝夷三郎?

はハア、なるほど、平べつたい石に、高サ二尺巾五十間の縮小圖なりと書いてあつたのは。

大きな石は?

岩でせう。

横に平べつたい大な石は?

平岩ですか、恐れ入りましたね。

など〻談して居る間に、互の姓名もよく解り、始めて逢ふた人同士が十年も交際を續けたやうに、各々心置きなく親しくなりました。

種々なる遊びのうちで、最も趣味の深かつたのは、推量と理由の說明と云ふのでせう、或一人のものが心に思ひつ〻あることを他の者は推察して、其答の當らざる時は、其理由を說明するのでございます。

當夜はコーツ夫人が何を考へつ〻あるかを推量するのでした、ピヤノのことを考へて居らつしやるでせう。

私は指環だと思ひます、私は電氣燈、私は鏡、書物でせう、ペンでせう。

其他窓、敷物、ランプ、菓子、林檎、茶、答は種々樣々でした、一同の答へ畢つた時、

私は護謨球の事を考へて居ましたと夫人は言れた。

此度は各自の答につれて、其理由を說明せねばならぬ。一同は首を傾けて智慧袋の紐を解きました。

護謨球は空氣に依つて動きます、ピヤノも空氣に於て震動します、其故護謨球をピヤノだと申ましたとの說明を初めとして、

護謨球はペンとはづむ。
　護謨球の廣く何處へでも行く如くに、書籍も廣く世界を廻る。
　電氣燈の球はゴム球の如く圓い、さうして電氣燈と呼ばるゝ頭は、ゴム球の如くに毛がなくてツル〳〵して居る。
　却々面白い說明ですね。
　私は咖啡と答へましたからそれにつきて、荐りと說明を苦心しました、併し良い說明が出來ませぬ、
　咖啡の實はゴム球と同形であります、さうしてゴム球の熱に遇ふと膨脹してよくはづむ如くに、咖啡に熱を加へて之を飮む時には、人は興奮して、走け廻りますと隨分窮した說明を致しました。
　一人の說明がある毎に、興は益々深く、春の花野を心と心とが結ばれ行くやうである。
　晩餐の席に就きました時には、誰一人遠慮の牆を隔つるものもなく、樂しく談り自由に食して、男も女も老も若きも、皆親子同胞の如き感じが致しました。
　椅子舞踏がすむで、散會したのは十一時、各の顔は輝いて心も身も、うら若き春の光に照らさるゝやうに見えました。玄關を出る時。
　實に愉快でした、ほんとうに、生命の洗濯をいたしました、
　這麼面白いことは始めてゝすよ、
　また斯う言ふ御招待に預りたいですね、
　西洋人は何をやつても巧いものですね、
　日本の家庭でも是非こんな遊びをやりたいものですわ、日本婦人は見聞が狹く交際が下手で、到底男子と席を同にする事は出來ぬなど主張する人は未だ交際法を知らない人です。
　宴會とは酒と藝者、醉ふて管捲いて猥褻い素振をして、人生の快事なりと、意氣揚々と威張り給ふ殿原は言ふまでもなく深窓に閉籠つて、廣い世界を小い節穴から覗き見て、悟り顔なる古風の淑女は別物として、苟も新しき時代に生れて、新しき敎育を受け、新しき世界に活動なさる方には、互に相交り相親みて今夜の如き趣味ある交際をしたいものだとおもひました。



成女學校の卒業式を見る

翠子

いと濕やかに降る春雨の一日、市谷なる成女學校の卒業式に臨みました。

來賓、在校生、職員と三百にも近い人等に埋められた。講堂の正面には紅白の幔幕、「祝卒業式」と書いた常磐木の葉で組んだ額が懸けてある桃欄の紅白の花が對の花瓶に活けてあります、滿場を見渡すと、下げ髮束髮、桃割中には稚子髷もあつて春の花や、リボンの蝶、片々と菫、蒲公英の千紫萬紅咲き滿ちた春の野と見るやう、白粉の香椿花の油の薫、扨てはやさしき女性の息の香りが室内の氣に漂ふて居る。

私がこの式場の席についた時は、九時半頃でした學事報告も濟ち、丁度證書授與のところでした。夫れが終ると山根校長が壇上に現はれる。

「今日は卒業の方に私はお喜びを申上げます、長い間克く御勉強なさつた甲斐が現はれて、立派に御卒業が出來ました、誠に此上もないお目出度い日であります……卒業後はよく今迄敎へられた道を守り實際に履行してゆくやうに……」といふ意を簡單に明瞭に祝辭を述べられる。並みたる生徒の中から特に卒業生だけは立つて、懇なる校長のお言に首肯くのであつた、次には早稻田大學の先生で安部磯雄といふ方の演說がありました。

「是から世の中が漸々進化してゆくと女子にも種々な職業が出來て、政治家にもなる女が出來るだらうが、何が女に最も大切かといへば矢張り小兒の敎育法である……。

立派な小兒を得やうと思ふには先づ配偶者を選ばなければならぬ、血統の汚濁の者や、惡ましい病氣に罹つて居るものなどは、例い何程の資產のあるとも、如何ほどの偉人なりとも夫にする事はならぬその妻はそれでも幸福だらうが、その害毒は子々孫々にまで傳はつて大なる悲歎を見るやうな事になる、亦大酒家も是と同じで決してこういふ人の子は立派なものが生れない……といふ事を懇々と語て、

「丁度此の學校の校長さんのやうに、禁酒して居る人、このやうな品行方正な人を理想として夫に選擇せればなりません。

とその突飛な言に、生徒一同が覆すやうにカラ〳〵と笑ひ出す。

「――敎育といふものは掘り出したばかりの銅を磨き上げて光澤を出すといふのに過ぎないので、決して銅を黄金にするといふ事は出來ないのである、故に諸孃等は胎內から出て來ないうちに敎育といふ事に注意して銅や鉛を生まないやうにして欲しい、瓜の蔓には茄子がならない

賢母の子は必ず該いに極まつて居る、何卒皆様は何も自分が大政治家大文豪にならなくともいふから、是等の偉人を澤山生むやうに充分の資格を備へて下さい……といふお話でした。

次は、金縁の眼鏡をかけた、薄い髯の顔のテラ〳〵光かつた人文部省の視學官の乙部さんといふ方で、婦人と健康といふ事について話された。

それから卒業生の總代で富田テル子の謝辭があつた。

細い縞の着物を着て、背の高い眼の細い鼻の少いさなお雛様のやうな顔立である。晴れやかな。美しい聲で、

「私は皆様に代てお禮の言を申上ぐるといふ程の資格があるものでは御座いませんが……

といひ起して——私等の爲に今日は盛な式をあげて下さつた事や長い間の師の恩に對して感謝を述べて、

「卒業證書といふのは私等にとりましてはまづ社會に乗り出る旅行



免狀と云ても宜しいのです、是から私等は種々な方面に別れますが、何れも理想の岸に近づいて直線に進む積で御座いますが、

それまでには或は帆を裂き、船を覆すやうな世の荒浪に逢ふ事も御座いませうが、どんな事があつても理想の岸に進で圓滿なる女子となり新社會に働いて師の恩に報い奉りまた本校の卒業生として恥かしからぬやうに致したい、殊に私等にとりまして、在校の時は是を鏡とし卒業後も心の胸の手綱として勵ますものが御座います其は何かといへば即ちこの袴についた黒線で御座います（成程生徒の袴の裾には皆黒線が這入て居る）常々先生からお話が御座いますが、この印は先生が定められたのでなく、生徒が自分等で勝手に定められたので御座います、初代の姉様等が何故黒色を撰だかと申ますと、つまり黒い色は物に屈せない意味を含だので私等は是を徽章として何處までも、校

風を重じてゆかう、といふ、級長方のお答へでしたので實に私は感心致しました、卒業の暁にはこの袴は見えませんが、この心を手綱として社會に出たならば決して屈する事はないだらうと存じます　今日濱邊に立つて私等の船出を見送つて下さる在校生徒に申上げます、長い間皆さんは姉妹のやうに親んで下さつた事を感謝致します、何卒益々御勉強なすつて、愈々この成女學校の校風を發揮するやうに御願ひ申ます、と語られて輕い禮をする、語るといふより寧ろ言文一致の文章をすらすらと讀んだやうなものである、話としては餘りに抑揚がなく淀みがなさ過ぎる、是だけの言をいふには幾日かの間、教室の隅やお部屋の机のもとで獨言して練習なすつた事だらうと思はれる、然しよく明瞭として少しも臆せず立派な謝辭であつた。

學びの窓の雪　螢、集めし光明にそひて……今日のよろこびいかならん……

と卒業の歌があつて、十一時半頃式を終へました。

式後、別室に茶菓の饗應があつた白布で掩はれた卓の上にはお鮨、サンドヰツチ、お菓子、蜜柑が並べてある、勸められるまゝに席を占めると私の側には卒業生の一隊が坐つて居る。嘉悦先生茶の琥珀のお袴に鼠色の御紋付で接待に忙がはしい。

「さゝ皆さん、何卒手製で御座いますが……」

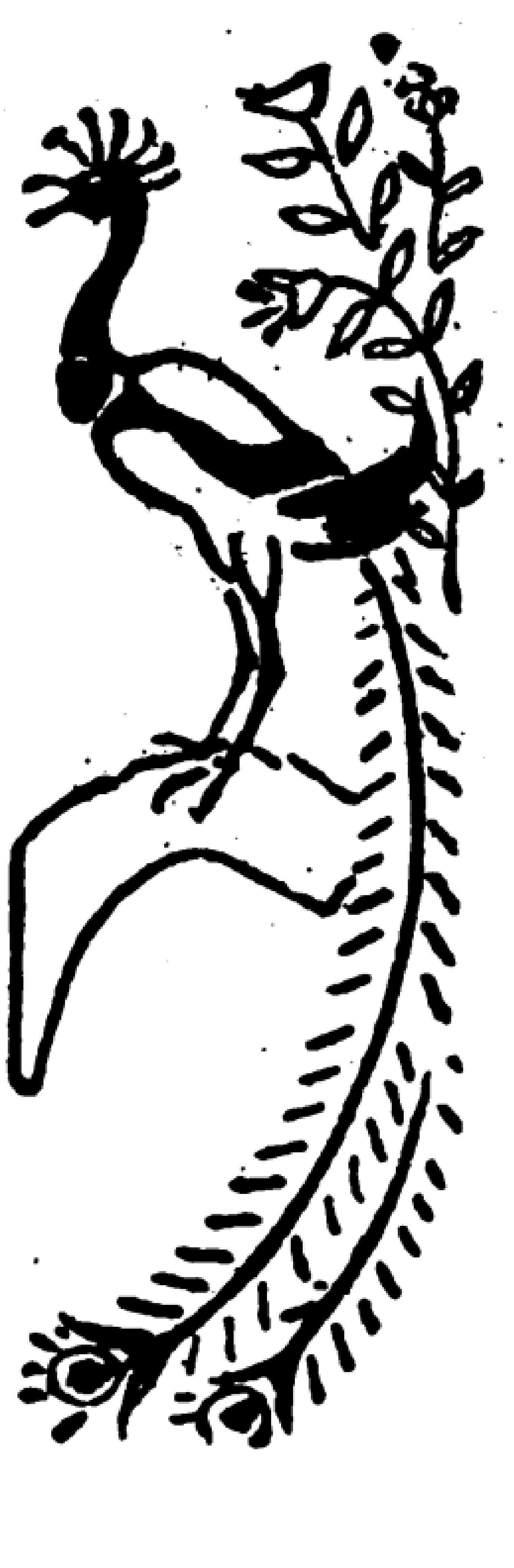
と仰言ると一人の生徒が「先生は……」と遠慮すると「今日は貴女方はお客様ですから……」と被仰る卒業生等は嬉しさうである。互に席に就いたものゝ流石女だけに食べる事には敏捷にゆかないで、忸怩して居ると。

「さ皆さん御遠慮なく、召し上がれ、接待に世話をやかせないのも一つの禮法で御座いませう……」

と嘉悦先生の警句一番に皆様が思はず咲と笑ふ。

「本當に夢のやうだわね、私等が卒業してからもう一年經つのよ」

なんて十八ばかりのお孃さんが云てる、誰さんが如何したの、彼さんは何處へお嫁に行つたのと、色々と友人間の消息が傳へられる、この校を出て妻となり、母となつた人等も今日は久濶で故郷に歸て、學びの庭に親み合ひし姉妹方や教の母君に逢て懷かしい想を語る樂しさ、卒業生方は如何にも樂しさうであつた、お手製のお鮨、サンドヰツチ數々も却々結構で御座いました。





流行の犧牲になる婦人へ

瑞枝子

婦人の交際が、日に月に盛んに成りまして、何々婦人會など申て活動せられますにつれ、皆様の御交際振りの御上手になりました事、テキパキとした物言ひの内にも、自然に愛嬌が有まして、初めての方々をさへ少しも照れさせぬ御手極の好さ、場なれぬ私などは、只もう感心するばかりでございます、其れは兎に角、何誰様も〳〵、私こそ流行の魁と云はぬばかり、髪飾りから重ね草履の先に至る迄、一分も透かさぬ御姿お若い御方は、今を盛りと咲き誇つた牡丹の花の様に年増の御方は、松の葉越の櫻花、何れ勝り劣りの無い御美しさ、花競べとでも申ませうかしかも時々に咲きかはると、聞きましては、押繪の姉様宜しくの私などは、恐縮して仕舞ふ次第でございます。

◎流行は母の形身

私とても女の端、飾り氣無しの廂髪ばかりも嫌やに爲りまして、たまには雲井形の丸髷に、金の透かし彫の平打、一寸氣取つて見度く成る事も有りますし、某の會に、某夫人が、這麼ブローチをして居られたと、聞きますと、咽喉から手の出る程欲しくも成りますが那麼事は、金に糸目を付けぬ富豪大家の奥様の事、切りつめた家計に生活して居ります者などには、思ひも寄らぬ事でございます、昨日の物は、今日は最早時候後れといふ、走馬燈よりも目まぐるしい流行を、追ふとでも仕ましたら、人にも話されぬ無理算段に、飛んだ苦勞の種を蒔く様なもの、結句母の形身の簪が、今の流行の形に似て居るなど丶、喜んで居る方が、増しでございませう。

◎呪はれたる虚榮心

何時も〳〵リユウとした御姿で、天晴れ交際場裏の花とでも云ふ可き奥様振り、お手先きなどの奇麗な事何爵令夫人とでも、いはれる御方かと思つて居ましたら、伺つて吃驚、月々の此收入の大半は、奥様の御衣

[illegible]料、旦那樣は、一昔前の御洋服に、古ぼけた中折れ帽大事相に冠つて、雨の日も風の日も、三百六十五日御徒歩勤めの御勞はしく、何々の肩書き厳めしけれども、折々は[illegible]へにも事欠くとか、大勢の御子樣の御世話、山出しの下女一人に任せぎり、手が荒れるとて奥樣箒一本持ち給はねば、夕暮れの多忙し時には、洋服姿で御子樣の御守り、嘸ぞや旦那樣、折ふしは、奥樣の御歸宅待つ間に、人間良人の身となる勿れなどと、つぶやき給ふ事も有る可し、如何に着物が無いからと申ましても、家に計り引き込んで居りましたら、其れこそいよ／＼時勢に後れて、世の廢れものに成つて仕舞ひますし、相應に着飾らなければ、人中には出られぬからとても、まさかに食住の二つを犠牲にして迄も、衣裳に浮身をやつされもせず、此處の兼合却々にむづかしく、下手にまご／＼しますと、あたら大事の生涯を、呉服屋と小間物屋のお玩弄物になつて、終るかも知れません。

◎流行に後れては馬鹿に見えるとの説

衣裳ばかりは、如何に金に飽かした品でも、色の配合、柄の見立、用ゆる場所などに依つて、から代なしに、なる事もありますし、那麼でも無いものでも、思ひの外に引き立つて見ゆる事もございます、衣服だけなりと、流行に後れぬ樣にしなければ、人間までが氣が利かずに見えるといふ人もあれど、元流行は一般の事ですもの、誰れにでも好いといふ譯には參りません、いくら流行だからと申ても、色の眞黒な人が、薄色の着物に白の手袋、目から下ばかりに白粉をつけて居ましたら、まア甚麼に見えませう、矢張り時勢後れかは知りませんが、黒縮緬の羽織に眞黒い着物、餘りぱつとせぬ好みの方が、貌うつりもよく上品にも見えませう、其かはり首筋と手先だけは、忘れても垢の附いて居無い樣にして欲しいものでございます。

◎柄よりも品位

要するに婦人の交際には、服裝の競爭と云ふ事が、如何しても、免かれ無い樣でございます、其れを一々氣にかけて居ましたら、夫こそどうする事も出來はしませんから、流行などは眼中に置かず、自分の顏色や姿をよく考へて、縱し品物は惡くても、高尚なものを撰んで、折目正しく、きりゝと着こなして居ましたならば、見る目に櫻花の艶麗な趣きは無くとも、犯す可からざる梅花の品位を、保つ事が出來るかと存じます。



病魔を驅逐して一家悉く健康に復せる實例

糸　左　近

▲家族十二人悉く病氣

某家の主人公語つて曰く、我が家程慘憺たる狀態は恐らく澤山は有るまいと思ふ、昨年の秋頃から、家族が交る〳〵病氣になつて、一人が治れば一人が代り、甲の治らぬ中に、乙罹り、愈々今月は一家十二人病氣でない者は無いといふ始末、父は（六十九歳）慢性氣管支加答兒、母は（六十二歳）慢性僂麻質斯、これは族からの事なれど、此頃は別けて重くなつたやうである、而して私は（四十四歳）消化不良、愚妻は（三十洲歳）子宮内膜炎、長男（十五歳）はEczemaとかいふ皮膚病、次男（十一歳）は腸加答兒、長女（七歳）は寢小便、實に世話の燒けた病氣、所へ持つて來て三男（四歳）は夜啼、赤坊（五ケ月）は鵞口瘡、加之に血氣盛であるべき書生（二十五歳）は腦神經衰弱、下婢の一人（十九歳）は赤鼻の治療に腐心してるし、一人（十六歳）は瘰癧の療治最中、それ故醫師は内科小兒科皮膚科外科の四人に分擔して貰つて、看護婦は二人雇切といふ按排。家の中は森として、何時も火の消えてるやうな寂しさ、此の分で續けば、後には何うなるか心配せずには居られんと言ひ終つて長大息を漏らし。

參考——この家の主人は大學教授にして博士、その父君は以前某會社の重役なりしも今は退隱して閑散の身分。

▲父の氣管支加答兒

これは五六年以前から兆したので、始めの中は晝は左程にもなくて、只夜分だけ寢床に入つてから、半時

ばかりコン／＼咳嗽に苦しんで居たが、次第にその咳嗽は數多くなり、此頃では晝も連發し、痰壺と首ッ引の姿如何なる名藥も更に効がないと見える。醫師の言葉によれば、生命には別條ないとのことなれど、その顔を眞赤にしてせき込まられる時の苦しさうな按排は、實に氣の毒で堪らぬ。

▲僂麻質斯

これは昨年の十月頃から始まつたのが、實に妙だ、天氣豫報になると言つても可い、天氣が宜ければ疼痛も少くて、比較的自由に運動も出來れど、雪が降るとか雨が降りつゝくとかいふ日は、形容の出來ぬ痛さがして、起居擧動にも不便で、帶も他人に締めて貰ひ、便所へも蟲の這ふやうにして行くといふ始末、去年の十一月末からは終日炬燵へ這入つたきり、何の運動もせぬから、從つて食欲も進まず、心も鬱々として、嗜な小說本も讀みたがりもせず、又聽きたがりもせず、只自烈たがつて無暗に癇癪ばかり起してゐる、これも生命には何の關係無いさうだが、併しあの分で續けば運動せぬ爲に、段々身體は衰へるだらうと思ふ。

▲子宮內膜炎

妻が出產したのは昨年の九月末極めて安產で母子共に經過甚だ宜しく、乳汁の分泌も自然に彈き出る位だし、食欲はズン／＼進み、三度の食事も待てぬやうな譯であつたが、明日が二十一日、愈々床上げといふ晩から、俄に惡寒を催し、續いて熱が出て、計つて見れば四十度五分ある、早速醫師を招いて診て貰へば、卵巢炎だとの診斷、併し思つたよりも輕くて、五六日經つと熱は全く退き、平常の樣になつたれど、其の間授乳を止めてゐた爲か、乳汁の分泌は甚だ細くなつて、迚も嬰兒を養育するだけは出ぬ、巳むを得ず牛乳を以て育てることにしたが、これより妻は腰痛み、續いて粘液物を漏し、食欲も進まず、精神も鬱々として、次第に衰弱し、恰もヒステリー病者の樣になつて了つた。

▲二男の腸加答兒

これは妻が子宮病に轉じた當時からの事で腹は大に膨れて太鼓の樣になつた揚句、下痢し始め、一日に十

回も水の様な糞便を漏してゐたが、今は慢性になつて、今日は秘結するかと思へば、明日は下痢するといふやうな状態で、無邪氣な愛らしい顔は、次第に憂欝な顔に變じ、從つて動作も不活潑を極めてゐる。

▲長男のエクチエーマ

と診斷受けたは、二男の腸加答兒よりも後の事なれど、素人流に



考へると、去年の十一月頃から始まつたものではないかと思ふ、其の故は始め凍瘡が手足や耳朶へ出てゐたのであるから、此が原因となつて、今のに轉じたのであらう。兎に角手足や股が痒くて堪らぬ所から、掻けば段々その部分が廣がつて、今は殆ど全身に瀰り、身體の此處彼處に結痂が出來てゐる。藥を塗けても、

治る後から又出來て際限が無い、醫師は温泉へ伴れて行けと言ふけれど、今はそれ所でない。

▲夜啼と寢小便

これは殆ど同時に發したやうなもので、何れが前か何れが後か分らぬ位、三男の夜啼は睡つてから、大凡一時間も經つと、突然眼を覺し、物に怖るゝやうな風をすると間もなく啼き出し、何と慰めても聽き入れずに、二十分時も啼いてゐて、やがてスヤ〳〵と自然に眠る。始の中は一晩に一回だつたが、今は二回も啼いて、家中の者を困らすには殆ど閉口だが、併しこれよりも尚一層閉口なのは長女の寢小便で、夜の中は更に厄介は無いが、明日になつて下婢共に迷惑をかけるのは實に氣の毒で堪らん。

▲腦神經衰弱症

これは私の消化不良と共に、二月頃からと思へど、何れが前後してゐるか分らぬ。書生は元來快活で、而も忠實な男であつたが、今は何だか鬱々と無常を感ずる的の人間になり、詰らぬ事に涙を流したり、心配したりしてゐる。夜も碌々寢れぬやうだし、頭痛はする記憶力は無くなる、食欲は進まず、奮發力は起らず、唯終日悶々と机の前に坐つてゐる。私のも病名こそ違へ、書生と大分似て居る。即ち食欲が無くて、鈍い頭痛がして、身體中何うと形容の出來ぬ倦怠さを感じ、胃部には時々變な痛みがして、腹が張る、腰氣が出る、便秘はする、或は時に惡心を催して、飲食物を少許吐くこともある。そして氣がクサ〳〵して、何でもない事に激し易く、後であの樣な事位に怒らんでも宜かつたものをと悔むことがある。

▲赤鼻と瘭疽

赤鼻の方は一昨年の夏から多少赤かつた樣だが元來顏の赤い質であるために紛れてゐたが、確に鼻が赤くなつたと認めたのは一月末からで、今は特に血液が彈け出さうな赤さ、今一人の女は十日前からのことで、始めは指が痛んで寢られぬと泣いてゐた揚句、濃汁が出て、段々少しづゝ快癒るやうな風であるから、診察を受けると、瘭疽であるから、切り取らねばならぬと

の事、當人は之を厭がつてゐたれど、惜めば惜む程尚病勢に切らねばならぬと勸められ、漸く昨日手術が濟んだ。

▲赤坊の鵞口瘡

これは四五日前からであるが、口中一面に舌から上顎まで、小い白點が澤山出來て、哺乳にも痛む爲か、一口飲んでは泣いてゐる、醫師は今一週間經てば治るとのことなれば、左程に心配にもならねど、兎に角右の樣な始末、一家は恰も小さな病院である云々。

▲十二病悉く關係

予はこれを診して曰く、元來この父なる人は何も爲る事がない所から、客を招いては碁を打つ、それが爲に毎晩夜深をする、主客互に煙草を燻らし、其の上洋燈の油煙、火鉢の瓦斯、各々の呼氣、されば冬は不潔な空氣を以て室内を充すに相違ない、夏は戸を開いてあるから、惡瓦斯は籠らねど、濕氣を受けるは當然の事、故に氣管支加答兒に罹られたのであらう。又、母なる人は夫の起きて居るのに、獨り先に寢る譯にも行かぬから、矢張濕氣に侵されつゝも起きて居らねばならぬ、六十二歳にもなる女性が、斯くて毎晩の樣に夜深しをすれば、僂麻質斯に罹るはこれ亦病理の然らしむる所、次に妻なる人の子宮内膜炎の原因は卵巣炎で、卵巣炎の原因は產後なるにも拘らず、母上の病氣のため、自ら一家の內政に干與せねばならぬし、且つ三週間も濟まぬ中に、或は起きて出るやうなことが無いとも限らぬ、又從來の通りなれば、母上が產褥の清潔法にも注意される筈なれど、その柱とすべき母上が病氣だから、其處まで注意が行き屆かなかつたかも知れぬそれやこれやで卵巣炎になられたのだらう、次に次男の腸加答兒は、言ふまでもなく、飲食物に注意する人が少ないから或は餡氣の物が過ぎたり、或は良からぬ冷水を飲だからであらう。次に長男のエクチエーマは凍瘡の所へ、大人が皆々病氣だから、自づと注意する人の少いのと、又一つには入浴數も少くなつて、遂に頑固なエクチエーマに變じたのは疑ふまでも無い。次に三男の夜啼は、その就寢後に於て家庭の騷々しいこ

どが一大原因となつてるは鏡に懸けて睹るが如しである。抑々小兒の就寢後は何等の音も聞えぬやうに靜かな室に移し、睡眠の妨害にならぬやう注意すべきが家人の義務である。然るに主人が深夜まで讀書せらるゝを始とし、其他コン〱咳嗽をする人、呻る人の多い所へ持つて來て、今まで添寢して呉れた慈愛の母と離れてることとなれば、夢寐の間に恐怖の心を起し、夜啼するに至るは更に怪しむべきことでない、次に長女の寢小便、これは診察せぬ中は何とも斷言出來ぬけれど、或は二男の腸加答兒とその原因同じくて、只單に飲料の過ぎる所から起り、一夜之を漏すと、それが習慣になつて、遂に今日に至つたものであらう、次に主人の消化不良、これは精神の過勞、睡眠不足、食事時間の不規則、これが三大原因を爲してる。次に書生は忠實な人だと言ふことだから、皆樣が病氣であれば、自分も共に心配し、夜更けて醫家へ走つた こと も あらうし、看護の勞を取つたこともあらう。それ故勉强せねばならぬ〱と思ひつゝ、徒らに時間を過し、遂に本病になるは青年に有勝の事。女中の赤鼻と瘰疽、これも關係が無いやうで、矢張關係があらう。一家の主婦たるべき方が二人まで臥てゐると、女中の心遣ひは一方でない、のみならず坊ちやんの夜啼、奥樣の熱發、その度毎に起き出て心神過勞、睡眠不足をしてるから、さらでだに上部に充血してる赤頰の女中は、遂に鼻まで侵されるやうになつたものと見える。又瘰疽は察するに、冬の中から多少皸裂を切らしてゐた所へ、寢小便の夜具や、襁褓の洗濯を餘儀なくさせられ、爲に毒物は創口より侵入したのであらう。最後に赤坊の鵞口瘡は、手の足りぬ所から、牛乳壜や乳嘴などの清潔法行屆かず、それが積り積つて毒物が口中に巣つたのである。

▲十二病の結論

（一）夜深（二）空氣の不良 濕氣も含む （三）睡眠不足（四）精神過勞（五）運動不足（六）衣服器物の不潔（七）食事時間の不規則（八）飲食物の不注意。この八ケ條に歸着するのである、然れども今二箇條最も大切なる事がある、

即ち入浴の不足、精神の活動不足、この二つが實に一家の平和を破る最大原因となつたのである。

抑々父なる人は年六十九歲生理衞生の大道から論ずると、前途悠悠八九十年は活動出來る身體、然るに最早代を嗣子に讓つて、圍碁三昧とは何事ぞ、我が國の人は一般に早く隱居をして無爲に暮したがる惡弊がある、其故精神の活動は早く止み從つて身體も早く老衰するのである。若し父にして何か大なる事業に從事し、大に活動したならば圍碁などの遊藝は時偶でなくては行る氣になれぬ、さすれば夜深をする事にもならず、氣管支加答兒にも侵されず、若やかに元氣好く居られるのである。父にして斯の如くなれば、之に



連れ添ふ母も矢張それに感化され、まだ〳〵妻君盛で此の世を送られるのである。一家の年長夫婦が斯様に元氣であれば、家族皆之に準じて活動するは論ずるまでもない。そこで精神上の論は先づ此の位にして置いて、次に沐浴の効能を述べやう。若し此家にして、朝の冷水摩擦、晩の入湯、之を缺かさずに實行して居たならば、皮膚の抵抗力が強くて、而も清潔であるから、長男の皮膚病は決して起らぬ、女中の瘰疽も斷じて無い。次に入湯は熟眠を得せしめ、上部の血液を下部に下し、精神を爽快ならしめ、食欲を進むる良藥であるから、夜啼も從つて無く、赤鼻も神經衰弱も起り難く、消化不良も遺尿も或は無しに濟んだかも知れん。又、僂麻質斯の治療としては、溫泉療法を最も可とする、これ溫泉に含める藥の爲ではなくて、溫浴の効にあるのである。又生殖器病殊に子宮病　子無き人も溫泉の力で目出度なつた例は往々ある。又、腸の病も溫浴の力に依て腸の蠕動を促し、便通を整へるものである。然れど朝の冷水摩擦は病的の人のみであるから、當分之を止め、其の代り朝夕二回とも入湯になし、湯槽に水を注ぐ役は主人と書生とで分擔し、以て運動の不足を補ふたら、何より善い策であらうと予は懇々忠告したのである。右の忠告を爲してから約三ヶ月ほど經て例の主人公は予が許を訪づれ、欣然として曰く、

御蔭を以て今日は我が家に一人も病人が無いやうになりました。今その無いやうになつた次第を述べると、父は起し役で毎朝四時に鈴を鳴らす、鈴が鳴ると一同に起き出で、妻は子供に小用をさせる、長男を除くの外は更に二時間を眠らしむる事にし、其の他は夫々仕事を分擔する、其の役割は、父が風呂の火を焚き。母が佛壇に關する一切の仕事をなし、妻は子供に關する一切の事及び食事の監督。長男と書生は庭園の掃除。下婢の一人は臺所一切、一人は室內の掃除。余は勉學に從事する。

斯くて風呂が五時半に沸き上ると、家族の順序で、入浴し朝飯は約六時半より七時半までに食し終るやうになる。終れば三十分時乃至一時間休憩して男達は學校

へ出掛ける。父も今月より又々會社に出勤することになる。母も全く手足の自由になり次第、慈善事業に奔走するとの事、午後、父は會社より歸ると盆栽の世話をして樂しんでゐる。我と書生は矢張勉學に從事する午後四時から余は風呂の水を汲む、長男は火を焚く、午後五時半頃に湯は沸く、矢張朝の順序で入湯し、食後書生は柔術の道場へ行く、父と余は鐵啞鈴を振る、道場から書生の歸るは八時半、間もなく書生は湯槽に明朝の水を汲み入れておく、一同九時に就寢する。

右の如く規律を立てゝ實行したれば、氣管支加太兒は次第に緩らぎ、僂麻質斯にも莫大の功を奏して、此頃は殆ど痛みは除れ、妻は子宮病の氣も無く。長男の皮膚病も次男の腸加太兒も自然に治つて了ひ、小兒の夜啼は全く止み、寢小便も更にせぬ、尤も之を治すには寢小便矯正法を實行し、午前に成るべく飲料を與へ、午後からは全く液類を飲ませぬやうにし、就寢せしめてから一時間經つと起して排尿せしめ、拂曉即ち四時に又排尿せしむるのである。別に六ケしいこともないやうなれど、注意を怠ると午後に水を飲まうとするし、就寢後の一時間をうつかり忘れるやうになる。それから余の消化不良も、書生の神經衰弱も、運動と入浴との爲に何時の間にか忘れて了つて、此の頃では九時を打つと眠くて、堪らぬやうになるし、眠つてからも夢一つ見ぬ。それから食事の旨しくなつたのは何より愉快である又子供の間食も、午後三時と定め、餡氣の物は更に與へないでビスケツトカステラパン、其の他煎餅類と定め、飲料には麥湯を用ひ、なるべく午前の中に飲ませることにしてゐる。又、君の敎へられた所の、牛乳器の淸潔法に從ひ、一々重曹水を以て壜や護謨管乳嘴を消毒し、然る後又溫湯で洗ひ、乳嘴の如きは幾つも求めておいて、代る／＼2％硼酸水に浸しては使つてゐる。故にそれ以後鵞口瘡は言ふに及ばず口中一切の病に罹つたことは無い。

要するに早寢、早起、運動、入浴、淸潔、精神の活動飲食物の注意これだけを僅一ヶ月餘り實行した爲に何等の醫藥を用ひぬやうになり、この分では我が家には永久に病魔は來まいと信じてゐる云々。

衛生顧問

鼻血の療法　問　昨年の八月頃より毎朝一度位は必ず鼻血出で色々治療も盡し候へども今に治らず、その療法を。（肥後の孝察女）

答（一）成るべく無言を守る事（二）頭部を下げぬ事（三）便通を整ふる事（四）火邊に近づかぬやうにする事（五）明礬二瓦を水百瓦に溶かし之に綿を浸し之に綿を輕く搾つて鼻孔へ塡充する事（六）心を興奮させぬ事。以上六ヶ條を一ヶ月實行して效なくば又御相談に預りませう。

便秘症の療法　問　平素秘結症にて三日目毎に灌腸器を用ひねばなりませぬ、、いかにせば便通ふか。（兵庫縣紫子）

答（一）運動する事（二）毎晩腰湯して寢る事（三）香物を少し餘計に食する事（四）寢床に入つてから腹部を輪狀に摩擦する事（五）毎朝半合乃至一合の冷水を飲む事（六）精神を過勞させぬ事（七）毎朝便意なくとも上圊して促す事（八）腹部に何時もフランネルを卷いておく事。

右八ヶ條を切めて半年實行して見られよ。

顏に油が多くて困る　問　私は顏に流れる程油が浮き白紙を以て拭へば全紙濕ふ程に候之を少くする法を敎へ下されӧ。（廣島のいイカラー女）

（一）剃毛を以て時々輕く拭き取る事（二）鉄をつけて毎日二回顏を洗ふ事（三）燒酎を少し許先一日に一回塗る事。

田蟲を除く法　問　普に永年の田蟲出來甚に困ります何か全治する方法は有りますまいか。（二十七歲田蟲女）

答（一）一日に二回熱過ろ程の湯に手拭を浸し輕く搾つて其の部を摩擦する事（二）摩擦したる後イヒチオール五瓦をアルコール半合に溶かして塗る事。

野菜を食すれば寄生蟲の害あるか　問　田に生えてある芹には蛭の卵が附いてゐて、之を食すれば腹中にて生育し一方ならぬ害をなすとの事を、芹を食したる後人より聞きその日より精神的に痛み始め申候果して然りや。（高瓦縣高天腹痛女）

答　蛭の卵は腹中に入りて生育するを得ず、されば御身が腹中の痛むは精神的ならん。然しながら野菜類には如何なる寄生蟲の附着し居るも計られねば（一）芹に限らずよく〳〵淸潔に洗ふ事（二）沸騰してから十分時間經つて食する事。この二ヶ條を守れば安全なり。

瘦せる方法　問　私事餘り肥えて下顎は三つに下り居る位、何卒瘦せる方法を敎へ下され。（高岡市十七歲女）

答（一）精神を使用する事（二）液體を餘り飮まぬ事（三）過ぎる程立ち働く事（四）脂肪類の食物を用ひぬ事（五）入湯を一日二回行ふ事（六）毎月月經時の五日前から月經時まで蘆薈藥劑巴丸を二粒づゝ朝夕服む事右六ヶ條を半年實行して効無くば又御相談を受けませう。

疥癬の療法　問　疥癬病にかゝり、大に困り居候が、良藥を敎へ給はれ。（大阪の大困り生）

答（一）入浴を朝夕二回實行する事（二）入浴する時如黒石鹸を以て垢や脂を落す事（三）然る後秘露バルサム五瓦をアルコール五十瓦に溶して塗布する事（四）塗布するには毛筆の尖をチヨン切つて之に藥を附けて摩擦するやうに塗ける事。

右三ヶ條を守れば必ず治ること請合なり。

【記憶力增進法】問 身體に變りなきやうなれども、記憶力段々鈍くなり困り居り候何卒記憶を强固にする方法を敎へたまはれ。（福島縣信夫）

答（一）早く寢て早く起きる事（二）記憶力の强弱を氣にかけぬ事（三）何事をか覺えんとする時他念あるべからざる事（四）便通を整ふる事（五）運動を適宜にする事（六）稽事を缺かぬ事（七）滋養の食物を取つて身體を一般に强壯にする事（八）優美の精神を養成する事（九）稽事を習ふ時その休憩時に何事も思はずに愉快に遊ぶ事（十）空氣光線の善く通ずる室にて稽事を學ぶべし。

右十ヶ條を守れば大抵記憶力が强くなるものである。

【姙娠と藥物】問 姙娠中に候が實母散順血湯の如き物を服用し居れば安產に効果ありと果して然りや。（兵庫縣一二三女）

答 安產をせんが爲に前以て服用しおく藥は道理上有るべき筈なし。何となれば藥は病氣に用ふるもので姙娠は病氣で無いからである。

【子宮後屈は治るか】問 甲の醫師は子宮後屈は治ると言ひ、乙の醫師は一旦後屈せしものは如何としても難しと、甲乙何れが眞か。（伊豫の湯の花女）

答 專門醫師の手術を受くれば整復するものである。乙醫は恐らく婦人科專門の醫師で無い所から余には治されぬと言はれたのであらう。

【慢性腸胃加太兒の療法】問 常に下痢し易く惡心ありて食欲進まず溜飲の氣味何時も去らず、何卒その養生法及び適當なる療法を御敎授あれ。（大久保の質問SP女）

答（1）固形の食物を成るべく禁ずる事（2）冷たき液體を飲まざる事（3）腹部を温包する事（4）脂肪の食物を取らざる事（5）毎日入湯を怠らぬ事（6）精神を愉快にする事（7）大氣日光に照れて散歩する事（8）藥用する事（9）藥用は固より御地の醫師に乞はるべきだが、一寸左に記せば、

硝蒼五、〇瓦　乳糖適宜

右三包に分け一日三回一包づゝ

（下痢を止める目的）

含糖百布聖三〇　撒衣矢爾酸〇一　タカヂアスターゼ〇三

右三包に分け一日三回一包づゝ

（健胃且つ胃の醗酵物を防ぐ目的）

【烟草を如何樣に吸ふか】問 烟草は絕對的に害なきものならば、その吸ふ心得及び用量等を御敎示下され。（東京の男の信雄夫）

答 喫烟十五則といふがある。嘗て一度述べたこともあれど改めて左に列記しておかう。

(1)二十五歳になつたら吸へ、何となれば二十五歳以下は身體纖弱で中毒し易い(2)口中に長く煙を留めてはならぬ、これニコチンが唾液に溶解し易いからである(3)廉價の煙草は概してニコチンが多いから上等を吸へ(4)湿つた煙草は多量のニコチンを吸收し易いから乾いたものを吸へ(5)空腹時に吸つては宜しくない、これは中毒し易い(6)空氣の流通宜しき處で吸へ、これは中毒し難い(7)日本産を吸へ　外國産は日本産より概してニコチンが多い(8)酒を飲みつゝ煙草を吸つてはならぬ、二物相俟つて中毒を助くるものである(9)刻みならば　二服紙卷ならば半本、これ以上は中毒し易い(10)短い煙管はその煙が眼へ入るから宜しくない、從つて紙卷もパイプで吸へ(11)深夜喫煙してはならぬ甚だ中毒し易い(12)咳嗽の出る時吸つてはならぬ、氣管支加太兒になり易い(13)過激の運動後は避ければならぬ矢張中毒し易い(14)喫烟者は日々數回殊に就寢前には口を嗽ぐが可い、これ口中にニコチンが殘留するからである(15)長い時間止めてゐた揚句は少し吸へ、これ中毒が激烈に來るからである。

(煙草を止める法無きか)問 女の身でありながら煙草を喫み始め、有害と知りつゝ止められず候が何か之を止める方法は無きか。([illegible]烟草好女)

答 害と知りつゝ止められぬは意志の薄弱なるに依ることなれば意志を强固にする外に仕方無し。貴女若し眞に止めんと欲せば煙草に關する器物を悉く捨て、而も家人は言ふに及ばず來客にも喫煙を禁ずる位にせられては如何。

(茶を飲む時と其の用法)問 茶は一日中にて何時飲むべきものなるか及びその用法御教へ下されたし。(山城宇治の茶摘女)

答 茶は朝飯前及び午後二時頃に一二碗を飲むが宜し、これ精神を興奮せしむる効あるものである。その用法とは如何なる意味か解し難し、或は煎じ方の意か、果して然らば上茶は一旦沸したる茶を冷して注ぐを可とし、番茶は、焙爐にて焙じ之に熱湯を注いで飲むが可なり、何となれば上茶はその成分たるテイン多くて、鞣酸少く、番茶は之に反す。而してテインは其の味爽にして早く煎出し鞣酸は其の味澁くして遲く煎出するの性あるからである。

(局部多汗症の簡便なる療法)問 或る一局部に特別に汗多く出で、爲に臭氣を放ち困り居り候が、之を治す名法御座無く候や。(上野の某愛讀生)

答 局部多汗症に大凡四通りある、即ち其一は手掌に出るもの俗に之を油手といふ。其二は足蹠に出るもの、俗に之を油足といふ。其三は内股に多く出るもの。俗に之を裾腋臭と云ふ田舍の婦人に多い。其四は腋窩に多く出るもの、之は例の腋臭である。所に依て多少療法を異にすとは云ひながら、最も簡單にして且つ右四部に通ずるのは單寧酸一瓦を酒精百瓦に溶解して塗るが宜い。但し局部を常々清潔にす可きは勿論。又この種の病を熱心に中年以上も續けねばならぬことを返すがへすも申し上げておく。



藤に就ての種々の研究

鶴枝生

藤は、荳科植物に屬する蔓狀の木で、數十年も經つて、幹の直徑五寸以上に達するのがあります。枝は細長くて鵲豆の如く、普通は他の木の幹などに卷き着いて、高く上の方へ攀ぢ登るが、又地上を匍ふ枝もあります。葉は複葉で、一本の中軸に、數多の小葉が對生して居ります。花は一本の花軸に數多の小花を附け、恰も房の樣な狀であります。さうして一個の花は、五枚の萼瓣と、五枚の花瓣と、十本の雄蕋とより成つてゐる。花瓣は大小三樣の形狀があつて恰度蝶蛾の飛んでる樣な狀であります。之れは荳科植物の特徴で、此荳科に屬する植物は、葛でも萩でも、大豆でも赤小豆でも、悉く蝶形花であります。果實は、大きな莢で、其中に碁石の如き黑い種子があります。

幹の太きものは、往々之を横に斷つて、土瓶敷に用ゐます。其横斷面には多くの小孔がありますが、植物學上此小孔を導管と稱へ、根から吸ひ取つた滋養分を枝や葉の方へ運搬する通路であります。如何なる植物にも、總べて此小孔があるのですが、極めて細かいから、ちよと見分けることが出來ないのであります。

花は、五月の初め、即ち八十八夜の頃に咲くので、農家は、それを待つて、大豆の種子を、蒔きはじめます。此の花は紫色に白味を帶べる淡紫色、所謂藤紫で、頗る美しい上に、花が房の如く、長く垂れてゐるから、一種異樣の趣があります。花房は、普通一尺前後であるが、攝津國の野田に產する野田藤は、長さ四五尺に及び、また近年園藝家の培養してる九尺藤といふのは、長さ九尺に達するので、世人に持囃されて居ります。

○藤と園藝

藤を園木にするには、概ね棚を作り、其上に匍はせ、さうして、花房をば一齊に棚から垂れて、咲き揃はせます、野生の藤の花は、大抵薄紫色ですが、栽培種には、白色のものや、八重咲きのものがあります。又四季咲藤といふのがあるが、年に四回は咲かないけれ共、二度は必ず咲き開きます。今園藝上、主なる變種を擧げてみませう。

九尺藤は、關東一の名木です。武州粕壁町の近在、牛島の原產で、其花房の長さ、七八尺から九尺に達するので、九尺藤と名づけ、世界無比の珍花であります。

野田藤は、古來有名の藤で、もと攝津國野田に產し、花房の長さ四五尺に達し、往時は實に關西一の名木であつたのです。之に紫色と白色との二種類あります。

麝香藤は、近頃外國から舶來せるもので、花房の長さは、一尺餘りであるが、如何にも香氣が佳いので麝香藤と名けられ、最も盆栽に適します。

墨龍藤は、花は八重、其色は濃き紫色で、葉の出ない前に、數多の花が咲き、最も麗はしく見えます。口紅藤は、花房大きく、花瓣の外面、眞白く、內面が紅色で、實に珍らしいものです。カピタン藤は、花房は短いが、花の形が大くて、色が白く、盆栽に適します。薩摩藤は、木も花も小さく、花數が多くて、早く咲くので面白いのです。白藤は、葉が大くて厚く、花は白く、普通の藤より、早く咲きます。夏藤は、夏期咲くので、一に土用藤と名けられ、紅夏藤と白夏藤の二種類あります。此他藤には、紅萩藤、白萩藤、千重紺藤、淺黃藤などの變種があります。

今園藝商の定價表を見るに、九尺藤、麝香藤、口紅藤などの苗は、一本二十五錢づゝで、千重紺藤が、一本二十錢、他は一本十錢、若くは十錢以下であります。

藤を培養するには、成るべく濕地に植え、冬のうち、酒糟の汁や、米泔の汁を、根に潅けて置くと、よく繁茂し。又田の畔に植えると、根のはびこるのを制限して、多く蕾を附けるといふことです。さうして藤の花を、花活にするには、花瓶の中へ、少しく酒を加へる

と長持がするといひ傳へて居ります。

○藤材の用途

藤は、花が美しくて、園木に適するの外、幹は、土瓶敷の如き、細工物に用ゐ、皮は其丈夫なる纖維は、織物の原料となります。藤布は、俗にタコ布或は藤ダコと呼び、昔時奥州の相馬や、信州の木曾より產出し主に褻袴に用ゐたのですが、頗る丈夫で、縱令皺が出來ても、水を吹かけて疊み置くと、直き舊の通りになります。纖維は又



藤綱とて、强靭な索綱にも用ゐます。麻裏草履の裏は、多く藤の纖維にて作り。其他箕、穀篩、土瓶提の如きものも、概ね藤の皮で編むのです。藤の蔓は、細長くて、强靭であるから、山國では、往々藤の蔓を編んで、橋を作り谿川や絶崖に架けてあります。

○花實の食用法

藤の花は、藤花菜と稱へ、食用となります。主に煠てから、酢味噌にするのです。又支那では、半咲きのものを、鹽湯に浸し、後之を出し、蒸してから再び日に晒らし、長く貯藏して置くさうですが、酒に醉ふとき、之を食べると、早く醒めるといふことです。

藤の莢の中にある碁石に似たる種子は、味やゝ栗に似て、煠て食用となります。之を酒の中に混せて置くと、酒が腐敗しないといふことです。

藤の葉の嫩かいうちは、蔬菜と同樣、食用となります。又此嫩葉をもみて、湯の中に入れると、茶の如く飲むことが出來るゆゑ。山民は茶の代用をさせるといふことです。

藤の幹や根に生ずる瘤を、藤瘤と稱へ、昔は藥劑に用ゐたといふことです。

○歌に顯はれたる藤

藤の花は、淡紫色で、花房は、所謂下藤と言つて、下の方に垂れ下り、一種の趣があるから、古來いろ／＼に歌はれてゐるが、普通は、八十八夜の頃に咲くので、歌集などには、多くは春の末の部に入れ、又偶には夏の初めの部に入れてあります。歌にも

いづかたに匂ひますらん藤の花　春と夏との岸をへだてて　康資王母

武隈の松の木末に春と夏と　二葉をかけて藤さきにけり　僧公朝

暮れのこる春の日かげに咲き初めて　盛りは夏にかゝる藤浪　参議爲相

とあつて、晩春と初夏にかけて咲く花であります。

藤の花房が多く垂れ下つて、風に搖られて動くところは、恰も浪の動くやうであるから、藤の花房の咲揃つてることを、通例藤浪と呼んで居ります。

ゆく春のかたみにかゝる藤浪の　色みえそむる田子の浦松　爲家

小倉山松の藤浪心には　かゝれど行きて見る時もなし　閑人

ながめやる難波入江のゆふなぎに　よせてかへらぬ春の藤浪　爲顯

藤の花は、紫色であるから、雲、水、衣などに詠み

つらねた歌も、少なくはありません。

紫に春は藤浪たつた川
　これも時代の水の色かは　[illegible]具明

九重に咲けるをみれば藤の花
　濃き紫の雲ぞ立ちゐる　[illegible]家

千歳ふる松にかゝれる
　藤の花君が衣の
　　色かとぞみる　国房

白河の名にぞたがへる
　今日みれば岸の藤浪
　むらさきにして　能宣

藤の花は、蟲媒花で、昆蟲を招いて花の底に蜜を貯へ、居るけれども、香氣は著しくない、それ故か、藤の花の匂を詠んだ歌は、まことに少ないのです。

松のいとよりかけて咲く藤の　菅原 大政大臣



香ひに人やたちとまるらん

おとづるゝ松の雨さへかほるなり
　藤さくころの庭の夕風　經家

紫の雲かとみれば藤の花
　咲き匂ふ松のこずゑ也けり　光俊

藤は、蔓によりて諸方にからみ着くの特性があります。けれども藤カツラ即ち藤蔓として、詠んだ歌は、實に少ないのです。

ならすなよ垣ほに咲ける藤かつら
　くろ山人の
　かへるかざしに　家隆

まきはへるいはれが岸の藤かつら
　春は過れどをる人もなし　同人

藤の蔓は、主に松の樹に卷き着いて、高く攀ぢ登るゆゑ、藤の歌には、松にか

けたるものが頗る多くあります。

春風に咲くともみえて高砂の
　松の梢にかゝる藤浪　平忠盛

たちかへりみてを渡らん大井川
　川邊の松にかゝる藤浪　源實朝

波こすと人は見るらんすゑの松
　梢に高くかゝる藤浪　顯輔

志賀の山松にかゝれる藤の花
　うらの波こすかとぞみる　藤原俊成

山かたみ松にかゝれる藤の花
　空よりおつる浪かとぞ見る　源道濟

藤は、野生のものを山藤といひ、多く山野にあれども、又よく池や河の岸にあつて、水上に、のり出してる所などには、なかく面白いのがあります。

淸見潟岸にかゝりて咲く藤の
　浪もせきとや人とゞむらん　爲相

住の江の岸におふてふ草はあれど
　春を忘れずかゝる藤浪　爲家

古里の池の藤浪誰うゑて
　昔忘れぬかたみなるらん　實朝

藤の枝が、水面上にのり出して、花房の影のうつるも、又一しほの眺めであります。

吹かゝるふせの浦わの藤浪に
　うつる影のみまつは見えつゝ　衣笠内大臣

にごりなききよたき川の淸ければ
　底より咲くと見ゆる藤浪　忠盛

藤の花は、到る所に咲いてるので、山野に運動せる人々は、よくかざしにして、樂むのです。

ふる里のみかさの野邊のみかり人
　かざしの藤も今盛りなり　衣笠内大臣

いろまがふ野べの藤浪そでかけて
　ゆかりの人のかざし折るらん　定家

春日野の藤は散にきなにをかも
　ゆかりの人の折りてかざさん　人麿

いは淸水かざす盛井の藤の花
　萬代かけて神や守らん　定家

此他、藤の花を詠んだ。歌、俳諧は種々あります。けれども紙數に限りがありますから、省きます。





雨の科學的研究

工藤芳春

日本のやうに雨が澤山では、一般の農家は勿論、勞働者は仕事が出來ぬ上に、米價の騰貴に泣き、貧乏書生は又雨かとて破れ靴に顔をしかめ、運動好きは今日も駄目だとてこぼし、奥さんや下女は洗濯が出來ぬとてかこつので、唯喜ぶものは下駄、傘屋と雨蛙位かもしれぬ、併し昔の學者には雨を喜で其屋を喜雨亭と名づけた人もあれば、又雨にちなんで雅號をつけて居る人も澤山にある、されば人は其の境遇性質によつて同じ雨を或は陰氣とも思ひ、又愉快とも感ずるものである。

△世界の樂園

我邦は世界に於ける多雨國の一つである、先づ第一は印度邊、次が香港附近、其次に日本が數へられる、日本では東山北陸の高地、及び種子島より以南の諸島嶼、九州の東南岸、四國の南岸及び日本海沿岸等は最も雨多き地方である。此はつまり四圍を繞らすに洋々たる海を以てし、地形は狹長くして南北に延び、沿岸を流るゝ暖き黒潮は盛に蒸發を促し、寒冷なる潮流は北から流れてこれと衝突する、加ふる、冬秋に多き亞細亞大陸より吹きくる北西の風は、日本海の濕ふた空氣を送り、又西南風は太平洋の濕氣を洗つて吹いて來る等の爲である。

斯の如き理由で我國は殆ど年中降雨がある、即ち或る時は春雨となり、或時は五月雨となり、夕立となり時雨となつて、始終我邦土を濕して居る、去れば我邦に他國で見ない傘や下駄のあるのは、決して怪むに足らぬ、かくいへば我邦は非常に濕潤で、陰鬱で、哀れな土地の樣であるが、事實決してそうでない、之を五風十雨とでも言はうか、却てそれが我邦をして世界の

樂園、豊饒なる國土、峻秀なる邦土たらしむる所以となつてゐる、以下季候の折々によつて降る我邦の雨の性質と其の及ぼす影響とを少しく述べて見やう。

△春雨

我が邦土はまだ冬の名殘を止めて冷氣が全く去らぬ處へ亞細亞大陸の內部にある高氣壓部が、追々朝鮮半島から南方に移るに從て、濕りを帶びた稍々暖い西南風を起して水蒸氣の凝結を來し、所謂花曇りとなつて、しく〳〵降つて來るのが春雨である。其れがのどかに注ぐと野邊の若草は時を得がほに萌え出で、今迄雪に霜になやまされてありし梅の花は、破顏一笑得ならぬ香を放ち、鶯囀り、櫻は雲と棚引き、柳は綠の絲をくり、桃李、梨杏、さては菜の花、紫雲英などが赤、白、黄に、紫に咲きほころびる、所が草木の母の此の雨は、又咲き亂れた其花を情なくもたゝき落していつしか春の盛りが過ぎる、これは三月下旬から五月上旬迄の間である。

△五月雨

やがて太陽が追々北半球を直射し、亞細亞大陸が漸次熱せられると、今迄吹て居た貿易風は、印度洋上の季候風と衝突して茲に多濕多潤なる西南風となり、我國全部を被ふて吹て來るが、それが山嶺に支へられて陰雨霏々として數旬に亘り、吾邦の最も陰鬱な不健康な時期となる、卯の花下しといひ、五月雨といひ、皐月雨といひ、梅雨といひ、黴雨といふのは即ちこれである、此の風は印度洋から吹いて來るから、西南の方程影響が烈しいのである、即ち印度邊では殆んど半年を雨の中に送り、我九州四國等も隨分多雨であるが、東北地方は殆んど影響を被らない。

△夕立

七月頃太陽が漸々北回歸線を離れて南に向ふと、風は西南若しくは南に廻はるから、我邦の其風の衝に當る處は多少の雨があるが、天候は概して平穩である。

けれ共連々炎天燒土の時候となるから、上昇氣流は非常に盛で、其の上昇した空氣が冷却して雨雲を起す、之れが即ち夕立となるのである、一體十分乾いた空氣は約六十米昇る毎に、華氏の約一度低下するものである、今地上の温度を百度とすれば、五哩上昇するときは零下四〇度に低下する割合である、そして夏の空氣は皆多量の水蒸氣を含有して居て、それが上昇するから、忽ち油然として滿天雨雲を以て被はれ、電光雷鳴轟然として大雨を降らするのである。

△時雨

九月の下旬より十月にかけて、陰晴不定稍ゝ寒氣を催し、所謂時雨の季節となつて、滿山紅を織り出すこれは高氣壓部が漸々再び、亞細亞大陸の方に向ふから、今迄吹いて居た西がかつた風と、新に始まらんとする西北風とか相混亂し、時々水蒸氣の凝結を起してこの現象を呈するので、芙蓉の峯は夕陽を浴みて三保の松原時雨るゝの好景を見るは此の時である、又此の季節には低氣壓の通過につれて颶風と共に襲來する豪雨がある。即ち二百十日、二百廿日といつて農家の最も懼るゝ所で、穰々たる禾穀も此のために見る影もなく荒れ果てる、此の雨、此の風こそは、實に我邦にとりては非常な厄介者である。

△半雨半晴の奇觀

其れより以後になると風は全く西北若しくは北に廻はり、こゝに日本海の水蒸氣を拉し來つて中央山系に衝突するから、裏日本は全く濕候となつて、二三ヶ月は殆んど晴天を見る事がない、即ち或は雨もよいとなり、雪おこしとなり、或時は雨瀟々連日に亘り、或時は飛雪軒端をたゝき、遂には皚々たる銀世界となる、然るに表日本の方面は濕風が中央山系に支へらるゝから、多くは日本晴れで、一天青碧、空氣は乾燥、富士の嶺は朝な夕なに其の清い雪の肌をあらはしてゐる。

△雨と景勝

斯の如く我國は一年の中、極少しの間の外は大抵雨が降つてゐるが、此の雨は或時は熱を奪ひ、或時は潜熱を發し、又或時は放射熱を妨げて、よく氣候を中和してゐる。且つ雨が地盤に働く力は實に驚くべきもので、諺に雨滴石をうがつといふのは實際である、軟い岩は言ふに及ばず、硬い岩と雖も化學的と器械的との二作用によつて遂には崩壞を免れない。岩よりなる地盤は漸次溶解、浸蝕、削磨の作用をうけて、これによつて山も出來れば溪谷も出來る、高い山も低くなり變化のない山も自ら峻秀奇拔の風を表はしてくる、彼の耶馬溪や、木曾の谷や、妙義の山や、榛名、日光、箱根等、人が妙なりとし、奇なりとする風景は、殆んど皆此の雨水によるのである。其證據には南方低緯度の多雨の地方程山の奇景をなすものが多くある。

△雨と人情

終りに雨が人事に及ぼす作用を述べて見ると、我國に於て雨量が地方によりて差異ある如くに、人情風俗にも差異がある。即ち一天靑碧、風物自ら朗らかな表日本に於ては、人情風俗も亦自ら快活であるが、裏日本の比較的雨多き山陰北陸地方に往つて見れば、秋風そよ吹く秋の夕などに、路上に遊べる小兒等が、「あした降るか、照るかよー」といひ乍ら、穿てる草履を足もて拋ち、伏すれば雨となし、否らざれば則ち晴となして晴雨を卜する聲の陰氣さは、東京などでは迚も見れない圖であらう。或は雨蕭々たる朝、其の折戸によれる童女が、「雨さん〳〵やんでをくれ、赤い紙買うて、糊買うて、障子張つてあげましよう」とうたへる謠の如何に悲しげなることよ。而も精緻にして堅忍不拔の氣象は却つて多く此の間に於て養はるゝやうに思はれる。

「春小雨、夏は夕立、秋時雨、世の中よくて我れ乞食せん」とは眞によく我邦樂園の眞相を言つたものである。

家庭の讀物に就て

もし家庭の讀物として如何なる種類の書を採擇すべきかといはゞ、こは却々の問題である、何となれば、人々の趣味により、家々の風儀にもより、又時勢の如何にも依る事なればなり、されど多くの人は流行の小說や、文學趣味の多き雜誌、物語等なるべきは一般の習ひなれど吾人の見る處ろは聊か異つてゐる。

蓋し一家の人々が其日常書物によつて慰安を求むるは、唯樂しみの分子笑ひの分子のみでは無くして、又大いに眞面目にして、何等か人生の歸趨に到着せる深奧なる人間の性理を味はゝなければならぬ必要がある。これに就て吾人は一部の論語を推薦せんと欲するものである、何となれば、孔子の所說は、恭謙にして不遜ならず、その靄々たるは春風の如く、その溫藉なるは玉の如く何れの時代何れの國土、何れの人種、何れの政體にも通用して更に抵觸する所なく、實行し易き特點あるが故である、論語は彼の瑣迹なる漢學者が喋々する如き不可解的のものにあらずして、一言一語何處迄も平易簡直で、殆んど他人の注釋は要せぬ位である、人と人との交際にも子供の教育にも將た又臺所の衛生にも、日常公私の應酬にも活用することが出來る況んや家庭の秩序、平和を謀らんには斯る恰好の讀物を措いて、復た何物を求むべきであらう「父父たり子子たり」の如きは、平易簡直の語中に家庭の意義が、充分に味ひ得らるゝにはあらずや、人々若し此教訓を服膺したならば、一家はいつも溫情を以て充たされ、爐邊の情話に相親み、卓上の快談に打興じ、所謂水入らずの圓滿なる家庭を建設する事が出來るのである、總じて笑ふも樂むも、畢竟内に笑ふべく樂むべきの實質がなければならぬ此の實質は何に由りて得らるべきか、言ふ迄もなく眞面目の勤勞より生ずる自然の報酬である、換言すれば、父は父らしく、子は子らしく、體力相應、身分相當、相勉め相勵み、相依り相扶くるにあり、斯く秩序よく最も平和に、最も健全に、家庭を保存せんには、家庭の道德を愼まれればならぬ、家庭の道德は、腹の皮を捻るやうな、浮いたものばかりでは、到底修め得らるゝものではない、些つとは窮ッ苦るしくとも、聖賢の教訓に耳を傾ければならぬ、苟くも此道理を合點したならば、聖賢の語訓は實に家庭道德に多大の勢力を附與するのである、要するに社會の現狀が動もすれば、不眞面目に流れんとしつゝある今日家庭の空氣をして淸く高からしめんには須らく聖賢の書を讀み、聖賢の格言を服膺して其の心を整へ身を修め、以て一家の純潔を保ち、以て子弟訓育の源流を造られればならぬ。

近頃流行の潮勢に乘じて動もすれば不健全なる書籍の家庭に浸入せんと欲しつゝある際なれば、一家の主婦たるものはよろしく此の邊に多大の注意をしなくてはならぬであらう。



平塚明子女史に贈るの書

泊子

移り住み候牛込は片ほとり、春未だ寒うてその松一木高う、今日も終日獨り居の徒然を雨に暮して、物憂さは小猫膝に眠らせながら不圖此の書面認めて見る心に相成候。

西大久保は家並疎らに、更けては梟の聲うら淋しうて、夜陰を男だに心せではとの事。近頃此の邊何處へ行つても、彼の

夫人慘殺事件

の噂のみにて持ち切り居り候。つい此の程も紺屋の小僧用聞きに參り候ひて、やあ奥さん、飛んでもねえ事を演つちやいやしてねと、珍しくも無い、何れは例のの又かと思へど、然うね、眞個に御氣の毒な事をしましたつけね、と其の頃能く〳〵口癖の樣になりて、我れにも無く漠然相槌を打てば、何が奥さん氣の毒な事があるもんですか、全體女の癖しあがつて、餘り生意氣だからさと、可愛や小僧、他人の疳氣を頭痛に病みて、人一人決して容赦まじき形相。聊か見當の違ひし樣なれど、然うとばかりねつから相手にもならず、彼れか此れかと頻りに色手本見比べ居り候處、ほらね、平塚明子つて女學生の事なんさと、此れは又案外、流石の自分も甚く面喰はされて、默つて相手の顏まじまじ眺め入り候へば、御覧でしたでせう？新聞でと機敏さ。今朝の新聞にも出てたぢやありませんか、昨日家の旦那が新聞を見て然う云つてましたつけね、だから家の娘等を誰れが何と言つても、女學校に入學れる事丈は俺が承知出來ねえんだよつて、けれど何でせうかねえ奥さん、今日日の女學生つて眞當に其麼奴ばつかりなんだらうか、家なんかのつい近處にも、

軍人の娘さん

かなんかでもつて、女子大學校へ一人通學つてる女がありますがね、今でこそ隨分眞面目腐つた面相もしてますけれど、後には、さあね、什麼なるもんですか、折角高い月謝を出して、怎うせ碌な事ぁ敎はつて來るんぢやあるめえなんかつてつて、家の旦那は又馬鹿に口の惡い男だもんだから、其麼事もね、言つてますのさと、如何にも老せた口吻の可笑しくて、つい何とやら獨り微笑まれもいたし候へど、塲末ながらも七十五日、然らでも女子は心騒くて、善惡なき人の口の端に上り給はん御可憐らしさ、西大久保事件の其れにも況して、言ふばかりなる御氣の毒に存じ候。

されば濃い紫とやらん袴の御裾輕う、思ひ切つてハイカラの眉取り別け清う在して、御氣象柄か心ばかり地味作りの、却つて幾倍も際立つ御美しさ。彼の頃純白のお前掛け召して、御料理敎室の窓に等寄り添ひ給ふすつきりとした御立姿の、笑止や二十四の今日迄

戀知らぬ女子

の身にも、男子樣とは決して忘られぬ御名に在し候。兎角男子と生れて妻を娶るほどならば等と、其の頃はかなき食後の雜談等にも、不圖恥かしき貴女樣の御名申し出でゝは、同室の友にお腹の皮の撚れるほど笑はれ候ひし事も御座候。文學士白揚とやらん二十五絃とやらん、扨ても明星派の詩人の中にも、去る人の近頃在し候やらん、在しても何時も忘れ性のうすぼんやりと、いつしか上の空にて聞き流しやせし見流しやしつらん、森田樣とは私今始めて承る御名の樣な心地も致し候へど、男と生れ給ひし御果報、身につまされて眞に御妬ましさ、限り無く候。

とは云へ誠に此の度は存じ掛けも無き飛んだ御災難新聞紙等にて善惡の御評判伺ひ候ひし時は、寧つそ呆るゝばかりに驚き入り候。怎うせお年ならもうお二十三と有仰れば、戀の愛のと甘つたるき事に、乙女心の人恥しう、今更思すべき年では無論在すまじき筈を。其れも日頃御勉强の憂さ晴らしとならば格別

死にゝ行く身を

貴女樣ほどの方が、初心らしい、何の御醉興で鹽原三界、とんと私には解し兼ね候。其れは春花麗しうて、花鳥も歌ひ出でなん今日此の頃を、そよ吹く春風に自ら言の葉の散りけるをさへ、花の歌とも見るらんてふ可笑しき人の世なれば、所詮私如き御異意のほど解し兼ぬるは定に候。去りとて定とは存じながらも、此れを以て直ちに時代思潮の犧牲、若しくは過渡時代の產物の樣に、何かは元より知り候はねど、慈善會の音樂會のと、良人ある身に役者狂ひも、時に取つて然のみは貴婦人方の御名譽に障り給はぬと云ふ、大した景氣のいゝ當節並べての風潮に候へば、どの道好き合ひ思ひ合ひなされし同士、元來は未だ御亭主の無い御身柄なり、聊か以て其處等の御遠慮在すべうは候はずと覺え候。

由來明子樣の御性癖として、但し餘り西洋小說に等讀みふけりなされしせゐにも依るか、妙に一種異性等に對して、餘り殘酷らしう翻弄遊ばすの御手腕普通ならぬと樣に、友の中には誰れ彼れ感心して評し合ひ候向きも有之候へば、未だ肩上げも取れぬ

十六七の小娘

ならば知らぬ事、愛は婦人の全部なりとさへ申し候人も御座候程なるを、其れ位な經緯明子樣で無くたつて、今時大概な女子は疾うに心得とり申す可く候。少し橫町の宵暗を、迂散らしき男女の私語めき。見渡し廣し芝品川は海原も見えて、夏には月に宜しき處。廂髪にチクタイ、土曜から日曜日を掛けての貸席は、冬は猶更御方便な事が御座りますると、恐悅涙に咽ぶ其處等の女將も候はんを、況して女學生專門の待合すら都下にはありと傳へながらも、眉細う畫きて、人前胡麻化し給ふ野暮な姬御前も當世餘り少ければ、所詮秘されぬ證據は濃紫の乳首、生强ひ白粉の香氣高うぬり秘す不聞な令孃も今時滅多には在さじ。何と言つても縞御召等のふうはりと、花見小袖の縮緬は宜し羽二重は宜し。根掛けに釵釧指輪に腕輪迄添えて、兎角目出度う

婦人の既往

は聞はぬこそよけれ。唯我が妻こそはと信じて可愛がつて、序に嬶大明神と崇め奉りて、餘り吝を云はずに精々と稼いで、欲しいと云ふ物何でも買つて遣つたら、其れで必定家庭は平和たるべき筈なのに御座候。去るを小賢しやくれて、正義の何の云つて見た處で、矢つ張り冬は寒いもの夏は暑いもの、眠い時は眠たし食べたいものは食べたし、怎うせ天保錢の通用無くば其れ丈の談なれば、

みめよき女生徒は、二年三年にて退學し、四年の課程を事なく卒へるは宿痾にあらずんば、加賀千代の亞流なりと、さる女學校の敎師は語りき。それはむかしの事よ今は……



此處等が大方自然主義とやらの生粋と如才無し早う合點して、一家には必ず無くてかなはぬ筈の女房と上り框とは、兎角大切になさるが男は利益かと存じ候。

と申して、何もこれが女子ばかりの我が儘とも無論云へまじ森田樣などの事は知らず、今更此處にて申さんも賢かれど、大臣博士、政事家實業家、靑樓の一夕に千金を抛つの伸氣さは云はずもがな。隨分いゝ顔遊ばした向き

の、演説に新聞雜誌の寄稿、人道正義を標榜して、やいの〳〵と極め込み給ふ敎育者の中にも、先づ以て女騙しが非常にお上手にて、妻には

二重婚の憂目

見せながら、二人の兒まで私生兒として叩きつけ給ふ英雄もありと聞けば、浮世は廻る小車の、何方にしたつて、餘り大きなお口は利けまじと存じ候。

此は何も同病相憐むの下卑しい下心より、眞逆かの場合何ぞの御加勢阿方樣に願ふとて斯く一生懸命肩を持つて上げるにてはなけれど必竟無趣味極まる倫理の講義が、鈍くも現時文學の勢力に壓倒されたる譯にて、一も二も無く明子樣程の方を出したる學校の、近頃一大恥辱かと見れば見られぬ事もあるまじく候お恥もじながらお互にも記憶のある事、瀧口入道の横笛に心から濺ぎし涙も、倫理敎室の一時間には欠伸を嚙み殺す苦し紛れの涙より外出です候ひしを理屈は元より何方にも附會けど、言ふ迄も無く明子樣此の度の御行爲にして、少なくも當路の反省を促し得候はゞ、所謂身を殺して仁を爲すてふ御名譽は貴女樣に在す可く更めて感謝仕り候。

例へば同じ水にても、牛此れを飲む時は乳となり、蛇此れを飲む時は毒となるとやら申し候事も候へば、其の牛たると蛇たると心々の春面白し。更けては乙女椿の一輪にも風冷う當り候へば、今は此れにて擱筆する事と致し候。然るにても三疊の御書齋、御被布姿の一人香薫らして、青松葉嚙みながら結跏趺座して何をか思し給ふ。聞かましきは今宵の御夢、唯眞幸く在せと外ながら念じ參らせ候。

四月八日夜燈下





「結婚は戀愛の墓」とぞ聞けり。緣日の歸りに、二人求めしパンセの一鉢は、曾て、偶々の日曜日に訪れきて、そつと筆立に挿みし菫の花の純なると、いづれか美はしき、いづれか嬉しき。人笑つて答へす。

女の夜歩きを戒む

大町桂月

躑躅に名高く、八重櫻にも人の注目を惹ける、花の大久保村も、さきごろは、大に物騒に候ひき。あらゆる新聞が何日となく、筆を揃へて書きたてたることに候へば、今更申すまでも無く、又申すも、汚はしき事に候へども、幾多の婦人が汚され、若くは、されむとし、終に一婦人が汚されて殺されし事柄が、折角の花の大久保をして、物騒なる處と化せしめ候ひき、小生事、年久しく、大久保村に住し居り、醜なりと雖も、女房を有するの身、よそ事とは思はれず、此頃、繁昌しかけし大久保村も、爲めに衰微することもやと、密かに心配いたし候ひしが、げにや、天網恢々、疎にして洩らさず。犯人は終に捕へられ申候。大久保の住民は、愁眉をひらき申候。警察の力はえらいものと、感歎に堪へず候。

さらば、今後は、婦人が夜間、大久保村を濶歩することが出來るかと申すに、否、否、決して油斷は出來申さず候。大久保のみならず、何處にても、女の夜歩きは、大に戒むべきことに候。古人もこの點につきて、いろ〳〵やかましきことを云ひ居り申候。そのやかましく云ふは、つまり、女の身を思ひやるの故に候。諺にも、女が夜歩きすると、月やけがすると申す事あり。女は古來、容貌を氣にするもの、色の白きは、七難隱すとかや、色の黑くなるは、女の最も苦痛を感ずる所に候へば、いろ〳〵な危險に逢ふぞと戒むるよりも、月やけがして、色が黑くなるぞと戒むる方が効能があるべしとて、この諺が出でたるものと存申候。月やけと云ひたるは、方便に過ぎず候。月やけどころに非ず、女子の夜行は、危險多く、弊害も多く候。小生の家内は、御存じの如く、お化けみたやうな顏をいたし居り候へども、それでも、矢張り女の身、晝間こそ、米の小買にも出せ、夜間は、何事も自から出でゝ辨するやうに致居候。とかく、女子は一般に虛榮心の

強すぐる者、晝間は、ぼろ着ては出られず、貧乏德利は提られずとて、一方の危險を忘れて、夜間を撰ぶならはしも之あり候へども、そは、甚だ宜しからざる了簡に候。あれも人の子、樽拾ひと云ひけむ、下女とても、やはり、女の身、夜間は、いたはりて、外に出さぬが、慈悲と申すものに候。

いかに女子が力み候ふとも、もと〳〵男子とは、身體の構造を異にいたし居り候。かの大久保村の慘害の如きは、男子には無くして、女子にのみあることに候。今日は人の身の上、明日は我が身の上とは、古の武士の述懐に候ふが、女子は、いつ、どこにて、どんな目に逢ふかも計られず、女子も柔術ぐらゐは心得て居る方が得策に候。今日、女學校にて、色々運動の具は、そなはり居るやうに候へども、まだ、どこも、柔術を敎ふる處は之なきやうに存申候。こは世の教育家の一考を煩はしたきものに候。さは云へ、窮鼠、猫を嚙むとやら、柔術を知らずとも、力はよわくとも、死を覺悟いたし候へば、女子も案外强き者に候。現に大久保にて、一婦人が犯されむとせしに、わざと從ふ眞似して、氣を許させ、一呼して、男の急所をつかみて、危難を免れしこと、新聞に見え申候。この秘訣は、女子一般に心得をりて然るべきことゝ存申候。獨逸の古き叙事詩に見えたるジーグフリードと申す豪傑は、龍を殺して、其血に浴して、全身が鋼鐵よりも堅くなり、槍も、刀も通らず候へども、浴せし時に、一片の菩提樹の葉が肩に散りおちて、その一點のみ柔く、後に、そこへ槍を通されて死に申候。如何に强き人とても、何處かに柔かき處があるものに候。鬼を拉く剛力の男とても、必ず一つ急所を有し居り候。すべて、銳をさけて、虛を衝くが、戰鬪の秘訣に候。女子にして、この秘訣を解して、騒がず、あわてず、徐に男子の虛を衝き候はゞ、男子をして氣絕せしむるは、きはめて、容易なることに候。餘り精しく露骨に申し上ぐれば、風俗上の虞之あり候へば、常識にて判斷の出來る迄にてやめておき申候。斯く申すも、新聞事件を機として、一般の女子の身の上を思ひやるの微衷に出でたる事と

御賢察下されたく候。

新聞の報ずる所に據れば、彼の婦人は、年まだ若く、容貌も美にして、風呂屋よりの歸路に、かゝる目に逢ひたるにて、姙娠して、五箇月に及びし由に候。あはれ、湯上りの薄化粧も、我が夫をよろこばさむ爲めなるべきに、わづか數十間をへだつれども、急に臨みて、之を呼ぶに由なく、夫が情の種の腹中の一塊肉をも闇から闇に葬りしは、遺憾さこそとしのばれ申候。又報ずる所に據れば、浴中にて、知りあひの婦人にあひて、共に浴を出でたるが、われは一人身、他は子供づれ、一足お先きへと急ぎて歸りし心の中には、止むを得ざる事情ありしなるべけれど、旅は路づれ、世は情け、十分やそこらの差なら、待ちあはせて、共に歸りしならばと、遺憾に思はれ申候。

大久保の天地、今や妖雲消えて、時節柄、春めき申候。躑躅は、未だ開かず、八重櫻にも少し早く候へども、一重櫻は到る處に滿開に候。鶯も、さき頃までは、唯地を這ひまはりて、餌をさがし、聲を出すこと少なく、出すも、まだ情を含まざりしが、この頃は、所謂喬きに遷り申候。聲も聽くに足るやうになり申候。鶯も、少年期をすごして、青年期に入り申したるにて候。少年期は、たゞ食を求むることが急に候ふが、青年期に入れば、また他の慾が生じ申候。こは、人間も、動物も、かはらぬ事に候。大久保は、コスモスの國と云はれ候程にて、秋は、到る處に、コスモスの花か咲き候ふが、この頃は、到る處に沈丁花が咲き居り、清香、乾坤に溢れ申候。御閑あらば、來て御覽ぜよ、今頃の大久保は、一種の香世界に候。小生の庭にも二三株之あり候まゝ、一房折り取りて、この手紙と共に進上仕候。君が手にふれて、君が紅顔の前に清香を放たば、花神も、さぞや滿足ならむと存せられ候。





私塾の實驗談

櫻井女史

◎英語の研究は手紙より

私の子供の内は本の寺子屋風の教育を受け十四の歳御維新に出遇ひましてから、家も一寸ごた付きましたので、唯裁縫の稽古位いたして十八まで過ごし、直に此櫻井へ嫁つたので御座いますが、唯今でも暇を見てつもり物なぞ致す時に、此裁縫の稽古が餘程益になる事と感じます。英語は嫁つた年から始めましたので、家庭敎師を迎へた時もあり、通學した時もありましたが、敎授法も只今より餘程不完全でしたから進歩が遲う御座いました。併し私はそういふ經驗に基きまして様々と苦心の末、敎授法に研究を致して發明する處もありまして、昨年の九月から私の塾へ英語の稽古に來られた方達でも此三月までちよつと半年間に以前私が一年半程苦しんだ位進歩しました位です、私塾の生徒が英文の雜誌や手紙を讀のに熟練して居りますのは、米國から私の許へ參る友人の手紙を澤山讀ませて練習させるためで御座います。

◎手紙の種類

手紙は誠に興味のあるもので御座いまして、特に米國の友達から寄越すのは、現在の事實を正直に書いて在りますから誠に嬉しく感じられます、優雅な貴孃、淳朴な農婆、可憐な少女の手紙に各々獨特の眞情が現はれて居る所が面白いので、私はやがて飜譯して雜誌へ掲げたいと考へて居ります。何時も良い對照の出來るのは、一方は靑年から熱心な信仰を持て居る宣敎師と、一方は以前役者であつた華美者が悟を開いて宣敎師となつた人です、同じ安否を尋ねる文言でも大層な差があります。一方の人は『御手紙有がたく拜見しま

した』と書てある所も一方の人は『貴女の御手紙を戴いたのは、實に光榮の限りである』と大袈裟に書いてあると云ふ風で、內輪に握手する人と、掌を指し延べて握手を求める人との交際振が日に見ゆるやうで御座います。兎に角手紙は事實や感情を正直に書いたものが一番價値があると存じます。

◎所感を話す練習

私方の塾生は、女子大學、音樂學校、其他各學校へ通學する傍ら、私方で英語の練習と家政見習を爲て居るのです。皆地方で相應な家の娘達ですから自然氣品も高う御座いまして細かしく監督せずとも不都合はありません。私は塾生達に每朝十五分か二十分程づゝ其日に於て心得べき精神上の話を致し、日曜日の晩には塾生達に一週の間に感じた事を話させますが、私も時時所感を述て生徒の話を引き出すやうに致すのです。先達も少い生徒が『私は今日電車に乘りましたら、恐ろしい大きな人が眞中に立つて下げ皮にもつかまらず、威張つた樣子を爲て居ましたが、電車が急に止つた時ヨロ／＼と倒れて可笑ふ御座いました。其時私は人間は何か豪い者に寄り賴んで進まなければならない自分の間違つた考ばかりで押通さうとすると躓くものだと感じました』と旨い話を致しました。此樣風に隨分各々面白い所感を述べるので御座います。

◎塾の料理ストーブ

明治十二三年、丁度私が番町で女學校を開いて居つた時代に、婦人交際の必要と云ふ議論が喧しくなりましたので、島田三郎夫人、河津祐之夫人、加藤弘之夫人、其他二三の御懇意な婦人と相談して婦人懇話會を組織いたし、御良人方に講話を願つて互に談話の稽古をいたす趣向で始めて見ました處、講話が濟と皆樣が默つて居られるので、今度は間食を爲て見ましたけれども、御菓子や御すもじを食べて了ふと矢張默つて居られ如何も集會の効がありませんでした。夫から料理の稽古を爲たら如何かと考へ付てコックを聘して一ケ月に二回づゝ三十錢の會費で西洋料理の實習會を開きました處、御互に家庭で直接必要の事ですから熱心

に話し合て、交際が自然面白く出來るやうになりました。其頃用ゐた料理ストーブを唯今以て私の塾で使つて居りますので、先達も或御方が『此ストーブの履歷を書いたら面白いでせう』と云はれました。夫から明治十四年に北海道へ參りましてからも追々衣食住改良の必要を感じ、其後米國へ參る度に、日本の家庭に應用の出來る料理法を見て來たい考で、知己の妻君に賴んで臺所を手傳はして貰ひ、妻君の料理を見ながら話を聞いたり致しました。日本でも近來料理の著書が澤山出來まして研究に都合よくなりましたが、成る可く唯今日本の家庭程度に一般應用の出來るやうな敎授法に依りたいと存じます。此塾では此點に就て深く注意して居るし、道具も普通の臺所で使ふものを用ゐて手輕に出來るやうに敎へて居るのです。

◎客に食物を進める場合

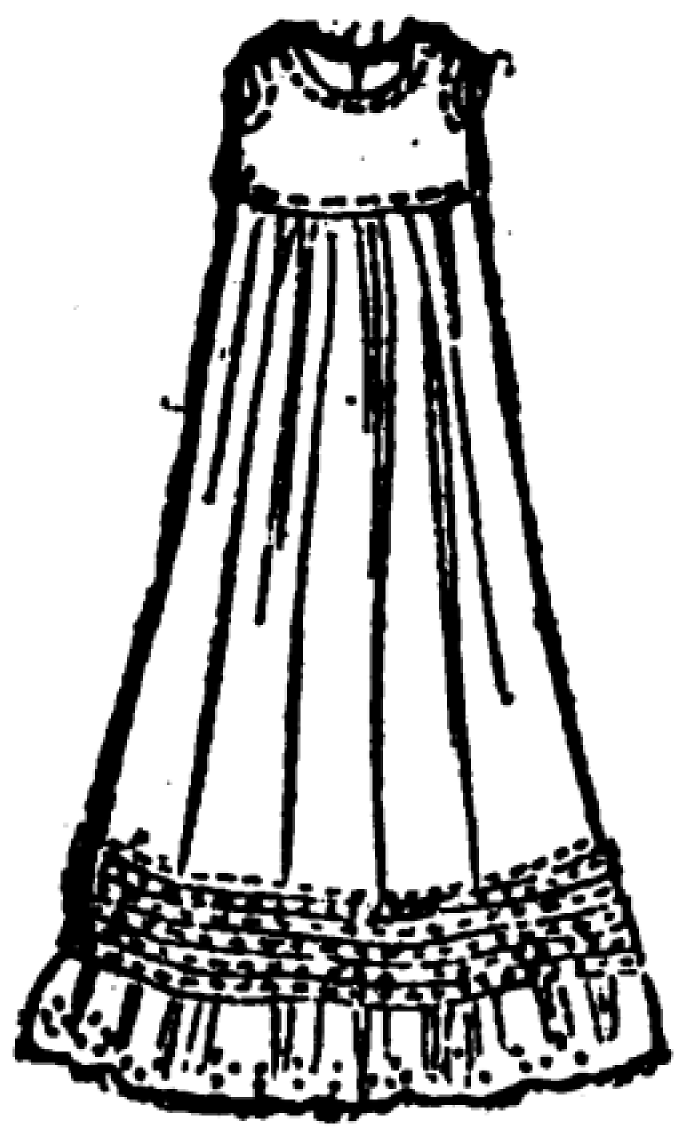
塾の主人は御客好で、不意に何々を拵へて出せと言ひ付けますが、料理が出來損ふたり、手間取たりいたすと後で大層小言を云はれますので、平生手早く出來る料理法を考へて置くやうに致します。遠慮勝な御客に食物を進めますのは呼吸のむづかしいもので、珈琲なぞも甘いのが御好だか否か分りませんから、私は甘味を少く致して出し、別に砂糖壺を側に置いて自由に加減なされるやうに致しますし、料理も皿へ內輪に盛て出し、別に他の皿へ同じ品を入れて側へ置き、自由に取分けて貰ふやうに致して居ります。若い婦人なぞは殘すのも失禮だが如何しても食べ切れないと云ふ場合がよく在るもので、私のやうな遠慮なしでも御飯なぞ大盛にされて閉口する事が在りましたから、此邊は一寸注意しなければなりません。又自分の好嫌ひに從つて食物を進めると失策する事が御座います。私は熱い物好きで、先達も御客が珈琲を何時までも飲まずに置かれるのが氣に成て熱いのを出し替へました處、御客は苦い顏をして『オヤ〳〵折角さまして置たのに、困つた』と笑はれました。斯樣遠慮なく云はれる御客はかりなら宜しう御座いますが、默つて迷惑される方ですと實に御氣の毒で、餘程六ケしい物で御座います。

手輕に出來る子供の洋服

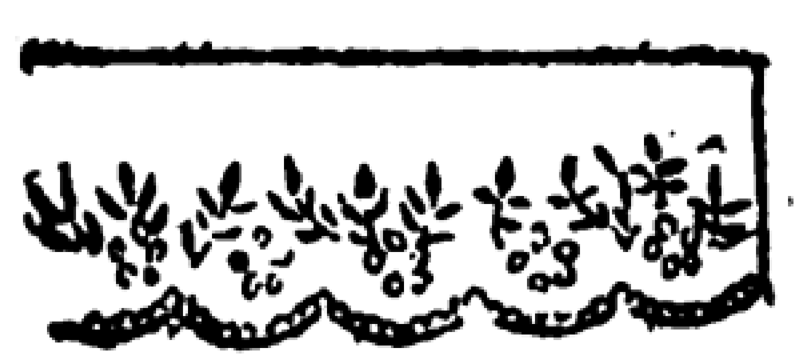
女子共立會　松江美佐子

先頃子供洋服に就て一寸お話致ました處、意外にも御同感の方が澤山にありまして、毎日形紙の御注文やら御熱心なお問合が澤山に參りますが何分多忙の中とて往々お返事の後れるやうな事がありますので、甚だお氣の毒に存じて居ります、就ては、其等の方々のために本號から順を追ふて形紙の拵へ方及び縫方の說明などを記載致し、幾分か御便利を計りたいと存じます、先づ此度は順序として嬰兒の下着から記載致します。

△嬰兒用下着

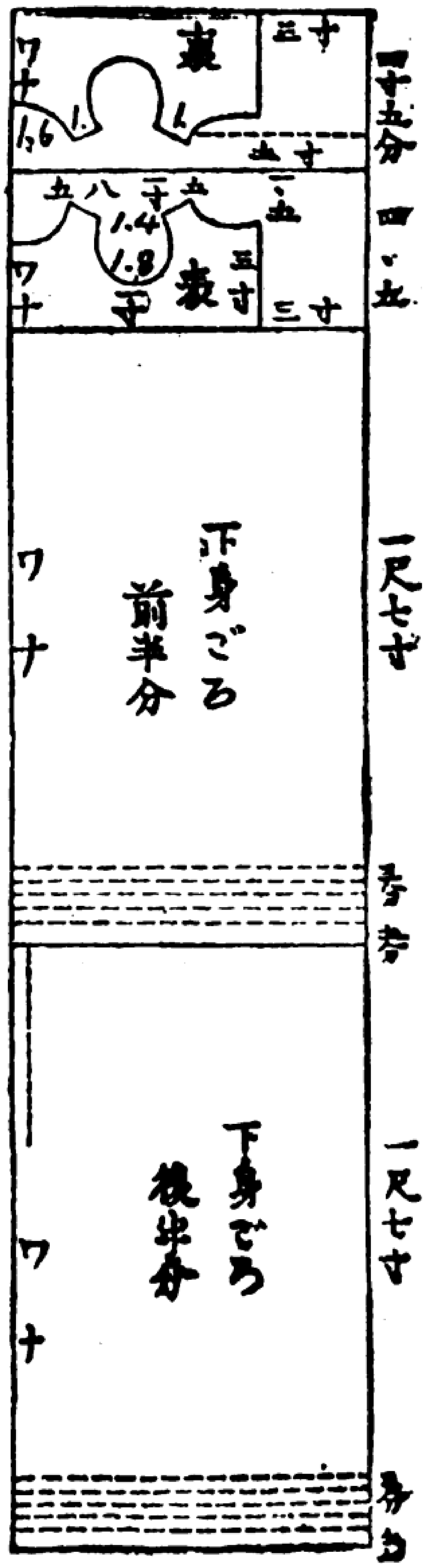


此下着は肩をボタンで掛けるやうに致して御座います、此は不意に汚れた場合などに、一々上着をぬがしたり、腕を拔くやうな事のないやうに、肩にボタンさへ外せばずつと下へ拔けるやうに致してあるので御座います、地質は必ず洗濯に堪え得るもの、例へばのり氣なしのキヤラコ、チンスックなどを擇びます、又色は總て白色のものを用ひます、用布は二尺巾四尺三寸此他に附屬品としては巾一寸五分位のエニブレードを六尺要します、此エンブレードとは、下圖の如きもので洋物店又は大きな糸物屋に御座います。



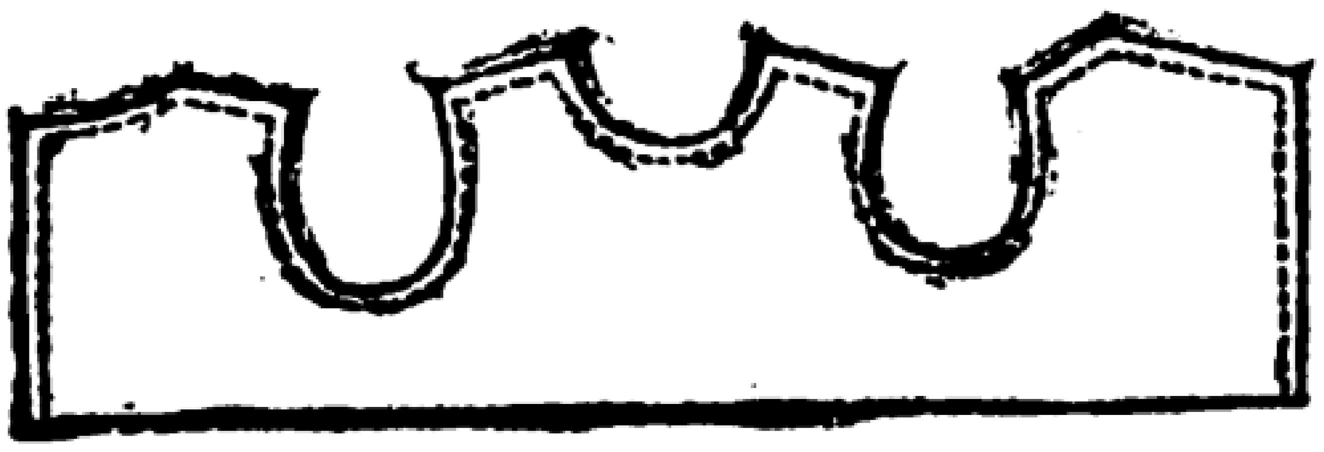
△裁ち方

總て洋服を拵へるには切れで裁つ前に先づ形紙を作るので御座いますが是は御覽の通り、形と申しても至つて簡單であります故、直ちに切れで裁つ事に致します、即ち左の通り



△縫方の順序

先づ第一に上身頃の裏表を合して下部だけを殘し、其他の部分をぐるりと縫ひて表へ返し、隅々を正數して、下圖の如く飾ミシンをかけます、夫より下身頃の一方の脇をはぎ合せたる後、裾の印を山に一分位のヒダを五六本取り次に裾へ、エンブレードを付けます、此は六尺のものを身頃の胴廻し、即ち四尺にちゞめて此のギャザの上へ身頃の端に折りを付けてのせ、仕付けをかけたる後、ミシンをかけます、夫より一方の脇も縫ひ、次に後の眞中のあきを三ツ折りにしてミシンをかけ、上下前を重れて、正しく止めて置きます、夫より上部にぐるりとギャザ縫ひをなし、此れは上身頃の下部に合してちゞめ、此れと縫ひ合します、但し此れは、始め



表一枚に縫ひ付け次に裏に折りをつけて、表から一周に飾ミシンを掛けます、最後に仕上げを致します。

先づ後の肩にボタンをつけ、前の肩にボタンの穴をあけ、尚後の眞中はボタンがけ、或け紐で結ぶやうに致します、尚此の衿廻り及脇ぐりの周へ、巾三四分の柔かいレースにギャザを取つて付けますなら、一層奇麗で御座います。

序ながら此れ等に就ての御質問は總て誌上でお答致しますから、本郷區彌生町三女子共立會洋服部宛に御出し下さい。

尚本誌には紙數に限りがありまして一時に澤山の形を記す事が出來ませんから、若し色々の形をなさりたいとお思ひになる方のためには「小供西洋服の拵らへ方」と題して京橋區築地二丁目廿番地服部書店から發行致して居りますから其れをお求めになれば凡數十種の形に就ての裁方や縫方がくわ敷御解りになります。

庖厨

此の月のお總菜は

◎木の芽田樂　豆腐を長さ一寸五分、巾五六分厚さ四分ほどに切り、これを布の上に並べ置き、よく水氣をとり、竹串にさして、まづこれを素燒にし、これへ、豫ねて用意したる味噌をつけて又ちよつと燒くなり、味噌は常の甘味噌に白砂糖少しと木の芽を入れて摺り味醂で溶きたるものなり。

但しこの竹串は青竹を用ひ、これを柄近くまで削り豆腐に刺す所は二股にして刺すなり。

◎煎り豆腐　豆腐を摑みくづして鍋に入れ豆腐が被る程の水を加へ、鍋を火に掛け、煮立ちはじめんとするときを度とし、別に目笊の中へ布巾を敷きたる處へ移し直ちに冷水を澤山注ぎかけ、豆腐の濁を去り、布巾を四方よりたゝみかけおき、水氣の切しとき、鍋に入れ、火に掛け、生鷄卵（豆腐二丁に付小なる鷄卵壹個の割合）を毀し入れ、絶ず金杓子にて掻交せながら空煎を爲し、之に濃き煮出汁と白砂糖とを加へ、バラバラになるまで煎り付け、之に生醤油を注し一寸と掻きませ、之を平皿の如き器に移し、薄く擴げて煽ぎ冷すべし。

◎鰆のかぶき燒　鰆をほどよき切身となし、これに金串をさして素燒になし、又醤油をつけて燒き、其上へよく溶きたる生玉子を塗りつけ、玉子の漸く乾くまでに炙るなり、あしらひには蓮根の酢煎などよし。

◎烏賊の木の芽あへ　まづ蓮根の皮をむきてゆで、これを亂切にし、烏賊もゆでゝよきほどに切り、これを味噌にあへるなり、味噌の造り方は白味噌六分に赤味噌四分の割合にてその中へ砂糖を少し入れ、木の芽を少し摺りこむなり、又上等にする時は獨活を用ゆるが獨活は斜切にして用ふるなり。

◎平目の煮付　平目を水にて洗ひ、刺肉庖刀にて皮をすきとり、鰓を出し、腹を開きて臓を取り、腹の中を水にて能く洗ひ、水氣を拭ひ、三枚におろし而して之

を適宜の切肉と爲し、味醂七分と清酒三分と水少しくとを鍋に入れ、火に掛け、一回煮立て、鍋の中へ敷笊を敷き、其上に前の切肉を一重にならべ少しく煮て、之に生醬油を控へ目に加へ、落蓋を爲して煮、魚に火の通りしとき、前に控へし丈けの醬油を注し、一寸と煮て鍋を火よりおろし、敷笊と共に肉を鍋より出して石皿の如き器に移し、直ちに煽ぎ冷して皿に盛り而してあられ生姜を添へ侑むべし。

◎筍の葛煮　筍の柔かさうなのを選りぬきてよくゆで一夜水に浸し置てこれを適宜の輪切になし更に銀杏に切り、味醂と醬油とを充分に入れてよく煮しめ、上より葛を溶きて入れるなり。藥味に生姜を擂りて入るゝもよし。

◎黄枯茶飯　並飯を炊ぐに用ゆる水に清酒と生醬油とを加へて並飯の如く炊ぐべし。
但し白米壹升に付き清酒七勺生醬油九勺を用ひ又水は並飯を炊ぐに用ゆる水の量より清酒と醬油との量丈け減じて用ゆべし。

◎あられ豆腐　豆腐を小なる骰子形に庖丁をなして、水の中へ放ち、二三回水を取換へおき、別に鍋へ濃き煮出汁に生醬油を加へ程好く味を付けし汁を入れ、火に掛け、煮立て而して前の豆腐を網杓子にて掬ひ入れ豆腐の浮上るを待ちて椀に盛り其上へもみ海苔を撥り掛け、蓋をなして侑むべし。

◎赤貝の敷味噌　赤貝を稍降となし、(湯煮をするにあらず、肉の色が白く變るを度として引あげるなり)皿に擂味噌を敷き、其上に右の赤貝を入れ、赤貝の上に纖打(極く細くうつなり)の獨活をのせて出すなり、擂味噌の仕方は、味噌の中へ砂糖と芥子とを入れ擂鉢にてよく擂るなり。

つけもの無盡藏

◎牛蒡の味噌漬

牛蒡の兩端を切り捨て、跡を六七寸位に切りザッと湯をくゞらせて味噌に漬くるなり、澤庵大根の味噌漬と同じく成るたけ桶の底の方に漬けるをよしとす、牛蒡は却々漬り難きものゆゑ、一年以上ならればは不可なり、三年五年古い程其味美なるものとす。

◎獨活の味噌漬

山獨活を兩三日陰干となし、莖がぐな〳〵と軟くなりし頃、味噌に漬けるべし、凡そ百日ほど立てば食膳に上せ得べし。

◎玉葱の酢漬

白色の玉葱にても或は黄色のものにてもよし、少量の鹽を加へてざつと煮、後ちその皮を剝ぎ去り能く乾して壺などに納め置き、而して胡椒、蕃椒など程能く入れ、酢を煮立たさせて壺中の玉葱にかくるなりその酢の冷えし頃を見計ひ密封して貯へ置き客來の時など出して供すれば最も妙なり。

◎即席奈良漬

即席の粕漬用原料としては糀瓜に限るべし、その拵方は瓜をそのまゝ竪に三分程の厚さに切り、暫時鹽に漬けたる後、之を水にて洗ひ布巾にて其水分を拭ひ取り、再び之を燒酎に白砂糖を加へたる中に暫時浸しおき、後ち程能く切りて用ゆるなり、最も燒酎を使ふは早く酒の氣の粕に浸み込ませる爲なれば、若し翌日にも用ゆる場合ならば燒酎の代りに直に味醂へ漬けてよろし。

◎胡蘿蔔の味噌漬

胡蘿蔔の頭尾を切り去り、五六日間風通しよき場所に並べおき、一時淺鹽にして漬け込み三四十日の後取出して、一日天日にあててそれより味噌に漬くるべし、大根、牛蒡など、よく漬かれば珍らしくて調法の品なり。

◎鹽魚の麴漬

先づ酒と水とを等分に和して糀を捏れ、ひた〳〵にしてそれより魚は何魚にてもよけれど、まづは鯖なり、鮭なり、其他鹽つよき魚類の切身を漬くるべし、鹽は魚類の含めるものにて充分なれば鹽梅するに及ばず、壺などの中に漬け置くべし。

◎青梅の漬方

青梅を若き内に摘み取りて一夜水に浸し置きて其苦味を去り、翌日水を切り青梅一斗に鹽二升の割合にて輕く押石を爲し置き、水が上ればその水を零してサット洗ひ、水氣を乾して再び少し許の鹽をして漬けるべし。

◎青梅の甘露漬

青梅の青きを取り、一夜水に浸して苦味を去り、砂糖蜜に漬け、且つ紫蘇の葉に包みて白砂糖をふりかけ、輕く押石をかけて置くなり。

◎山葵の粕漬

山葵を短册に刻み一寸鹽押をなし、翌日水を切つて粕に漬けるべし、壺などに入れて目張りしおき入用の時出して使へば酒客などによく喜ばるべき物たるべく又醤油を注けて食へば味よし。

◎鮑の味噌漬

生の鮑を水洗ひもせず、鹽揉みもせずそのまゝ貝を剝き腸を去りて赤

味噌の中へ押へ付けて置くなり、大抵夏季ならば一週間冬季ならば一ヶ月にて漬加減となる、用法は甘煮となすには味噌を洗ひ落し一分程の厚みに小口切となし、味醂ばかりにて煮て出すべし、又皿盛となすには味噌を洗ひ取りて平鳥に殺ぎ金網にのせて一寸燒くべし、次に、水貝にするには矢張り味噌を洗ひ落し、一分ほどの薄みに小口切となし、丼に入れ水に浮して客に進む、夏季の料理には頗る妙なり。

◎金柑の鹽漬

水と鹽とを等分に合せ、一度煮立て冷しおき、金柑の未だ十分熟せざる實のみを取りて例の鹽水に漬くるなり。而して風の當らぬやう目張して貯ふべし。

◎蕪菁の蕃椒漬

蕪菁を薄く切りて鹽漬となし押石を載せて置き、その後柚子の皮と蕃椒とを刻みて混ぜ、柚子の絞り汁るに酢を交ぜて浸しおくなり。

◎三つ葉の溜漬

三つ葉の白き所ばかりを揃へ、竹の皮を細くさきたるものにて束り、根と葉とを去り、水氣を十分に切つて、味噌の溜りを籠にて漉たる汁へ漬くるものとす、二晝夜ばかりでほどよき漬加減となる。

◎百味加藥漬

生姜、茗荷、松茸、蕈、紫蘇、青柚子、山椒、蕃椒など何品に限らず鹽押にして貯へ置くなり、用法は生の品の有り合さぬ場合などに一寸鹽出して使ふものなれば頗る調法なり。

◎薤の三杯漬

割合は薤一斗に鹽二升位にて、生姜の葉を多く入れて、輕く押石を施して水を揚げさせ、三十日計も經つて其水を零し、暫時水を切りおき、更に三十日計りして砂糖蜜に漬くるなり、鹹味は薤の持前なれど、若し辣き時は少々酢をさしてよろし。又酢漬を拵へるには最初能く薤を洗ひて食鹽を振りかけ、一日天日に乾かし、別に酢を一度煮立たせて、ジタ〱に成る程掛け、器に入れて目張し置くものとす、丸蕃椒など入れ置かば妙なり。

◎麹　漬

麹三枚に味醂一升を加へて、ねかし置き、干瓜、鹽押茄子、其他干大根など刻み込み、又紫蘇の實、生姜、蕃椒など少しづゝ加へ、漬加減を見て賞味するものとす、一名これを漬物の醍醐味と云へり。

◎梅　花　漬

梅干の核を去り、肉のみを擂鉢にてよく摺りつぶし、これを平たき器にのべ、梅の花の蕚を短く切つて、梅肉へ挿し、蓋をして目張をなし、置くべし、何時までも馥郁たる梅花の香りを保ちて風味この上もなし。

◎蕪の千枚漬

蕪を極薄く輪切となし、一枚づゝ鹽をふりかけて桶又は鉢に漬け、輕く押石をなし、軈て鹽の溶けかゝりし時分を見計らひて其鹽水を捨て、更に別の器に入れて所々に丸蕃椒をはさみ、三杯酢をかけて浸し置くなり用法は一晝夜も經ては漬るゆゑに之を四つ折にして出すべし。

女學世界
定期增刊

運命開拓法

第八卷第七號
五月十五日發行

運命は天にあるか、天笑つて答へず、運命は努力にあるか、努力は徒らに奔命に疲れ了らんと欲す、然らば奈何、這般の天機玄妙不可思議にして猥りに人間の容喙を許さずといへども、幸に近世の科學の齎らす理法によれば、人事悠忙の間自から一道の脉絡ありて、努力も亦必らずしも無益の勞にあらざる事を示す、是れ運命開拓法の出る所以なり。

彙報

◎女子大學の榮へ

四月十一日午後女子大學第五回卒業式及び同附屬高等女學校の卒業式を擧行されたり、卒業生は大學部は家政科百三名、國文科四十三名、英文科十七名、總て百六十三名、高等女學部は八十八名なりき。

正一時開始、來賓は生徒保護者の外は教育家が大部分を占めたり、卒業生は順を正して階下に居流れ、衣の色、髮の飾り、今し校庭に滿開の花を此處に移せるかと思はれぬ。

麻生學監の先學年中に完成せる事業の報告は簡にして明、次に式の如く證書の授與あり、後校長成瀨氏は二時間餘り諄々と告辭演說を試みられぬ、要旨は「我女子教育に志してより今や三十一箇年、今年始めて我理想の卒業生を出すを得たり、それは今年の生徒は七年間本校にて修業せる大學生活を社會と家庭とに擴大する精神的生命を有すると共に、又個人の理想をも確立し居る事種々の事例に徵して明白なれば也、而に我は之をもて理想的卒業生として世に紹介するの勇氣ありと聲言す、爾等亦希くは卒業式は社會に打つて出るの始業式と心得、或一部の社會が女子高等教育を目するに職業教育とし良妻賢母を見るに高等下女頭として蔑むの風潮と健闘せられん事を」と云ふに在りて、故野村望東尼の「二心夫の大和心を綯り合せ末一筋の大綱にせむ」の國風を吟じ、之を心の守となし世の爲め人の爲め生涯を通して活動せよと結ばれたり。

軈て卒業生の謝辭を高女の方は淺井みさ子、大學部は淸水まつ子が總代として朗讀せしが、振鈴の如きの美聲も流石母校を離るゝ悲哀に折折は淚聲となりぬ、殊に大學部の生徒側辭の文中「明日よりは母校を出でゝ波風荒き人生の……恐へばいとゞ心細さのきはみ」に至りし時は、彼方此方に泣歔欷の音を聞き、女の來賓の多くは帛子に目を掩ひぬ。

西園寺首相、牧野文相の祝辭が續いてある筈なりしが、兩氏とも病氣の爲めに臨席なく、纔に澁澤男の簡單なる演說あり「ぶるな、らしく」で行つて貰ひたいと來賓側の喝采を博したり式後豐明館の樓上樓下に分ち來賓一同に生徒手製の茶菓を馳走されしが、何れも其風味の素人離れせるは驚くばかりなりき。

◎棚橋刀自古稀祝賀會

東京高等女學校、東京技藝女學校にては四月十三日午前九時より同校紀念式を兼れ校長棚橋絢子刀自の古稀祝賀會を開きたるが、校內廣庭に大天幕を張りて會場となし、先君ケ代の唱歌ありて、校長の勅語捧讀、式辭に次ぎ生徒一同校歌を奏して紀念式を終り、其れより祝賀會に移るや、小川理事長開會の辭を述べ、金太仁斎氏は絢子刀自の波瀾多き生涯を詳述して一同を感奮せしめ、職員總代、生徒總代、卒業生總代の祝詞朗讀ありて、次に可憐の少女は紀念品を贈呈し之に對する刀自の挨拶あり、終りに祝歌「桃の下陰」を合唱して式を閉ぢ其れより午餐の饗應ありて、午後は餘興となり、卒業生松野美喜子の獨唱及び同西村賀代子のオルガン伴奏は春雨に相和して滿場をシンとせしめ、筑前琵琶、手品、狂言、薙刀等も面白く、而して卒業生の祝賀行列は刀自の赤兒時代より古稀に至る迄の面影を扮して大に喝采を博し、更に敎職員の福神行列は其假裝頗る滑稽を極め滿場頤を解きて之を拍手歡呼せり、又校舍內には活人畫、屋外には諸種の遺物などありて大に賑々しく、午後四時過ぐる頃和氣靄々の中に散會を告げしが、流石に女流教育家の元老の祝賀とて、曾て刀自の薰陶を受けしもの及び縁故ある、貴婦人紳士等數多列して頗る盛なりき。

◎女子美術學校の卒業式

三月廿六日午前十時より第十二回卒業證書授與式を擧行したり、式場は階上の大廣間にて、廻らすに紅白の幔幕を以てし、生徒はギッシリと詰り、來賓はズラリと竝べり、先づ校長佐藤夫人の式辭ありて、君が代、勅語捧讀、證書授與等最も嚴かに取り行はれ、其れより校長の告諭として、「近來の若き婦人は、學校を卒業すると兎角よい氣になられるが嘆はし、斯くては世間の攻擊を受くるもまことに致し方なき次第なれば、諸姉は成るだけ内輪にして、貞淑の徳を現す事に注意せられたし、單に手の先のみの美術に止らず、心の美をも合せ得せしむるが本校の方針なり」との主意を述べられ、次で千家男爵、尾崎市長の祝辭、坪井博士の人類學的の美術談、監督正木直彦氏の卒業生の成績に關する演說等あり、最後に卒業生が答辭を述べ了りて一同名殘りに「八咫の鏡のしるしもて四海をてらす我校は云々」の校歌を唱する際には、流石に母校のなつかしくてか、目に啼淚を催せる者も見受けし。

◎女藝專修學校卒業式

牛込横寺町なる同校にては三月廿九日其の第一回卒業式を催されたり、待つ間暫らく三層の新校舎より漏れ來る唱歌のゆかしと聞きつる程に、やがて開會を宣せられ、先づ校長子爵松平敬義氏の式辭、普通科高等科等の證書授與等あり、それより來賓の演說ありて、極めて有りふれたる事柄を最も面白く述べられたり、何分創立以來初めての卒業式なれば、卒業生は左迄多からざりしも、職員生徒間の親睦の樣一擧一動に現はれ居たるは、多く他に見受けざる處なりき。

◎明治女學校實習部

巣鴨庚申塚なる同校にては、去る明治三十九年より、普通部の外に別に實習部なるものを置き、高等女學校卒業程度の修學者を收容して、二ケ年修業にて家庭の準備教育を施し來りしが、其の結果頗る良好なれば、今回又新に二十名位の入學を許すと云ふ、同部は學術と技藝とを調和修練せしむる方法として殊に學科の按排に腐心し、最も着實なる方針の下にあるものなるよし、尙ほ普通部第一二學年にも幾何か收容餘地ありと聞く。

◎東洋女藝學校展覽會

四月十二日神田猿樂町なる同校にて製作品の展覽會を催されたり、第一の室は裁縫室にて、其處には美はしき衣服の數々を列べられ、第二は刺繡室にして、多くの陳列品の中には、却々立派なるものを見受けたり、それより造花室に入れば、櫻花の咲き綻びたる中に、女學生の嫣めいたる聲にて、「すみれは奈何です、一つお買ひなさいまし」と勸めらるゝまゝ、ニコ〳〵して買ひ行く男學生もあれば、算盤珠をカチ〳〵はじく廂髮もあり、すつと廻つて下へおりると休憩室あり、お茶が出る、お菓子が出る、傍を見れば京都の出來なりとて多くの參考品を列べられたり。

◎默語會の發起

本邦美術工藝界の耆宿として偉大の貢獻を爲せる故淺井忠氏の功績を顯彰して名聲を不朽に傳へむとの目的を以て今度默語會なるものを發起せられたり、其の事業は、紀念會を開く事、傳紀を編纂し遺作を蒐集して刊行する事、紀念物を建設する等にして、事務所は東京にては麴町區一番町七番地田中松太郎方、京都にては上京區岡崎町關西美術院内に置かれ、故人に知交の有無を論ぜず同好の士は何人にても入會を許すと云ふ。



初夏日記

水野仙子

六月五日。

おとゝひ着替へたるセルの、朝はまだ稍々肌寒きを覺ゆれども、硝子戸品よき洋物店に、ショールのかげは見えずなりて、かざられたる夏帽子など、白々たるがいと晴々し。そよ何となう夏めきたりき。さびたりし八百屋の店に、蠶豆青々と盛られて、やう〳〵に生氣つかむとす、堆き夏蜜柑の色何となく胸を透かす心地ぞする。

お針の師訪ふを茲に三年、通ひなれたる通り横町の今朝ふと氣まぐれに戸數を數へ見ぬ。まづ芝居のビラ貼る角の茶屋よりはじめて一軒二軒、かくて學校の前角まで、五日ばかり前空きたる家もろともに廿八軒横なる道を後にして、學校の脇道に入れば、端なる家は、戸に桑仲買のまづき文字。それより五軒と數へてほと息を切りたる時、顏のみ馴染の赤き手がらの若き妻、爐の火つくろふ火箸の手とめて、愛らしき笑窪の出現はしぬ。此家、店なる品は、下れる草鞋に並べるマッチ、棚に蠟燭あり、塵紙あり、さてはいろ〳〵と箱に駄菓子、乾つく咽喉に、盛り切一ぱいの魚には鯡、よろづ間に合ふと、近在通ひの馬子達がお得意なり。まことに夏なり、こゝに蒸し芋の息たゝずなりて、かはりに出でしは桶の水にところてん、棚なる德利に口したる杉の葉も青々しう、戸には某呉服店の、夏物賣出しのしの字大なり。

ひとり離れて杉垣圍ひの、師の君が家まで、棟割長屋十七と數へられぬ。

此夕夕立あり、雷遠くに聞ゆ。

母君のセルやう〳〵縫ひ上りたれど、共襟かけだけ

殘りぬ。

同、六日。

肥りつぼの其體には、前衿の大巾ならではなど丶、人惡るく姉上揶揄ひ給ふに、耳を塞ぎて急ぎ家を出づれば、憎らしや猶、笑ふ聲の耳に響き來る。

令孃氣取りてなど、母上のたまひ乍らも、望めりし被布、縫ふべく今日は許されぬ。袖丈は五分つめよとなれど、今一年二年はと何となう心細し。

彼の家に、かの若き妻の姿は見えず、一臺二臺道塞ぐるが常なる荷馬車の影もなく、人もあらず、家のうち何となう靜けき樣なり。二三軒過ぎてふと振り回り見たる時、笄長きおばこ髮の老婆、急ぎ彼の家に、はいるを見る。さてはとまた見回られぬ。いよ丶彼の妻產氣つきたるなるべしと。末子と產れたる身は產の如何なるものかを知らず、人事乍ら氣遣し、たゞ安かれと心に念じて。

話の切れ目〳〵を針の手とめては彼の人は如何したらむ、早や產れてか等と氣を揉むを、人々お可笑しと笑ひ給ふ。さては彼れは貴女のお姉樣？など丶我顏覗き込む君の笑み憎らし。

仕返しに、蚤の磔を、君の針さしにさして遁りぬ。

三時頃、落ち來りし一粒二粒、憇ひ返して空はまた晴れつ、屆け呉れたる傘、徒らに邪魔となりぬ。

同、七日。

來客の爲め、少し後れて行けば、日は校庭に葉櫻の影黑う、少さき女生徒の體操初められてあり。見遣りつ丶歩みを運べは、彼の家に赤兒の泣く聲我を驚かしぬ。さてこそと胸は躍りつ、見れば出商ひに留守勝ちの夫、父なる人、爐の傍に柴折りて居ぬ、耳はひたす奥にや傾むく、子供一人店に立ちたるを、と思ふ時、輕く我肩を打つ人あり、驚きて見れば富子の君、また一つ輕く叩きて、お目出度うと、何かは知らず、顏見合せて失笑しぬ。秋の麁々かしさ、折角樂しみの辨當解けば、菜入はたゞ白く綺麗に。今朝の忙しさは承知乍ら、人ある如く屬しれば、師の君笑ひて煮豆を給ひぬ。

夜、郭公二聲聞きたり。

同、八日。

朝より暖き日なり。途中、何處よりか首輪なき巨犬我が前になり後になりす。在所の母ならんか彼の家に面影似たる中年寄の働くを見ぬ。ふと見れば御燈明あかあかと照り輝きて、白き紙は神棚に貼られたり。いよ〻名は付けられたるらしと、まぐさ喰む馬の背のかげ、身を反らして凝視れは、一、出生、千代の墨跡鮮かに。さては同じ運命の女なりしかと打ち微笑まれぬ。



同、九日。

我物なればか、常よりは捗ゆきて、午少し前彼布は仕上りぬ。初のハイカラなど〻貶されたれど裏の白きは紫紺に映えたり。

歸り路、馬場なる叔母上尋ねてお團子の馳走になりつ豐樣の飛白の四つ身賴まれて歸る。

夕げ終つたる頃より強き雨あり。電光頻りにす。

同、十日。

牡丹は亡び、躑躅散り、花かつみまた色褪せて、檜扇やう〳〵丈延びたり。

心地よき好天氣。

襁褓干されたる彼の家の庭にも、撫子の色あざやかなるを見て。

同、十一日。

師の君が許に人の來て、毎田川の菖蒲、今盛りなりと傳ふ。近く率てゆかむと約し給ふ。

同、十二日。

清子君が急ぎのもの手傳へたれば、歸りは早や街に電氣つきぬ。

歸り見れば、西の京なる従姉より小包着きてあり。急ぎ開き見れば優しき女持ちの扇一對嬉しきこと限なし。母上は添へられたる手紙の手蹟を褒めて、少し心せよと我を嗜め給ふ。故とにはあらざりしかど、夜、久々にて雁のゆきかひを彈きぬ。

同、十三日。

朝髪結ひに行く。きけば往復六日かけて、東京に行き來りし由、樣々と達者なる話あり。われは桃割に結ぶ。義夫の運動襯衣作るべく、白キャラコ求めて午後よりゆけば、人々明日は花菖蒲見とて、さゞめき合ひ居ぬ。

明朝は降るなと心に祈りてさて床に。

同、十四日。

八時家を出でぬ。一行に例の小夜子の君居たれば、名高き氣取りやの君も、半巾口をはなれざりき。晴れと着かざりし人々、此地にも流行の潮は流れて、オリブの洋傘、七分をしめぬ。

行程一里半、園につきたる時はすでに十一時過ぎなり。去年よりは花輪大きけれども惜しや開き過ぎたるのうらみあり。主人は云ひぬ二三日前が見頃なりしとさもあるべし。

空じき腹は鮨に膨らみたれど、冷たき水の戀しさに一人草履つきかけて、松の木陰を徊徉ひぬ。先刻茶屋の女の手桶を下げてこゝより出でたるを見たれば、狹き一すぢの道を見出でゝ、柔き土踏みて、奥へ〳〵と

入れば、名も知らぬ小さき紫の花咲き亂れて、楢の樹松の樹、追々に繁し、振りかへり見れば遙かなるところ、茶屋の白幕うちそよぐのみ、林の中、身に纒へる浴衣の白きが氣味惡るし。淸水などあり得べくも見えざれば、戻らんかとそと立ち止れば、ふと目に入りし古き井戸、それよとばかり



小走り寄らんとせしも、朽ちかけたる井桁を蔽ふ熊笹の繁り、一もと大きう傘したる松樹のかげ、邊り小暗きやうなるに折からとて心淋しう、さては深碧ゆるがぬ井の水に、七草模樣の衣亂れて、眞白き面におどろとかゝる黑髮の……などとまざ〳〵胸にうかびては堪え難う、身を顫はして一二

歩退りぬ。折しもはるかに絃歌の聲。迷ひたる旅人の人里近きを知りたる時の如、俄に心強う、思ひ返して近寄りつゝ縄のみ新らしきつるべ下せば、鏡は破れて我顔は砕けぬ。水は冷たし心地よし。後れ毛かきあげまた水の面を覗き見れば、松の影、笹の影、ゆら〱〱と稍々に靜けし。汗おさまりたる身を、やがて蘆簾のかげに現はせば、人々何處にとて顔うち見成る。それよ人々、うかべる其微笑みを何と見し。

女の足の遅れがちに、町に入りたる頃は灯ともされぬ。

湯に入りたれど足重し。

直ちに前後も知らず……。（十五日記）

同、十五日。

ふと目覺れば折しも鳴り出したる柱の時計、八つと數へられたるに驚きて飛び起くれば、足の重きに昨日を思ひ出されぬ。揚子口に、井戸端に至れば、珍らしや桶の水に一八美し。今し方六軒の爺が我にとて持ち來りし由、水汲める秋は云へぬ。さるにてもいたら寢過したるものかなと心恥かし。進まぬ餉げすませば、花の師、舞田川の歸りなりとて寄らる、白の蕾、四五本携へ給ひたれど露は早干てあり、幸ひに彼の一八逆勝手に生けぬ。

裁縫は休みつ、夕げ後用ありて、師の許訪はんと例の道何氣なく行きしが、ふとあるものを見出でゝ我身はそこに釘づけにされぬ。

見よ二日見ぬ此家のこの光景を、閉ざされし戸は靜に開けられて、香の香こもる灯はさと黒き道を劃りつ地に長う影うつしたるは僧なり。續けるは老爺、その背に負ひたる小箱はそも何ぞ、蔽ひたる白布にそれと知らるゝ柩にあらずや、さらば何人の？問ふまでも無し、打ちかけたる花色染めの一つ身は、生るべき子の玉肌包むと、或る日膝にひろげて彼の妻の、鈍き針先を油の髪に通すを見たりしそれなるを。あゝ千代子は死したるなるか。それよ健かなりとのみ、一昨日の夕つ方美しき車の止まり居たりしも醫師のそれとは氣づかざりしが……………。

若者の持ちたる笹の、白張提灯ゆらめきいでゝ朧ろに燈燭の火は透きて見ゆ、送る人はたゞ二人、鐘の音細く僧に従きて、今はと立ち行く冥府の門出、喪簾のかげ、人の影するは母か、祖母か、あはれさめ〴〵と忍び泣く音の……見上ぐれば星の瞬き夢の如、夢見心地に我もまた柩に従きぬ。笹さら〳〵と風に鳴いて、心あるや冥路を導く灯のたゆたひ、もの言はぬ人々の顔はの白う、柩負ふ老爺の草鞋踏みしむ音は、露、苔すべる冥府の岩戸に洞より反して響く足音、魂やさまよひ出でんかと、身のうちさつと水を浴びぬ。道分るるところ、のぞめば遙に森のかげ黒う、こそよ千代子が墳墓所。柩は静に道を入りぬ。

暫くは見送られつ、實にはかなき汝が運命よ生れ出でゝ僅かに九日、十日、さとくも世のけがれを知りて姿なき慈母の膝下に急ぐか、さらでもあれ、殘されし汝が母の、汝が父の、悲歎はそも幾何ぞ、今宵この柩見送らんとては十月の苦しみはせざりしものを。此世に面は見ざりしとても、前の世慈しみし汝が運命の、あまりにはかなきを我は悲しむ魂よ迷はて往けとばかり、佇む袖をふく涼風に、忘れし我にかへりぬ。

宵に見しこと、胸にうかび目にうつり、目の冴ゆる夜なり。

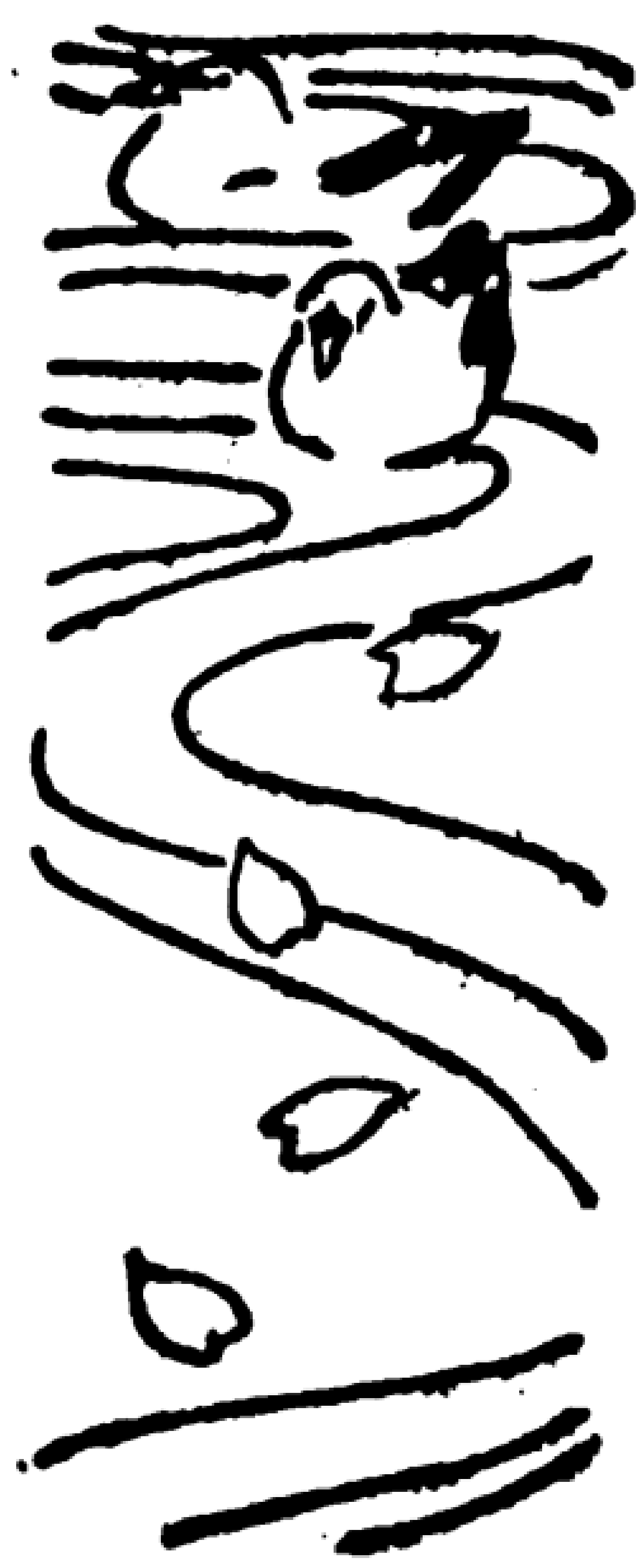
同、十六日。

行きも歸りも彼の家の戸は閉されたり。

過ぐる雪の日のつれ〴〵に、誰やらが發議の阿彌陀鬮、我可笑しくも使の鬮にあたりて、詮方なく〳〵お薩をと面赤めて、彼家の店に立ちたりしが其折よ、お寒きところをといろ〳〵勞らひし彼の妻の、好いたらしうと思ひし心、日々に面を見交しては、悲しみもはた歎きも人事ならず思はるゝぞかし。

子を失ひし母人よ、恙なくてか。

夏は漸々暑からんとするを。



友の結婚

田中ゆり子

卒業後のあかつき身を處する参考にもと。我より一歩早う浮世の山路に旅立給へる。友の四五に。此の頃の御様子よろずきかせたまはれと無禮を幾重にも謝して。せつに願ひやりしが今日しも嬉しや。第一の返りごとは來にけり。

御手紙のおもむき承知致しました。何だかおはづかしうございますれど。他ならぬ貴女様の。御參考とやらになります事ならばと存じまして。萬お打明致しますから。久子様。何ぞお笑ひ遊ばさずに……。

私の此の上村家に嫁りましたのは。一昨年の、山は霞に野は花にと、申す春の最中。其時の感じは如何にと。定めてお尋ねでございませうが。之れ計りはホ、ホ、、。ごめん遊ばせ。何んぼ私がかまはずやだと申しましてもホホ、、。

貴女様もやがては…………。と存じます。

上村家は始め。貴女様もごぞんじの。アノ君子様をとの、望みでございましたが。お心の高い御器量よしの君子様の。どうして御承知なされませう。學問と申せば。女學校を卒業遊ばして。村の先生と肩を並べる位にお出來なさるさう。女子で以て英語をよむものが此の村は申すまでもなく。一里四方の近在で。幾人ございませう。君子様より外。鐘や太鼓でさがしてもございませんのですもの。田家がいやなのも。サラ〳〵御無理ではなく。御不承知なのも。あながちに我儘計りとは申されません。

で君子様のかはりに私が縁附ことになりましたのです。

願ひ通り君子様に御同伴に私も女學校へ參つて居りましたならば。私も。君子様と同樣。上村家との縁談

は不承知であつたかも知れません。よし縁附つて居りますにしても。只今の樣に滿足して其日〳〵を樂しう過しては居なからうと存じます。

然し今はこう申して居りますものの。父が分相應といふ事を考がえろと申して。女學校に入學のことを。何うしても聞き入れて呉れませなんだ時。私は何の樣に悲しかつたで



ございませう。よく種々の無理を申して兩親をこまらせました。

其時。あゝ其時。目前の愛に曳かれて。私の願を聞いて呉れましたならば。今頃は虛榮とやらに惑はされて。久子樣。私は必と〳〵淚に袖をぬらして居るでせう。蒼い顏して吐息計りついて居るでございませう。

其後のことでした。

仲の好かつた君子様が。二年目の久しぶりで夏休にお歸り遊ばすと云ふ事を聞きましたので。御着は四時二分とのことでしたが。もう嬉しうて／＼家にジッとして居らませんので。午後早々停車場へと迎いに行きました。

歩いたり。腰掛たり等致して時間を費やして居りましたが。扨ても待つ間の長い事。機關車の響きの遠くに聞こえた時の喜びは。マア何程でございましたか。頬は上氣して紅く胸は動氣の高ぶつて。眼と申しましたら蟻程のものでも見のがさじと輝やいて居るのですもの。他人から見ましたら狂人とでも見えたでございませう。

汽車は止りました。

二等車からは。美くしい紫のお袴に光つたお靴召した令孃達が四五人ぞろ／＼と此方へ…………。

其中に君子様のお姿たを認めました時。私の足は釘付にされた様になり。手足はブル／＼と顫へ出しました。

マア君子様のお美くしくお成遊ばされたことアノお召物の御立派なことゝ思ひますと。昔しに變らぬ。我が田家姿がはづかしく成りましてお目にかゝつたら。「お懐かしう」と一番に縋り付う。アヽも申そうコウもと。昨晩一夜眠らずに。考へたことは何こへやら。只だお歸りとのみ幽かに／＼。

おそる／＼頭を上げて。君子様はと見ますと君子様はチラと此方を御覽遊ばしたきり。

御靴の音高う。胸はり出してお友達と。愉快げに笑ひさざめいて。お宅へとお歸り遊ばすのでした。

樂のしみに樂しんでお迎へに來たものを…………恨めしいお方と計り。其の得意らしい後姿を眺めて居りますと。涙は止度もなく頬を流れて來ましたので。思はずそこへ泣き伏しました。

其當時。私は口惜ゆうて／＼心の底の底から。兩親を恨みました。

兩親さえ私の願ひを聞いて與れたならば。此樣な恥はかきはせんのに。此様な口惜い思はせんのに。私も

君子様と同じ様に。えらい立派なお孃様に成らしやつたと云はれるのに。私が彼れ程にたのんだのに。ウンと頷づいて下さらなんだのは。君子様の御兩親のやうに私の父や母は。私を可愛がつては下さらんのであらう。あゝつまらんつまらん。一層池へでも陷つて死んで仕まふか。家を飛出して何處かへ行つて仕舞ふか……と私は其の時。實際に此樣な恐ろしい心を出しましたのです。お呆れ遊ばしたでせう。久子様。私は大膽ではございですが。考へ通り行ふほどに。

主人と申すは至つて溫順しい性質で。お茶屋遊び一つ致しませず。舅や姑は昔氣質のかたくろしやですけれど。子供を大勢もつたおかげには。無理な小言を申しませず。此の秋靜子と申す女の子さへ。產れまして一家は。久子様お喜び下され。無事太平で賑はしう暮して居ます。

子を持つて知る親の恩とは。ホンに其通り。五つ六つにもならば。年に一度の大阪行か氏神様のお祭より外には手を通さぬ。アノ大事の〱長襦袢や。ちと華美なれども。里の母が父に隠して買て呉れました繻珍の帯なとを仕立直して靜子のにしてやらふと今から樂しんで居りますのですよ。炬燵をかこんでの夜毎の話しは。いつも靜子の上。オヽ然うです昨晩のことでございました。話の調子に浮かれて。ツイ何心なう私が。何なお家へ靜子を縁附ませうと申しますと。お母さんのお膝に抱かれて。ヲッパイ飲んで居る様な花嫁さんを貰ふても。何家も仕様は有るまいと舅が笑ましたので。皆々大笑を致しました。

此の様に幸福にくらしますのも。全たくは父母のお陰なのでございます。

世の中に親ほど結構な者がございませうか。我が子悪しかれと思ふ親が。何處の世界にございませう。それですのに恨んだり泣いたり拗戻たり致したしたのは。何たる我が儘なことでございましたでせう。今はミシミシと後悔の致されまして。春秋の里歸りに其話が出ますと。背中に冷汗が覺えず出ますのでございます

よ。
久子様も今にお縁附になりましたならば。御両親のありがたい味がわかるでございませう。
親に背いて縁附たために。つらい〱思ひをして居る人が此の村にございます。
名はお秋様と申して。都育ちのお綺麗な方。何でも此の春野に摘草に行つての歸りがけ。お連の方がさきへ行かれたので。ツイ氣の急まゝに汽車の來るのを知りながら。レールを飛び越やうとなされましたが。物に躓づいてバタリとレールの上に。お倒なされたのを今の旦那様の米吉様が。折よく傍にお出でなされたので。一生懸命お秋様の手を掴かんでお引つぱりになつて。危ふい處をお助けなされたとの事でございます。お秋様のお身體がレールの外へ出るなり。汽車が通りましたとやら。マア何んと云ふ怖いことで御座いましたらう。
で御両親が。御恩返しは他に種々とあるからと仰しやつたのを。お秋様はお聞き入れなく。命の親の大恩人ですからと。此の田家へお嫁入してお出なされたのでございます。
四五日前道でふとお秋様に出合ひましたとき。何心なう。マアお秋様のお瘠せなされてと私の申しましたのが話の糸口となりまして。種々とお氣の毒のお話を承まはりました。お秋様の仰しやりますには。
マア百姓の仕事程つらい物はござりませんなア。私は心では何程の事でも忍耐致しまする氣ですが、身體がとても續くまいと思ひます。ご飯焚やら拭き掃除は。少しなれましたら出來ますが。稻を扱たり籾をすつたり仕ます事の。困難かしうございますこと。皆様の急がしさうにして居られるのに。私一人が疊の上へに坐つて居りますのも氣樂なので。私も手傳はして貰ひませうと。皆様のお仲間へ這入ましたが。何うして仕なれぬ事の出來ませう。只多くの人に笑はれる計り。口惜うても仕方がございません。一寸此手を御覽下さりませ。僅か半歳あまりで此の節くれ立ちましたこと。お琴の爪をはめましても。さ程見惡くは御座いませな

んでしたが……。此の間からは皹さへ切れましてございます。

恩のあるお方とばかり。思ひつめまして親の意見を耳に入れなんだ罰があたつて居るので御座いませう。

他人様にも見へる位ゐの此の痩をやがて。間のないお正月の里歸りに。何と兩親に言譯を致しませうやら……。ほんに私程馬鹿な者が廣い世界に二人とございませうか…………。

× × × × × ×

× × × × ×

何といふおかわい相な方でせう。御不憫な方でせう。然しお秋様の不幸も、ツマリ牛は牛づれと申す事をごぞじなつかつたからだらうと存じます。三味線やお琴を持て居なされたお方が。何うしてお百姓のお嫁に向きませう。

ツマラヌことを長々と書ましてさぞお退屈でございましたでせう。久子様さやうなら。





二人の箸が、箸箱の中で、一所になつてゐたとて、笑ひこける若き妻、旦那様のあるかなきかの髭を「あたつておげませう」とて、赤襷かひがひしく、剃刀をとつて、後に立つたが、二人の顔が並んで鏡に映つたとて「何がそんなにおかしいのだ」



婦人の最も榮えある一日

並河良孝

婦人の一生涯中で一番變化の激烈で、又一番晴れな日は何時でありませう。結婚の日であるといはねばなりますまい。新郎新婦が手に手を執つて新生涯に入るときは、見るもの、聞くもの、樂しくて、うれしくてほゝえみ迎へる樣に見えるのであります。

茲に述べるのは米國の結婚式の光景ですが、此時は教會堂はいつも人を感動せしめます、うつくしい此の儀式の場に充てられるのは、ゆかしくて、いかに簡單な禮儀でも、どことなく重みがあり、品が高い樣に見えます。結婚の當日早朝、教會に來りて、日除(雨除)をしつらへたり、毛氈を入口に敷いたりするものもあるし、馬車の扉を開く役目をなすものもあれば、跪く際に必要な座布團を敷くものもある、白いリボンを手にせるもあります。

來客は帽子や外套を小役僧にあづけて、アイル(會堂内の側堂)の定めの席につきます。その席の數は、無論客の多寡によるのであります。花師は大廣間を飾り、高い壇は椰子の葉もて奇麗に飾られ、座席の後ろも各々飾られます。さうして、種々雜多の花が、高壇のレイルにひまなく裝飾せられる。樂隊は客が來るよと見ると直ぐに、奏樂を始める。案内者(Ushers)は、婦人の手を執て入つて、花嫁の友人なれば左方に、花婿の友人なれば右方に案内するのであります。纏衣は玄關にてぬいで、腕にかけられるのであります。

第一等の席は、花婿花嫁の席であります。それは中

央であります。案内者は後から來る客の席をとつて置きます。花嫁の鹵簿より少しく前に、花嫁の母と花嫁の家族とが入り來ります。案内者が此の人々を案内して、定めの席に着かしめるのであります。花婿の家族も同様であります。

△式場の準備

かくするうちに、馬車が玄關に待つて居ます、この馬車は何の爲めでありませう。花嫁の介添女（花嫁の血縁者が五六人この役をつとむるのです）が、幾人か、花嫁を迎へにその家に行くのであります。花嫁の家につくと、花嫁は花婿に贈る花束を介添女に渡します。花嫁の着けて居たことのある襪紐（靴下ドメ）を介添女一人々々に與へます。これは緣喜がよいといつて昔から贈るので御座います。それから、花嫁とその父とは、同じ馬車に乗り、介添女は別な馬車に乗つて、後からついて、會堂に馬を驅るのであります。

それから、花婿は己れの從者たる介添男（Best man）といつて花婿の兄弟か然らざれば最も親密なる友人がなり、花嫁の介添女 Bridesmaids に相當ります。花婿には普通一人ですけれども、花嫁には數人の介添女があります。その長としてはたらくものは、花嫁の姉妹が殆んどいつもなります）と共に到着して、寺の或る部室普通寶物室にて、僧（婚儀施行の）に會ひます待つこと長らずして、花嫁の行列が見ゆるといふ使が馳せくる。この合圖に僧は高壇に上ります。花婿と介添男とは、僧の左側に席を占める。これは高壇のレイルの外側で、丁度アイルに向つて居るので、花嫁の向ふから來るのを、今か〳〵と、待つて居ります。二人の介添女は、中央アイルの兩側に、大幅の白リボンを張つて、これを人々の座席にとゞめ置いて、花嫁の行列の來るのを待ち、先頭にたつて案内するのです。

△新夫新婦の入場

これより先き、行列の見ゆるや、樂隊は嚠喨たる喇

調を奏して、花嫁の御入御を報ずるのです。會衆は一同に起立して、花嫁に會釋いたします、案内者は、二人づゝアイルに進みます。介添女は二人づゝ後ろについて歩みます。兩組は其の間三四尺です歩調は音樂につれて整へるのであります。介添女の長は、獨り歩むことになつて居ます。

時には、小さい花持ちの乙女が、花嫁の歩む道に、花を散らすことがある、無論花嫁の前に在つて歩むときであります。又少年が、指環持ちの役目をなして、花にて飾りたる座布團の上に貴重な小さい指環をのせて歩むことがあります。此の際には介添女の先きにたつて、行くのであります。花嫁は最後に、父親の右腕にもたれるか、さもなければ、花嫁の最も近い男の縁者を撰びて、それと同じく右腕にすがりて、入り來るのであります。



それから、行列は高壇の段の下か、上かで、右と左とに別れて、花婿花嫁のたつべき所の兩側に、半圓形を作ります。介添女は、案内者の中間か。又は前面に花散らす乙女は、介添女の前方に、指環持ちは、花婿の介添男の少しく後方にたつのであります。すると、花婿は二三歩進んで、花嫁を見ます。花嫁は、花婿の手を握らんとて、父の腕をはなします。兩人は僧の前に立ち、やがて跪きます。父は右後方に退き、これより式が始まります。

△指環の交換

「此の娘を與ふるのは誰でありますか」といふ言葉の下に父は進みて僧の右の手に、花嫁の右の手をのせる。僧は花嫁の手を、花婿の右の手に渡します。父は此の時退いて、座席にある己が妻の所に行きます。

祝婚歌を唱ふる少年隊が、時には此の際、樂を奏して、花婿花嫁のほとりに至り、轉じてアイルを經て、進行することがあります。

いよ／＼指環を與ふる時刻になると、花嫁は己が手套を脱して、花束と共に介添女の長に渡します。その指環を持つて居る花婿の介添男は、これを花婿に渡します。花婿はこれを花嫁に渡します。花嫁はこれを僧に渡します。僧はこれを花婿に渡します。花婿は自らこれを、花嫁の左の手第三の指に、嵌めるのであります。かく僧が花婿に指環を渡すのは、花嫁の父が、花嫁の手を僧に渡し、僧これを花婿の手に渡すとひとしく、此の役目は、敎會の條例であります、若し花嫁にして介添女なき場合には、父は傍に在りて、手套と花束とを持て、己が娘即ち花嫁が指環をかくるのを待つのであります。

英國の習慣に從へば、高壇の踏み段にて、結婚誓約をなし、終りて花婿花嫁兩人祭壇に進みて行きます。此の際、花婿花嫁を接吻することになつて居たが、公衆の前にてかゝる事をなすは近時廢せられたのであります。妙ではありませんか、昔は接吻の下稽古さへあつたといふ事で御座います。

△見送る行進の曲

說教が濟むと、僧侶は二人に祝辭を述べる。花婿は右の腕を花嫁に捧げます。介添女の長は、花嫁の花束を返し、身を屈して、花嫁の長い衣裳の皺を正して、後ろについて行きます。此際また、音樂隊は行進の出を奏します。兩人はアイルを下ります。外の人々は、先きに入り來りし反對の順序に、アイルを下りて、これに從ひます。此際、案内者は前後になります。而して己等のみは、中途よりまたこゝに歸りて白のリボンを撤回いたします。花婿花嫁の家族は、他の役員に見送られ、戸口より外出いたします。白リボンがとらるゝと、一般會衆は、起立して戸口に出づるのであります。



此間花婿の、介添男は寶物室をくぐり側のアイルを經て、戸口に至つて花婿に帽子等を渡します。

時には、花婿の介添男が、式後アイルより歸る際、介添女の長に握手します。介添女は、案内者に從つて退出します。樂隊は人々が悉く退出するまで、樂を奏するのであります。

△式後の花嫁の家

花嫁の家に着くと、花婿花嫁の從者や、最も近い親戚のものが、新夫婦に祝辭をのべる。新夫婦は同じ所にたち、介添女は列をなして、そのあたりに位置を占める。

來客も入りて賀詞を述べます。案内者は、新らしき人々を新夫婦に紹介します。新夫婦は、我友を新たな人々に紹介します。花嫁の兩親は、入口にたつて居るので、これにも無論挨拶をせねばならぬ。花婿の兩親は、實に當日のはれの御客であります。時によりては花婿の父と花嫁の母、花婿の母と花嫁の父とが、一緒になつて知人を紹介することがあります。

△結婚招待會

結婚招待會にも、他の會の時とひとしく、普通小さい糸のついたハヤシ道具、マンドリン等を奏するのであります。これは、草花や椰子の葉で飾つて外から見えない樣にしてある樂屋でやるのであります。午後の結婚には、食堂にあるうつしく飾つた食卓より、食事が配膳されます。又正午の結婚の際には、その後ブレツクフワスト(朝飯にあらねどかくいふ)が時として出される。然し普通懇意な小宴で、一個の食卓に在つて幾回も出されます。大きな宴會になると、小食卓に各うつくしい花や、うまいものが載せられて數多の客がもてなされるのであります。大抵花嫁と花婿とは、少しく離れた食卓に、同席に坐するので、無論花嫁花婿の從者も、その卓に席を占めるのであります。

夜分の結婚は今日流行いたしません。

春と夏とに在つては、花嫁の家が、田舍にあつて、うるはしい芝生の最中にあれば、此の招待會は、園遊

會となつて却々盛であります。

招待會の準備にと、客室は美麗な花や、草木で人工の美をつくされます。全く主人の嗜好に應じて、色々意匠をこらすのであります。時には、花の東屋が出來て儀式の室の中に建てられる。或はいろ〳〵樣々椰子の葉や草花で飾られます。

花嫁の母は、客室の入口に在つて客を迎へます。二人の案内者、又は花婿の友達は、それぞれ役をなすことがあります。



花嫁の父は、この時居らぬので、後から花嫁即ちわが娘と共に入り來るのであります。

時によりては、たゞ近い親類や、親友がその宴に列りて、一般の招待狀は、半時間後に發せられます。時には、正午の結婚に、たゞ極々の親しいものばかりに、通知せられて、食事が出されることがあります。一般には二時か二時半に招かれる。客は祝辭をのべる、

一寸した食事が出ます。

△家にて式を行ふ場合

華燭の典をあぐる日になれば、家はお祭り騒ぎの樣になり、室々は特に僧侶、花婿の介添男、案内者にあてられ、又介添女にもあてられます。定刻になれば、僧は式場に最も近い客室に入りて、來客に會ひ、花婿はその介添男に案内せられて、次いで入り來り、僧の左にたちて、花嫁をまつのであります。

二人の案内者は、大きな白リボンや、花束にて廊下を飾ります。終ると新夫婦の團體に加り、介添女に先んじて、式場に近き室に入ります。室に入ると、樂隊から婚禮を祝ふ唱歌がきこえます。ピアノや、バイオリンの音が聞こえます。介添女の長は、介添女に導かれ、花嫁は父の腕にすがりて、最後に入り來り、從者は左右に別れる、花婿は花嫁に會はんと前進します。二人は并びたち會衆はかなたにたちます。

式がすめば、僧は慶賀の辭を新夫婦にのべて、己はその場を去ります。次いで兩親がのべる、家族がのべる、親族がのべる、それから會衆がのべます。介添女は、花嫁の方に並ぶか、又は二人の兩側にたつかであります。花婿の介添男と案内者とは、來客のもてなしに忙しく握手して祝賀するのであります。

かく祝辭を交はしたる後、來客は友人と知己とを求めて食堂に入る。半時間許にして、介添女はその所が去られるけれども、花婿花嫁は、尙半時間も出でられませぬ、特に祝辭をのぶる人々と談話して居ます。やがて時間となる、新夫婦は互に腕をとりて、食堂に入るので、萬目一點にあつまるのであります。

一般の客は、新夫婦の食堂に入る前に、退出するか、又は直ぐに退くので、たゞ最も懇意なものばかり後に殘ります。歸る客には下男が玄關の卓上に、うづ高く重ねてある婚禮菓子(特に製したるもので誰が切るかといふと花嫁が切つて人々に食堂にて配付することもあるし又この場合の如く玄關にて渡すこともある)を一つづゝ渡したり、又客自ら取るのであります。

△蜜月旅行の準備

此間食堂にて、花婿の介添男は、新夫婦の健康を祈り、會衆は長壽と祝福とを願ひます。花婿花嫁は、退いて蜜月旅行の準備をします。所謂ブレックフワストには花婿花嫁は第一に食堂に入り介添女の長と花婿の介添男とがこれに從ひます。介添女は案内者と共に入り、花嫁の父は花婿の母と共に入り、花嫁の母は僧の手を執り、又は花婿の父の手をとるのであります。花婿花嫁は、相並びて席を同じくし、又は最も近き親族と僧侶との大卓に坐するのであります。

花婿が蜜月旅行の準備に服をとゝのへると、階段の下に花嫁を待つて居ます。介添女と他のものとは、皆玄關の通りに集つて居ます。手には皆々米を一掴み持つたり、むしり取りたる花を持つたりして居ます。さあ花嫁が見えると、拍手喝采の裡に迎へます。花嫁は先きの婚禮用花束を、高くあげて「取つて御覧」といつて、介添女の群に投げる。それを取るものは、此の次ぎに花嫁になるといふ縁喜であります。

花嫁が、その家族と朋友、特に最も近く最も親しいものに、暇乞をすると、鴛鴦の夫婦は、雨の如く降り來る米の中、花の中に別を告げ、倉惶出でゝ行きます。

馬車には、人々がリボンを挿すので、うつくしく飾りたてられるのだから、道行く人々も、これはとばかりに立ちとまつて見る。これもどうやらうらはづかしいといふので、別に一臺の馬車をさる場處に仕立て、急に乘り替へて、樂しい〱一生初めての旅行に出でるのであります。

花婿の介添男のみは、停車場にて夫婦を迎へることを許さるゝので、實は兩人が蜜月旅行にのぼる前に、ひそかに行李を送り、小切手や、切符や、果物や、糖菓をとゝのへて、停車場に待つて居るのであります。やがて蜜の如き新夫婦は、馬車を驅つて來る。「御途中御安全に」といふを名殘りに、汽車は烟を吐いて疾走し去るのであります。



和歌

三宅花圃女史選

（天）さくら　名古屋　松久秋

よしの山おくのさくらをながめつゝ
　立つ身もはなの木の國なりけり

評、のどかなるけしきよとこそ。

（地）木遣蛙　矢澤民子

山ふきの花ちりかゝる山の井に
　こゑもひまなく蛙なく〳〵つゝ

評、手だれの筆なりけり。

（地）別れ一夜度へ　林　きく子

御神の下ひにかゝれ夜な〳〵の
　君が歌まく身にあらはゝとも

評、しらべもいと宜し。

（地）霰　山形　古谷喜代

うなひ子が手に受とめし嬉しさも
　たちまち消ゆる玉霰かな

（人）霰　新潟　塚田なみ

飢になく子をすかしつゝ乳貰ひの
　急ぐ夜道にあられたばしる

評、あはれなる子を思ふやみにこそ。

（人）桑花　福岡　大沼象子

軒近くまかぬすゞなの花咲て
　胡蝶も遊ぶ宿となりにき

評、田村のけしきみゆ。

（人）夢　松野月子

つばさなきに青空高くかけりつゝ
　雲のさま〴〵を見しはゆめかも

評、ともすればあるべきさまおもしろくよみなし給へす。

（人）蛍　三村翠子

蛍川を流るゝ水の白絲に
　花ぞりまぜて書きはしき哉

評、上手書匠なるべしな

（人）　眞邊公子

ぬぎすてし麻色はかま懐にいでゝ
阿兄がはれ着と今日縫ひかへぬ

評、今更ながら早きとし月を驚かれつらむな。

佳調

追憶　兵庫　安藤まゝ
いとし子の病臥りしまくらべに愛でにし椿又も散りけり

野遊びの夕べ　遠江　石野圓子
幼子は疲れしまゝに眠るなり夢路や野邊に小蝶追ふらん

春雨　大阪　松本安子
けふいくか降るともわかでつくづくと夕さびしき春雨の庭

野梅　備後　平岡敬子
ためらひつ袂に手折りし野路の梅こゝろとがめのせられぬるかな

懐古　和歌山　中島穣子
痛がるゝ子の我主なるに暴はずも涙せきつゝみ瓶送りぬ

路　岩代　眞田芳子
春雨に野づらのみ霞むら消えて小川のほとり路の芽青し

春海　東京　小幡文江
みちこちに白帆も見えてほのぼのと明け渡りゆく春のうみかな

題しらず　東京　山口房枝
咲きそろふ花の木蔭に遊びをれば暮もよらぬ白雲ぞ降る

失題　香川　末包まだ子
舟かつぎ君は去りぬ瀬戸の海白帆して行く舟とひとしく

述吟　愛媛　宮脇朝齋
郷出でゝ三年の春を顧れば嘆みなものゝ悲しうこそ

失題　長門　田中はな子
春雨にひとりし立てば白鷺洲しう立ちて野は黄昏れぬ

折にふれて　鎮南浦　久美子
うきことを忘れな草の根はたえて繁しみみてりわが家の庭

晩春　攝津　阪本禮子
山寺は鐘のひゞきに暮そめて讀經淋しき葉櫻の陰

醫士の力により病全快せしを悦びて　四谷　浅見八重子
今日よりは君をらからにもゝ年の花さく春にあはんとぞ思ふ

摘草　浅草　野末ハル
萌え出でし野邊の若草ふみわけて数なき菫つむぞうれしき

題しらず　牛込　平塚白百合
丹塗かじかきすゑられて御殿山西日傘ならぶ花のころかな

夜花　東京　中村千代子
吹く笛の聲のあるじは誰ならんおぼろ月夜の花の下みち

卯の花　埼玉　小山琴子
白たへの瀧の糸かとゝめくれば世をうの花のさきみだれつゝ

春雨の朝の我が庭　遠江　横田米子
起き見れば待ちし櫻に咲き初めて春日長閑に鶯の鳴く

花下宴　横濱　服部花子
山櫻まとゐたのしくうまさけに花のにほひもくみかはしつゝ

雨中花　岩代　木内よし子
うかれ出む心の駒をわが庭の花につなぎて春雨の降る

胡蝶　紀伊　本山百合子

七草をつみわけかへる乙女子の顔ちかくも舞ふ胡蝶かな

ある朝まだき修學旅行にて廣島に出立つ長女を見送りて　周防　小越龜代子

旅立つ子ともし火かざし見おくればあかつきやみにみがほかゞやく

友人と共に旅行すべかりしを出立の前夜に至り友人差支生じ我一人旅行して着地より友に送る　千葉　井深つた子

道すがら君なつかしきはかりにて野山のけしき目にもうつらず

折にふれて　伊勢　永谷靜子

をさな子が手にもちながらねむりたる夢はすみれの花野なるらむ

春野遊　神奈川　小川ふさ子

すみれつみつくしさわらびをりえても遊びはつきぬ春の野邊かな

折にふれて　陸奥　江波あや子

水上は春やくれけんよどみなく流るゝ水に花の浮べる

櫻　京橋　野菊

道すがらふとかいま見し破垣にいとも麗はし山櫻花

逍遙　下谷　渡邊もり子

しばらくを花つむ袂よ靜かなれかざせる花に胡蝶戯へり

馬上見花　芝　瀧澤ちはや

千里ゆくこまもあゆみやとゞむらむたづなひかるゝ花のした道

雲雀　京都　三田とし子

のどけさを四方に告げんと春の野に大空高く鳴く雲雀かな

題しらず　石川　築城春子

河原道あなたに廣き花野ありて蝶追ふ子見ゆ晝閑なる日よ

蝶　長野　佐藤りきよ子

羨ましのどけき風にふかれつゝ花のしとねに眠る小蝶は

春風　越後　ふさ子

眠ひつる隙間の風にも春されば枕の下に香る梅が香

題しらず　周防　佐々木逸子

學びやの園に生ひ立つ數草采る春ごとに色まさりけり

折にふれたる　羽前　高村みほ子

筑波嶺に登りてみればふじのねをおもふぞ人のこゝろなりける

春雨　攝津　山路倭文子

若竹になごりの露をとゞめおきて今朝うるはしくはるゝ春雨

蓄音器をきゝて　越後　伊倉田鶴

唄端唄京なつかしき聲にして祇園の花の夢を見るがごと

春雪　山梨　田邊喜美子

あわゆきのつもる間もなく消えさりてさすがに春の心地こそすれ

梅　水戸　榊はる子

思ひ出の梅の小路のうす明り戀しき人のおもかげもして

失題　長崎　高柳節子

さくら花散りて流るゝ中川の瀬の小川に春ぞくれゆく

梅　水戸　榊いち子

うぐひすの初音きゝつと夢さむる小窓にかをる白梅のはな

春雨　伊豫　渡邊梅子

妹が衣の衣桁なすへる音細う文かく宵を春雨のふる

亡き人を思ふ　神奈川　岡部あや子

春くれてゆきにし人をおもふ夕たかきみそらにほし一つ見ゆ

折にふれて　近江　中川はる

見ましきすがた寫せるうつしゑのくもりてみえぬ我なみだかな

皆様の御撮影を見て　　伊勢　中島かず子

日に開く窗の友におくれじと讀みて匂ふ月ごとの花

菫　　神田　岡本品子

嬉しさもこぼるゝばかり乙女子が摘める手籠の花すみれかな

春の川　　兵庫　細見榮子

舟人の聲ものどかに聞ゆなり櫻みだるゝ春の小川に

今度の大雪のあとの花を見て　　赤坂　矢澤民子

雪に雨になやまされたるこの春を恨ともせで花のにほへる

庵春雨　　牛込　岡つれ子

世のはなにさわくこゝろを春雨のふりしつめたる谷のしたいほ

春雨　　尾張　櫻井峯子

とぶてふの羽袖おもげにみゆるかなまだ春雨のしづくかわかで

京都へ行く途中桃山驛にて　　尾張　櫻井峯子

豐臣のむかしを思ふ殿造り今も匂へる春の桃山

我が子の小學校に入學したるを祝して　　豐前　賀來政子

みをしへの露おく園に撫子のけふより花は咲きそむるらん

山里春　　大阪　正子

手折るべき人も訪はれば長閑にもしばがきごしに咲ける白梅

捨子　　茨城　鵜殿節女

抱きあぐるちごの面わのぬれたるは親のなみだやかわかざるらむ

春野　　大阪　森岡常子

おもふどち誘ひつれて春の野につばなぬきつゝけふも遊ばぬ

歸雁　　大阪　松本安子

今はとて雪ふる里へいそぎつゝ雲井はるかにきゆるかりがね

失題　　神田　矢島とみ子

おんうたに吾が文封じ月日貝ひそかに春の海にながしぬ

淋しき夕べ亡父を思ひ出して　　埼玉　小山琴子

夕されば疾く歸りませ父君と言ひし昔の戀しかりける

嫁ぎていくばくもなく野に蕨とりそのかへるさ詠める　　下野　吉村澄子

里なれぬのらの歸りの夕月夜見返る背子の笑み嬉しき

失題　　神戸　幽規子

何となくわづらひ多き夕暮の雨にくつるゝ緋牡丹の花

失題　　熊本　加納燕香子

しめやかに春の雨降る夜櫻の窓の戸閉す琴の君かな

鶯　　岐阜　山田はき子

高殿の小琴のしらべそと止みぬ庭めぐりする鶯の音に

梅雨　　伊豆　古谷靜江子

父やいかに母や如何にとさま／＼に思出多き夜半のさみだれ

春のよひ　　大阪　青山なか子

おぼろ夜に匂ふ櫻を眺めつゝこゝろしづかに歌思ふかな

逸題　　大阪　青山なか子

さくら花みごろとなりぬ今しばし雨もふるなよ風もふくなよ

全快祝　　津の國　涙花

あたらしき代に生れぬるこゝちしぬけふ嬉しくも床ばらひして

偶吟　　美濃　度會よし子

何となく君喚び給ふ心地して出づれば響く寺の鐘の音

海邊にありて　北海道　静子

地引網急濟にして沖遠く入日かゞやく海のけしきや

乳兒　備後　石岡靜代

人形を抱きしちごのいたかれてねむれる顔にはなひら散りぬ

逸題　伊勢　荒木綾子

春雨に一羽のこれる川千鳥芽ふく柳の糸くゝりゆく

逸題　福島　松本眞砂子

若菜籠そとなげおきて小女子等小袖おふなりかげらふもゆる日

春　河内　末田多喜子

佐保姫のもすそのあやと見ゆるかなやけ野の原にもゆる若草

羈旅雁　京都　澤野井岸子

古さとを遠くへだてし旅路にもかはらぬものは雁の聲

逸題　攝津　東あさ子

夏川の岸の岩かけ柳かげいづれのかげに舟こぎよせん

惜別　越後　平野すい

さきくませと只一言の言の葉におく露しげき今日にもあるかな

電信　福井　富田豐

あら波の底くゞりてもはりかねの糸のたよりはもつれざりけり

雨後春月　下野　外塚ふじ

宵の雨わつかに晴れて跡なく星川柳月朧なり

春雨　姫路　白百合子

昨の日ふたつ夕べの川を隔ぐ見えて春雨ほそし高楼のまど

山花　肥前　南しな子

あらし山花咲にけりたちならぶ松のみどりも見えぬばかりに

述懐　埼玉　萩野くに子

行末を思へば悲し黄金にもかへぬ子寶もたぬわが身の

亡父の夢　同　松籟

何事を語らはんかと思ふ間にはかなくさめぬ父にあひし夢

晩雲晴れて櫻花咲き亂れたるもとに明月を仰いて　麹町　渡邊常子

なしからぬ身をながらへて此春は月雪花をひとつにぞ見き

なき友を思ふ　韓國　波奈子

こぞまでは共にながめし八重櫻手折るもかなしなき人の爲

鶯の新家　青山　畔代いと子

かりそめにたてし山邊のかやの軒いこひて花を見よとなるらむ

里の春　韓國　波奈子

菜の花を岸に眺めて黒川の末ははるかに打霞むなり

牡丹　千葉　吉松鶴子

孔雀まふ夕日の園に姫君の白き牡丹を見そなはすなり

折にふれて　松本　池田和代子

さち薄きわが身を嘆きおぼしまに彳むゆふべ春雨のふる

逸題　越後　松永繁子

幾度か心離れし君なれどそゞろなつかし花の夜頃は

棣　愛知　柳原豐子

夕風にさほさし下る筏にもあふちちるなり川つらの里

不如歸　下野　外塚あさ子

旅の宿の欄干高み故郷の母戀ひ居れば不如歸なく



短文

〔甲賞〕

バイオリン

札幌　香枝子

いつことも無く春の氣が身にせまる、讀みかけの文をつと閉ぢて、庭下駄かろくおり立つと、キユーと美しいバイオリンの音がする、何うやら此頃お引越のお隣りのやうである、ゆるさせたまへと袖垣の間よりすかせば、眞白のカーテン斜に開きて、華やかな燈火の下に、やゝ首かしげてひたすらに譜本み入りたまふ繪のやうな美くしの立姿、けさ方かどにてニツコリ笑みかはしゝマーガレツト君である。

〔甲賞〕

四月九日

芝　磯部すゞ

昨夜から雪はしきりと降りつもりて、僅一町許り先へ使にやつた女は、三度も轉んだとこぼしてなる、いつも喧ましい電車の響も、たまにしかきこえない、豆腐屋の寒さうな聲もだん〳〵遠くなりて四邊はひつそり、この寂寞を破るものは電線の切れる凄い音許り、お祖母樣は炬燵にあたりながら「四十九年前、井伊掃部樣の殺されなすつた時でもこれ程のふりではなかつた。こんな事はまお覺えがない、おゝ寒い、昨日は花見で、今日は雪見、何ていふ惡い年だらう、長いきはしたくないもの、南無阿彌陀佛〳〵。」

〔乙賞〕

夜の嵐

麹町　名なき花

夕からの雨に風さへ加つてひどい嵐となつた、ゴーツと荒まじい勢で雨戸を拍く音は實に物凄い、海はどんなであらう?、逆まく怒濤を蹴つて勇ましう夫のめせる軍艦の跳る樣も見ゆるやう。

物凄き嵐の音なきくにつけみ艦いかにと思ひわづらふ目はさめる時計はチン〳〵と二つ打つ。

乙賞

春の宵

宇都宮　君島喜美子

靜かな春の宵であつた、染代さんは窓によつて燃える樣な緋の福袢の袖から眞白い手を出して頰杖して恍惚と空を仰いで居る、咲き亂れた櫻の梢には白い烟の樣な春の月がほんのりと懸り、雪洞には灯がはいつてゐる、關けな水車の音が緩るく川面を傳ふて響くと、ふうはりとかんばしい花の香をのせて來る風のまに〳〵、誰がすさびか微かに優しい笛の音が聞える、恍惚と聞き惚れて居る染代さんの美しい顏はくつきりと白く闇に浮いて恰度醉つた花の樣、泉水の灯の傍の櫻がはら〳〵と散つて二ひら三ひら風にゆられてその黒髮に落ちた、實に詩的！　全く繪の樣であつた。

乙賞

田舍ずまひ

牛込　平塚白百合

湯がわいたと乳母がしらせる、背戸へ出て番傘を枝につけてそろ〳〵しづむ、湯は上かげん、鎭守の森はぼかしたやう、人通りまれな田舍道は春雨がしと〳〵と若草をはぐゝんでゐる。

田一つへだつた道には牛乳の配車が並木のかげへとかくれた。

火をたいてゐる乳母のかほは夕やみにくつきりと白く拔けてゐる。

丙賞

落花

攝津　中西たつ子

窓近う囀づる鶯の聲に聞きとれて居ると、門邊に人のけはいして幸子さんが入つて來られた、相かはらず音樂の話が出る、幸子さんは「落花の歌」をうたはうと仰しやるから私は伴奏することになつた。「……ヒラヒラヒラ蝶にも見まがう花かも、風につれて、ヒラリ〳〵〳〵花が散るよアレ」と滑らかなお聲に感じてゐると、花瓶に揷してあつた櫻の花びらがほろりと樂譜の上に落ちた、歌か、まことか、餘りのいみじさに彈く手も歌もはたと止んで後は唯ゆるやかなピアノの餘韻が、窓外の鶯聲と和するのを聞くばかり。

丙賞

春の夜

豐後　加納豊子

軒端に近き海棠に、仄にさす灯影朧に、圓柔き春の夜、妹の手紙を又繰り返し讀んで見る、姉さん、當地は大變賑かで御座います、私も今度は一番で三年に成りました、

お手玉を十一揃へて送つて下さい」つい昨日までお乳頂戴と甘へて居た妹が、何時の間にこんなに大きくなつたらう、私の目は見るともなく机の上の寫眞挿の中の妹の肖像に落ちた、お下髪に袴をはいて、すーつと立つてゐる、今より三年の級長としてさぞ榮える事であらうと思ふてゐると、ハラ／＼と活花の櫻が散つた。

丙賞

かゝる夜

岩代　岸野常子

夢といふものを、幾枚にした様な仄かな雲が、美しく星を鏤めた大空を被ふて居る、ぼくり／＼と庭下駄を引掛けながら、花の下を歩くと、撓く落ち積つた櫻花は丁度天鵞絨を敷いたやうに柔かくあたる、はら／＼と花が零れる、静かな、寂しい、木魚の音が、向ふの野寺の方から傳はつて来る、かゝる夜に松影暗き方丈を敲いて、孤燈の下に、白髯の禪師と、此世を語つたならどうであらうなどゝ、そゞろ幽玄の感に打たれる。

丙賞

彼岸詣

京都　藤田静枝

彼岸の或朝、亡き母君の御墓に詣でんとて小供を連れて宅を出た、御墓は宅の北約一里許りの高い在所に在る、町外れから次第に爪先き上りになつた路は、一歩一歩眼界が展けて、遠くは殘んの雪の古び行く高比叡から東山六この峰は一帶に靄に罩められつ、京の町は低く舟岡山に遮られて、僅かに樹の間に隱見する、天寧のガラスが星のやうに朝日にキラメクのが殊に目に立つ、そして此あたり所ろ／＼にある紅白の梅は今丁度眞盛りで芬々と得ならぬ清香を放つて居る、又青々と涙のやうにそよ風になびく麥畑には今まで麗かな空高く長閑さの限りを囀つて居た雲雀が矢のやうに落ちて来る、久々で郊外に出た自分は何ともいへぬ嬉しさを感じた、且つ眺め且つ歩み卸々道が捗らぬ、正午近き頃漸く御墓に着て、先づ香を焚き花を供へて恭しく回向をすれば、折柄側への籔の中から朗々と流れて来る經讀鳥の妙音は、丁度菩提を弔ふやうであつた。

丙賞

後生願ひ

愛知　小栗きと子

靈鑑寺といふお寺の本堂の前を參詣をすまして歸り行く婆さんが小さな黒色の包を落したが、少しも心付かずに過ぎ去ると、後より矢張りお詣りの歸りであらう、右手に杖、左手を腰に上げた婆さんが来て、それを杖の先きで一寸はねて、あたりを見廻はしてあはたゞしく拾ひ上げ、自分の懐中に入れて何くわぬ顔をして行く、先きの婆さんは心付たとみえて、眼をキヨロ／＼さして引返し



來て山門の下で行違つたが、姉さんは聲高く念佛を唱へて過ぎ去つた。境内の杉松には鳥がカア／＼鳴で居る。

うたゝね

長野　渡邊松子

朝の用を果し洗濯に行き、歸りて自分の部屋に入れば、バイオレツトと花瓶の梅と薫り競べをして居る、軒の若楓には美しい小鳥が來て聲面白く囀つて居る、机に寄つて昨日の日記を記し、手紙三本認め、源氏物語繪合の卷を繙く、心地よき事云はむ方なし、しめやかに降出でし春雨の音にをつとりして何時とはなしに讀さしの書の上に面を伏せてまどろむ、午砲の鳴りましたと云ふ下女の言葉に目覺むれば、今迄日かげ麗かに糸遊立てる野邊に散歩して居たのは夢であつた、相變らずしめやかに春雨が降つて居る、小鳥は肌寒むげに羽ばたきつゝさりやかに囀つて居る。

大雪

千葉　山口秋子

明日は花見に行こうと約束迄して樂のしんで起きて見ると、大雪が降つてゐる、其を眺めてゐると夢の樣な氣がする、黒い犬が白毛に成つて走つてゐる、酒屋の小僧さんの傾けて行く傘の上に眞白に積つて軒の大半が雪を被て見える、勇ましい人が足駄の雪をこと／＼と石にあてゝ拂はれる、一間も行くと今度は傘の雪をホト／＼と搖される、花見歸りにはきつとお遊ひをよこして頂戴子ーと可愛聲がおとなりからもれてきこえる。

雨後のながめ

岩代　雅香子

よべ一夜しめやかに降りそゝぎし春雨の今朝は如何ならんと雨戸をくれば、嬉しやからりと晴れて雀の聲のみやかまし、咲きそめし桜の蕾は露をふくみて常よりは大きやかに、落つる雫は化粧水にもせまほしう。遠き山々、煙立つ茅屋など霞衣もて覆はれし如く、祭祠にやあらん森のあたりに白き旗二つ見ゆ、里の子のよろこびやいかばかりなるべき。

嬉し涙

兵庫　中西たつ子

山の雪がとけると共に私の病氣もだん／＼良くなつてゆくが、然りとて一向外を歩いてみようといふ氣にもならんので、父は心配なされて「折角こんな佳い處に保養しながらソウ内にばかりひつこんでてはからだのためによくなからう」と何時も仰しやる、或る朝海岸の散歩から御歸りになつて、「ヤア大變だ、今朝この海で大鯨がとれたので漁夫どもが大騷ぎしてるよ」と日頃まじめな父さままでが目を合まれる、私も見たうなつて、食後姉さんにつれられて行くと、マア驚いた、鯨はおろか波さへ立たぬ靜かな海である、私があつけに取られて立つてゐる

と、「きよさん、實は貌を見せるのではなくて、この賑やかな様を見せて新しい空氣を吸はせたいばつかりの父君がはかり事よ」と姉が言ふので、何ともいはれぬ厚い親の情が身にしんで、しらず〳〵嬉し涙のこぼるゝのであつた。

友の許に

福岡　小泉梅子

桃も櫻も今朝は霞に霞み候を如何見そなはし給ひしか、勿來關ならねど落花の雪に御上忍びて蹴ろ鞠ねらし候よ一日訪れ給ひて諸共にゆく春を惜しませ給はずや、咲かばと宜ひし山吹もはやいつの程よりか微笑みて君とひ給ふを待ち居候を、雨ふらば色やあせん、風吹かば花や散らん、ふらぬ間に吹かぬ間にとくこし給へ、いざとく。

わかれ

駿河　豐島きみ江

母樣と姉とは停車場迄荷物を持つて送つて下された、日常ならば、花見とか摘草とかと笑ひさゞめいて歩くのに、今日は互に沈み勝ちで、母樣は唯上京後の注意などして下さる、……やがて汽車が着きました。母樣は窓際迄お出でゝ、それでは隨分身體を大切にしてね、折角勉強なさいよ、あゝいよ〳〵これで別れるのかと思ふと、萬感一時にせまつて物悲しく、涙の中に母樣を見つめつゝ、唯ヘイ〳〵と終には泣き伏しました。汽車は出た、漸く心が落ち着いた、あゝ妾はなぜ一言も言ひ得なかつたらう、も一度會つて、せめてお母樣もお身體を大切にと、言つて見たい、と思ふ中汽車は轟々と富士川鐵橋を渡つた。

心字が池

河内　土屋千津子

春雨のいとしめやかに降る晩、私は夕ぐれついた女學世界をひもといて居ると、短文のところに奈良といふ字が見えたので、飛立つ思ひして讀んで行くと、一字〳〵に懐舊の感が湧いて、梅田つゆ子樣とは如何なる人なるぞ私の知つてる榮枝子樣ならばたしかに今年卒業なれど、朔耶子樣とは聞かぬ名、其れにしても、手に豆をこしらへて掘りました心字が池とあるからは、私と一緒に起臥した人に相違ない、と同窓會誌の大和なでしこ取り出し、會員名簿を一々見しにさる人あらず、あたりしづまつて燈火やう〳〵暗し、時計は正に十時、今宵はわきて三笠の山が戀しい。

かじか取り

朝鮮　金田節子

ある暖かい日曜日私は二人の弟妹を連れて程遠からぬ沼邊へ散歩した、此沼は三方山に圍まれ、一方は小高い土手で、一面に生えた若草の處々にふきのとうが芽を出して居る、土手下は小さな砂川で、水岸には河骨の花がやさしく浮いて居る、此處にはいつも「かじか」釣るちい



やが居のだが、どうしたのか今日はその影さへ見えない、それを見るより弟の英ちやんは、やあぢいやが居ないよと手を打ちながら川に這入る、つゞいて妹の富美ちやんもじやぼ〱、私はやはらかい土手の草の上に腰を下して二人の話を聞く、あの石の下にはきつと大きいのが居るよ、僕が捕るから富美ちやんそつと石を取つてれ……あらまあ早い事英ちやんの足の間から……、富美ちやんが靜かにしないからだよ、英ちやんがこんな手つきでしてるからさ、と二人は夢中である、逃れたかじかはやさしい花の下で靜かに小さな胸をなでて居るであらう。

春雨ごもり

姫路　鈴木ふじ子

春雨蕭々として空は薄暗く、殆ど未明の様な氣持がする。弟と妹は炬燵へ這入つて手細工に夢中である。其所らは紙片や小布やらで雜然としてゐる、手を伸べた所に、鶴や豆藏の折つたのが並べてある、お暴栗を泣いた人形も仰向にころんでゐる、突然弟は、

「お母さん鋏を下さいー」と叫ぶ、

「鋏は今渡したぢやないか」と針を運ばし乍ら母が答へる。

「すぐ又返しましたよ、ねー笑いちやんー」と妹の顏を覗き込むと、妹は、

「お母さん今取つたくせにネ」と言ひ乍ら一寸シナをする。

「さうぢやないよ、ようくお前達の下を探して御覧」と言つて母が立上られると、カチヤンーと音がした。

「アハハ……」「ホホ……」と皆で笑ふ。

春雨が急に勢を得て、屋根がひどく鳴り出す。

なみさん

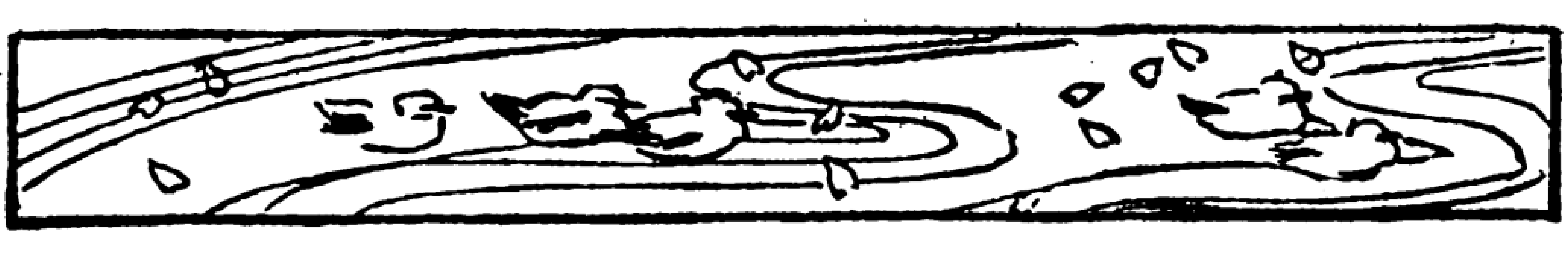
千葉　山口秋子

なみさんは女學生時代は隨分ハイカラがつた、お轉婆で、私が遊びに行くと、母様は内のなみの様な子供が外に有るでしようか、これでも年頃に成れば少しは女らしく成るでしようかネーと、何時もお顏をくもらせてお話しに成るので、私もなみさんの爲めに心配したが、今日あつて驚きました、いつの間にかお嫁入りなすつて、可愛い子供迄で抱きなすつていらつしやる、旦那様はこちらの聯隊に轉任なすつたとか、「私には似ないでしよう?」、眞人そつくりよ」と可愛いゝお口をお顏におつけなさる。

家庭日記

小石川　平塚八重子

三月六日晴天金曜日、昨日まで三つ四つしか開かなかつた梅の花が、澤山咲いてもう數へきれなくなつた、俊子様から御手製の美くしい繪はがきに、「繪はがきに咲いた梅のたよりかな」の句を添へて送られたから、自分も「うれしさや故郷の梅の咲いた沙汰」の駄句をかいて御返事を出した、午後から編かけの靴下を遊へあげた、紫



がないたがどこで啼いたのかわからない、夜は久しぶりで叔父様の尺八と琴をあはせた。

春の影

名古屋　松　久　秋

水草塢の彩で摘草をして居た妹と姿が、ふと見ると、蝶を主の菜花の舟が、ゆるう流れてくるので、我れを忘れて、花籠を水に浸して止めようとすると、浮び出たのは草花數十、白き蝶は忽ち逃げて行く、髪をすべつて落ちた妹の紅きりボンは、きら〳〵と漣たてゝ、水は片々に輪を描いて流れる。

春

岡山　笹　原　貞　子

花の世は來りぬ、さびしかりし山々は緑あざやかに、うらがれし野邊は紅の錦を織り出しつ、香ばしき春風に奥深うひそみ居し佳人も、振りの袂ゆかしう、いつれを花と見まがふなるべし、四季おり〳〵の眺め清き花中にわきてめでたきは、春の色にこそ、

留守居

岩代　紺　野　の　ぶ　子

待つてゐる母上は歸つていらしやらない、東京にいらしつてから今日で三十日計りになるのに、香水や反物を人づてに下すつたきりで、まだ一度も御便がない、私は淋しくつて毎日〳〵つまらなく暮して居る、けれども考へて見ればソンナ小供らしい我儘も云へない、お母さんだつてモー六十に間がない上に過々いらしつたのだから。

羨ましき家庭

千　葉　清　水　よ　し　子

籬垣一重でおとなりの美いちやんの御家なのです、いつも〳〵かわいらしいお口をして小猫をだきながら、「たま（猫の名）今に兄樣が御遊びにいらつしやるから待つておいで、そんなに啼かないでね、姉樣おんぶしてあげようかい」などゝたわいもなくあどけなくおはなしをして居られる、おとなりは御兩親と此のみいちやんに又氣だてのよい下女ばかりで、家庭はいつも春風がそよそよと吹いて居る、兄樣と云ふのは今尋常四年生で、これから中學をおへて士官學校に入り、立派な軍人になられたら御二人目出度なられるさうな。

春雨

和歌山　山　口　文　枝

ひら〳〵と蝴蝶の如く、まひ込みし美しの繪はがきを、手早く拾ひ上ぐれば、嬉しや懐かしい姉樣より水ぐきの跡、麗はしく「昨今は鎭守の花の眞盛り、こゝ二三日を過ぎなば、風雨の爲に散りもやせん」とあり、早速日頃親しき友どちを誘ひ、明、早朝より發足する由申し送りしが、夜中頃ふと、目覺むれば悲しや、雨だれの音、げ



に情け無く思ひはべりぬ。

病める兄

筑後　光子

嗚呼いとしの兄よ、可愛の子よ、汝ありてこそ若き母があらゆる憂苦も忘るらめ、去るをなどて病める、其咳聞くもつらきぞかし、ふくよかなりし汝が頬も、あはれ病苦に色あせてほそり、すゞしき眼はどんよりとして今日此頃の空にも似たりよな、折ふし小さき胸のものに驚くは如何なる夢のなす業か、薬口にする度苦しむ汝が様見ては母が身の代りてやりたき思ひぞすなる、よしや身はきれ氣はめ入るとも汝が病いやして母が赤心を全ふせん。

初戀

芝　日比まつ子

二九の春を迎へて、こゝに、いつしか、戀てふことを我も知りぬ、あな淺まし。などて君の上のみ戀しきや、斯くとさとり給はゞいかならん、去年の秋菜園遊會にてはからずも君を見まゐらせしぞ實に〳〵うらみなる。

家庭日記

和歌山　松島双葉

四月十一日、土曜　晴

雨戸をくると、夜來の雨晴れて、花が白う散りしいて居る、九時頃から久々で松本さんを訪れたが生憎留守であつたのですぐ歸る、夕方伊藤さんから手紙がきた、「名譽嘖々であつた山口の君も終に結婚された」とある、ハズバンドはどんな方であらう?。

夕飯をすまして話は帝都の大雪から萬延の昔にかへつて井伊直弼の人物評になる、罵倒する父上、肩を持つ兄様、思ひ〳〵の辯論に夜を更かす。

摘草

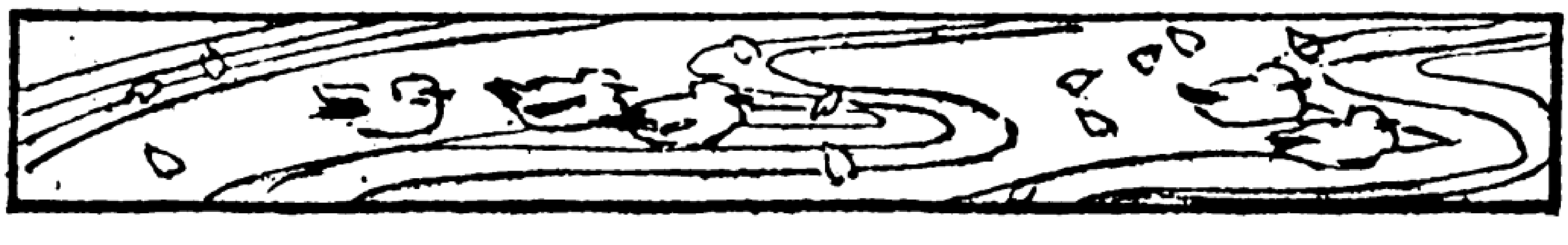
伊勢　ひさ

春雨晴れて暖に、かすむ田舍のたんぼ道、と大聲に歌ひながら畑道をずん〳〵行く、よいのがあるからしばらく摘んで又いそ〳〵と歩み出す、後の山には名もしらぬ鳥が囀つてゐる、小さい川がある、その流れに添ふて行くと色のよいすみれがあるから摘んで頭に挿す、菜の花の黄金色なる間を小走りしてやう〳〵思ふ高土手に來た、前の菜種田へ雲雀がおりた、巣でもあるかと思ふていつて見ると何もない、二三間の方から雲雀は高く舞ひ上がつてあなどるやうにさへづつてゐる。

別莊の妹へ

北海道　吉田幹子

すみれと櫻をありがたう、いゝ色ですわ、當地はまだ花がないから北海美人を御目にかけます、ハイカラでせう、ラケツト持つたのもありますよ、わすれな草など得たら



早速御送り致します。

淡川神社

神戸 谷口 操

今日は近頃に珍らしい好天氣で、家の内にばかり居るのも何だか惜しい樣な氣がしたので、久しぶりに、お友達の貞子さんと散歩に出かけた、いつもひつそりとして居る淡川神社も今日は殊の外賑やかである、社の後の二三本の櫻の今を盛りと人待ち顔なるもいと愛らしい、二人はあちこちと歩を移して、丁度社の正面に來ると、澤山の鳩が餘しさうに遊んで居る、三つか四つ位の愛らしい小供が、其鳩を捕へんと紅葉の樣な手をひろげて、追ひまわる樣は又なく愛らしい。

春の夢

山形 林 みさを

あゝいとしの我子よ、汝と別れしよりはや四年餘となりぬ、汝が父母を慕ふ心はよく知らる、我らは汝一人を浮世に殘して草葉の陰の身とならんとは露程も思はざりき、されば斯くなりてよりは、後になり前になりて汝の身を守りをるなり、あゝ我子よ何事も不運とあきらめ、早く立身して我々父母を慰めよ、と聞きしは春の夢なりけり。

黄昏

新潟 古澤ふさ子

師留白き雲雀の歌も、里の子が弄べる風の唸りも、聞えずなりて、漸々黄昏近くなり行くまゝ飛石傳へに庭に出でゝ佇むに、新月の影空にかゝり、家路をいそぐ村人が暮もなげに唄ふ野歌の調べいと微に響く。

家庭日記

兵庫 松尾貞子

三月十三日、金曜 晴天

此頃は兄さんが東京から歸つて居らつしやるので、嬉しくて〳〵學校がすむと大急ぎで歸る、今日お友だちが遊びに行かうと云ふのをことわつて歸つて來た兄さんと一緒に作男を一人連れて、おたご山へ行つた、まだ何の花も咲いて居ないが大變景色がよい、木のかぶに腰をかけて四方を眺めて居ると、後から作男が「若旦那樣小さい時にはよくこゝへ、茸狩りに來なすつたものだがのー、」「さうだつたね月日の經つのは早い物だ此山へも五六年程來た事がない、」と懷かしさうに方々を眺めて居らつしやる。

日が西に入りかけたので唱歌をうたいながら歸つて來た夕飯がすむと兄さんのお友だちが四五人來て歌留多が始まつた、おしまひに見たら皆の顔が真黒である、私もハイカラ髮はやされて皆に笑はれた、兄さんは一度も付けられなかつたので一人大威張り。

春の夕暮

山口　小野とも子

日は西に傾いて、今迄で鳴て居た鶯や目白が塒に歸ると、風がそよ〳〵吹て、美しく咲た庭の梅の花がはら〳〵と散る、向ふの畔道を四五人通る、其話聲もかすかに聞えて何となく物悲しい、前の小路を十三四の娘が七八つになる男の子を連れて歸る、弟のお迎であらう－、だつて姉さん暮れるのを知ない事はないよ、夫れではなぜ早くお歸りないのお母さんは大變待て居らしやるよ、能くお聞きよ、今のお母さんは本當のお母さんでないから能く何でも聞かないといけないよ、僕のお母さんは何所へ行たんだらう、と早涙聲。折しも山寺の鐘の音は響て餘韻高く二人の姿は小暗き森の中に隱れてしまつた。

妹の手紙

千葉　雛賀はな子

妹の八重子は只今片田舍の親類の家に行つて居るので、その後はどうしてゐるだらうと朝夕思ひつゞけて居りましたら、昨日手紙が屆きました、早速開封して見たら、この春おばさんが東京の三越へ行つて買つて來た着物は、もう肩揚も腰揚もして着るばかりに仕上つたとの事、

よな〳〵に果は深しあや衣

友は變れり

津市　入江小せん

うらの小川で洗濯をして居たら、向ふから清い唱歌の聲が聞える、誰かしらと一寸手を休めて見ると、婦美子様と春子様である、お二人共瑠璃へ大きなリボンをさして海老茶のお袴を召して入らつしやる、はつと思つたがやがて橋の上に足音が聞えた故、言葉をかけやうと思つて上を見たら、婦美子様はつと向ふをむかれて春子様と何かお話しなさつて、クス〳〵と笑つて走つて行かれる、私は彼方に消え行くお二人の後姿を眺めて知らず〳〵涙が頰をつたふ。

霞が岡

三河　今村貞子

そよ吹く風にリボンなびかせつゝ、菫つみしも此岡なり、夕ぐれに團扇片手にさまよひしも此岡なり、空高く氣澄みたる日、枯草敷きて、遠近の紅葉眺めしも此岡なり、白きボアーに顏を埋めて、枯野を見しも此岡なり、あゝ思出多き此岡よ、げに姿が無二の樂園にこそ。

春の雪

山梨　古谷きよ

霞のひまもれてはら〳〵と降り來る雪は、天つ空なる花の散るらんやう、冬のものとはおのづからたぐひてなかしさもひとしほなり、あはれ冬におくれし雪は春にさきだつ花にぞあるなる。



一口噺

◎印入賞

◎　駿河　天野ふじ子

甲「君僕の娘を持參金三百圓で貰つて吳れ給へ、」
乙「兩方では勿體ないからお金だけ貰はう、」

◎　京都　ます子

孫娘「お祖母さん今晚は何の御馳走をいたしませう、」
祖母「ハムレットをしておくれ、」

◎　北海道　みき子

妹「姉さん、あの西洋人の子はあんなにちいさくてもよく英語をつかってよ、ゑらひはれー、」

芝　松村光子

東京見物の田舍者　甲「電氣燈はこんなに風が吹いてもどうして消えないんだらう、」
乙「ホヤに穴があいて居ないからさ、」

芝　松井岸子

或人友人の病氣を訪ひし折、來合せたる一紳士が庭の景色を眺めて、
「長閑なる林にかゝる御庭松」
と詠みしに感じ、彼他の病家を訪ふて、
「咽がなる早や死にかゝる鬼は待つ」

伊勢　市川しの子

敎師「あなた方は大きくなつたら何に成りますか、」
一生徒「私は老人に成ります、」

遠江　圓子

山家者始めて海に出て藻草を取るのを見て、
「あの沖の方に何かして居るのは何ですか、」
傍の人「あれは藻取です、」
「もくとりは人間によく似た鳥ですれー、」

京都　藤田靜枝

下女「孃さんアナタはお父ッさんの　お子ですか　お母さんのお子ですか、」
孃「晝はお父さんの子で夜はお母さんの子だよ、」

臺灣　渡邊ゆき子

下女「私だつて和歌はずゐぶんけいこ致しましたよ、」
奧樣「アラそうかへでは一ツやつてごらん、」
下女「方々に花は咲くけれど御宅の花が一番美しき哉、」

京都　吉田千代子

玉ちやんは造花の櫻に水をかけている、
姉「マアなぜそんな事をなさるの、」
玉「御祖父ちやんがこれに水をやるのを忘れて　いらつしやつたから、」

越後　みさほ

妻君「貴郎は御向ひの奧樣許り御褒めに成るが、あの方だつていろ〳〵の缺點が御座いますわ、第一にれ人の陰口がソリヤ御好きでしかたが有りませんの、私等意氣地が無いから迚もおまれは出來ませんわ、」
旦那「いや、おまれ處かそれで充分、否それ以上だハハ、、」と云はれてハツト御口に釉、

三河　平川生

ハイカラ孃「あんな人は妾の良人としての資格ありません」
田舍爺「四角は無からうが圓はあるだらうよ」

大阪　三井榮

夫「オイ、女學世界の寶さがしに何か當選したかへ、」
妻「何があたるもんですか、寶は人々の頭の中にあるのですもの、」

熊本　丸尾德平

僕の事をお人好だと賞めて吳れる人もあるが又少々足りぬ樣だと云ふ人もある何處が足りないか知ら！」

橫濱　服部花子

母「太郎や、そんなにお砂糖をなめると胃病になりますよ、」
太郎「さつき豫防に胃散をのんで置きました、」

岐阜　渡會よし子

甲「あなた日本中で何が一番目出度ものと思ひなさるか、」
乙「わたしは破れ蚊帳と思ふよ、」
甲「なぜ、」
乙「釣る(鶴)と蚊奴(龜)が這入るから、」



感謝の微聲

女子大學の卒業式に臨みて生徒總代の讀みあげし謝辭

明らけき御代の光りと共に、年毎に榮えもしるき。我が學びやの、花も盛りにうるはしき春の今日しも、數ならぬ吾れらがために、かくも盛なる卒業式はあげられつ。校長の君をはじめ奉り、數多の師の君さては、我が校にゆかり深き方々のみまへにて、不束なる吾れ等が拙に三年の業卒へたる其の證書を賜はり、且つは、懇なる行末のみ諭の數々をさへ添へさせ給はる嬉しさ。何にかはたとへん。おもへば、三年の昔、吾れ等はじめて本校の主義をしたひ、其精神にあこがれて、かたき志を立て、こゝに咲ける、美しき眞の花を手折らんものと、この敎への庭におり立ちし頃は、まだふみなれぬ庭の手草に足もといと覺束なく行く手の道もわけがたかりしを、御情けふかき師の君方の朝に夕に手をとりて導き給ひつゝ、望む高嶺のまことの花を手折らんとならば、卑しき我れを棄てゝ高き我れと生れよ、ねむれる眼さまして希望の光り輝くかなたの空をながめよなどゝ、強く優しく、高く尊き御さとしをうけたる餘ゝに、今はやう〳〵まことの人のふむべき道の片はしを辨ふる身とはなりぬ、かくて望みの光りに照らされつゝ、喜び勇みて事しげき世の旅路に門出するを得るに至れるは、是れ全く師の君達の懇なる御導きの賜ならずやは。あゝ海と深き此の御敎へ、山と高きこのみ恩み、いつの世にかは忘れ奉るべき。あはれ、あすよりは、なれし此の敎の園をはなれて、浪風あらき人生の海に舟出せんとし、或はを暗き人生の山にわけ入らんとす。思ふに、嶮峻なる人生の旅路なり、いかなる妖雲の立ち蔽ひてか、吾れ等が行く手を迷はすならん。いかなる荒波の狂ひ來りてか、我れ等を奈落の底に陷れんとするならん、思ひやればいとど心細さの極みにこそあれ。されど、師の君よ、吾れ等には、日頃示し給へる女子の道、いづこまでもふみ遂げではやまぬ勇氣あり、吾れ等が志す彼岸には、必ず、吾れ等を迎ふる希望の光あり。たとへ世の浪風はあらく、いかにこゞしき岩根のわだかまるとも、此の勇氣を友に、此の光りを便りに、進みて越えて、志したる岸に、目ざしたる高嶺には、必ず達せではあるべきさらば師の君達よ、幸にみこゝろを安め給ひてよ。吾れ等よしや力少くとも、一致するところに力は生ず。吾れ等心を一つにして互に助け助けられつゝ、此の年頃示し給へる女子の道遠き彼岸に達するまでは、奮闘努力屈せずたゆまず、進みて世のため國のために捧げてつかへん覺悟にこそ、願はくは、師の君方よ。朝な夕なに御身を、御心を、かくて千歳の御齢を重ねさせられ、吾れ等が行く末を見そなはし、導つは、吾れ等が前途をなほとこしへに守らせ給はらん事を祈り奉るになん。

大學部卒業生總代

新刊紹介

▲益軒樂訓(塚田敬正著)　世間の風の吹き廻しにつれていたづらに心を動かし、今日の陽氣なるに樂觀し明日の陰氣なるに悲觀するといふがごときはこれ心の修養至らぬ人の常なり、苟くも眞に修むるところあれば世に處してたゞ中すくは悲哀せざるべき筈なり、この書は古教育家の大家たる貝原益軒翁の樂訓に關する文を集めたるものにして樂訓二十五章擧く是れ身を修め、心を錬るの工風ならざるはなし蓋し當時の人格の高尙なる、學識の博大なる、思想の圓熟せる其の感化力の大なる青年學者の嗜讀の及ぶところにあらず編者は曩に益軒十訓を撰して好評あり今又この樂訓を撰す學ぶからずといふべし。(價六十五錢、博文館)

▲算術獨習書(下卷)　竹貫登代多著　本書上卷は世既に定評ありて、論述最も正確なり本卷に至つて比例より始めて利息算、開平、開立、求積等說かれたれば、前卷と相俟つて最も重寶の獨修書たり。(定價金三拾五錢、博文館發行)

▲天才(前編)　小栗風葉著　艶麗なる著者獨特の方筆は本書に於てますます艶彩を放てるを見る、著者自ら從來の畦型を棄てゝ多少新しき覺悟と新しき用意とを以て試みたる第二の處女作なりと謂へりしが如く、實に著者が文藝生涯に一期を劃する紀念の作品たり。(定價八拾五錢、隆文館發行)

▲お伽花籠　木村小舟編　嚴谷小波氏の世界お伽噺百種完結の紀念として同氏の知友門人諸氏が同氏に贈るべく執筆されたるお伽噺にして西村渚山、沼田笠峯、吉岡向陽、高野斑山、竹貫佳水等諸氏て十有餘氏の作を集められたるが、少年諸氏の爲には孰れも絕好の讀物と云ふべく、製本はた美はしければ、贈物としても亦た可なり。(定價金七拾錢、博文館發行)

▲歡潮　石丸梧外著　主人公は薄倖なる天涯に縛られつゝ一生を苦悶の中に過した余の親友であるとは著者の言ふところ、如何にも悲惨なる物語なり、紅葉、天外、風葉の作風に似たれど、又自ら獨特の主張ありて、流麗なる寫實の筆もて事も無くやつてのけられたる點は頼もし。(定價金四拾五錢、東京堂發賣)

▲人格と教育　佛國敎授チーラー著　前田長太譯述　人格と教育との關係を述べたるものにして、人格の意義、修養方法等解說最も詳細を極む。(定價金四拾五錢、開發社發行)

▲大勇士　嚴谷小波編　世界お伽文庫第一編　世界お伽文庫は、世界お伽噺の後身なり、去れど紙數を倍加し、內容を精撰し、插畫を多くしたれば、體裁實質は遙にお伽噺の上にあり、本編大勇士は希臘神話の有名なる物語をものせられたるもの、而して編者は更に世界各國の神話傳說を始め、歐米名家の創作等を研究し、其長を採つて子女の愛友たらしめん事を期すと云へば、敢て世のお子供衆にお勸め申す、教育家或は家庭の父兄に於て子女の品性を陶冶する資料としても亦一讀すべきものなり。(定價金拾錢、博文館發行)

▲川口東洲翁の有眞樓文集　有眞樓文集は故主川口東洲翁の門生、小田嶺洲翁相謀り翁の文を編纂せしものなり、之を評するに其の偉麗なるは山嶽の巍々たる若く、其の雄渾なるは江河の洋々たる若く、縱横變化雲烟の若く、莊重嚴肅九鼎の若く、而して其の溫平たる氣節は夏日の若く、溫平たる眞情は冬日の如し、蓋し翁が一片の誠心溢れて此の文と成る、南摩羽峰君の跋に一誠以貫之とあるは實に能く肯綮に中るものと云ふべし、聞く翁は維新前後官にある四十年、老後の一樂事として書學を教へられたるが、生徒の多きは他に比類なく、本郷の書學校といへば問はずして有眞樓たるを知る、是れ翁の書、能く規を握り、矩を踏み、平正遒勁師表たるに適する故なるべしと雖も。之を要するに門生を遇する極めて懇篤にして、之を愛する兄孫の若く、諄々として倦まざるによるならむ、是れ亦一片誠心の發揮する所にして、固より怪むに足らず、翁の文集を見て翁の性行を知り、翁の性行を知つて書學校の隆盛なる所以を知る世の人此の集を讀むもの亦以て[illegible]ふするものあらむ。

▲みつこタしイムス　三越の機關として現はれたる色ずり四頁大の日刊新聞にして、四月一日其の初號を發刊せられたり、論說も雜錄も小說も廣告も總て自家の爲に書かれたるもの一商店にして斯くの如きものを出すは我邦に於ては之を以て嚆矢とすべし。(三越吳服店發行)

▲人事活斷▼

石龍子

▲安藝國の海邊何度女へ＝＝諺に「可愛い子に旅をさせよ」と、御身の令弟にも此の方針を取り、三年間三都何れかの實業家へ奉公をなさしめ然る後良縁を求めらるべし。さすれば必ず家運長久の源を開くなり。

▲山陽道の多煩悶母子へ＝＝猛虎の檻を出でたるに逢ひたる卦なり、逃げたりとて逃げ果せるものに非ず、寧ろ大聲にして有力者の救助を求むるに如かず御身等の境遇も亦これと同じければ仲兄を壓服せしむるに足るべき人の力を藉りてその處置を乞はるべし。他にこれに越す良策無し。御身の養子は母上の氣に入る人即ち二十九歳の人最も吉なり。相性惡しとは古風の賣卜者の言なり信ずべきに非ず。

▲長野縣松野みどり女へ＝＝御身の心は正氣堂々一片の疚しき所なし。父上は短氣なる所あれどもこれ亦心中に何等の邪惡無し。然るに御身の良人は劣情を縱にせんとする心あり、而して妹殿は優婉の氣に乏し。故に御身は此の際何事も父上の心に任せ家に留まりて祖先の祭を絶やさゞるやう心がけ給ふべし。

▲北國の雪姫へ＝＝昔から我が國に言ひ傳ふる所の男女相性或は年齡などいふ事は眞の易道より論ずれば實に根も葉も無き愚論にして取も直さず賣卜者の牽強附會說なり。然るに御身の兩親は斯かる愚論を迷信して御身が前途の幸運を犧牲に供せんとするは不慈悲の處置と言はざるを得ず、さればこの理由を御身より穩やかに諫めて早速二十四歳の人と結婚せらるべし。之を破談とせば之に優るの良緣は却々無しと思はるべし。

▲府下心配女へ＝＝良人は今や恰も麻醉劑を服して夢關なるの姿なれば如何に之を醒さしめんとするも到底不可能なり、されば時來つて自然に醒むるを待つの外詮なし。自然に醒むる時とは如何、曰く財產盡き果てゝ情緒の無常を悟りたるの時なり。御身は其の時まで堅く婦道を守りて怨める氣色を見せ給ふこと勿れ。さすれば良人夢さめて必ず御身の前に平身低頭せらるべし。假の財產盡き果てたりとも精神改まれば復挽回すべき時至るものなれば夢々今の中に短慮あるべからず。

▲肥前心痛婦人へ＝＝高きを望めば凶、低きに就けば吉なるの卦なり。されば御身外國渡航の念を止め悠々樂天的に此の世を送らるべし。此の心になられなば幸運次第に巡り來るなり、何をか悲觀し何をか煩悶せん。

▲東肥の花まつ女へ＝＝世に迷信ほど恐ろしきものは無し。迷信は我が意志の不確實より起るものなり。貴女今や目出度き結婚を擧げらる、前途の幸福更に疑ふ所に非ず萬歳々々。

▲日本橋水の流女へ＝＝良人の意志も薄弱なれど貴女の意志も亦不確實なり。故に此の際貴女は意志を強固にし大に婦道を守つて熱心に正義の道を勸め奉らすべし。必ず反省して品行端正にならるべきなり。

▲金井澤の失業者へ‖‖西洋のお伽噺に「或る人驢馬に乘り子をして牽かしむ。甲曰く弱者に牽かしむるは無慈悲なりと、是に於て子を乘せ己之を牽き來る。乙曰く父をして牽かしむるは不孝なりと是に於て二人とも乘らぬことにせり。丙者曰く愚なる哉動物利用の道を知らずと、二人は遂に同乘す丁者曰く斯る小動物に二人同乘するとは何ぞ動物を虐待するの甚しきやと、父子爲す所に迷ひ已むを得ず驢馬を棒に吊し二人にて汗を流しながら擔ひ歸れり」とあり。貴女よ貴女、己一旦教員たらんと志し養成所まで卒業しながら人の言に迷うて彼此意志を換へ遂に人事相談にまで訴ふるに至るはお伽噺の父子とその愚何ぞ擇ばん、宜しく最初の一念を貫徹すべきなり。

▲名古屋こう女へ‖‖昔森格爾の或る處にコールと云ふ一少女あり、その父甚だ沒人情にして、この少女が十六歳の時、之を賣春婦にせんとしたれども、少女之に從はざりしかば、兩親は所有責折檻を與へたり、然るに少女は昊天に向つて號泣するの外、誰に告げて救を求むる人も無ければ泣く〳〵悲しき月日を送る中に、年は饑饉に遭ひ一斤のパンは四シリングの高價に上れり、殘酷なる父母は何條この高價なるパンを與へようぞ、直ちにコールを追放したり、コールは之をも怨まず或る教會の小使となりて僅の俸給を得る中を貯へて父母に給せり、父母是に於てその孝心の深きに感じ、以前の無慈悲を懺悔して有道の人となれり云々。御身にして此のコールの風を學ばれなば御兩親の慈愛深くならるゝのみならず、一年經たぬ中に幸運續々として來ること、鏡にかけて見るが如し。

▲大久保村迷ひ女へ‖‖何事も良人と共に爲すは吉にして離れて爲すは凶なるの卦見ゆ。故に良人と共に渡米なさるゝならば石龍子は兩手を擧げて賛成するなり。

▲山陽わがき女へ‖‖妙齡の男女中には往々小說を讀んだり外國の飜譯本を見たりして、我が胸中に理想(?)の夫婦を畫き、夫は小說でも作り妻は之を批評する、夫は山水を眺めて新體詩を賦す、妻は三十一文字を詠むとか、或は夫は外交官となつて堂々と各國の使臣と樽俎の間に折衝する、妻は又社交界に出でゝ夫の事業を助ける、或は又夫は武邊一方の軍人、妻は婉曲優美に內政を掌り日暮れて晩餐に家族團欒しアヽ、すゐゝで暮さんなどゝ思ひつゝ、やがて結婚すれば豈圖らんや夫は斯の如き人なりぬとか、妻は如何にも沒趣味なるとか、或は妻が菫の花の愛らしきことよと言へば夫はこの棒の木を切つて、薪木にし其跡へ菜でも蒔いたら經濟だらうといふやうな工合にて事毎に齟齬し、何れも不快の念慮にて一生を送る人少なからず。今貴女の言はるゝ理想なる者も、即ち詰らぬ理想にして縱令今の良人を捨てゝ何處へか再緣せらるゝとも、その空想に當篏まる夫は三千世界に一人も無きなり。捨て給へ〳〵その空想をその空想にして除かれなば、現在の良人は天眞爛漫たる所の人となりて貴女の眼に映するなり、豈樂しからずや。又貴女は殘り二十九年と言はるれど、衛生顧問の某氏の說には人生悠々百五十年と、されば殘り百二十九年ある。急ぐなかれ理想を否空想を。

▲靜岡藤田晶子へ‖‖石龍子卜筮を取つて之を占ふに先方は一時貴女を手折つて見たき念慮に驅られたるなり、貴女之を信ぜんか如何なる災難に遭遇するや測られず斷々乎として之を謝絶せられよ。如何に先方は立腹せんもそは勿怪の幸なり。

▲北海道ST不幸女へ‖‖御身の心は梅見に行くべく約しながら櫻見に誘はれたれば之に心動きつゝある姿なり。櫻見に行くも可なり、梅見に行くも敢て惡しきに非れども、一旦約したることを拒絶せんとするには約したる人に誠を籠めてその理由を述べ、その罪を謝せざるべからず、斯の如く誠實れば何れに行かるゝも圓滿なる結果を來すべきなり。

▲岐阜縣葉名の紅葉女へ‖‖風雨霜雪の苦を凌ぎつゝ一輪づゝ咲き始めたる梅の花に似たり。やがて葉茂り實熟し、其の實は又梅干となりて人を利するや必せり。されば御身は志望の通り文部の檢定を受け給ふべし、令弟も必ず家を再興すべき時來るなり。然れども御身も令弟も無生を職業に守つて其命の降るを待たるゝこと何より肝要なり。

▲青山千代子へ‖‖不義の富貴は浮雲の如しとは古聖の言なり、されば不義の富貴に遭つては耳にかけるまでも無し、今の中に斷然御身より謝絶したまふべし、然らざれば不測の災あること疑なし。

▲東京不幸女へ‖‖再嫁することながら、人と結婚せらるべし。戀愛中々好き結婚も望みべからず、此の心になられば、就職前と就職後とは異なる境遇に身を置き、先方は不幸なるが故に見捨て、御身の幸なる時を待つて嫁せんといふ如きは夫婦なるの道に非ず、道に背きて結婚せば天必ず幸福を與へたまはぬものなり。易道の眞意茲に存す。嗚呼茲に在り。

▲京都楠野花子へ‖‖一尺の布も共に着らるべし、一合の米も共に食はるべし、離縁の請求は外國人の言なり我が國婦人の言に非ず、斯の如くに赤誠を籠められよ、良人必ず感奮激勵して御身が思ふ通りの人に化せらるゝなり。

▲陸奥吹雪女へ‖‖若し石龍子をして御身の境遇に立たしめば兩親に對し「私は必らず良人の意志を興奮せしめて參りますから」と許を得て良人の許に至り、良人の手を把り「良人〱よ妾は御身をゆめ捨つる心は有らざれども御身は何故に妾を捨て給ふか、妾を捨て給ふに非ずんば志を立て換へて勤儉勵勉の人となり給ふべし、妾は神明に斷つて良人が錦衣歸郷の時を待つなり云々」と天を仰いで潸然と泣いて御覧なさい、人間なりせば之に動かされぬ者はあらず、返す〱も石龍子にして女ならば如何なる不善良な良人も必ず感化せしめんもの を扨々不甲斐なき貴女なる哉。

▲關西松操女へ‖‖日陰の梅、枝葉茂らず、花亦開かざるの計なり。此の儘にして肥料を與へんか同じく榮えざるべし、然れども他に移して日光に逢はしむれば必ず生々と花開き實は結ばん。此の理に依て判斷すれば早々他家へ嫁せらるゝを吉とす、今年中には必ず良縁ありて嫁がれたる後は身體も亦健康に復し樂しき生活を送らるべきなり。

▲筑後公子へ‖‖霜雪の下に埋れる若草の如し。今や春の爲に如何とも

愛す者はされども時來つて[illegible]えなば萌え出でゝ次第に成長せらるゝや[illegible]なし。御身は此の若葉と同樣にして今明兩年の中に必ず良縁あるべければ[illegible]去りのなりゆめ／＼過し給ふべからず。

▲山口縣の[illegible]へ‖已に意中の人ありとも之を父母に告げざれば父母の知る由もなし斯くて父母より[illegible]命的に他へ嫁せしめらる、是に於て己は父母の犠牲となつて好まぬ人の妻となる者世間に往々あり。而して嫁したる後の婦人は二樣の途に向ふを常とす、その一は意中の人を忘れず居[illegible]々として家庭[illegible]ならず、遂に破鏡の歎に至る者、その二は斯うなつた上は仕方がないと諦め、今の夫に愛を傾注し、意中の人を忘るゝ者これなり。之を我が易道より論ずれば前者は不貞の婦人にして縱ひ意中の人に再縁せしめんも其の運拙く、後者は節操の婦人にして日を經月を累ぬるに從ひ樂しき一生を送るべきなり。貴女は後者に從ふべきか、それとも前者に倣ふべきか、貴女の心を聞かまほしく。

▲山口縣百合子へ‖貴女の運命は[illegible]の如く又朝顔花の如し何物にか頼らざるべからず、頼れば必ず[illegible]なり。故に何事も父母や姉諸の言葉に從ひ私意あるべからず、五月の[illegible]に服するなどは不得策の至なり。

▲山口縣[illegible]女へ‖言ふまでもなく結婚は人生の一大事にして、本人の好まぬ縁を父母や親戚が壓制して[illegible]き女を己等の犠牲に供せしめんとは如何にも不合[illegible]千萬[illegible]事なり況や[illegible]親も不賛成なるものを親族が彼此言ふに於てをや。されば何事も姉上の意志に任せ他より干渉せざるを吉とす。

▲大阪府の一人娘へ‖[illegible]卜者の所謂相性とは戌年と申年と會はずとか、或は火の性に水の性とは宜しからずとかの如く、[illegible]らぬ理由を判斷するなり。二十六歳の人は多くの縁中にて最良なり、一刻も早く其人と婚を結ばるべし。一刻遅ければ千秋の悔あり。

▲山形縣冬野雪子へ‖實業家の家に嫁ぐことは順風に帆を擧ぐるが如し、行末次第に目出たし。中學生を忘るゝは御身の爲め又中學生の爲め、雙方共に後の幸なり。

▲[illegible]後[illegible]子へ‖貴女の心に父を正なりと思ひ給はゞ父に從はるべし、[illegible]人を正なりと思ひ給はゞ[illegible]人に從はるべし、[illegible]情に絆されたまふべからず、敢て問ふまでもなきことならずや。

▲神田の君子へ‖稻田今や熟して正に刈るべき期至れるに似たり、されば早々良縁あるべければ何等憂ふるに足らず。

▲新潟縣[illegible]月生へ‖御身の理想は猿猴が水中の月を捉へんとするに似たり。捉へらるべき理なし。それよりも農業の心得ある人を迎へ夫は田園に耕し、御身は學校に奉職を續け出でゝは無邪氣なる兒童と遊び家に歸れば米穀野菜[illegible]々たり嗚呼樂しき哉貴女の身の上、石龍子も何れの日か斯る田園生活を爲したきものなり。

讀者文藝 投書歡迎（締切五月十五日）

▲和歌（一人一首）

▲短文（三百字以内）

▲小說（二十枚以内）

▲一口噺（一人一題）

▲小品文（十枚以内）

◎和歌、短文、一口噺は必ず端書を用ゆる事◎字體は楷書にて鮮明なるべき事◎住所姓名は必らず原稿に記しおく事◎投稿は博文館女學世界宛の事……

◎賞品

▲一等一圓▲二等五拾錢
▲三等參拾錢（圖書切符）
▲一口噺は入賞參拾錢
▲小說と小品文は詮考の上相當の謝禮を呈す

明治四十一年五月一日發行　第八卷第六號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百二番 千十八番　二千六百二十番 三千二百二十九番



和服も縫へる

シンガーミシン

タッタ拾回の出教授で、ホワイトシャツが縫へる、簡單服が仕立てられる樣になつた、セルやネルの單衣も出來れば襦袢も結構、奥さんが朝から晩までミシンに熱中すれば、旦那が配達係となつて、親類や知り合の處へ配つて得意顏の御吹聽と云ふ方が實際あるのです、ナント盛んではありませんか。

家庭向
婦人用

シンガーミシン

月賦大販賣

即金賣特減

裁ち方縫ひ方
使用法一切

無報酬出張教授 京濱市内

東京銀座

シンガーミシン會社

（明細書）御申越次第無代送呈す

女（後付の一）

數學世界臨時增刊 第貳卷第四號

長サと積

既成發行

洋裝菊判紙數百廿八頁
口繪ユーグリツト肖像及び其著書の原版（寫眞版）
正價金拾五錢 郵稅（本號限り）四錢

東京 博文館 本町

關東の人曰く、幽靈は箱根こつちには無いと、關西の人も亦た曰ふ、幽靈は箱根から此方にはおまへんと、兎角幽靈を繼子扱ひにして、成るべく他所へ押付ける算段、畢竟厄介物たればなるべし、我が數學界に於ける長サと積の計算、頗る之に似たらずや算術の方ではあれは幾何の領分だと云ひ、幾何の方ではイヤそれは違ふ、成程其研究は此方で取扱ふが、其長短廣狹などの小うるさい計算は知らぬと繼子扱ひ、幽靈なら宇宙にフラ〳〵と浮ばれもせず迷ひ居るも差支なからんも幽靈ならぬ實用のものにてはそれにては濟まざるべし乃ち爰に之を收むる處の一書を編し汎く世の爲、人の爲に此等の諸法を採錄せんとす、亦た多少の功德なからずとせんや、書名も其儘「長サと積」世の長サと積に苦む學生諸氏は本書に依り其苦患を免れたまへ

英語世界編輯部編

四十年度入學試驗 英語問題詳解

附 試驗委員之成績講評及受驗合格者之受驗談

洋裝四六判美本紙數約二百頁

正價金四十錢 郵稅六錢

執筆者（ABC順）

深澤由次郎
今井信之
上條辰藏
喜安璡太郎
長井氏晸
佐川春水
武信由太郎

講評試驗委員

神田高商教授
高島高商教授
村井高外語教授
平井外語教授
畔柳高等教授

入學試驗中最も學生の難關とするは英語と數學なり。此難關に應する最も捷徑の窓は果して何ぞや。所謂難句集を[illegible]にするも一[illegible]たらん。所謂受驗科に入學するも一法ならん。而も常に敵たる試驗問題其者を研鑽して問題に馴れ[illegible]コツを得るは更に要訣中の要訣なり。本書は昨年度廿八官立校の入學試驗英語問題に無比の詳解を施し、加ふるに試驗委員の成績講評と、受驗合格者の受驗談とを以てし、天下幾萬の受驗者が試驗準備の信賴すべき參考書たらんとす。世に類書の刊行なきにあらねど其の答解の正確精緻なると叮嚀懇切なるとは竊に編者の誇とす所なり。

發兌元 東京 博文館

田村逆水君著

人生と健闘

●曩に成功と人格を著はし好評を得たる著者は今亦本書を出せり其内容は敢て喋々たるを要せず下に掲ぐる標目を見よ

●洋裝菊判並製紙數百七十頁

○本書目次

●正價金三十錢　郵稅六錢

東京本町　博文館

竹貫登代多君著

算術獨習書

出でたり! 言文一致にて算術の初歩より誰にでも解し得る如く認めたる算術獨習書は出でたり!!! 著者は誰? 數學世界主筆竹貫登代多君也。機敏なる學生諸君にして、先生の名を知らざるものありや。方今、算術を分り易く記述すること竹貫君に及ぶものありや! 敢て薦む大方の學生諸君に、此書一度自己の所有に歸す以上は、僻邑に獨學せるものと中央都會に良師に就て勉學せるものとの差異は取拂はるべし、何となれば算術獨修書は、良師に超越すること數等なればなり、敢て勸む。書中の順序は決して奇拔なるものにあらず、世間一般學校に就て致授するものと毫も異なるなし、之れ等しく文部省令に準據しあればなり、只だ此獨習書の特色は說明の親切にして且つ分り易き點のみ、されば獨學者に頗る便利なるは勿論他の一般學生には良好なる復習書なり各學校入學受驗者の福音なり、敢て天下の學生に薦む。

全二册

菊判洋裝並製

上卷……紙數三百八十八頁
正價四拾五錢　郵稅八錢

下卷……紙數二百四十二頁
正價三拾五錢　郵稅六錢

發兌元　東京本町　博文館

(後付の三)

香國 土居通豫君編述

作文活法

全一冊 菊半截判洋布特製約六百卅頁
正價金六拾錢 郵税金六錢

古來我國文に於ける諸體の作法を示したる書は、極めて稀なり、本書は、君が時勢に感ずる所あり、獨特の技倆を揮ひ、和漢洋の文法を斟酌湊合し、一斷案を下して、我國の現時に最も適應する所の國文の作法を一定せり、卷中章を分つこと十六、中に就て、篇法、章法、句法、修辭法、の如きは一々古人の文を引き或は圖を揭げて、詳密に其作法を示し、詞法に於ては、國語組織の根元を明にし、而して各體の作例は極て豐富なり、其他國文の作法は網羅して一も漏す所なし、之を一種の文典と稱するも實に誣ひざるなり、地方師に乏しき人は素より中學生諸君及、それ以上の學生諸君に於ても、坐右片時も離すべからざる近世稀有の必用書なり、

東京 博文館 本町

本書は我國古來の賢哲が世俗一般を教化せんため修身處世上、極めて通俗にして趣味多き文字を用ひ機に臨み事に應じて筆を染められたる數百ケ條の教訓を集め一書として公にしたるもの也、特に多年德教研究に心を寄せらるゝ足立氏が其採集の珍書中より一々出所を示して其粹を拔かれたるものなれば學校家庭の參考本として將又學生及實業家諸氏の好指針として最も適當有益の著書たるや疑を容れざるなり立志處生に志あるの士幸に之を坐右に備へよ

伯爵 松平直亮君序
足立栗園君編

洋裝並製菊半截
紙數三百二十餘頁

立志處世 先哲教訓集

正價金三十錢 郵税四錢

東京日本橋本町 博文館發行

女(後付の五)

文學士　久保天隨先生精解

日本外史新釋

●全部拾貳冊

●毎月一回發行

毎編　和裝美本　紙數約三百頁

●第一冊以下非常の好評にて既に數版に及ぶ

賴氏の外史は、その一生の心血を注ぐところ、世道人心を裨益せし功固より少からず、且つ漢文講習に益あること言を俟たず、これ家藏戸誦今に至りて尙ほ廢せざる所以なり。その講義の如き、坊間頗る是ありと雖も、その完全なるものを求むれば、遂に指を屈するに及ばず。天隨氏こゝに深く慨するところあり、乃ち平生の蘊蓄を傾けて、此書を著はさる、兎を搏つに獅子の全力を盡すは、適まその婆心の極めて深切なる所以、精該詳備、まことに賴氏の忠臣羽翼たるに負かず。この書一たび出でて初學幸に津梁あり、その業をなすに際して、唯だ易きを見て難きを見ず、將門の興廢を詳かにし、國史の大半に通曉すると同時に、讀書力の涵養に資するの便あるべく、一擧兩得勞半にして功必ず倍するものあらむ。

目次

正價一冊金參拾錢　郵稅一冊金六錢

前金　六冊金壹圓七拾錢　十二冊金參圓貳拾錢　▲外要郵稅

（後付の六）

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館


腦病
神經病全治良劑
健腦丸
本劑の赫々たる信認は
世既に定評あり
迷ふ勿れ腦病患者
腦病藥の霸王
本舖大阪市心齊橋
東京市箔屋町
丹平商會藥房
▲一日早く本劑を服せば。一日早く不快なる病苦を脱して。爽快なる健康を得るのである
▲常に持薬として連服せば。逆上を引下げ。恐るべき腦充血を全治し。中風卒中を未發に防ぎ。記憶力を增進する特効あるは獨り健腦丸のみである
効能
腦充血
腦膜炎
頭痛
大便秘結
逆上症
中風
卒中
五週分 金貳円 郵税 十銭
三週分 壹円廿五銭 仝 十銭
二週分 八拾五銭 仝 六銭
一週分 四拾五銭 仝 四銭
三日分 貳拾銭 仝 貳銭
一日半 金拾銭 仝 貳銭

女學世界

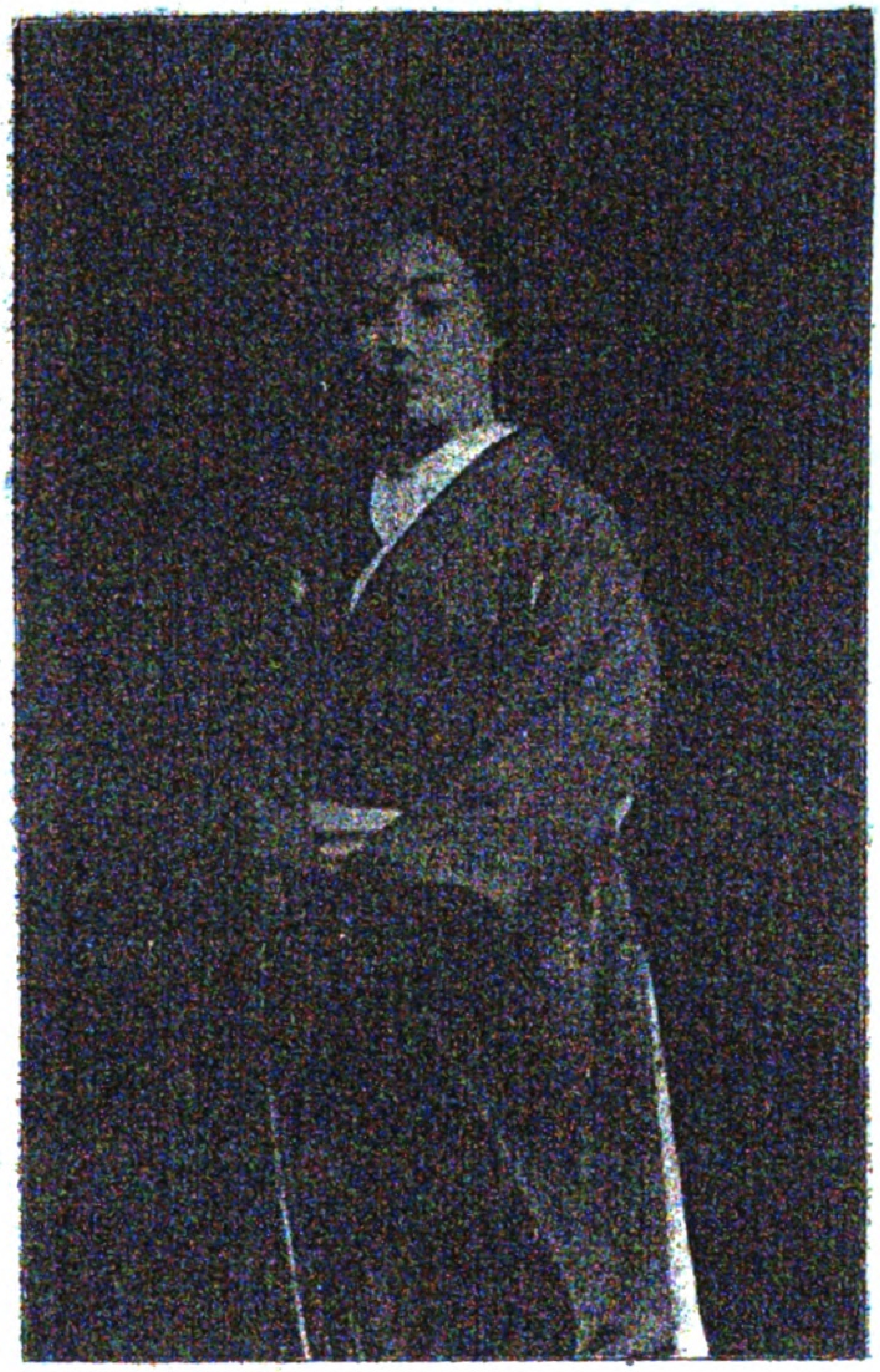
(明治四十一年四月一日發行 每月一回一日發行) 第八卷第六號 (明治卅三年十二月廿五日 第三種郵便物認可)

粧へば

清楚の姿 月も羞らふべく

艶麗の顔 花も及ばぬべく

美白の膚 雪をも欺くべし



是れ乳白化粧水レートが

美人を作る特色として世に好評を博し醫學社會に認定られ化粧界に實驗せられ洋行歸りの紳士淑女に愛用せらるゝ第一の原因なり

拝啓
東京平尾賛平
商店の乳白化粧水レー
ト日常[illegible]
[illegible]

[illegible]

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界(じょがくせかい) 明治期復刻版59
明治41年4月(第8巻第5号)、5月(第8巻第6号)

2009年7月10日　第1刷発行　　定価(本体20,000円+税)

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14(〒113-0021)
電話　03-3947-8251[営業] 03-3947-8254[編集]
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3617-9　C3321